俺と少女と救われなかったこの世界

残念無念

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と少女と救われなかったこの世界

【Nコード】

N5733T

【作者名】

残念無念

【あらすじ】

2011年5月1日、世界同時バイオテロにより地上は死者の樂園と化した。

それから1年後、歩く死者に領土を占領された大同土が第三次世界大戦を勃発させてしまう。核、生物、化学兵器の詰まった弾道ミサイルが世界中に降り注ぎ、黙示録的な世界が訪れた。

20年後、治安が完全に崩壊しミュータントが闊歩する日本で、岩崎武は傭兵として日々を過ごしていた。

：（注）この作品は「サバイバル高校生」の続編です。まずはそ

ちんをじく賢くだつた。

ブローグ 救われなかった世界

遠くからエンジン音が聞こえてくる。それも二つ。今時動いている車はそんなにないので、きつと今回依頼を受けた、俺が排除すべき「目標」だろう。

俺は被っていたカムフラージュネットから少し身を乗り出し、手にしたM14EBRライフルの二脚を立て、とりつけられたスコープを覗いた。M14EBRの銃口にはサプレッサーがとりつけられ、弾薬は亜音速弾を装填してある。弾丸が音速で飛翔する時に音がするので、弾の速度が落としてある亜音速弾を撃つてもあまり銃声は響かない。

カムフラージュネットからライフルの銃口とスコープだけを突き出し、スコープ越しに前を見る。平原を二台のトラックが、俺のいる方向へと走ってくる。

運転席と助手席には男が一人ずつ、荷台には何人も乗っている。数は合わせて20人弱か、「依頼人」の情報通りだな。

どうやら向こうは、まだ俺の存在に気づいていないらしい。当然だ。俺はまるで藪にしか見えないカムフラージュネットを被り、しかも高台の上にある森の外れにいるのだから。

そもそも連中は攻撃を受けるとすら思っていない。これから連中が向かうのはただの村であり、連中にとっては搾取の対象でしかないのだ。村人は武装をほとんどしておらず、故に銃で脅せばあっさり村人が要求を飲むと思っている。

だからこそ、俺が「依頼」を受けたのだけねど。

スコープの倍率を上げ、荷台にいる男達の武装を確認する。約半数がAKタイプの自動小銃を装備しており、残りも散弾銃などを持っている。「盗賊」にしちゃ、いい武器を持っているな。

ま、その銃が村人に向けて火を噴く事はないだろう。

今から俺が殺すのだから。

トラックとの距離が200メートルを切った時、俺はM14EBRの引き金を引いた。驚く程軽く、小さな銃声と共に、前を走っていたトラックの運転席の窓ガラスに穴が開き、続いて真っ赤に染まる。運転手が死亡したトラックはコントロールを失い、がくがくと少し蛇行した後に横転した。荷台にいた盗賊達が地に投げ出され、後続のトラックが急停止する。

その隙も逃さず、俺はもう一台のトラックの運転手を狙撃した。再び窓ガラスが飛び散った血で真っ赤に染まる。

たちまち盗賊達は大混乱に陥ったようだ。リーダーらしい男が何かを怒鳴っている。そこを撃つ。

男が頭に風穴を開けて倒れたのを見て、盗賊達はようやく自分達が攻撃を受けていることを気づいたらしい。先を争って横転したり停車したトラックの陰に隠れたが、その頃にはさらに4人の仲間が俺によってあの世送りにされていた。

男が一人、トラックから離れる方向へと走り出した。どうやら逃げ出すつもりらしい。

「はっはっは、どこへ行くこうというのだね？」

遠い昔に見た映画の、某ラピュタ王のセリフを呟きながら俺は引き金を引いた。逃げ出した男は背中から撃たれ、情性でしばらく進んだ後に倒れた。

さて続きを・・・と思ったが、生き残った盗賊達は皆トラックの陰に隠れて動かず、俺に姿を見せない。ただ銃を持って暴れるしか能がないと思っていたが、少しは賢いようだ。

俺は今まで被っていたカムフラージュネットの下からはい出た。M14EBRの二脚を畳んでストックを縮め、背中に背負う。代わりにレッグホルスターから、ベレッタM93R機関拳銃を抜いた。

高台から滑り降り、岩や木の陰に隠れながら盗賊達のもとへ向かう。今回受けた依頼は「盗賊の殲滅」なので、一人残らず始末しなければならぬ。でないと「契約違反」になってしまう。

盗賊達はどこから狙撃されるかわからず、怯えているようだった。今までは散々人を殺してきたのに、自分が殺される側になるとは思ってもみなかっただろう。

ま、盗賊なんて珍しくもない。むしろ見かけない方が珍しい。

20年前のあの日以降に育った人間は、平和な時代を知らずに育ってきた。暴力は身近なものであり、何かを得る時には他人から奪うのが普通な、そんな世界に生きてきたのだから。

俺は数少ない平和な時代を知る人間の一人だが、盗賊達に同情するつもりは全くない。今の俺にとって連中は排除すべき対象であるからだ。

M93Rを構えつつ、俺は盗賊達に近づいていく。盗賊達は恐怖からか、まったく見当違いの場所に向けて銃を撃ち込んでいた。弾の無駄遣いだな。

長年刈り取る人間がいなかったせいで、トラックが横転している道路の脇には草が長く、地面を埋め尽くすかのように生えていた。地面に伏せ、匍伏前進でトラックまで進んでいく。草の背が長いせいで、盗賊達から俺の姿は見えないようだ。

ついに盗賊達から20メートルも離れていない場所まで接近した。盗賊達の怯えた声が聞こえてくる。

「なんだよっ!? 連中は武器を持ってないって話じゃなかったのかよっ!」

「そんなこと知らねえよ! 誰か傭兵を雇ったんじゃないのか!？」
「どっちにしても、どこから攻撃してきた? もしかしてもう近い位置にいるんじゃないか?」

はい、全員全問大正解。ご褒美に9mmパラベラム弾をくれてやりましょう。

俺は立ち上がると、今話していた3人の盗賊へ発砲した。3点バーストの射撃で頭や胸に銃弾を叩き込み、無駄なく盗賊達をあの世に送っていく。

銃声に気づいたのか、他の盗賊達が隠れていた横転したトラックの陰から飛び出した。そして俺の姿を見て「敵だっ!」と叫び、手にした銃を撃ちまくる。

さすが盗賊、射撃の腕前は下の下だった。弾は一発もあたらず、俺は落ち着いてトラックの陰に隠れ、時々身を乗り出して発砲する。

俺が一回引き金を引く度、盗賊が一人、また一人と倒れていく。

最初20人弱いた盗賊は狙撃で14人まで減り、さらに今も減り続けている。勇ましく道路に仁王立ちしてAK-47突撃銃を乱射してくる奴もいたが、そいつはただのアホだった。銃を撃つ時は遮蔽物に隠れながら撃てよ。

むろん、そんなアホな奴は真っ先に殺した。恐れをなして逃げ出そうとした奴もいたが、そいつは背中から撃つてやった。

「悪いけど、これ契約なんだよね。だから諦めて死んでくれ」

そう言いつつ、M93Rを撃つ。

やがて銃声が止んだ。さつきまで襲撃してきた俺を返り討ちにしようとしていた盗賊達は、地面に倒れて動かない。

一人だけ、瀕死の状態ながらも生きている奴がいた。そいつは脇腹を撃たれてはいたが、俺に向けて弾が切れた水平二連のソードオフ切り詰めたショットガンの引き金をかちかちと引いていた。弾切れなので、当然銃口から散弾が吐き出される事はない。

「なあ……頼む、助けてくれよ……」

その盗賊は震える声で命乞いをしてきた。まだ若い。20代前半と
いったところか。

俺より年下だな。

俺は男を見下ろすように立っていた。男は俺が一步足を踏み出す度、両手両足で地面を蹴ってどうにか逃げようとする。

「くそっ！　なんでこんなガキに、俺達が……！！！」

その男の言葉に、俺は頭にきた。

M93Rを単発に設定し、男の頭に向けて引き金を引く。銃声の後、男はどさりと地面に倒れた。

ま、こんな地獄で生きていくよりは、あの世の方がよっぽどマシだろう。少なくとも、あの世では殺し合いが日常ではない。

それと……。

「俺は37歳だ。外見で人を判断すんなよ」

俺はそう、動かなくなった男に向けて言い放った。

契約通り盗賊を殲滅した俺は、早速盗賊達の死体やトラックを漁りはじめた。自分が殺した敵や倒れている死体を漁って物資を入手することは、世界がこんなになってからは普通の行動になっている。まずは盗賊達が持っていた武器弾薬を集めた。が、粗悪品が多すぎる。さすが盗賊。

持っていたAKタイプ突撃銃は、全て大陸から大量に流入してきた中国製の違法濫造コピーか、あるいは個人が手作業で適当に作りました感が満々の密造品だった。むろん、全て質が悪い。こんな

を持ち帰っても使い物にならない。売るにしたって買い手がつかないだろう。

弾薬も粗悪品が多かった。こんなのを使っているのは弾詰まりが頻発するどころか、質が悪い薬莖が発砲時の熱で膨れ上がり、機関部に張り付いてしまう。

散弾銃については論外だった。盗賊達が持っていたのはほとんどが水平二連の散弾銃。俺はこれよりよっぽど性能がいい散弾銃を他に持っているし、水平二連の散弾銃は流通量が多い。こんな中古品を買うより、新品を買った方がコストパフォーマンスがいい。

乗ってきたトラックはどうかと思っただが、部品が劣化しきっていて、いつ動かなくなるかわからない。予備のガソリンもないし、よくこんな状態でここ辿り着けたものだ。

というわけで、俺は盗賊達の装備を全て、仕事を依頼してきた村に寄付することとなった。

さっきまで俺がいた高台から500メートルほど北に行くと、そこには周囲を山に囲まれた小さな村がある。この村が、今回俺に仕事を依頼してきたのだ。

この村はあの終わりの日以降も平穏を保って過ごしてきたらしい。人口密集地帯から離れていたので、20年前のゾンビ大発生時にもまったく被害はなかったそうだ。続いて勃発した第三次世界大戦の時もこの辺りには大した目標はなく、この村はずっと平和なままだった。

が、数週間前に盗賊に見つかって以降、平和な村ではなくなった。盗賊の集団は村人達に乱暴狼藉を働き、さらに食料などを強奪しよ

うとした。ただその時はまだ収穫前だったので、数週間後（つまり今日）にまた来ると言って盗賊達は去って行った。

村人達はうるたえた。今まで大した外敵の侵入はなかったから戦う技術はないし、銃だって狩猟用のライフルや散弾銃が二丁しかなかった。

で、傭兵を雇うことになったのだ。

仕事を終えた俺は森の外れに停めてあった装甲強化仕様の高機動車（自衛隊の放出品だ）に乗ると、早速報酬を受け取るために村に向かった。盗賊達の死体はそのまま放置する。埋葬なんかしている余裕はない。放っておいたらカラスや野犬、そして「ミュータント」に食われて土に還るだろう。

村に戻った俺を、村人達は不安そうな顔で出迎えた。村長である老人に、盗賊を殲滅したと報告する。

「そうですね、ありがとうございます」

感謝の言葉はそれだけだった。まあいいさ。この稼業で大事なものは礼より報酬だからな。

「連中が使っていた武器はそのままだから、好きに持って行っていいですよ。俺はいららないんで」

「いいんですか？ 貰っても？」

「御自由にどうぞ、どうせガラクタ同然ですし。あとトラックも二台あるんでそっちも持って行っていいですよ。予備の燃料はありませんが」

俺がそう言つと村長は早速何人が若者を向かわせた。大量の武器があるのと、それを使いこなせるかどうかは別問題だが、俺は敢えてその事は言わない。

だつて聞かれなかつたし。しかも村人が自分達で村を守るようになったら、俺の仕事が減るかもしれないし。

俺は村長から報酬を受けとつた。50万円の現金と米20kg、ジャガイモやその他の野菜など10kg。

現金はこの働きに比べたらとても少ない額だが、大事なのは食料の方だ。金は使用できる相手や場所を制限してしまうが、食料などの現物は物々交換がすぐにできる。

高機動車の後部ドアを開け、荷台に米や野菜の入った箱を積んでいく。爆弾などが仕掛けられていないか、念のため箱を開けて中身を確認しながらの作業だ。

村人達は俺の周りに集まり、俺を指差して何やらヒソヒソ話合っている。その中で一番多い話題は、

「なんであんな子供が傭兵なの？」

というものだった。

彼らにしてみれば俺に失礼がないよう、声を出れるだけ抑えて会話していたつもりだったのだろう。だが残念なことに、彼らの会話の内容は筒抜けだった。

だつて俺、普通の人間じゃないし。

あと俺は、何度も言ってるけど37歳だから。

ま、見た目はずっと17歳のままだから、間違われるのも仕方ないけどね。

時間を無駄にする気はないので、さつさと高機動車に乗って帰ろうとした俺の袖を誰かが引つ張った。振り返ると、10歳にも満たないであろう少年が、俺の目を見て話しかけた。

「おにーさん、名前何ていうの？」

すぐに俺を遠巻きに眺めている村人の中から女性が飛び出してきた。おそらくこの少年の母親だろう。

少年の母親は俺に謝りつつ、いそいで俺から少年を引きはがした。

俺の事が怖いんだな。ま、よくある事なので慣れっこだが。

まあ誰だって怖がるわな。どこからどう見ても俺はガキにしか見えないのに、銃を持って盗賊20人以上を皆殺しにしたんだから。

俺は遠ざかっていく少年の背中に言ってやった。

「武だよ、岩崎武。それが俺の名前だ」

報酬を受け取った俺はさつさと村を出発し、一路帰宅の途についていた。荒れ放題の草原に通るアスファルトの道路は、20年放置されているせいであちこちがひび割れており、その隙間から背の高い草が伸びている。

俺の運転している高機動車以外に、道路を走る車はない。道路の脇には枯木を思わせるかつての街灯の柱が、錆び付いて赤茶色になりながらも規則正しく並んでいる。

途中、道路の脇に巨大な円筒が転がっていた。目を凝らすとその円筒の側面には規則的に四角い穴が空いている。

その円筒は、墜落した旅客機の胴体部分だった。いつ墜落したのだろうか。とにかく、長い間放置されていることに間違いはない。

世界が終わったあの日に、ゾンビが機内で発生してコントロールを失い、墜落したのか？あるいはそのゾンビ大発生に伴い世界中が混乱に陥ったせいで勃発した、第三次世界大戦の時に撃墜されたのだろうか？

ま、そんな事を考えても無駄だ。起きた出来事は変えられないし、失われた人命は戻って来ない。

高機動車は旅客機の残骸の脇を通り過ぎた。道路に錆び付いた旅客機の破片が散乱している。

俺は運転席の窓を開けた。車内に気持ちのいい、6月の風が流れ込んで来る。

雲一つない空は青かった。核戦争があった後でも、20年前のあの終わりの日の時も、その前の平和な時代でも、空の色は今と変わらなかった。

20年前。

あの日俺の知っていた世界は終わりを告げ、世界は死と暴力、そして歩く死体（一部は走ってたけど）が闊歩する地獄と化した。

俺はそんな地獄でも精一杯戦った。だがそんな俺に待っていたのは、「全ての仲間の死」という報われない結果だった。

それでも俺は戦った。皆の遺志である「生きて世界を救え」という使命を果たそうとした。

最初はうまくいったかに見えた。ゾンビの発生を抑止するワクチンと治療薬を届けた際には、これで世界は救われると思った。

あの時の俺は、本当に純粹でバカだった。世界を救えると本気で思っていたのだから。

それから20年　　。

世界はゆっくりと、だが着実に、滅びへと向かっている。

俺は、世界を救えなかったのだ。

ブローグ 救われなかった世界（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第1話 俺と少女（前書き）

登場人物紹介

いわさき
岩崎 武 たけし

37歳

この作品の主人公。傭兵。

とある事情で外見が17歳の時からまったく変化しておらず、度々子供に間違われてバカにされる。ただし少し人外の能力も持ち合わせている。

「終わりの日」以降に勃発した第三次世界大戦の際は、一時的に自衛隊に入隊していた。5年後に除隊し、その際のコネを使って傭兵を始める。

現在は新谷市を拠点として、サキと犬達と暮らしている。

第1話 俺と少女

千葉県新谷市。あらたに

俺が今向かっているのはそこだ。いや、向かっているというよりは帰宅の途についていると言ったほうがいいだろう。とにかく、そこは俺の家がある場所だった。

新谷市は大戦以前は人口が少なかった。都心から程よい距離ではあるものの、日本で一、二位を争う運賃の高さで有名な鉄道しか通っておらず、また都心に直通している道路もないという中途半端な立地条件が災いし、人口は市の条件を満たすギリギリの5万人しかいなかった。

そしてその少ない人口も、20年前のゾンビ大発生時に大部分が市から流出してしまった。そのせいで新谷市は、一時ゴーストタウンと化したこともある。

だがその状況を一変させたのが、第三次世界大戦だった。新谷市には大した工場や軍事施設もなく、大戦中はほとんど攻撃を受けなかった。大戦終結後、無傷だった新谷市には自然と人が集まり始めた。そして今や新谷市には、1000人程の人間がいる。しかしそのほとんどは、あまり真つ当とは言えない仕事に従事する者ばかりだ。半分が俺のような傭兵であり、残り半分も様々な職業に就いている。

武器弾薬や食料、その他様々な物資を売る商人。

金さえ払えばどこにでも連れていったり荷物を運んでくれる運び屋。情報を仕入れてきては売る情報屋。

人間を害するミュータントを狩るハンター。

その他諸々の職業の人間が集まっている場所なのだ。

そして俺は、そこに家がある。

新谷市は東西を川に挟まれ、南には海がある。いわゆる中洲に出来ている町だ。新谷市に出入り出来る橋は合計で6本あるが、その全てに検問がある。新谷市を牛耳る「カンパニー」が、この町の治安維持を担っているのだ。

高機動車を走らせた俺は、新谷市へ通じる橋にたどり着いた。橋の手前側には線路の踏切にあるようなバーが設置され、さらに小屋が建てられている。そしてその周囲を、突撃銃を携えた男達がうろついていた。

俺以外に新谷市に入ろうとする人間はいなかった。俺は高機動車に乗ったままバーに近づく。すると、男の一人が近づいて来る。

「なんだ岩崎か。よし、通っていいぞ」

男は俺の顔を見るなり、通行を許可した。男が合図すると小屋の中にいる男が機器を操作してバーを上げ、俺は問題なく新谷市へ入ることが出来た。

今の男達はカンパニーの構成員であり、ここの警備員だ。新谷市には基本的に誰でも入れるが、銃をぶっ放しながら侵入しようとする奴は追い返されることになっている（最悪、あの世に御案内される羽目になる）。

ちなみに新谷市の中では訓練時以外、発砲は厳禁だ。撃つていいのは自分が襲われた時やミュータントが侵入した時だけであり、何かの問題を解決するために銃を撃つのは固く禁止されている。

これもカンパニーの指示だ。カンパニーはこの新谷市を支配して利益を上げている。新谷市の治安が悪くなって人が出て行ってしまえば、カンパニーに入る利益も少なくなる。だからカンパニーは、新

谷市内の治安維持を重要視しているのだ。

橋を渡つて新谷市内に入る。明かりとしてあちこちに松明が掲げられているが、市内に人影は少ない。今は夜7時、皆仕事を終えて帰宅するか、酒を飲んでいる時間だ。

それでも市の中心部に行けば、まばらに人影が見えてきた。共通しているのは、皆が銃で武装していることだ。

市の中心部には街灯が灯っていた。カンパニーが発電機を動かしてわざわざ点してしているのだ。

やがて俺は目的の酒屋を見つけた。とりあえず高機動車を路肩に停め、銃だけ持って降りて酒屋に向かう。

ちなみに報酬の食料などは高機動車に積みつ放したが、盗まれる心配はない。この町では窃盗も厳禁であり、カンパニーの警備員があちこちで目を光らせている。

他の町だったら降りた瞬間に通行人に襲われて、報酬は車両もろとも強奪されているところだ。治安がいつても大事なことだね。

通りを歩き、俺は酒屋に入ろうとした　　が、入口に立っていた警備員に呼び止められてしまった。

「おいボウズ、ここはガキの来る場所じゃないぞ。家に帰れ」

俺はその警備員の顔をまじまじと見つめた。20代前半といったところか。こんな警備員がいた記憶などないので、多分新入りだろう。

「俺は岩崎武だ。小野田おのだに話がある、ここを通せ」

「小野田さんがお前みたいなガキに会うわけがないだろう。さつさと帰れ」

「……あんた新入りだな？なら小野田にこう伝える。『頬に傷のあるガキが会いに来てる』ってな。多分あんた、すぐに殴られて俺に詫びを入れることになるから」

警備員は不審そうな顔をしつつも、酒屋の中に入っていった。俺は心の中で、彼が殴られる方に5000円を賭ける。

こうしてガキに間違われるのはよくある事だった。初対面の人間には、確実にガキ扱いされてナメられる。

俺は今37歳だ。なのに外見は、ずっと17歳のまま変わっていない。

俺は20年前、世界を終わらせたバイオテロの首謀者と戦った。それは生物兵器開発の専門家で、自ら生物兵器と化して俺と激戦を繰り広げた。

その際俺は、そいつから攻撃を受けた。頬に出来た大きな傷痕は、その時そいつにナイフのような爪で切り裂かれた時の傷だ。

そしてそいつの変異した細胞が、傷口から俺の体内に侵入し、あらかじめ打っておいたゾンビ化防止のワクチンと反応して俺の身体を変化させた。

その時から俺は歳を取らなくなった。鍛えれば筋肉はつくし、怪我すれば傷は残る。だが外見はずっと17歳のままだ。

「終わりの日」の時、俺は17歳だった。そして20年経った今は37歳。なのに顔にシワ一つ出来ていないし、白髪も生えてこない。

そういえば昔、見た目は子供、中身は大人って漫画とアニメがあったな。某江戸川くんが行く先々で殺人事件に遭遇するという、1年で何十という人間が殺されるバイオレンスなアニメ。

だけど、冗談じゃない。見た目は子供で中身は大人でいていいのは、^{アニメ}二次元の女キャラだけだ。^{リアル}三次元の男がなっただって、ライトノベルのネタにすらならない。「誰得？」って言われるだけだ。

……ま、今じゃアニメもライトノベルも死語同然の失われた文化だが。

1分もしない内に警備員は戻ってきた。俺の予想通り殴られたらしく、唇の端から血を流している。ざまあww。

「……………どうぞ。お入りください」

ついでに言葉遣いも丁寧になっていた。それでいいんだよそれで。お客様は神様っていう言葉があるだろ（今じゃこれも死語か）。俺は入口から堂々と酒屋に入って行った。

酒屋の中にはいくつかテーブルや椅子があり、男や女達が座ったり立ったりして静かに酒を飲んでいる。15人くらいいるだろうか。彼らは皆、肩に突撃銃を掛けていたり腰に拳銃を下げている。この酒屋にいるほとんどの者は、傭兵だったりハンターだったりと、銃を使って仕事をする人間だ。

そしてカウンターの中にいる一人の男が、俺に手を振っていた。俺は軽く片手を上げて答え、カウンター席に座る。

「よお岩崎。仕事はどうだった？」

そう俺に言ってきた男こそ、この酒屋「フジヤマ」の店主であり、カンパニーを束ねる小野田^{おのた} 弘^{ひろし}だった。

小野田と俺は、第三次世界大戦が終結してからの知り合いだ。小野田は「終わりの日」以前は弱小暴力団の下っ端組員だったが、ゾンビが発生した時に才能を発揮し、組織の中でのし上がっていった。そして第三次世界大戦が終結すると、自らに従う組員を引き連れこの新谷市にやってきた。そしてカンパニーを組織し、その勢力を日々伸ばしている。

ちなみにカンパニーというのは、小野田をリーダーとした団体の事だ。カンパニーとは英語で会社や仲間を意味し、その名の通り加盟員同士の互助を目的にしている。

カンパニーには様々な職業の者が加わっている。俺のような傭兵やハンター、商人、情報屋など様々な人間がいる。そしてカンパニー内で様々な仕事をやり取りし、仲間内で利益を上げることが目的だ。

例えばカンパニーの加盟員である商人が他の地域に商売に赴く時、同じカンパニーに所属する傭兵を護衛に雇わせる。そうすれば商人は信頼出来る仲間を守ってもらえることになるし、傭兵は報酬の不払いを心配する必要はない。

他にもカンパニーが外部からの依頼の情報加盟員に伝え、加盟員に仕事を与えたりする。俺が今日やった盗賊の殲滅という仕事も、カンパニーから与えられた仕事だ。

とつか、小野田にやれと言われて断り切れなかっただけなんだけど。

「ったく、小野田。お前新入りの教育くらいきちんとしてよ。お客様は神様だろ、客の顔くらい覚えさせとけよ」

「いやあ悪い悪い、今度からちゃんとやとくよ。で、仕事はどうだった？」

小野田はそう言って見を乗り出してきた。男が近づいてきても暑苦しいだけだ。キモい、寄るな、顔を近づけるな、俺にガチホモの趣味はない。

「……はつきり言つて、俺じゃなくても出来る簡単な仕事だったさ。つか燃料代と弾薬代の無駄だ、なんで他の奴に行かせなかった？」
「いやね、報酬が安すぎるから誰も行つてくれなかったんだよ。かといって向こうには大した資産もなさそうだったし、お前ならやってくれるかなって」

「おいおい、俺は無償で傭兵ホランティア 仕事やつてるんじゃないんだぞ。今回の仕事だって現金の報酬が少な過ぎる、弾薬代と燃料代を差っ引いたら儲けはほとんどない」

「ま、いいじゃないか。食料はもらえたんだろ？」

こいつ、もしかして俺をパシった？

こんな世の中で、ただで人のために働く奴はいない。そんなお人よしは、あつという間に騙されて殺されてしまう。世の中はギブアンドテイク、それがこの地獄でのルールだ。

……かつての俺も、人のために戦っていた時期もあったが。

話題を変え、別の依頼が入っていないか尋ねる。カウンターの隣の壁には掲示板があり、そこに画鋏で留められたいくつものメモ用紙がある。メモ用紙には小野田が集めてきた依頼が書かれていて、誰でも閲覧して依頼を受けることが出来る。

例えば、

「盗賊退治。報酬20万円。依頼主誰々」

「あるグループのリーダーの暗殺。報酬500万円。依頼主誰々」

「ミュータント狩り。報酬300万円。依頼主誰々」

「商人の護衛。報酬100万円。依頼主誰々」

などなど、様々な依頼がある。もし依頼を受けたい場合は、小野田に伝えて依頼主の了解を得る。

俺もいろいろな仕事をした。盗賊退治からミュータント狩り、暗殺まで、およそここにある仕事はたくさんやった。

「おい小野田、もっと報酬がいい依頼はないのかよ？」

「うーん、あるっちゃあるんだけどな。政府の依頼が」

「どっちだ？ 旧政府？ 新政府？」

「どっちもだ。互いに腕のいい奴を引き入れて、戦力の強化を図りたいらしい」

「じゃ、止めといた方がいいな。一方に肩入れしてもう一方から恨みを買うのはゴメンだからな」

ちなみに、今日本には政府が二つある。

「終わりの日」とそれに続く第三次世界大戦のドサクサに紛れ、国会議員数十人が勝手に立ち上げた「日本民主共和国」。通称「新政府」もしくは「西日本」。

そしてもともとあった内閣から権力を継承し、自分達が正当な政府だと主張する「日本国」。通称「旧政府」もしくは「東日本」の二つだ。

新政府は九州の博多に首都を置き、旧政府は札幌に首都を置いている。ちなみに九州と四国の半分、そして本州の西端は新政府が支配し、旧政府は東北地方の一部と北海道しか勢力が及んでいない。

軍事力は両者ともに均衡している。自衛隊は旧政府の指揮に従い戦力を全て東北地方に移動させ、新政府は民間軍事会社P.M.Cを主体とした「国防軍」を保有し、両者共に勢力争いの小競り合いが度々勃発している。

俺も昔、自衛隊に所属していたことがある。第三次世界大戦の勃発直前に成り行きで入隊し、日本に上陸してきた外国の軍と戦った。5年で辞めたが、その時に得た経験とコネは、その後の俺の活動に大きく貢献している。

基本的に政府の依頼は高額報酬が約束されているが、引き受けられる者はあまりいない。下手に一方の依頼を受けると、もう一方から敵に認定され、場合によっては暗殺部隊が送り込まれてくる。だから新旧政府の権力争いに関する事で依頼を受ける事は滅多にない。

用が済んだので帰ろうとした俺を、小野田が呼び止めた。

「なんだ、もう帰るのか？ 酒の一杯でも飲んでいけよ」

「いや遠慮するよ。俺は疲れてんだよ、どこかの誰かさんにパシリ

同然の仕事させられてな」

「そのどこかの誰かさんは、一体誰なんだろうな？」

お前だよ、お・ま・え。

こいつにはいろいろ貸し借りがあるし、まあその辺はあまり追及しないようにしておこう。今後の仕事に差し支えるかもしれないし。フジヤマ（ネーミングセンスが日本かぶれの外国人並だな）から出た俺は、高機動車に乗り込み帰宅の途につく。俺の自宅はフジヤマの近くにあるが、これは誰かに襲撃を受けてもすぐに小野田達が駆けつけてくれるからだ。カンパニーは加盟員の安全を保障してくれるので、この町で必要以上に襲撃を警戒せずに済む。

俺の家は2階建て、地下室と庭ありの一軒家だった。敷地内にはセンサーやトラップを仕掛け、さらに建物内部は防弾構造になっている。

これだけの物件だと購入額は高くつくのが相場だが、俺は小野田に貸しがあったので安く手に入れることが出来た。他人に恩を売ることは重要である。

家の屋根にはソーラーパネルが設置され、庭には風力発電用の小型風車が立てられている。俺の家だけなら、電力は十分供給出来る。

ガレージに高機動車を戻した俺は玄関に向かった。ちなみにガレージを開けるには鍵を使うかパスワードを入力する必要がある、無理矢理開けようとした場合は即座に警報がなる。無論、勝手に敷地内に侵入した場合も警報とトラップが作動する。

玄関の呼び鈴を鳴らすと、家の中から犬の鳴き声と足音が聞こえた。俺の「同居人」達のものだ。しばらくして、ドアが開く。

「お帰りなさい、武さん」

そういつて姿を現したのは、俺の同居人である少女だった。銀色の髪をショートカットにし、透き通るような白い肌を持つ少女だ。

そして少女の足元には、4匹のシェパードがお座りの姿勢で俺を待っていた。この犬達も俺の同居人だ。

「ただいま、サキ」

俺はそう答え、家に入った。

先程の少女の名はサキという。名字は不知火^{しらぬい}、珍しい名字だ。

サキと出会ったのは6ヶ月前、ミュータント討伐の依頼を終えて帰宅する途中だった。サキは真冬だというのに薄着をして、道端に倒れていた。どうやらどこかから逃げ出して、疲れきって倒れていたらしい。

普段だったらそのまま通り過ぎるか持ち物を漁ってなにか持っていないか調べるところだったのだが、なぜか俺は彼女を拾い、そして家まで連れてきてしまった。

この御時世、他人に構っている隙はない。他人は利用するか警戒する相手であり、かまう暇はない。

だが、なぜか俺はサキを放っておけなかった。それは彼女がまだ17歳の子供であって保護すべき対象であるからかもしれないし、何より俺は、サキに懐かしい面影を感じていたのである。

20年前、初めて俺を好きだと言ってくれ、そして俺が守ることができなかった少女の面影を。

そういうわけで、俺とサキはこの6ヶ月間共同生活を送っている。サキは家で炊事洗濯掃除などの家事全般を行っている。彼女は何もせず俺に守ってもらう気はないらしく、自ら手伝いをするのを申し出た。俺としても仕事をしながら家事をするのも疲れるので、サキに家事をやってもらっている

ちなみにサキは恋愛対象ではない。庇護すべき弱者だ。大人と子供、成年と未成年、保護者と被保護者、そして傭兵と少女。それが俺とサキの関係だ。しかも年齢は20も離れている。サキの方はともかく、俺はサキを恋愛対象としては見ていなかった。

サキはすでに夕食を作り終え、配膳まで済ませていた。ご飯に豚バラ肉の入った野菜炒め、そして大根ともやしの入った味噌汁。質素だが、この食料不足の時代にしては恵まれてる食事だ。そもそも、豚肉なんて滅多に市場に並ぶことはなく、普段は猪を狩って豚肉代わりに食べている。

「いただきます」

サキと俺は椅子に座り、そうやって夕食を食べはじめた。4匹のシエパードが俺達の夕食を物欲しそうに眺めている。

このシエパード達は、俺がかつて飼っていた犬の孫だ。母犬は病弱でこいつらを産んですぐに死んでしまったが、俺が全て育てた。

こいつらはサキの遊び相手であり、同時に護衛でもある。狩りに連

れていけるほど優秀な犬達なので、俺が仕事で留守にしてもサキを守ってくれている。

「そついやサキ、留守中に何かなかつたか？」

「隣の高柳たかやなぎさんが、『しばらく仕事で留守にするからよろしく。誰か勝手に入ろうとしてたら殺やつていいよ』って言っていました」

「そつか。それよりサキ、もう少しオブラートに包んで言おうな？」

夕食はあつという間に終わった。やはり家で食べる料理はおいしいものだ。

サキに皿洗いを任せた俺は、高機動車に積みつ放しだった米や野菜を家に運び込んだ。この御時世食料は重要なので、嚴重に保管しておく。

何度か往復して食料を運び終えた頃には、サキは皿洗いを終えて犬達に餌をやっていた。

「サキ、俺は疲れたからもう寝るわ。お前風呂入っとけ」

「はい、わかりました。……お休みなさい」

「ああ、お休み」

サキは自分の部屋に戻ると、着替えを持って風呂場に戻った。

この辺り一体は川の水を引いているので、ただちに水不足に陥る心配はない。この辺りの川は汚染されていないので、普通に飲用に適している。さらに俺の家には浄水器も取り付けてあるので、仮に汚染されたとしても問題ない。

俺は家中の窓に鍵が掛かっているか、センサーは正常に作動してい

るかを確認したのち、地下室へと降りて行つた。地下室の鉄扉にはいくつかもロックが掛かつており、それを解除して中に入る。

地下室は武器庫だった。古今東西の様々な銃が数十丁、壁の銃架に整然と並べられている。床にはそれらの弾薬箱が積み上げられ、壁には爆薬の入つた箱が置いてある。下手に火をつけたら、この家は跡形もなく吹き飛ぶだろう。

俺は今日の仕事に使つたM14EBRライフルの弾倉を外し、銃架に掛けた。弾倉に残っていた弾は全て排出し、ばら弾が入つた箱に入れておく。

俺は20年かけて、これだけの銃を集めた。いや、売つたり誰かに渡したりした銃を含めれば、多分100丁を越える銃を扱つていただろう。

この御時世、銃は力だ。銃がなければ生き残れない。俺が20年前の「終わりの日」を生き残れたのも、銃を手に入れていたからだ。

武器庫から出た俺は自室に向かつた。風呂場からはサキがシャワーを浴びる水が跳ねる音が聞こえてくる。

いや、俺は見に行かないよ？ 俺は紳士だからね、変態という名の。だから風呂場に押し入って女性の裸を見たりなんかしない。

それにサキの身体はスレンダー……、いや何でもない。

俺の部屋にはベッドと机、そして本棚しかない。机の上にはノートパソコンが置かれ、パソコンには様々な情報が入っている。

俺はベッドに寝転がり、天井を見上げた。ホルスターからM93Rを抜き、枕元に置く。

今日も疲れた一日だった。その記憶を最後に、俺は眠りに落ちていった。

第1話 俺と少女（後書き）

突然ですが、登場人物のアイディアの募集をします。具体的には作品内に出てきた「カンパニー」の加盟員である傭兵やハンター、その他様々な勢力に所属している人間です。

あるいは新政府の国防軍や旧政府の自衛隊、さらにはPMCなどに所属する人物でも結構です。

性別や年齢、一人称などを詳しく書いて頂ければ採用されやすいと思われます。あとその登場人物が何故その職業に就くようになったのかも書いて頂ければありがたいです。

頂くキャラのアイディアは、職業一つにつき一人までとします。職業が違えば何人でも結構です。

武器は基本的に2つまでとします。3つ以上持たせたい場合は、重量が15キロ前後になるようにお願いします。ターミネーターみたいに何丁も持たせるのはご容赦ください。

この作品の日本では政府の勢力圏内以外は治安が崩壊しているので、どんな武器でも手に入るといふ設定なので、基本的に出して頂いた武器のアイディアは採用できると思います。

本編に出てくるキャラの傭兵は8名までとしたいと思います。傭兵以外でも結構です。頂いたキャラのアイディアが被っていた場合は、先に頂いたアイディアを採用させていただくのでご容赦ください。

第2話 チート？（前書き）

登場人物紹介

不知火 しらぬい サキ

17歳

武と一緒に暮らす少女。髪は銀色でショートカット。道端に倒れていたところを武に助けられ、それ以降一緒に暮らしている。戦闘要員ではないため、家で家事をしている。過去に何があったのかあまり話そうとしない。だが武のことは信頼している。

ちなみにスレンダーな体型をしている。

第2話 チート？

6月12日

今日もいい天気だ。何となくそう思った。空には雲ひとつなく、青空が広がっている。

朝食を食べた後、俺とサキは町の中心部に出かけることにした。最近仕事で銃弾を消費して補充する必要があるし、生鮮食品がなくなりつつあるので買って来なければならぬ。

町の中心には様々な店が並んでいる。食料や衣服などの生活必需品の店から、武器弾薬を売る物騒な店まで様々ある。何かなければ、普通のもは大抵そこで手に入る（値段は別として）。

「サキ、準備出来たか？」

玄関でスニーカーを履きつつそうきくと、二階から「今行きます」との声がして、少ししてからサキが下りてきた。

最近気温が上がってきているので、俺とサキの服装はラフだ。サキはジーンズを穿きTシャツに薄い上着を羽織り、俺は迷彩のズボンを穿いてインナーの上にミリタリージャケットを着ている。むろん、俺はM93Rの収まったレッグホルスターを装着し、SG556カリーピンを肩にかけて弾倉が入ったポーチをいくつかベルトに取り付けている。いくら新谷市とはいえ、武装は必要だ。だけど弾倉をいくつも持ち歩けるようなチェストリグを着用する場面でもない。買った商品を運ぶためのリュックも用意する。レジ袋なんてつけてくれるのは遠い過去の話だ。

シエパード達は家で待たせることにする。一応あいつらは番犬にな

るからな。

……多分。

サキと並んで歩く。いつも口数が多いというわけではなく、また感情をはつきりと表すわけでもないサキが、なぜかこうやって買い物に行く時だけは楽しそうな顔をするのだ。

「武さん、今日は何を買いますか？」

「ああ、商店じゃ野菜と肉だな。武器屋では弾を補充する」

「わたし、買い物って大好きです。『何を買いおこな』って考えるのが楽しみです」

サキはそう言って笑顔を見せた。

サキ、お前は知らないだろうな。昔はもっと商品が並ぶ店があちこちにあって、お前くらいの年齢の女の子は週末になると毎日そこに出かけていたんだよ。

だがサキは「終わりの日」以降に生まれたので、そういったことはしたことがない。必要なものを得るには買うのではなく、誰かから奪うことの方が手っ取り早い世界で暮らしてきた。

もしサキが「終わりの日」以前の世界で過ごしていたら、どんな生活を送っていたらうか。俺は時々そう思う。

週末になれば服を買いに渋谷辺りに行っていただろうか？ いや、サキの性格からそれは考えにくい。書店で立ち読みをしている方がお似合いだ。

ちなみに俺はアキバでメイド喫茶に……ゲフンゲフン。何でもない。

ま、考えるだけ無駄だな。あの平和な世界は戻って来ないんだし。

そついやこつやって女の子と並んで歩くのって、実は凄いことなんじゃないか？

いや、ないないない。だって俺37歳だし、サキは17歳だし。俺の外見は17歳だからもしかしてサキと俺は恋人同士に見えるかもしれないが、実際は親子と言った方が正確だよな。年齢差的に。

町の中心にたどり着くと、朝だというのにたくさんの方がいた。町の中心の一部（酒屋とか売春宿とは賭場とか）は夜の方が人で溢れるから、朝になって自宅や宿に帰る連中が多いのだ。言うまでもなく、彼らの全員が武装している。

「じゃ、まずは食料だよな……」

そう呟くと、俺とサキは行きつけの商店へと向かう。長い間の付き合いなので、いい商品を店長が優先的に回してくれることもある。「増尾屋」と看板が掲げられた商店に入る。中には商品が置かれた棚がいくつも並び、カウンターには暇そうな40過ぎのオッサンが椅子に腰掛けている（37歳の俺がオッサンと言えたことではないが）。

「おお岩崎、サキちゃん！ 今日もいつものやつか？」

カウンターに座っていたオッサンこと増尾が立ち上がり、早速レジ前に移動する。俺達は金を持ってこの店のお得意様なんだが、

それにしても気が早過ぎないか？

俺とサキは棚を回り、入口に置かれていたカゴに商品を入れていく。この店では大抵のものを取り扱っていて、とりあえず何かない場合ここに来れば手に入る。

食料から衣服、さらには銃器まで取り扱っている。具体的には治安がまだ崩壊していない新旧政府の支配地域から流れてきた製品や、猪や鹿を狩って得た肉、海で取れた魚、新谷市の農園で採れた野菜など様々なルートで入手した商品だ。

一応銃も取り扱っているが、拳銃や散弾銃といった初心者用の武器だけだ。これは新谷市では高性能な銃は武器屋が取り扱う取り決めになっていて、しかも銃の売上は少ないからあまり売っても意味がないからだ。新谷市に来る人は、大抵銃を持ったまま来るから買う必要はない。

「そうだとツサン、なんか甘いもの売ってないか？」

「甘いもの？ 菓子か？ 新政府の領域から流れてきたチョコレートとかならあるが。あとオツサンと言うな」

「じゃあそれくれ。あとカロリーメイトをいつもの分」

願いをスルーされた増尾は溜息を吐きつつ、カウンターの下からアルミホイルに包まれた板チョコレート数枚と、黄色いパッケージが特徴のカロリーメイトを数箱取り出した。ちなみにカロリーメイトは、いまだに旧政府の支配地域である北海道で生産され、流通している。

サキがカゴに入った食料をカウンターに乗せる。増尾は素早く電卓を叩いて、「20521円です」と告げた。

財布を取り出して料金を支払うと、増尾は「まいどありい〜」と笑顔を見せた。

こんな世界になっても、まだ通貨は価値がある。こういった政府の支配が及ばない地域では、傭兵やハンター同士の場合は物々交換の

方が喜ばれる。しかし商人や武器商品達は現金での支払いを望む。彼らは政府の支配地域から商品を仕入れ、支配地域では貨幣が支払い手段だからだ。政府の支配地域では物々交換はあまり通用しない。ま、いくら貨幣に価値があるといっても、通貨の量に比べて商品が少ないからインフレが起きてるけどね。

増尾屋を出た俺は、サキに買ったばかりのチョコレートを渡した。

「あの……、これは？」

「いつもよく家事をしてくれてるから、ご褒美だ」

「そんな！　じゃあ代金を……」

サキはそう言っただけで財布を取り出そうとしたが、俺はその手を押さえ止めた。

大人が子供にものを与えるのは当然のことだ。確かにチョコレートを始めとした菓子類は高価な代物だが、いつもサキにはそれに見合うだけの仕事してもらっている。

そう言っただけで、サキは財布を閉めた。そしてチョコレートを大事そうに、リュックに閉めた。

「食べないのか？」

「いえ、残しておきます。大事にします」

そうか、ならいい。それにしても、サキは行動の端々に可愛さが垣間見えるな。

だからといって襲い掛かったりはしないけどね。

今度は武器屋に向かう。武器屋は商店と違って、より高性能な武器や弾薬を売っている。ただしその分値段も高価ではあるが、ベテランの傭兵やハンターがよく使用する。

いつも利用している武器屋は「六実」という。サキを入口で待たせ、俺は六実の中に入った。

「いらっしやい」

店内に入るとカウンターにいた60歳程度の男性が声をかけてきた。この武器屋の店主である、六実^{むつみ} 敏夫^{としお}である。

店内にはさっきの増尾屋と同じように棚がいくつも並んでいた。ただし置かれているのは、銃やその付属品であるスコープなど物騒なものばかりだ。

「9mmパラベラムを120発、7.62mm NATOを300発くれ。あとM93R用の弾倉を6個」

「あいよ。今回はまた大量に買ってくな」

「まあ、仕事で大量に使ったからね」

六実カウンターの下から金属の箱を取り出すと、そこから弾薬を取り出した。そして紙箱にどんどん収めていく。

この増尾は、「終わりの日」以前にはどこかの暴力団に所属していたらしい。主に海外の武装組織と繋がりを持って、武器の密輸入に手を染めていたそうだ。

そして「終わりの日」以降はその繋がりを活かし、傭兵やハンターに武器を売る武器商人を始めた。最初は旧ソ連製の拳銃や散弾銃などしか取り扱っていなかったが、徐々に自動小銃や機関銃も売りはじめた。それらは主に、大陸ルート^{大陸ルート}の外国人商人から輸入したり、西日本のPMCが余分に購入して違法に横流ししたものを入手した

物だ。だから最新鋭（20年前の時点だが）の武器も取り扱っている。

俺は弾薬と弾倉を受け取り、代金を支払った。

「そついや、なんか新しい武器は入ったか？」

「あるよ。ダネルNTW対物狙撃銃が入ったよ」

「装甲車も破壊出来るライフルなんて買う奴はいるのかよ？」

「あれ？ 岩崎が買うんじゃないのか？」

「買わねえよ！ オーバーキルだろ！！お前は人間をミンチ肉にさせたいのかよ！？」

ダネルNTWは航空機用の20mm機関砲弾を使用する対物ライフルだ。一般的な狙撃銃の弾丸の光景は7.62mmであることから、その規格外の破壊力が窺える。

そんな物騒なもん、買う奴がいるのか？ 装甲車も破壊出来るような代物を購入するってことは、確実に相手が政府になる。そして政府を敵に回すってことは、それすなわち死が待ち受けている。

このジジイ、たまに役に立ちそうで立たない物を取り扱っている。だからボケがはじまっているのではないかと疑ってしまう。

武器弾薬を購入した俺は店の外で待っていたサキを連れ、帰宅の途についた。もう特に買うものはない。

町の中心部には駅がある。線路が一本だけ通り、小さな駅舎がある。そして駅の前には広場があった。広場には大きな掲示板が建てられており、そこには行商人や流れの傭兵達が各地から集めてきた情報が掲載されている。

掲示板に貼られた大きな紙には、今日の天気や新旧政府の政情、そして噂などが貼られている。

どうやら今日の天気は晴れらしい。数日後は雨が降るといふ。他にも様々な情報がある。新種のミュータントが出没したとか、大きな盗賊団がこの辺りに近づいてきているとか、噂話に過ぎないものばかりだが。

「明日も晴れですか。よかった、洗濯物が乾かせます」

サキは家事を担当しているので、そういった事には敏感だ。俺としても雨より晴れの方が気分がいい。駅前広場には何人も傭兵やハンターがぶらついていた。彼らは談笑したり商売の話をしたり、とりあえず和やかなムードである（ただし銃を持っていなければの話だけだ）。

さて帰ろうかという時になって、俺は後ろから誰かに呼び止められた。振り返ると、そこには数日前にフジヤマで俺をガキ呼ばわりしたあの警備員がいた。

「小野田さんの使いで来ました。小野田さんがあなたを呼んでいます」

「小野田が？　なんで？」

「頼みたい事があるそうです」

頼みたいこと？　依頼か？

俺はサキの方を見た。サキも一緒に連れていくか？　こいつを一人にしたくはない。

だがサキは「わたし、先に帰ってます」と言った。俺はサキに注意して帰るように言い、一人でフジヤマに向かう。

こうやって小野田から直接依頼を受けるのは度々あることだった。大抵は難しい仕事を直々に頼まれるのだが、たまに俺をパシる目的

で呼び出すこともある。

……次パシリやがったら、髪を全部引っこ抜いてやるうか。

フジヤマに到着すると、早速小野田が待ち構えていた。店内は朝と
いうこともあり、客の姿は少ない。

「さあさあ座ってくれ。何か飲むか？」

「いや、さっさと話を済ませよう。で、何の用だ？」

「いやね、少し頼みたいことがあってね。なんか10人くらいの盗
賊連中が新谷市（こま）に近づいてきているらしいんだよ」

盗賊？ なんもの大した脅威ではないだろう。

「終わりの日」以降、盗賊なんて珍しくもなくなった。初期はナイ
フやバットなどを持ったストリートギャング紛いの連中が多かつた
が、密輸入されたり違法に製造された銃器が出回るにつれ、銃火器
で武装する盗賊が増えはじめた。

だが銃で武装しているといっても、実態は銃を持って気が大きくな
っている素人の集まりだ。銃だつて拳銃や散弾銃などばかり、まれ
に突撃銃や機関銃を持っている奴もいるが、ほとんどの盗賊は脅威
にならない。

「盗賊がどうした？ 追ひ払えばいいじゃないか」

「だから、それを岩崎に頼みたいんだよ」

「はあ！？ なんで俺が？ 警備隊を出せばいいじゃないか」

「だってその場合、確実に抗争に発展しちゃうんだよな。こっちと
してもリスクは避けたいし、それに警備員に出す給料の額が上がっ

「ちやうじゃないか」

つまり、俺にこれ以上町に近づくなと盗賊達を説得してこいと。んで戦闘になったら、一人で全員倒せと。

つまり小野田は、経費節減のために俺をパシリたいと。

はつきり言つて俺じゃなくても出来る仕事だ。盗賊なんて大した敵じゃない、新米にやらせるよ。

と言うと、小野田はさらに頼み込んできた。

「え〜いいじゃ〜ん。俺とお前の仲だろ〜、心の友よ」

「それはそれ、ビジネスはビジネスだ。それにお前はジャイアンだよ。とにかく依頼なら報酬は貰う」

「ただでやつてくれないのかよ?」

「もしお前がロリな美少女で、目を潤ませて上目遣いでお願いされたら話は別だが……」
「つておいやめる。アラフォーの野郎がやろうとしたってキモいだけだ」

「この変態め」

「俺は変態じゃないよ! 変態という名の紳士だよ!」

その後の交渉により、35万円の報酬で依頼を引き受けることになった。この手の依頼としては、まあ妥当な額だ。

今日は特に依頼も入ってなかったなので、家には帰らずそのまま仕事に直行することにする。小野田に頼んで、サキに帰りが遅くなる事を伝えてもらうために使いを出してもらった。

どうやら盗賊達は新谷市を囲む川の上流側にいるらしい。数日前に新谷市にやって来た行商人が襲われたそうだ。

川に架かる橋を渡り、新谷市から出る。橋の警備員達は、基本的に

何もしてこない。通行を阻止するのはミュータントが侵入しようとしていたり、入って来ようとする人間が好戦的な場合か、出て行こうとする人間が町の中で何か問題を起こして逃亡しようとしている場合に限る。その条件に引っ掛からなければ、新谷市への出入りは自由だ。

盗賊達のいる場所が近いこともあり、今日は歩いて現場に向かう。というか、車は長距離の移動をしたり荷物を運ぶ場合しか使わない。燃料や部品は貴重であり、いつでも必要な分だけ入手できる訳ではないからだ。

新谷市の周辺には森林や草原が広がっている。元々新谷市の周辺は人口が少なかつたし、「終わりの日」以降は誰も整備することがないので荒れ放題になっているのだ。

それに核兵器や生物、科学兵器が使用された影響かはわからないが、異常に草木が繁茂している森もある。そういつた場所はミュータントも多数生息するので、立ち入るのはハンターくらいしかない。

道路を北上し、盗賊達が目撃されたという公園へと向かう。あくまでも戦闘は最終手段であり、出来るだけ話し合いで解決してこい、というのが小野田の指示だった。

俺もあいつも、それは無理なこととはわかっているのだが。

北に進んでいくと、道の脇に小さな公園があった。遊ぶ子供はいなくなり、20年放置されている公園だ。

そのせいで草は伸び放題、街灯は錆び付き、座る板が朽ち果ててな

くなつたブランコが錆びた鎖を風に揺らしている。
そして公園の中心に、10人の盗賊が車座になつて何か話していた。
フードつきのパーカーとジーンズを着用し、傍らには銃が置かれて
いる。

どうやら話の内容的に、盗賊達は新谷市を襲う計画を立てているよ
うだ。人数でも武器の性能でも劣っているのに、無謀な事である。
よくいるんだよな、こういう連中。銃を持って気が舞い上がって、
正常な判断が下せなくなっている奴がほとんどだ。経験が長い盗賊
は、大抵一人で行動している傭兵や、移動中の行商人を襲う。たく
さん人がいる場所は襲わない。

「あゝ、少しよろしいでしょうか？」

その声をかけると、盗賊達は驚いたように瞬時に立ち上がり、俺に
銃を向けてきた。いきなり物騒な奴らだ。

「だ、誰だてめ……、なんだガキかよ」

ガキ言つな。俺は37で、多分お前らより年上だ。
そう心の中で言いつつ、盗賊達の装備を確認する。3人がマカロフ
自動拳銃、4人が水平二連散弾銃、二人がステン短機関銃を所持し
ている。リーダー格らしき男は、驚いたことにAN-94突撃銃を
装備していた。

マカロフは旧ソ連製の自動拳銃で、日本で最も流通している拳銃の
一つである。「終わりの日」以前は暴力団などが持っていたが、大
陸経由で大量に密輸入されてきている。

水平二連散弾銃は盗賊達の標準武装と言ってもいい。「終わりの日」
以前から猟銃として大量に日本で流通していたし、製造方法も簡単
だから安価で大量に流通している。

ステン短機関銃は、イギリス製の短機関銃だ。設計されたのはなん

と第二次世界大戦中、武器不足に困ったイギリス軍が「簡単に作れて資材を極力減らして銃作る」という思想に基づいて作られた。そのため銃身にライフレングを入れる以外、工作機械があればどんな工場でも作れるようになっていた。水道管に銃床ストックの鉄棒と板がくっついたような外見が特徴だ。

日本で流通し始めたのは第三次世界大戦後、外国から違法に持ち込まれた設計図と実銃を元にどこかのバカが作り始めたのがきっかけだ。製造方法が簡単だし、何より連射出来るので盗賊がよく使う武器の一つだ。

これらの3つの武器は大量生産品である故に性能も精度もそこそこだ。だがリーダー格が持っているAN-94は、ロシア軍が採用している高性能で高価な突撃銃である。命中精度もいいため、価格は高い。盗賊が持つていていい銃ではない。

「てめえ、何のようだ？」

「いや、新谷市のリーダーの使いで来ました。新谷市を襲撃しようってなら止めておけと伝えに来ました」

「ハッ！ てめえみたいなガキに言われてビビるかよ！ それよりボウズ、いい銃持つてるじゃねえか」

あ、ヤベ。ついSG556を持つて来てしまった。SG556は高性能な銃で高価だから、流通数は少ない。

そんな物を盗賊の前で見せたらどうなるか？ 連中が奪おうとするだけである。

立ち上がった盗賊達はニヤニヤと気味の悪い笑いを浮かべながら、俺を取り囲んだ。銃に手を掛け、いつでも撃てる姿勢を取っている。

「なあボウズ、そんな銃持つてたって使いこなせないだろう？ 俺達にくれよ」

「遠慮します。それよりあなたもいい代物持ってますけど、どうや

って手に入れたんです？ 買ったんですか？」

「ああ、こいつか。傭兵が一人でうるついていたから、殺して頂いたんだよ。案外弱いんだな傭兵って」

リーダーがそう言ってAN-94に手を掛けつつ下品な笑い声を上げた。ああなるほど、だから無謀にも新谷市に突撃しようとしていたのか。たまたま傭兵一人を殺せたから、自分達が無敵だと思っているのか。

「ボウズ、持ち物を全部置いてさっさとどっか行け。命だけは助けてやる」

「あんたらみたいな下品な連中にくれてやる物は、一円たりともねえよ」

面倒になってきたので、俺は敬語を使うのを止めて挑発的にそう言った。リーダーが俺の口調にナメられたと感じたのか、銃口を俺に向けた。

「てめえ、ガキだから優しくしてやってるのに付け上がりやがって！」

「俺はガキじゃねえよ。37歳だ、新人^{ルキ}」

さらに挑発的に言うと、ついにリーダーがキレた。「やっちなええ！」と言つと同時に、俺を取り囲んでいた盗賊達が発砲する。

普通の人なら絶体絶命の状況だ。いくつもの銃口を向けられ、周りを取り囲まれている。普通の人間なら、ここで死ぬ。

……普通の人間なら、な。

生憎、俺は普通の人間ではない。普通の人間と違うところは歳を取らないだけではない。少々人外な能力も20年前に身につけた。

俺に向けて飛んでくるいくつもの銃弾が、まるで映像をスローモーションで再生しているかのように見える。弾丸はまっすぐ俺に飛んでいる。

俺は上半身を少し傾け、盗賊達の射線上から身体を反らす。銃弾は俺に突き刺さることなく、今まで俺がいた場所を通り過ぎた。

さらに姿勢を低くしつつ、俺はレグホルスターからM93Rを抜いた。SG556は使わない、こんな盗賊連中相手にライフル弾を消費するのはもつたいたい。エゴを心掛けなければ。

M93Rを単発タミキョートに設定し、まずはリーダーの頭に銃口をポイントする。盗賊達は今だに何が起きたのかわからないようで、マヌケみたいにあんぐり口を開けている。

俺はM93Rの引き金を引いた。放たれた9mm弾は、正確にリーダーの頭を貫いた。周囲に頭蓋骨の破片や砕けた脳が撒き散らされる。

「てめえ、何を……！！」

そう言いつつ、盗賊の一人がステンを連射した。だが俺は身体を捻り、それらの銃弾を回避する。

放った弾丸をことごとくかわされた盗賊が、まるで化け物を見るような目をした。その頭にも銃弾を叩き込む。

「うっ、うわあああああっ！！」

悲鳴を上げながら一人が散弾銃を発砲した。俺は横に飛び、散弾を避ける。放たれた散弾は運の悪いことに、俺が今までいた場所の後ろにいた盗賊に襲い掛かった。

同士討ちか、一番やってはいけないことだよキミ。もう二度と同士討ちをしないように、あの世に送ってあげよう。

右足の親指を軸にして身体を右に回転させつつ、次々M93Rを撃つ。一発撃つたび、悲鳴と共に盗賊が地に倒れる。

10秒もしない内に、公園で立っている人間は俺だけになっていた。

俺は20年前のあの時、人外の能力を身につけた。俺と戦った世界同時バイオテロを引き起こした女は、自ら蜘蛛のような生物兵器と化した。

そしてその女に裂かれた頬の傷から、その女の生物兵器化した細胞が俺の体内に入った。

その時から、俺は普通の人間ではなくなった。不老に加え、異常にいい五感、軽い怪我ならあっという間に治る治癒力の他にも、今のような能力も身につけた。

危険な状態に陥ると、周囲の光景がスローモーションのように遅く感じるようになったのだ。発射された弾丸やその弾道すら見え、身

体を捻って避けることも可能だ。一対複数で戦う状況では大いに役立つ能力だが、代償もある。

それは一度能力を使うと、猛烈な空腹感を感じてしまうことだ。

俺はリュックから、増尾屋で買ったカロリーメイトを取り出し、封を切って中身を口に放り込んだ。あくまで空腹感なので実際には腹が減っていないことが大いし体力が減る訳でもないのだが、猛烈な空腹感は気力を減らしてしまうし、なにより精神的に辛い。

まあこの能力を使わずに済む場合の方が多いのだが、カロリーメイトは能力を使って空腹感を感じた時のためにいつも携行している。

俺は盗賊達の死体を見下ろした。全員が頭か心臓を撃ち抜かれ、即死していた。

俺の言う通りにさっさとどこかに行ってくれれば死なずに済んだのに。というか常識的に考えて、どう見てもガキな奴が高性能な銃を持っている時点で警戒しろよ。

……自分で自分の事をガキって言ってしまった。

その後、恒例となった死体漁りをする。リーダーが持っていたAN-94とその弾薬は無論頂いていく。六実のじーさんに売りつけよう。

マカロフや散弾銃、ステンも回収しておいた。これらの性能が低い武器は六実では取り扱っていないが、増尾屋に売れば問題ない。ま

あ、タダ同然の価格ではあるが。
盗賊達の財布まで漁ったのち、ずっしり重くなったリュックを担いで俺はもと来た道を引き返した。残念な事に、筋力を強化するような能力は得られなかった。だから俺は、一歩歩く度にリュックの重みを感じる。

ああ、疲れた。どうせ人外的能力を得るなら、力が強くなったり持久力が上がるような能力がよかった。俺はそう、心の中で愚痴った。

その後新谷市に戻った俺は、早速六実にA N - 9 4を売った。お値段は10万円。臨時ボーナスおいしいです。

第2話 チート？（後書き）

登場勢力紹介

傭兵

金で動く兵士。新谷市には武を始めとした傭兵が集まっている。個人で依頼を受ける者もいれば、数人でグループを使って行動する者もいる。ただし武器や装備は人によって違い、統一性はない。金さえ貰えばどんな仕事もやるが、依頼主の報酬の支払いが止まれば仕事を放棄したり、最悪の場合は裏切ることもある。

ハンター

人間を害するミュータントを狩る職業。ミュータントは人間と違って痛覚が鈍く耐久力が強いため、強力な武器を装備している場合が多い。

基本的に依頼を受けてミュータントを狩るが、まれに興味で狩っている者もいる。

第3話 番外編 登場勢力紹介（前書き）

今回は作中に登場する勢力の紹介をします。今後も追加予定。オリキャラを登場させたい場合の参考にしてください。傭兵以外も大歓迎です（ただし超能力者除く。本編に要所要所でしか関わってこないのです）。

第3話 番外編 登場勢力紹介

傭兵

報酬を得る代わりにどんな勢力の味方にもなり、またどんな仕事でもする兵士。「終わりの日」以降の日本に多数存在する職業。

個人で行動していたり数人でグループを作って依頼を受けたりとその形態は様々であり、傭兵達が多数集まってPMC（後述）を結成する場合もある。

自ら武器や車両などを調達する必要があるため装備に統一性はなく、また武器商人との関係も深い。

唯一共通しているのは「報酬第一」という点のみで、依頼人からの報酬が途絶えれば任務を放棄したり、最悪の場合裏切る事もある。また規律がないに等しい傭兵もあり、虐殺や略奪などに手を染める者も多い。

ハンター

主に依頼を受けてミュータントを狩る職業の人間。ミュータントは危険であるため、経験豊富な傭兵などが転職（もしくは兼業）する場合が多い。またただ単に、趣味で狩る者もいる。

ミュータントは人間と違って痛覚が鈍く身体が頑丈なので、強力な武器を装備している。またミュータントの習性などにも熟知している。

たまに野生の猪や鹿、もしくは食用のミュータントを狩ってその肉を売っている。

商人

物を売る職業の人間。資金やコネが豊富である。

主に食料や衣服、その他生活必需品を売っているが、まれに銃器も売っている。ただし、性能が低く価格も安いものばかりである。

一箇所に店を構えている者と、各地を回って商売する行商人の二種類がある。共通して言えるのは両者とも金や商品を持っているので盗賊（後述）などに狙われやすく、よく傭兵に護衛を依頼する。

武器商人

主に銃火器やそのオプションパーツ、弾薬を売る職業の人間。個人から会社組織のようなものまで様々な形態がある。

主に海外ルートを使って武器を輸入したり、規律が緩いPMCが横流しした武器弾薬を入手して売っている。また自前の武器弾薬の製造工場を保有している者もいる。

旧式の拳銃や散弾銃から最新鋭の自動小銃や機関銃、さらにはロケット砲までと、商人によって売っている武器のバリエーションが違

情報屋

様々な情報を仕入れてきては売る職業の人間。取り扱う情報については精度が非常に高いものから、信憑性に欠ける噂話まで様々であ

る。

情報は人から入手したり、政府などのネットワークにハッキングを仕掛けて違法に入手したりと様々である。傭兵が依頼を遂行する上で度々利用することがある。

運び屋

金さえ払えばどこへでもどんなものでも運ぶ人間。地形や道路の様子に詳しい。

荷物を早く体力に運ぶために車両などを所有している。また一部の人間はヘリコプターなども持っているが、燃料は貴重なので代金は割高である。

盗賊

他人から金品を強奪したり盗む連中。各地に出没している。

「終わりの日」以降出没するようになり、今では新旧政府の支配地域以外でなら必ずと言っていいほど目撃される。かならず数名でグループを作り、統率は取れていない。

武装は拳銃や水平二連散弾銃、ステン短機関銃など貧弱な場合が多いが、まれに強力な武装の盗賊団も現れる。

難民

「終わりの日」以降ゾンビや戦争で住む場所を追われた人々。大抵

スラム
貧民街で暮らしている。
貧しいため、難民から盗賊になる者が多い。

民兵

「終わりの日」以降も存続している市町村が擁する武装組織。所属する自治体の治安維持や他の自治体との抗争を行っている。元々はゾンビ対策の為に住民達が結成した自警団が、第三次世界大戦によって日本に流入してきた銃火器を入手して強力になったもの。素人に毛が生えたようなものから軍隊並の規律や装備をしているものなど自治体によって様々である。物資を巡って地域同士で抗争が勃発することが多々あり、民兵はその抗争に欠かせない。一部の民兵は傭兵に指導を受けている。また新旧政府の対立が起きている地域では、自衛隊や国防軍が人材や兵器を提供している。

PMC 民間軍事会社

民間の軍隊と言ってもいい組織を保有する会社。金で動く。傭兵達が集まって会社の体を作り上げた場合が多く、実質的には傭兵の集まりである。戦闘員を提供したり、戦闘車両や航空機による支援を行ったり、軍需物資の輸送や調達を行ったりと会社によってサービスの内容が異なる。

日本では第三次世界大戦後に急速に増え、日本民主共和国の国防軍に戦力を提供している。そのため国防軍の主力はPMCと言っても

いい。

日本政府

日本の統治機構。通称「旧政府」もしくは「東日本」。

「終わりの日」や第三次世界大戦以降も内閣を中心として日本を統治していたが、国会議員数十名が離反して作り上げた「日本民主共和国」と敵対している。最近では押され気味で、北海道と東北地方の一部にしか勢力が及んでいない。首都を札幌に置いている。しかし最近では戦闘は少ない。軍事組織として自衛隊を保有している。

自衛隊

日本の防衛組織だった軍事組織。今は旧政府の命令に従い、新政府との戦争を戦っている。また支配地域内における治安維持やミュータント掃討を行う。

「終わりの日」には指揮官が独断で出動を命令し、ゾンビによる被害も少なかった。岩崎武が届けたワクチンと治療薬を使用し、ゾンビの掃討作戦を開始したが、大分ゾンビが減ったところで第三次世界大戦が勃発してしまう。

第三次世界大戦ではどうか外国の軍を日本から追い出したが、その際の被害も大きかった。現在は北海道と東北地方の一部に駐屯している。

戦車や装甲車両、航空機や艦艇も保有し隊員の練度も高いため、傭兵がマトモに戦っても勝ち目がない。ただし国防軍に比べて陸上兵

力で劣っている。

武が成り行きで5年間だけ、第三次世界大戦中に所属していた。

日本民主共和国

国会議員数十名が「終わりの日」以降に勝手に立ち上げた日本の統治機構。通称「新政府」もしくは「西日本」。

「今の政府は統治機能を失っている」という名目で、国会議員数十名が離反して立ち上げた。第三次世界大戦後に本格的に日本の統治に乗り出し、今では九州と四国の半分、そして本州の西端を支配している。

軍事組織として国防軍を保有し、旧政府を完全に倒して日本の支配を目論んでいる。今のところ、戦闘はあまり起きていない。

国防軍

新政府の軍事組織。新政府の命令に従って自衛隊との戦闘や、新政府の支配地域における治安維持やミュータント掃討を行っている。実態は日本最大手の「ヤマト重工」を中心としたPMCが集まって出来ている軍隊。外国製兵器を保有している。そのため強力な武装をしているので、迂闊に戦うと死が待っている。

航空戦力や海上戦力で自衛隊に劣るが、地上兵力で勝っている。

カンパニー

新谷市を中心とする集まり。傭兵を始めとした様々な職業の人間を集めての互助を目的としている。リーダーは小野田弘。
新谷市内における治安維持も担っている。

ミュータント

第三次世界大戦で使用された核^N・生物^B・化学兵器^Cによる突然変異で発生した生物。動植物が突然変異したり、人間が他の生物の細胞を取り込んだりしてミュータント化する事例もある。

ノーマンズランド
汚染された無人地帯を中心に多数棲息し、今では日本中に広がっている。通常の動物よりも痛覚が鈍く耐久性も高いため、倒すには強力な火器が必要。

外見は人間ではないが中身は人間の意識を保っていたり、逆に外見な人間なのに中身は人間でないミュータントもいる。また一部は食用に適している。

超能力者

NBC兵器の影響により誕生した、超自然的な力を持つ人間。外見は普通の人間と大して変わらない。数万から数十万人に一人の割合で誕生する。

サイコキネシス サイコメトリー
発火能力や念動力、読心や未来予知などの能力が報告されている。

その力ゆえに超能力者だという事がばれた場合は、普通の人間から迫害されるか利用され、その怨みでテロ行為に及ぶ超能力者もいる。また新旧政府が戦力として使うために先を争って超能力者の確保を

行っている。

ゾンビ

歩く死体。世界を崩壊に導いた元凶。世界同時バイオテロによって発生し、各国を大混乱に陥れた。

生きた人間が噛まれることによって、体内にゾンビ化ウイルスが侵入することにより発生する。噛まれる前にワクチンを打つか、意識を失う前に治療薬を注射することでゾンビ化を防ぐことが出来る。すでに死亡しているため痛覚がなく、また身体のリミッターが外れているため怪力である。100体に1体ほどの確率で、高い運動能力を持つ「走るゾンビ」が発生する。

頭を破壊すれば活動を停止する。

武が確保したワクチンと治療薬により一旦はゾンビの発生が抑制され、自衛隊や各国軍隊による掃討でその数は減った。しかし第三次世界大戦により医療制度がほとんど崩壊したため、ワクチンと治療薬が国民に行き渡らなくなり再び増加し始める。

第3話 番外編 登場勢力紹介（後書き）

御意見、御感想、アイデア、キャラ案募集しています。

第4話 となりの崖の谷の城のアリエッティ（前書き）

登場人物紹介

小野田 おのだ 弘 ひろし

37歳

新谷市を牛耳る「カンパニー」のリーダーであり、酒屋「フジヤマ」の店主。

「終わりの日」以前は弱小暴力団の下っ端だったが、ゾンビ発生による混乱の中で手腕を発揮していった。第三次世界大戦終結後、自分に忠実な部下を引き連れて新谷市に移住し、カンパニーを設立する。

カンパニーは様々な職業の人間の互助を目的としており、新谷市内外から入手した依頼の情報をカンパニー加盟員に与えている。武とは第三次大戦からの知り合いであり、高額報酬の依頼の話を持ちかけてくることが多い。度々、武をパシる。

第4話 となりの崖の谷の城のアリエッティ

「はあく、なんかいい仕事ねえかな？」

6月も半ばを過ぎ、どんどん暑くなっていく中、俺はフジヤマにやってきました。別に酒を飲みに来たわけではなく、仕事を探しにやってきたのだ、

午前中なので、フジヤマにいる人は少なかった。大概が飲んだくれであり、朝になっても延々と酒を飲み続けているオッサン共（俺も37なので人の事は言えないが）である。休肝日とか設けなよアル中ども。

「おつ、仕事か？」

俺が入って来たのに気づいた小野田が、カウンターの向こうから話し掛けてきた。「まあな」と答え、俺はカウンター席に座る。

「注文は？」

「コーラ」

「たまには酒を飲めよ、子供だなあ」

「子供言うな！ それに誰が朝から酒を飲むと思っただ、酒は水じゃないんだぞ」

「はいはい、わかったわかった……」

小野田はそう言って今まで磨いていたグラスをしまい、コーラの入った瓶とコップを持ってきた。中身を注いで俺に渡す。

ちなみに俺は酒があまり好きでない。飲めないわけではないが、避けられるなら飲酒はしたくない。同年代の皆は酒は美味しいと言うが、

俺にはイマイチ良さがわからない。
まあ、俺の身体が17歳のままだって事が関係しているのかもしれないが。

受けとったコーラを少しずつ飲みつつ、何かいい仕事はないか尋ねる。カウンター脇の掲示板にも依頼のメモは貼られているが、小野田コノノに聞けば他の仕事も教えてくれる。たいてい危険な仕事なのだが、その分報酬も高い。小野田も俺を信頼してくれているようで、度々そういつた依頼を覚えてくれる。

「いい仕事ね……。今のところあまり入ってないな。どれも報酬は20万円以下だし、他の連中が予約を入れてる」

「お前このリーダーだろ、もつと仕事の話持ってこいよ」

「やかましいこの日暮らしめ！ ないてる！」

「派遣社員かよ俺は！？ あと『ひぐしひぐのなくころに』かよ！？ ひぐらし違いだろ！」

と言いつつも、小野田は一番いい報酬の仕事を教えてくれた。カンパニーのリーダーである、小野田からの依頼だ。

なんでもこの新谷市周辺の森でミュータントが目撃されたらしい。行商人が一人襲われたがどうにか逃げ切り、そして小野田が危険だと判断してその討伐を決めたそうだ。

ミュータントには様々なタイプがいる。元々自然にいた動物が放射線や化学物質の影響で巨大化（といってもせいぜい二回り程度大きくなっただけだ）したり、あるいは突然変異で全く異なる外見の生物になったりと様々である。

そしてそのミュータントには人間を含んでいたりする。見た目はかろうじて人間だけど中身は完全に精神崩壊してて猛獣そのものだったり、あるいはどう見ても人間じゃないけど精神は人間で言葉も喋れたりする奴がいる。そして俺の知り合いにも何人か、見た目は人

間じゃない知り合いがいる。

だがミュータントといっても所詮は動物、銃火器で対応できる。散弾銃やライフルを使えば簡単に倒すことが可能だ。ただしミュータントは例外なく痛覚が鈍く身体も頑丈なので、それなりに強力な武器が必要だが。

「で、そのミュータントはどんな奴だ？」

「わからないらしい。襲われたのは夕方、姿はほとんど見えなかったんだとか。ただ荒い息遣いとズシンズシンっていう足音がしたそうさ」

「なら動物系のミュータントか、しかもかなりでかそうだな。他の奴にこの話をしたか？」

そうきくと小野田は頷いた。すでに一人、ミュータント狩りに人手を確保したようだ。

そいつの名前は鳥谷とりたに 圭介けいすけ、ハンターだ。名前は聞いたことがあるが、一緒に仕事をしたことはない。

今回は二人で仕事をしてほしいそうさ。正体不明のミュータントを相手にするんだから、一人で行かせるのは危険だと判断したのだから。そしてその判断は正しい。

報酬は40万円。ただし対象の重量によってボーナスが加算されていく。たいていの場合ミュータントは重くなればなるほど頑丈で強くなるので、危険度が増すから当然のことだ。

すでに鳥谷は装備を整え、今回の依頼のパートナー待ちに入っているそうさ。小野田が無線で鳥谷に俺が依頼を受けたいと伝えると、向こうは快諾してくれた。30分後に俺の家に迎えに来てくれるらしい。その前に装備を整えなければ。

俺はコーラの代金を置いて店を出る。背後から小野田が声をかけてきた。

「良い狩りを」

フジヤマから歩いて15分ほどの距離にある自宅に戻ると、サキと犬達が出迎えてくれた。

「サキ、急に仕事が入った。夜までには帰ってくると思う」

「わかりました。どんなお仕事なんですか？」

「ミュータント狩りだ。うまくいけば、今夜はステーキだな。相手が食べられる奴だったらの話だけだ」

そう言うと、サキは「楽しみです」と言っただけで俺の準備の手伝いを始めた。といっても、水筒に水を入れたりカロリーメイトを取ってきたりと簡単なことだが。

俺は弾倉ポーチやポケットがいくつもついたタクティカルベストを身につけ、地下室の武器庫へと下りていく。何重ものロックを解除したのち、俺は鉄扉を開いて武器庫に入った。

銃架からいつも使用しているSG556やM14EBRではなく、ショットガン散弾銃であるM870MCSを取った。今回の相手は人間ではなくミュータントだ。人間は傷つけば痛みで動きが鈍くなり、出血多量で死ぬ。だがミュータントは痛みを力と怒りに変えています。狂暴になるから、確実に身体を破壊出来る武器でなければならぬ。

SG556は対人用の小口径ライフル弾を使用するからミュータント相手では心許ない。M14EBRはそれより大口径の銃弾を使用するが、全長が長いから森林での戦闘には取り回しが悪い。待ち伏

せしての攻撃では有利だが、今回はこちらがミュータントを搜索するのだ。待ち伏せ出来る機会は皆無と言っていていいだろう。だからM870MCSを持っていくのだ。元々M870MCSは狩猟用の散弾銃を軍用に改造したもので、対人にも対獣にも強力な威力を誇る。12ゲージの散弾とスラッグ弾も使用可能だ。散弾は鳥などの小さな目標や素早く動き回る目標に使用し、スラッグ弾は熊や猪などの大きく頑丈な動物に威力を発揮する。念のため散弾とスラッグ弾を両方持って行くことにした。どんなミュータントか判明していないので、備えは必要だろう。

M870MCSを持って一階に戻ると、サキがすでに必要な物を揃えてくれていた。

「準備、終わりました。……あの、武さん」

「なんだサキ？」

「銃、それだけで大丈夫ですか？」

そう言っただけでサキは、俺が肩にかけているM870MCSを指差した。なんだ？散弾銃と機関拳銃だけで不安だと言いたいのだろうか？

「サキ。そういう時は、『そんな装備で大丈夫か？』ってきくんぞぞ」

「え、そうなんですか……？じゃあ、そんな装備で大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、問題ない」

「もっと強力な武器を持って行った方がいいと思うんです。何があるかわからないじゃないですか」

何があるかわからない、ね……。でも12ゲージのスラッグ弾を持

っているんだ。俺の経験上、ミュータントはこれを数発食らえば死ぬ。素早く動くので当てるのは難しいのだが。

そう言っても、サキは俺にもっと強力な武器を持っていくように奨めた。何が出てくるかわからないから、散弾銃だけじゃ不安だそう。俺の事を心配してくれるのか、サキはいい娘だよな。

ついに俺はサキの意見に折れた。

「わかったわかった。じゃあ対物ライフルも持っていくよ」

一旦M870MCSをリビングのテーブルに置き、再び武器庫に戻る。そして今俺が所持する銃器の中で、最も強力なものを手に取った。

バレットM95対物狙撃銃、それがその銃の名前である。

M90は湾岸戦争やイラク戦争で活躍したバレットM82という対物狙撃銃を、ブルパップ（機関部を銃床ストックの中に配置する構造。銃身長はそのまま全長が短くなる）化した上で、弾の装填方法をボルトアクションに変更したものである。イラク戦争では2000メートル先の敵兵を真っ二つにしてしまい、当たり所によっては装甲車の装甲板すら貫通してしまう化け物じみた威力を誇る。

12.7mmという戦車に搭載している重機関銃の弾丸を使用しているのだ、当然である。こんなものをミュータントに使ったら、人間同様真っ二つになる。ならなくても身体のごくかが千切れるだろう。

そんな銃なので当然重い。弾抜きで10キロ以上あるので、こんな物を背負っての移動は当然疲れる。だから普通は、ミュータント狩りになんか持って行かない。

「ほら、これでどうだ?」

M95とその弾倉2つを抱えて一階に戻ると、さっきまで不安そうだったサキの顔が明るくなった。本当は必要ないと思うのだが、サキの不安を解消するために持つて行くことにしよう。下手にサキを不安がらせるのは俺の望むところではない。

武器の調整を済ませたちょうどその時、道路の方から車のエンジン音が響いてきた。エンジン音は俺達の家の前で止まり、少ししてタイヤムが鳴った。

外に出ると、家の前に一台の軽トラが停まっていた。そして門の前に一人の男がいる。

白っぽいコートに茶色のジーンズを着用している黒髪のその男が、今日一緒に仕事をする鳥谷とやらだろう。

「私は鳥谷です。あなたが岩崎さんですか?」

「そうだ。少し待っていてくれ、すぐそっちに行く」

「わかりました」

鳥谷とやら、ちゃんと年上の者への敬意は払えているようだ。感心感心。

といっても鳥谷は35歳らしいから、年齢差はわずか2歳だけだね。

「じゃあサキ、行ってくる」

「はい、いつてらっしゃい」

サキはいつものように、笑顔で俺を見送ってくれた。俺はM870

MCSを肩にかけ、テーブルの上に置いてあつたM95を抱えて家を出る。

今回は犬も二匹、一緒に連れていくことにした。俺の家にはオスメス二匹ずつ、計四匹のシェパードがいる。そのうちのオスを二匹連れていく。

名前はタローとジロー。なんか南極に置き去りにされそうな犬達の親戚みたいな名前をしているが、これはこいつらが生まれてから5秒で考えたものだ。特に後悔はしていない。

タローは駿足で、ジローは他の犬より嗅覚が優れている。普段猪などを狩りに行く時はこの二匹を連れ、ジローが獲物を嗅ぎつけてタローが仕留めるといふ戦法を取っている。

軽トラの荷台にM95と犬達を乗せ、俺自身も荷台に座る。鳥谷は運転席に座り、すぐに軽トラを発進させた。

「そんなモン持ち出すなんて、何かあつたんですか？」

鳥谷が窓を開け、運転しながら尋ねてくる。おそらくM95のことをきいているのだろう。

「俺も必要ないと思つたんだが、同居人が不安がつてな。安心させるために持ってきた」

「そりゃいい。今日は何が出てきても安心ですね」

「ああ、使う機会がないことを祈るよ」

その間に軽トラは、町を抜けて新谷市と外を繋ぐ橋にたどり着いた。小野田の依頼でミュータント狩りに行くと伝えると、橋の警備員にも話は伝わっていたのか、あっさり俺達を通してくれた。ま、問題を起こしていない限り、出入りは自由なのだが。

橋を渡ると、いよいよカンパニーの支配が及ばない無法地帯に入る。

そこでは盗賊やミュータントがやりたい放題やっている。まるで荒野のウエスタンだ。

そんな場所なのでしょっちゅう人が死ぬ。盗賊に襲われて身ぐるみ剥がれて殺されたり、ミュータントに襲われて死ぬ。別に誰が悪いわけでもない、ちゃんと盗賊やミュータントへの備えをしていなかった自分が悪いのである。

治安を守る警察や自衛隊がない今、頼れるのは自分と武器だけなのだ。

新谷市から2キロほど東に行くと、そこには森がある。元々森林があったのだが、第三次世界大戦の影響か、異常なほど植物が生い茂っている。草木は100メートルほど離れた場所にある住宅街をも侵食し、今では町の四分の一の面積が森と化していた。

その森の外れに軽トラを止め、俺と鳥谷は軽トラから下りた。タロ―とジローも荷台から下ろし、それぞれ武装を整える。

バレットM95は置いていく。こんな10キロ以上ある代物を担いで行つては動きが鈍くなる。そうなつたら俊敏なミュータント達にあつという間に殺されてしまう。

サキには悪いが、やはりこれは置いていくしかないのだ。M90と一緒に持ってきた毛布に包み、荷台に置く。

「準備、終わりましたか？」

「ああ。今日はよろしく頼む」

俺はそう言つて手を差し出した。鳥谷が俺の手を握り、信頼の証明である握手をする。

俺より鳥谷の方がハンター歴が長いので、今日は鳥谷の指示に従うことにした。「船頭多くして船山に登る」のことわざを実践したく

はない。

森に入った俺達は、早速動物のいた痕跡を見つけた。木の根元にあったバケツ十数杯分はあろうかという量の動物の糞である。

「ここいらにはこんなでかい糞をするようなミュータントがよくいるのか？」

「わかりません。でも新しいから、まだこの近くにいますはずです」

鼻をつまみながら、鳥谷が手近なところに落ちていた棒きれで糞を突いた。ハエの羽音がいくつも聞こえる。

糞の中から何か棒みたいなのが転がり出た。よく見るとそれは、どうやら動物の骨らしかった。大きさから見て鹿の足の骨だと鳥谷は言った。

この辺りに元々鹿など生息してはいなかったのだが、「終わりの日」に伴う混乱で動物園を脱走してこころへんに住み着いたらしい。そして20年間増え続けている。

動物園から脱走した動物というのは珍しくもない。俺も一度だけ飢えたライオンの群れに遭遇したことがある。その時はどうにか逃げ切ったが、猛獣はミュータント並に手強い。

「全身の骨が綺麗に残ってる。バラバラになった状態で食われたか、あるいは丸呑みされたか……」

「おいおいミュータントってのは鹿を丸々一匹飲み込めるほどでかかったか？ そんなのいたら手も足も出ないぞ」

「前者であることを祈りましょう」

鳥谷はそう言って歩きはじめた。

タローとジローの耳がピンと立っている。これは犬達が何かを察知したか警戒している証拠だ。
俺はスラッグ弾を装填したM870MCSを構えると、鳥谷の後に続いていく。

かつては住宅街があったであろうその場所は、もはや森の一部と化していた。道路のアスファルトを突き破って生えた木、蔦に覆われて緑色の箱と化している家屋、錆びて土に埋もれ、岩にも見える乗用車など……。

こんな場所だから当然人は住んでいない。ミュータントは森に多く生息するし、それ以外にも野犬なども住み着いている。済んだら一日以内に骨も残さずに食われてしまう。

小野田の話だと行商人が襲われたのはこの周辺だという。普通新谷市に向かう時は森を迂回するように進むのだが、その日に限って行商人は急いでいたらしい。森の中を突っ切れば大幅に時間を短縮出来るし、この住宅街にはまだ道路も残っているから、行商人の主な移動手段である馬車でも通行が可能だったのだ。

そして行商人はこの辺りで、ミュータントに襲われて命からがら逃げ切った。

「何かミュータントの痕跡はあるか？」

「馬の足跡に車輪の溝……、これは先日襲われた馬車の跡でしょう。そしてこれは……」

そこまで言っただけで鳥谷は絶句した。「どうした？」と尋ねると、彼は無言で地面を指差した。

以前はアスファルトで固められていた道路は、風で運ばれてきた土

に表面を覆われていた。そして土の表面に、車輪の跡と規則正しく並ぶ大小の動物の足跡がある。

……大小の動物？

俺は足元にあった足跡を見た。一つはさつき鳥谷が言った馬の蹄の跡。そしてもう一つは、とんでもないデカさの足跡だった。

まるで人間の頭並の大きさの足跡だ。こんな大きさの足跡を残せる動物は、象くらいしか俺は知らない。

その時突然、森の奥で鳥が一斉に羽ばたく音と鳴き声が聞こえた。俺と鳥谷は同時に立ち上がり、鳥達が飛び立った方向を見る、タローとジローが唸り声を上げていた。頬の肉を持ち上げて歯を剥き出しにし、威嚇するかのようには森の奥を睨んでいる。

俺の常人よりもいくらかいい聴力は、何かの足音がこちらに迫ってくるのを感じていた。そして足音に混じり、メリメリバキバキと木が折れる音がする。

「……なあ、鳥谷」

「……なんです？」

「……ミュータントって、木をへし折るほど強くてデカイ？」

「……私は今まで、一度もそんな奴に遭遇したことはありませんね」
「……」

突如、森の中から何かが吠える声があった。俺はM870MCSを、

鳥谷は持っていたベネリM3散弾銃を構え、それぞれ森の奥に銃口を向ける。

それを合図にしたかのように、いきなり地面が震動しはじめた。それに伴いバキバキと木が折れる音が更に響き、タローとジローが怯えたように吠える。

そして俺達の前方100メートルほどの距離にあった木が根元からへし折れ、そしてミュータントが姿を現した。

それは4足歩行をして、全身が茶色だった。茶色の身体に所々黒のラインが走っている。特徴的な豚のような鼻に、長く生えた牙。

どこからどう見ても、それは普通の猪だった。

……身体がワゴン車並にデカイことを除けば、な。

巨大猪は大きく吠え、そして俺達向けて一直線に突進してきた。あまりの速さに銃を撃つことが出来ず、思わず横に跳び、突っ込んできた猪をどうにかかわす。猪はスピードを落とすことなくさっきまで俺達がいた場所の背後にあった木にぶち当たった。直径30センチほどの太さの幹が、猪の突進を受けて爪楊枝のようにへし折れた。

「な、なんじゃこりゃあああ!?!」

「いいから撃って! 撃って!!」

こいつはやばい。俺はタクティカルベストの胸元に取り付けられた無線機を起動し、フジヤマにいるはずの小野田に連絡を取る。しばらくして、小野田が通信に出た。

『こちらフジヤマの小野田だ。誰だ？』

「岩崎だ小野田！ いいかよく聞け、とんでもないミュータントがいた！ 俺達じゃ倒せないかもしれないから、町中に警戒警報を出せ！！」

『なんだ、何がいるんだ？ どんなミュータントだ？』

「身体から触手をウネウネ生やして祟り神にでもなつてそんなサイズの猪だ！！」

『もののけ姫かよ！？』

「森へお帰り、オーム」

『今度はナウシカ！？』

ツッコミは敢えて無視する。そしてこれ以上ボケる余裕もない。というか巨大猪よ、本当に森へ帰ってくれ。出来れば土に還れ。

「とにかく、スラッグ弾を何発も頭にぶち込んでも死なない！ 警備隊に警戒させる！！」

『わかった。そっちにも何人か警備隊を送るから、それまで持ちこたえろ』

小野田との通信を終え、俺は再び走り出す。凸凹のある森の中では、全力で走ることが出来ない。だがどうにかして走り、俺は鳥谷に追いついた。もうすぐ森から出る場所にいる。

俺は突然思い出した。

「そうだ、バレットがある！ あれは効くか!?」

そう尋ねると、鳥谷はベネリにスラッグ弾を装填しつつ答えた。

「わかりませんが、いけるんじゃないですか!? てか対物ライフルでも死ななきゃ、ロケット砲でも持ち出さないと倒せませんよ」

「よし。ミュータント化した猪はどんな性質だ？」

「獲物が複数いる場合、まずは狙いを一つに絞って倒します。二兎を追ったりはしません」

そう言つて、再び発砲。スラッグ弾は巨大猪の頭に当たったが、猪は走る速度を一瞬落としただけだった。

頭蓋骨がとんでもなく固いのだろう。「終わりの日」以前にインターネット（ほとんど死語だな）で見た噂だが、猪は車に撥ねられても平気らしい。真偽は不明だが、山道で車を運転している最中に猪とぶつかってしまった、車は大破したが猪は平然とその場を去って行ったということだ。

熊の一種であるグリズリーの頭蓋骨が歩兵用の突撃銃の弾丸では貫通しないことといい、野生動物は頑丈なのだ。そしてミュータント化した動物は、さらに身体が頑丈になっている。

鳥谷はすぐに作戦を立てた。

まず俺と鳥谷の二人はバラバラの方向に走って森を出る。巨大猪は二人の内どちらかを追うから、追われていない方は軽トラに戻ってバレットM95対物狙撃銃を使う。追われている方は軽トラの真正面まで巨大猪を誘導し、そこを対物狙撃銃で撃つ。

これは猪は猛スピードで走っているから、頭を狙いやすくするためだ。軽トラの真正面に猪を捉え続けられれば、その間ずっと頭を狙える。ただし狙撃に失敗した場合、突進してくる猪が軽トラに直撃するこ

とになるが。

だがこんな巨大猪が新谷市に侵入したら大パニックに陥るだろう。銃が効くかどうかすらわからないし、突進で木をへし折るのだ。橋にある門は簡単に破壊されて、この祟り神予備軍みたいな巨大猪は町中で暴れ回ることになる。それだけは避けたい。

「よし、今です!!」

突進してきた猪をかわした後、鳥谷の合図でそれぞれ別々の方向に走り出す。俺の隣ではタローが走っている。ジローは鳥谷と一緒に行動させた。

振り返ると、巨大猪は俺ではなく鳥谷を追うことに決めたようだ。急速に巨大猪との距離が離れていく。

しばらく走ると森の外に出た。軽トラは200メートルほど東に停まっている。

森の中からは相変わらず猪の鳴き声と木の折れる音、そして銃声が聞こえてくる。銃声がするということは、鳥谷はまだ生きている。俺は走り、そして軽トラにたどり着いた。荷台に上がり、包んでいた毛布を取り払ってバレットM95対物狙撃銃を取り出す。

12.7mm弾を10発収めた弁当箱みたいなサイズの弾倉を銃床ストックに入っている機関部に取り付け、ボルトを引いて初弾を装填する。二脚を立てて、運転席の屋根の上に乗せた。

スコープのレンズを保護する蓋を外し、森から鳥谷とジロー、そして巨大猪が出てくるのを待つ。銃声と木の折れる音は、どんどんこちらに近づいてくる。

そして森から鳥谷とジローが出て来た。直後、木々をへし折って巨

大猪も鳥谷を追って出て来る。

右手でグリップを握り、左手でグリップの後部にある弾倉を抑える。こつこつとした方が安定するのだ。

鳥谷は軽トラ目掛けて走り、巨大猪も鳥谷の後に続く。ちょうど巨大猪の頭が、軽トラの真正面に来た。距離は100メートルもない。

「鳥谷っ!!」

俺が叫ぶと、鳥谷は思いっきり横に跳んで巨大猪の進路上から外れた。巨大猪は鳥谷の横を通り過ぎ、まっすぐ俺に向けて突進してくる。猪突猛進、走り出したら止まれない……など様々な言葉が頭に思い浮かんだ。スコープの十字線の中心が巨大猪の頭に重なる。

引き金を引いた。突撃銃のそれとは比べ物にならない銃声が響き、射撃の反動で思いきり殴られたような衝撃が右肩を襲い、俺の身体が大きく揺れる。

巨大猪の目と目の間に穴が空いた。猪は悲鳴を上げるかのように吠え、走りながら地面に崩れ落ちた。地面が猪の身体で削られ、まるでブルドーザーが通った後みたいなおさまりになった。

スコープから目を離し、すかさずボルトを引いて空薬莖を排出して次弾を装填する。そして再びスコープを覗いた。

巨大猪は地面に倒れ、動いていなかった。いや、痙攣だろうか、足が少しだけ震えている。

「……死んだ、よな？」

鳥谷が軽トラに近寄ってきたので、俺はスコープを覗いたまま呟い

た。

「さあ……？でもこれで死んでなかったら、もう戦車でも持ち出す
しかないですよ」

「戦車なんてないからな、新谷には」

ちなみに、戦車はブラックマーケットで売られていることがある。
第三次世界大戦の時に外国軍が遺棄していったものだったり、中国
やらロシアやらから密輸されて日本にきたものだ。当然数は少なく、
値段も高い。

鳥谷がベネリを構えたまま、恐る恐る巨大猪に近づいていく。その
間俺は、巨大猪が生きていた場合に備えてバレットを猪の頭に照準
し続けている。

鳥谷がベネリの銃口で猪をつついた。だが猪が起き上がる気配はな
い。どうやら、本当に死んだらしい。

俺は構えていたバレットを下ろした。そして軽トラの荷台から下り、
今倒した巨大猪に近づいていく。

その目と目の間には、直径1センチほどの穴が開き、血が流れ出て
いた。穴からは頭蓋骨らしき白い破片や、脳みそらしいぶよぶよし
たピンク色のゼリーみたいなのが覗いている。

額以外に穴がなかったことから、突き刺さった12.7mm弾は貫
通していないらしい。猪は人間と身体の構造が違うから、12.7
mm弾は頭蓋骨を貫通した後に体内で止まったようだ。

口からは人間の腕よりも太そうな牙が生えていた。こんなんで噛ま
れたら、身体に穴が開くどころか身体がちぎれる。

それにしてもデカイ猪だ。肉はどれくらい採れるだろうか？もし食えるなら、当面肉の心配はせずに済む。

「なあ鳥谷、こいつの肉は食えると思う？」

「こんなに巨大化したってことは、確実に放射線やら化学物質の影響を受けてますね。体内被曝とか中毒になりたいんなら止めませんが」

「つまり、食うなと」

それは残念だ。

まあこんな山の主みたいな奴を食ったらどんな祟りがあるかわからないし、仕方がないね。

「それにしても、こいつのことどう思います？」

「どうって、デカイとしか感想がないな」

「こいつだけが規格外の大きさなのか、それともこの森にいる猪は、こんな規格外なものが標準になっているのかってことですよ」

「おいおいまだこんな祟り神予備軍みたいなのが沢山いるってのかわ？ いくら対物ライフルがあっても集団で襲われたら対応仕切れないぞ」

「まあ、こいつだけが突然変異体ミュータントなんだと願いましょう」

俺と鳥谷は両手を合わせて「南無」と唱えた。歪みねえ巨大猪の冥福を祈り、ついでにこれ以上こんなデカブツが出てこないようお祈りの意味も込めてだ。

しばらくすると、新谷市からトラックやらクレーン車やらがやって来た。小野田が送り込んだ、カンパニーの保有する車両だ。

トラックに乗ってきていた警備隊員にきくと、どうやらこの猪の死体を持って帰り、剥製にするらしい。橋の近くに飾って「俺達の町はこんなデカブツも倒せるんだから人間なんて一ひねりだぜだから町に手を出そうとするなよ」的な示威行為に用いるそうだ。確かに俺も、こんな巨大な猪の剥製が飾ってある町には強力な武器や戦闘員がいると考えると、下手に手だしをすることが出来なくなると思う。だが、そんなことをしたら本当にこの猪は祟り神になるんじゃないか？身体から触手をウネウネ生やすことはなさそうだが。まあ俺には関係ないや。呪われるのは小野田だけだろうし。

巨大猪の処理は警備隊員達に任せ、俺達は先に新谷市に帰ることにした。巨大猪の体重はトン単位であるらしく、追加報酬は20万円にも上るらしい。やったね！！

鳥谷は御丁寧に俺の家まで送ってくれた。どっかの誰かさん小野田よりよっぽどいい奴である。

「じゃあ、これで。今日はありがとございました」
「いやいや礼を言うのはこっちの方だ。いい作戦を考えてくれたお前のおかげで、あんな巨大猪を倒すことができた」
「ははは。また仕事できる機会があればいいですね。それでは」

鳥谷は最後にそう言い、去って行った。俺はバレットやM870MCSを担ぎ、家に入る。

報酬は家に武器を置いた後取りに行く予定だ。こんな馬鹿でかくてクソ重い対物ライフルなんか担いで移動できるか。

「ただいま。サキ、帰ったぞ」

俺がそう言っただアを開けると、早速犬達が出迎えてくれた。タロ
ーとジローが早速、他の二匹とじゃれあう。
すぐにサキも玄関に来た。

「お帰りなさい、武さん。お仕事はどうでしたか？」

「ああ、今日はとんでもない奴を仕留めたよ。『もの○け姫』に出
てきそうな巨大な猪だ」

「『もの○のけ姫』……？」

「そうか、お前見たことなかったな。確かブルーレイがあつたから
今度見せてやるよ」

俺はそう言いつつ、タクティカルベストを脱ぐ。サキが俺の脱いだ
ベストをハンガーにかけ、テーブルの近くに置いてあるラックにか
けた。

こうして見るとなんか夫婦っぽいけど、断じてそんな関係ではない。
そんな関係ではないぞ。大切なことなので二度言いました。

俺にとつて、あくまでサキは保護すべき子供である。サキがどう思
おうと、俺はその考えを変えるつもりはない。

「そっぴいサキ、お前のおかげで助かったよ」

「え、何がですか？」

「もっと強力な武器を持って行けって、お前言ってくれただろ？バ
レット持って行かなきゃ今頃、『やっぱり今回も駄目だったよ。あ
いつは人の言うことを聞かないからな』って言われてたな」

「なんですか、それ？」

「エ○シャダイだよ、知らんのか？というか、もしかしてお前には
予知能力でもあるんじゃないか？」

俺が冗談混じりにそう言つと、サキの身体が一瞬びくつと震えた。

……もしかして、ドンピシャ？

いやあないないない！　こんなサキにそんな能力が備わってるわけないよね。

超能力者が存在するって話は聞いたことはあるが、何万から何十万人に一人の確率でしか生まれてこないって話だ。こんな狭い場所で会う確率なんて、ガリガリ君で当たりが100回連続で出る確率より低いだろう。

それに超能力者ならこんな所にはいない。今頃新旧どっちかの政府に保護されてる。超能力者は貴重な戦力になるからな。

あー、一瞬でも心配した俺がアホだった。

「じゃあサキ、報酬受け取りにフジヤマ行ってくる。すぐに帰ってくるから」

「はい、いつてらっしゃい」

バレットM95とM870を武器庫に戻した俺は、早速報酬を受け取りにフジヤマへと向かった。

第4話 となりの崖の谷の城のアリエッティ（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第5話 よく間違える人がいるけど、1は素数じゃないよ

巨大猪を倒してから数日後。

正午を回った辺りから、いきなり気温が上がった。まだ6月の中旬なのに、もう8月にもなっているのではと勘違いするほどの熱気である。

空は青く澄み渡っているが、西の空には大きな入道雲が広がっている。この分では、夕方あたりに雷を伴う雨が降るかもしれない。

俺は短パンにTシャツという格好で、だらしなくリビングのソファーに横になっていた。足元では4匹の犬達が、口から舌をだらんと伸ばして床に寝転がっている。犬達も暑いらしい。

「あぢ〜……」

俺はそう呟きつつ、手にした団扇で仰いだ。リビングにある扇風機はさつきから強風モードで稼働しているが、うだるような熱気の前には戦力不足であるようだ。

エアコン？ なにそれおいしいの？ エアコンなんて電力を大量に消費するから使えない。節電だよ節電。時代はクールビズだよ。

風はほとんど吹いていないから、庭の小型風車は電力を生み出していない。雲で太陽光が遮られてはいないから、屋根のソーラーパネルは朝から元気に発電中だが。

「かき氷、できました」

そう言っつて、台所からサキが盆を持ってやって来る。盆の上には、
苺シロップがかかったかき氷が入った器が二つ乗っかっていた。

「おっ、サンキュー……っつてコラコラコラ。タロー、ジロー、ミー、
シロ。いきなり人のかき氷を食おうとするんじゃない」

俺はそう言っつて、かき氷の臭いを嗅ぎ付けて勢いよく立ち上がった
犬達からかき氷を遠ざける。ちなみにミーとシロというのは、4匹
いるシェパードの内のメス2匹である。

三番目に生まれたからミー。猫みたいな名前だという批判は受け付
けない。

四番目に生まれたからシロ。シェパードの毛は茶色と黒なのになん
かおかしくね？ という批判も受けない。ネーミングセンスがない
という批判は受け付ける。

ソファアにサキと並んで座り、かき氷を食べる。サキはあまりかき
氷を食べたことがないらしい。

当然である。氷なんて電気がなければ作れないし（化学反応を利用
して作るとは出来るが）、そして今の日本では新旧政府の支配地
域以外ほとんど電気は通っていない。

ざくざくかき氷を食べていると、いきなり頭がキーンとなった。こ
れだよこれこれ。かき氷を食べている最中に頭が痛くなるのが醍醐
味だよ。ゆつくり食べればキーンと痛くなるのを阻止できるらし
いが、そんな食べ方する奴はチキンだと俺は思っている。

隣を見れば、サキも痛くなったのか頭を押さえていた。

「痛いかな？」

「はい……。かき氷って、なんで食べると頭が痛くなるんですか？」

「さあ、知らん。でもゆっくり食べれば頭が痛くならないらしいぞ」
そう言うと、サキは少しずつかき氷を食べはじめた。まるで小動物
のようで、なんか見ていて和む。

前言撤回。かき氷をゆっくり食べるのは、女子に限って認める。

夕食を食べ終えてシャワーを浴びると、もう寝る時間になった。「
終わりの日」以前だったらテレビを見たりラジオを聞いたり、ある
いは勉強したりで夜遅くまで起きていたものだが、今の俺とサキは
早寝早起きの生活を送っている。テレビはほとんど電波が入らず砂
嵐しか映らないし、ラジオは新旧政府のプロパガンダ番組ばかり放
送している。そして俺はもはや学生ではないし、教育制度もほとん
ど崩壊しているから勉強する必要もない。

家中のドアや窓の鍵が掛かっているか、センサーが作動しているか
を確かめる。ついでに家中に隠してある銃器が、ちゃんとあるかも
確かめた。

備兵
この仕事をやっていると同様な奴から恨みを買ったことがある。そう
なったら家にいるといっても襲撃される可能性があるのだ、そんな
った時に備えて銃器を隠してあるのだ。あちこちに隠しておけばわ
ざわざ武器庫に銃を取りに行かずにすむし、応戦しながら移動する
なり後退するなりできる。運がよければ襲撃者を撃退できる。

本棚や食器棚、テレビの裏に隠した拳銃や短機関銃がちゃんてあるかどうかを確認した後、俺は自室に戻る。階段を上がったところで、ざーっという音が聞こえ始めた。ついに雨が降り始めたらしい。部屋のベッドに飛び込み、電気を消す。直後、窓の外が一瞬光った。続いて雷の大きな音が響いてくる。まるで銃声か爆撃音だなと頭の片隅で思いつつ、目を閉じた。

が……。

ぎいっと部屋のドアが開く音がした。この家には俺とサキしかいないし、サキが俺の部屋に入ってくることは滅多にない。

枕元に置いてあったP230自動拳銃を掴みつつ、ベッドから起き上がる。すると部屋の入口には、寝巻姿のサキが立っていた。

「なんだサキか。どうした？」

そう尋ねる。サキは何かに怯えているようだった。身体が微かに震えている。

「もしかして、誰かいるのか？ それとも家の近くで人影でも見たとか……」

「いえ、そんなんじゃないんです……。あの……。その……」

「ん？ じゃなんだ？」

俺がきくと、サキは小さく答えた。

「……怖いです」

「何が？」

そう尋ねた直後、再び窓の外が光った。大きな雷の音が鳴ると同時に、サキが小さく悲鳴を上げてしゃがみこむ。

……もしかして、雷が怖いのか？

俺がそうきくと、サキは首を縦に振った。そして雷の音が響く度、身体を震わせている。

「あの、一緒に寝ても、いいですか……？」

「あ？ ああ、いいよ。じゃあ俺は床で寝るからお前はベッドを」

「そうじゃなくて、武さんの隣で、一緒に寝たいんです……」

……何だつて？

「武さんの隣」で、「一緒に寝たい」だと？ それはつまり、俺と一緒にのベッドで寝るってことか？

いやいやまてまて。俺は37歳、サキは17歳だ。年齢差は20。

親子ならギリギリ一緒に寝てもいいかもしれない年頃だが、生憎俺とサキには血の繋がりは無い。それイコール大人な展開に突入するってことか？ 石原都知事とかアグネスちゃんとか来ちゃうんじゃないか？
どうする？

1. 一緒に寝る
2. 断る
3. 優しく抱きしめる

ギヤルゲーかよ！？ なんで俺は自分でポケて自分でツッコんでんだよ！ セルフ漫才か？

てか3の選択肢の「優しく抱きしめる」ってなんだそれ！？ アホ

か！ エンディング直行かよ！？

いや、クールになれ、俺。落ち着け。

サキとの関係はそういったもんじゃないんだ。大人と子供、保護者と被保護者、家主と同居人。それだけの理由がありや、選択肢は一つしか……。

「ダメ、ですか……？」

雷が光る度に震えながらそうきいてくるサキを見て、俺の中から「断る」という選択肢は吹っ飛んでしまっていた。

まあ……仕方ないよね。大人が子供のお願いを断るなんて、なんか大人気ないよね。

まあ俺は紳士だからね、子供に手を出したりはしないよ。

「……わかった。じゃあ、入れ」

「はい……。お邪魔します」

サキはそう言っただけで俺の部屋に入った。俺はベッドに横たわり、身体が落ちるか落ちないかというギリギリの端っこだまで移動した。せめて身体は離しておかないと。
だが、

「あの、触っていても、いいですか？」

そう言っただけで、サキは俺の背中から身体を押し付けてきた。よほど雷が怖いのか、背中からサキが震えている感触が伝わってくる。

サキ、お前は俺の理性を吹っ飛ばしたいのか？ いや落ち着け俺。こ

ここでサキに手を出したら俺は性犯罪者確定だ。

年齢差は20。俺が17歳の時にサキは生まれてすらいない。俺が20歳の時にはサキは0歳だ。そして俺が30歳の時、サキは10歳。手を出したら俺はロリコンになってしまふ。何を言っているのかわからなくなってきた。

そつだ、素数を数えて落ち着くんだ。1、2、3、5、7、11。違う！1は素数じゃない！

クールになれ、俺。

そつだ。いくら外見が17歳のままだからと言って、サキと俺の生きてきた時間の長さは違う。

「あの、迷惑じゃないですか？」

俺の背中にしがみついたまま、サキがきいてきた。再び雷が光り、びくつとサキが身体を震わせる。

「いや、迷惑じゃない。むしろ嬉しげフンゲフン」

「そつですか、よかつた……」

今俺は背中をサキに向けているので、サキがどんな表情をしているのかわからない。だがサキの声は、さつきと違って怯えが消えていた。

まあ、いいよな。サキの不安を解消するために一緒に寝ているだけだ、そういつた関係に踏み込むつもりは俺にもサキにもないだろう。にしても、何を慌てていたんだ俺。単に女子と一緒に寝るってだけじゃないか。ガキじゃあるまいし。

今までこういつた状況を経験したことはないが、俺は大人なんだ。

何をビビる必要がある？

「サキ、何で雷が怖いんだ？」

そう尋ねると、しばらくしてからサキは答えた。

「雷って、大きな音と光がするじゃないですか。なんだか何かが戦争みたいで、怖いんです」

「戦争ね……。じゃあ、俺の事も怖いか？ この仕事に戦いは付き物だからな」

「そんなことないです!!」

サキはそう言っつて、ぎゅつと身体を俺の背中に押し付けてきた。なんとなく、女の子の身体は柔らかいんだなと感じた。サキがスレンダーな体型をしているのが幸いだった、凹凸がある体型だったら、胸が熱くなる。

「武さんはわたしの恩人なんです。もし武さんが助けてなければ、わたしはとつくに死んでます。広ってくれたのが武さんでなければ、今頃わたしは貧民街でゴミを漁^{スラム}って生きていたはずです。武さんは、わたしの、恩人なんです……」

再び、サキの声が震えた。今度は雷で怖がっているわけではなさそうだ。

同時に、サキが俺の背中に顔を埋めた。Tシャツがじんわりと、暖かい液体で湿る。

なんでサキは泣いているんだ？俺にはそれがわからない。こんな人を殺して金を稼ぐ職業の人間に、感謝するやつなんているのか？

この世界で見知らぬ誰かに助けられたら、まずはどんな対価を請求

されるか心配する必要がある。この御時世、ただで人を助けようとするやつはいない。いたらただのバカか、底無しのお人よしだ。

……俺もあの日までは、そういったお人よしだったんだかな。

あー、戦争なんて聞いたから嫌な事を思い出してしまった。出来れば一生封印しておきたかった記憶。「世界を救う」という俺の、いや俺達の幻想が完璧に、なにもかもブチ壊されたあの日の記憶。

瞼が重くなってくる。サキは安心したのか、先程から小さな寝息を立てていた。どうやらぐっすり眠ってしまったようだ。

そろそろ俺も寝るだろうが、この分ではきっと悪夢を見るに違いない。少し憂鬱だ。

俺の意識は、そこで途絶えた。

そして予想通り、俺は悪夢を見ることになった。

2012年 12月 23日

静岡県西部の国道を、俺達の乗るライトバンは走っていた。道路に

人影はまったく見え、乗り捨てられた乗用車があちこちにある。ライトバンには俺を含め、3人の男子高校生が乗り込んでいた。一人は運転席に、もう一人は助手席に、そして残った俺は後部席に座っていた。

「次の避難所、何人くらい人がいるんだっけ？」

運転席でハンドルを握っていた、横田 俊夫よこた としおがきいてきた。助手席に座る眼鏡をかけた松谷 明まつたに あきひが地図を眺めつつ、「200人以上って話じゃなかったっけ？」と答えた。

「200人？ 結構少ないな」

「大半が避難所にたどり着く前に殺されたんだろ。確か大八木おおやぎさんがそう言ってた」

俊夫と明が言葉を交わすのを聞きながら、俺は手にしていたSCAR突撃銃に弾倉をはめた。そして後部席にずらりと並べられた銃の列の中に置く。

「武、銃の調子はどうだ？」

「大丈夫、銃口から少し泥が入ってたただけだ。もう取れた」

「俊夫、銃は替えがきかないんだから、もう少し丁寧ていねいに扱えよ」

そんな事を言いながら、ライトバンは進んで行く。運転席の窓から、高層ビルがいくつつか立ち並ぶ市街地が遠くに見えた。

一年と半年前、俺は全ての仲間を失った。一時は絶望で自殺するこ

とすら考えたが、俺の仲間達の遺志がそれを止めさせた。

「生きて世界を救え」

それが彼らの遺志だった。まだ若いのに死ぬことになった彼らが、唯一生き残った俺に託した使命だった。

俺は飼い犬のラインを連れて、その使命を果たすべく行動を開始した。入手したゾンビ化ウイルスのワクチンと治療薬を自衛隊に届け、さらに助けを求める人々のために各地を転々とした。

俊夫と明は、その旅の途中で出会った仲間だ。二人とも高校三年生で、俊夫は東京で、明は埼玉で出会った。

二人とも大切な人々を失いながらも、誰かのために戦いつづけた。明は避難所となっていた高校がゾンビに襲撃されている時に俺が助け、俊夫はゾンビに追われていた避難民のグループの中で出会った。避難民達を守ったあと、二人は俺に同行したいと言っついてきた。二人とも親を亡くし、もう行く場所もなかった。そこで俺と一緒に、人々を助ける旅に出たいということだった。

無論、俺は歓迎した。俺一人でできることは限られているが、仲間がいれば様々な作業を分担出来る。何より、仲間がいるということは、俺にとって心強いことだった。

俊夫は面倒見がいい奴で、腕っ節が強い。ちょっと雑な性格がたまに傷だが。

明は眼鏡をかけて、いかにも知的なやつである。運動能力は俺達の中で一番低いが、狙撃が得意だ。

そうして半年前から俊夫と明を仲間に加え、俺は世界を救う旅を続けているのだった。

「あ、次『No Thank You!』かけてくれない？」

俺は車内に並ぶ銃を一つ手に取りつつそう言う。

「またけいおん！ かよ。けいおん厨め」

「厨で結構！」

「つくづく思うんだけど、武って本当にオタクだよな」

「オタクで結構！」

「このヘンタイめ」

「俺は変態じゃないよ。仮に変態だとしても、変態という名の紳士だよ！！」

俊夫と明から口々にそう言われたが、俺は信念を曲げるようなことはしない。だってこの世界でアニメや漫画、ゲームは俺の生きる糧なんだもん。

「つーかさ、なんでお前、このライトバンを痛車にしたわけ？いきなりお前に助けられた時、はつきり言っただけで頭がおかしい奴なんじゃないかと思っただぜ」

「あー、僕も最初そう思った。いきなり痛車がゾンビの群れに突っ込んで来た時、僕は自分の目を疑ったよ。しかも痛車でありながらちゃんと改造されてるし」

「いいじゃないか、溲ちゃんかわいいだろ！！ な、俊夫、明、お前達もそう思わないか？」

俺がそう尋ねると、二人は「興味ない」とでも言うかのように前を向いた。なんか俺がイタイ奴みたいじゃないか。

「それより武、何が無線は入ってない？ 避難所が近いなら、無線

機に通信の一つでも入ってると思うんだけど」

「いや、どこからも通信は入ってないな」

明にきかれたので、俺は後部席に搭載してある大きな軍用の無線機を眺めながら答えた。

この無線機は数ヶ月前に、俺達が前に遺棄されていた在日米軍の車両から入手したものだ。神奈川県のある都市を通った時に、乗り捨てられていた軍用車両のハンビーの中から取り外した。

そのハンビーはエンジンが故障して停車していた最中にゾンビの群れに襲われたようで、ハンビーの周囲には無数の空薬莖と頭を撃ち抜かれたゾンビが転がっていた。米兵の死体やゾンビはなかったのだ、どうにか乗員達はその場を離れたようだった。

ハンビーの中からは5.56mm弾の入った弾薬箱と、屋根に設置されたM240軽機関銃とその弾薬。そしてこの無線機が残されていた。慌てて撤収したらしく、それらの嵩張ったり取り外すのに時間が掛かる装備は、そのままの状態に残されていた。機密保持のために普通はハンビーごと破壊されているはずだが、その時間すらなかったらしい。

5.56mm弾は日本では入手しづらい弾薬なので、補充出来たことは非常にありがたかった。俺達が持つSG556カービンやSCAR突撃銃は5.56mm弾を使用するが、日本の銃刀法では口径6mm以下の弾丸を使う銃は所持出来ない。だから滅多に補給出来ないのだ。散弾銃や狙撃銃の弾薬は銃刀法に違反していないので銃砲店から手に入れる事が出来たが。

M240軽機関銃は貴重な戦力になった。群れで迫ってくるゾンビに対しては弾幕を張るのが一番有効な戦術であり、M240は装弾数も威力も、俺達の持つ武器の中では最高の物だ。大量のゾンビに

遭遇した場合大抵は逃げるが、逃げ切れなかったり人を助ける時は積極的に使っていた。

無線機は一番役に立つ。在日米軍はもちろん、自衛隊との交信が可能になり、救助した避難民を素早く自衛隊に引き渡すことが可能になった。

ハンビーだけはエンジンが完全にイカレていたので、動かすことは出来なかった頑丈な軍用車両を移動手段にしたかった俺達としては、残念無念だった。

前に一度、避難所まで救出した避難民を連れて行ったことがあった。その避難所はかなり規模が大きく、自衛隊が展開していた。

大量の軍用銃火器に加え、米軍の無線機を所持していた俺と俊夫、明は当然の如く不審者扱いされた。銃を携えた自衛隊員に見張られる中、俺達は必死に自分達が人々を救う旅をしている事を訴えた。銃火器の入手ルートについても根掘り葉掘りきかれたが、俺は正直に答えた。最初は信じてもらえなかったが、最終的には納得してもらえた。

疑われるのも当然だった。誰が製薬会社が独自に特殊部隊を保有していて、銃刀法違反確実の武器を装備しているなんて考える？

なんとかテロリスト認定されるのを防いだあと、俺達は避難所に展開していた陸上自衛隊の指揮官からある話を持ち掛けられた。大八木と名乗った30代半ばの三等陸佐は、俺達に生存者の搜索をしないかと提案してきたのだ。

聞けば自衛隊は避難所や基地を守るので精一杯で、各地に部隊を派

遣して生存者の捜索を行う余裕はほとんどいないのだという。俺が渡したワクチンと治療薬で警官や自衛隊員の被害は抑えられているが、それでも捜索を行う余裕はない。

そこで俺達が、自衛隊の代わりに生存者の捜索をしないかということだった。豊富な銃火器を持つ俺達なら簡単に死にはしないだろうし、自衛隊員ではないので命令に左右されることなく行動出来る。なにより死んだって、自衛官の戦死者としてカウントされることはない。

もし生存者を発見した場合、数が少なければライトバンに乗せて最寄の自衛隊が駐屯する避難所まで連れていく。もし数が多ければ、ハンビーから回収した無線機を使って連絡する。そうすれば近隣の部隊が救助に来てくれるだろうとのことだった。

各地で送電が止まり、連絡が取れない避難所が多い。食料などの問題から今どうなっているかわからないが、まだ生存していた場合は救助しなければならない。

大八木三佐は、「断れば警察に引き渡して、銃刀法違反と破壊活動防止法で逮捕させる」と言ってきた。この世界で生き延びるには銃を手にとって戦うしかないのに、卑怯な奴だと思った。

ただし承諾すれば、弾薬や燃料、食料を供給してやる、とも言ってきた。さすがに銃などは提供出来ないが、弾薬や燃料は「ゾンビとの戦闘で消費」ということにしてこつそり融通してくれるらしい。悪いヤツだ。

つまり従えば俺達はこれからも人々を救う旅を自衛隊のサポートつきで続けられるが、断ればタイーホされてしまうということだ。

俺と俊夫、明の出した答えはもちろんイエスだった。まだ前科者にはなりたくなかったし、なにより皆多くの人を助けたいという気持

ちだったからだ。

そういうわけで俺達は各地を転々として、生存者の搜索と救助を続けているのだった。

今向かっている避難所も、大八木三佐の指示で行くことになったのだ。下手に火をつければライトバンが木っ端みじんになるほどの弾薬や燃料を積み、俺達は旅を続けている。

一年前から俺が助けた人も含めて、すでに俺達三人が助けた人々は999人に上っていた。あと一人で4ケタの大台に突入するとあって、俺達のテンションは無駄に高い。

「なあ、壮大なネタバレ大会やろうぜ」

「なんだそれ？」

「いいからネタバレしまくるんだよ」

暇だった俺はそう言って、早速壮大なネタバレをする。

「江戸川コナン」工藤新一」

「「な、なんだってー!?!?」」

運転中の俊夫と、助手席でナビゲート中の明はちゃんと乗ってくれた。続いて明がネタバレをする。

「ターミネーターは未来から来たんだよ!?!」

「「な、なんだってー!?!?」」

続いて俊夫。

「ウルトラマンⅡハヤタ隊員」

「「な、なんだってー!?!?」」

そんなこんなで暇つぶしにネタバレ大会をしつつ、俺達の乗ったライトバンは街に向かっていく。ひとしきりネタばらしを終えた後、唐突に明が言った。

「そついやマヤの予言じゃ、今日世界が滅ぶらしいね」

ああ、そんなこともあったな。テレビがまだちゃんと放送していた時（今じゃ実質NHKしか放送していない。しかもほとんどニュースの再放送）に、盛んにバラエティーとかで取り上げられていたな。2012年に世界が滅ぶという映画も大ヒットしていたが、今ではマヤの予言とかなんとか聞くことはない。

「世界なんて一年と半年前に滅びかけただろ？ 予言なんて嘘っぱちか、日付を間違えたのさ」

「そつそつ。それにその予言って、単に2012年12月23日で予言が途絶えてるって話だろ？ それ以上予言するのが面倒くさくなったんじゃないね？ 三日坊主で日記をつけるのを止めたのと同じだろ」

俺と俊夫がそう言うと、「そつだよね」と明は笑った。

そつ。予言云々の前に、世界は一年半前に滅びかけたんだ。予言なんて大外れ、あてにならない。

だが予言がどうであっても、俺達の「世界を救う」という目的は変わらない。だから世界が滅びることなんて無いのだ。

それに、徐々にはあるが人類も復興に向けて動き出している。ゾンビ被害の少なかった北海道や九州、四国、それに本州内陸部を中心にして復興が始まっている。ワクチンと治療薬もあるし、人類が滅亡する事態には陥らないだろう。

「そっぴいや日本民主共和国……だっけ？　なんか議員先生達が勝手に作ったのって。あれ今どうなってるの？」

「確か政府や自衛隊からは無視されてるんじゃないっけ？　そんな国を乱すような事をするより、さっさと一致団結して復興してもらいたいものだよね」

俊夫がきくと、明が呆れたように答えた。

日本民主共和国とは、いつの間にか国会議員数十名が立ち上げた組織だ。「政府はその能力を失っている」という名目で、地方自治体や自衛隊に自分達に従うよう呼び掛けている。

確かにゾンビ発生初期における政府の対応は遅れたが、今では立派に警察や自衛隊を指揮している。被害がこれ以上悪化することもないだろうし、とりあえず今の政府に不満はない。

そっぴいえば日本民主共和国の呼び掛けを、自治体や自衛隊は普通にスルーしているらしい。まあ当然だよな、得体の知れない組織に従うバカはいない。

そっぴいえば、外国は日本よりもっとひどい状況らしい。ゾンビの群れに領土を占領された国が、安住の地を得るために隣国に侵攻したりすることがあちこちで起こっているという。

元々衛生状態や食料事情が最悪だったアフリカ大陸では、一部を除いて死者の国と化したらしい。中国やインドは人口が多いぶんゾンビの数も多く、国土の大半でゾンビが闊歩しているそうだ。特に中

国では各地で軍閥が勢力争いをしているらしい。ロシアやヨーロッパは、それらの地域に比べてマシだそう。ただしゾンビや難民の流入を防ぐために国境沿いに高い壁が築かれ、ヨーロッパ連合の主要政策だった「移動の自由」は失われている。以前から麻薬組織や反政府ゲリラが幅を利かせていた南米では、治安が完全に崩壊してしまっただよう。アメリカ合衆国は世界一の軍事力に物を言わせて国内のゾンビを次々掃討し、今では国境警備の方にウェイトを置いている。

なんでもメキシコから日々侵入して来ようとする難民を阻止するため、国境沿いに高い壁を築いたという。それだけでなく対地攻撃機や攻撃ヘリコプターを出撃させ、難民とともにゾンビが入って来ないように難民ごと爆撃しているそう。さすがアメリカ、やることスケールがデカイ。日本にできないことを平然とやってのける、そこにしびれる憧れるウー！！

と、今まで足元の座席と座席の間の床に寝ていたメスのシェパードのラインが立ち上がり、前を向いて吠えた。見ると前方の道路上にフラフラとさまよう何人かの人影が見えた。俊夫がライトバンのスピードを落とす。

「生存者かな？」

と明が言ったので、俺は双眼鏡を使ってその人影達を見た。

服はボロボロで血だらけ、その顔は土気色をしていて頬の肉が消失し、白い頬骨が覗いていた。何体かは腕がない。

これはゾンビですか？ はい、その通りです。本当にありがとうございます。ございました。

「あー、ゾンビだな。数は10体」

「どうする？ 轢くか？」

いきなり物騒なことを言い出す俊夫だが、今では普通の行為だ。ゾンビを見たら倒す、そうしないとこちらが食われてゾンビになってしまう。

明が腰のグロック17自動拳銃に、いつでも抜けるよう手を掛けた。

「いや。走るタイプじゃなさそうだし、このままスルーしよう」

俺がそう言うと俊夫は頷き、スピードを上げた。そしてそのままゾンビ達の脇を通り過ぎる。

これが走るタイプのゾンビだったら何としても倒さなければならぬいが、大抵のゾンビは動きがのろいので、大量に迫っている場合でもなにかぎり逃げ切れる。

ちなみにゾンビ達は発生してから1年半以上経過したにも関わらず、腐る気配がない。死体なんだからさっさと腐れよな。

ライトバンは都市に続く道路を進んでいく。右の窓から、ビルが建ち並ぶ街が見えた。

今回俺達は、大八木三佐からこの街に行ってくれと言われた。そこその規模の都市だが、初期にゾンビが大量発生していたせいで生存者は少ないらしい。俺達は避難所に赴いて生存者がいるかどうかを確かめ、いたら無線で救助を呼ぶ。

今回は何人助けられるかと俺が考えていたその時、いきなり後部席

の荷台に金具で固定してあった、在日米軍のハンビーから回収した無線機から誰かの声が流れ出した。

『……こちら……1師団……緊急……生……りかえず……発
生……から東……21……ルが……れた模様。繰り……、中
……風……イルが……本に向け……。展……中の各……射
特……隊は、直ちに……撃準備……』

通信可能範囲ギリギリなのか、切れ切れに男性の声が聞こえる。師団とかなんとか名乗っていたから、多分自衛官だろう。

「なんだ？ 一体何が起きたって？」

「緊急とかなんとか言ってたよね？」

俺は無線機のマイクを取り、とりあえず近隣の自衛隊部隊を呼び出した。だが完全に通信可能範囲の外に出してしまったのか、スピーカーからはノイズしか聞こえて来ない。

「今の一体、なんだったんだ？ 一度引き返すか？ そうすれば通信できるかも」

俊夫がそう提案してきた。街までは数キロしかない。ここで少し引き返しても、すぐにたどり着く距離だ。

「ああ、そうしよう。じゃあ……」

俺の言葉が最後まで続くことはなかった。突然、都市のある方向から、強烈な光が発生したからだ。

ライトバンは右側面を都市に向けている格好だったので、右側の窓から強烈な光が差し込んで来る。あまりの眩しさに、俺達は手で目を覆った。

「うわっ、なんだ！？ 一体何が……」

明がそう言った直後、今度は激しい衝撃が俺達を襲った。ドン！！と下から突き上げるような衝撃と共に、シートベルトをしていなかった俺の身体は宙に浮き、そして天井に頭を叩きつけられた。視界がブラックアウトし、俺はわけがわからないまま意識を失った。

ラインの吠える声で、俺は目を開けた。その瞬間、物凄い激痛が頭に走った。

「ってえ……」

思わず手を後頭部に当てると、手の平がべったりと血で染まった。どうやら天井に頭をぶつけた際に、頭を切ってしまったらしい。よく周りを見ると、天井にドアがあった。そして床に固定してあったはずの無線機の筐体が、なぜか壁から突き出ている。そこでようやく俺は、ライトバンが横転していることに気づいた。固定しなかったものが、今や床となった左側の壁に散乱している。

ラインは俺が起きたのがうれしいのか、俺の顔をなめ回した。顔が

ベタベタになりそうなので止めさせ、運転席の方を見る。

運転席では俊夫が、助手席では明がそれぞれシートベルトで座席に固定されたまま動いていなかった。一年半前のあの悪夢が頭をよぎり、俺はすぐさま二人の様子を確かめる。

幸いなことに、二人は気絶しているだけのようだ。頭にコブを作っているが、目に見える外傷はない。俊夫なんて気絶しているにも関わらず、大いびきをかいている。

二人の無事を確かめた俺は、ようやく何が起きたのか確かめようとした。腕時計を見ると、俺達があつた光を目撃して30分が経過している。

上にあるドアを開けて、俺は外に顔を突き出した。

そして言葉を失った。

今まさに俺達が向かおうとしていた都市のビルが、ほとんどなくなっていた。残っていたビルも途中で折れたりしている。

30分前は青空が広がっていたのに、今は空が異常に暗かった。

都市から赤々とした炎が、あちこちから上がっていた。

そして、その中心では、あるものが立ち昇っていた。
日本人なら誰しも、一度は教科書で見たことがある風景。人類が生
み出した最悪の兵器が引き起こすもの。

巨大なキノコ雲が、都市の中心から立ち昇っていた。

そこで俺は目を覚ました。またこの夢だ。
窓からは光が差し込んでいる。枕元の時計を見ると、すでに午前5
時を回っていた。

サキは俺の背中にしがみついたまま、静かに寝息を立てている。俺
はサキを起こさないように、そっとベッドから出た。

この夢は何度も見た。俺と俊夫と明の、「世界を救う」という希望
と生きがいと、完璧にぶち壊してくれたあの日の風景だ。

いくら俺がワクチンと治療薬を届けても、あの核戦争の勃発がそれ
を無意味にしまった。いくら俺達といっても、さすがに核戦争
の勃発までは止められなかった。

それからだ。俺が世界に絶望し始めたのは。

希望を失い、生きがいを無くした俺は、こうして今日まで生きてきた。死ななかつたから生きている、ただそれだけの人生だ。

「……クソッ」

俺はそう、小さく罵った。

窓からは青空がみえる。今日も、いい天気になりそうだ。

第5話 よく間違える人がいるけど、1は素数じゃないよ（後書き）

次回、読者の皆さまから頂いたキャラ達が多数登場します。お楽しみに！！

第6話 俺達特攻野郎、Zチーム!!（嘘です）

6月も下旬に差し掛かった、ある日の午前。

俺はいつもの日課でフジヤマに来ていた。別に朝っぱらから酒を飲みに来たわけではない、何かいい依頼が入ってないかと情報を収集に来たのだ。

店内に入ると、早速カウンターにいる小野田が「へい、らっしゃい！！」と声をかけてきた。お前は寿司屋か。

軽く小野田をスルーして、カウンターの脇にある掲示板を見る。いくつも貼られたメモの中、掲示板のど真ん中に大きな紙が貼付けてある。

「町同士の抗争。報酬1000万円。希望者は小野田まで（ただし8名まで）」

報酬1000万円？ 高いな。

物資不足でインフレが発生していて通貨の価値が下がっているとはいえ、それでも「終わりの日」以前なら即金で新車を買える値段だ。こういつた抗争に関する依頼の報酬がほしい500万円前後であることを考えると、かなり高額の種類に入る。

「おい小野田、これの募集まだやってるのか？」

俺がそのメモを指差して言うと、小野田は客に酒を出してから答えた。

「ああ、あと二人残ってる。ただしそいつに依頼するかどうか、俺が決めるがな」

つまり、難易度が高い依頼なのだろう。

掲示板に貼ってある依頼は、誰でも受けれるというわけではない。カンパニーのリーダーである小野田が、その依頼に適しているかをみっちり審査するからだ。

これは未熟者に下手に仕事を与えて失敗した場合、カンパニーの信用が落ちてしまうからだ。高額報酬の依頼は基本的に難易度が高いので、それなりに優秀な傭兵を送らなければならない。確実に依頼を遂行出来なければ、「カンパニーは未熟者を送ってくるいい加減な連中」という印象を持たれて信用を失い、依頼を受けられなくなってしまう。

そのため傭兵に成り立ての新人ルキは、盗賊退治などの簡単な仕事から初めていかなければならず、ある程度技術と経験を積んだのち、より高額報酬の依頼を受けることが出来る。

「俺、この依頼受けたいんだが」

「いいよ、お前なら問題ない。残りはあと一人か……」

「あ、そうだ。ジャックを誘っていいか？」

「ジャック？ ああいいよ。あいつなら問題ない」

ちなみにジャックというのは俺の隣人であり、同業者傭兵であり、友人でもある。

小野田の話によると今回の依頼がこんなに高額報酬なのは、依頼をしてきた町がかなり裕福だかららしい。カンパニーに傭兵派遣の依頼をしてきた山下町やましたは、大規模農業などで栄えている町だという。

そして山下町と敵対し、今回俺達の敵となるのが山中町やまなかである。山中町はその名の通り、山の中にある。そして山中町は、山下町の近くを流れる川の水源のある町だそうだ。

こんな世界では、水さえも貴重な資源だ。放射能や化学物質で汚染されていない水は、物々交換の対象や資金源となる。人間は水が無ければ生きていけないからな。

そして山下町はその名の通り、山中町より下の平地にある町だ。山中町は斜面が多い土地のため農業があまり出来ず、山下町から食料を融通してもらっているらしい。そのかわりに山中町からは山下町に汚染されていない水を供給し、山下町はその水を使って農作物を育てているのだそうだ。

そうして山中町は水を、山下町は農作物をそれぞれ供給しあっていた。だがある日突然山中町が水と交換する農作物の量を、今までの5パーセントから収穫の10パーセントまで増やすよう要求してきたらしい。断ったら水の供給を絶つと言っている。

無論山下町はその要求を断った。農作物の10パーセントとは、山下町の住民が食べていく分と山中町に供給する分を引けば、売却する分が大幅に減ってしまう量だ。山下町は農作物の売却で潤っている町であり、その儲けが減るということは、今まで続けられていた裕福な生活が途絶えてしまうことを意味している。

山下町が山中町の要求を断った翌日、山下町のすぐ傍を流れる川の水量が減った。山中町は秘密裏にダムを建設しており、そのせいで水の流れがせき止められたのだ。

山下町は山中町が本気である事を知り、戦争の準備を始めた。山中町は要求を飲まなければ攻撃すると伝え、その期限が迫ってきている。そのため山下町は戦力を強化するため、傭兵の募集を行っているのだ。

ちなみに山下町と山中町は双方とも農作物と水の販売でかなりの利益を得ており、どちらも民兵の部隊を保有している。装備は他の自

治体の民兵に比べてかなり恵まれているそうだ（ただし銃火器限定で、車両などを除く）。

「で、今回の任務は？」

「山中町の民兵部隊の無力化。山下町は山中町を手中に収めて、今後水による利権も得たいらしい」

「ふーん、どっちが侵略者かわからんわな」

「やるの、嫌になったか？」

「まさか、きつちり報酬分の仕事はさせてもらうさ」

そうさ、俺は傭兵だ。だからこの仕事を恥じたりしないし、誇ったりもしない。これが俺の選択だからだ。

人を殺すのにも慣れた。何人何十人殺してきたかわからない。もしかしたら何百人かもしれない。

山中町と山下町のどっちが正義か、なんてのもどうでもいい。俺が味方するのは、きつちり報酬を支払い、なおかつ報酬額が高い方だ。傭兵が尽くすのは国家や民族ではない、報酬を払う奴だ。

金こそ力なのだよ。

フジヤマを出た俺は、早速家のある方向へと歩き出した。だがこれから向かうのは自宅ではなく、隣にある家だ。

歩き続けていると、すぐに俺の家の前についた。そして家の前を通り過ぎ、隣に建つ平屋の民家の門にあったインターホンを押す。

ややあって、がちゃという音が、門の向こうにある家のドアから聞こえた。インターホンと共に備わっているカメラで、俺の姿を確認したらしい。ドアの鍵が解除されたということは、庭にある諸々の

トラップも停止しているはずだ。

「岩崎だ、入るぞジャック」

念のためそう言うてから、門を開けて玄関に向かう。ドアの前に立つと、ドアが開いて中から金髪碧眼の外国人のオッサンが出て来た。

ジャック＝ライリー。それがこの男の名前だ。

「よおタケシ、今日は何の用だ？」

「やらないか」

そう答えると、ジャックの表情はは固まった。そして無言のままドアを閉めようとしたので、慌ててスニーカーの爪先を隙間に突っ込んで閉まらないようにする。靴底と爪先には安全のために鉄板を入れてあるので、ドアに挟まれても痛くない。

少し言葉が足りなかったか。俺は「（俺と一緒に仕事を）やらないか」と言ったつもりだったのだが、これではまるで阿部さんだ。

20年前に実際に声をかけられたがね。

いかんいかん、今度はちゃんと伝えないと。

「ボクと契約して、一緒に依頼を受けてよ！」

「キユウベえさんかお前は！？俺は一瞬尻の穴の危機を感じたぜ、タケシがゲイになったんじゃないかとな」

「ねーよ。俺の恋愛対象は二次元の女子だけだ」

「17歳の女子と一緒に暮らしてる奴の言うことか、それは？」

ジャックはそう言いつつも、俺を家の中に通してくれた。

ジャックはライリーはその名と外見の通り、外国人である。年齢は40代だが鍛えられたその肉体は、まだまだ30代と言っても通じる外見だ。

ジャックはイギリスSASに所属していた。階級は少尉。SASはあらゆる特殊部隊のベースとも言われているほどの特殊部隊だが、そんな特殊部隊員のジャックがこんな所新谷市にいるのにはきちんとした訳がある。

ジャックは第三次世界大戦中、とある任務で日本に派遣されていた。その任務が何だったのか彼は決して語ろうとしないが、その任務は失敗し、ジャックはイギリスに帰還することも出来ず日本に取り残された。

その時一時的に自衛隊に所属していた俺は、仲間たちと一緒に墜落したヘリコプターの中から重傷を負ったジャックを救出した。ジャックの他の仲間は残念ながら死亡していたが、彼だけはどうにか生き残った。

重傷だったジャックが再び動けるようになったのは、第三次世界大戦が終結してからだった。すでに国際航空便なんて便利なものは消滅し、日本と外国を結ぶ船舶もほとんどなかった。ジャックはイギリスに帰れなくなり、生きていくために傭兵になった。元SASの名は伊達ではなく、ジャックはかなり優秀な傭兵だ。もしかしたら俺すら勝てないかもしれない。

そんなジャックが俺の家の隣に住んでいるのは、単に俺が知り合いだったからである。ジャックはイギリス人なので、時々サキに英語を教えてもらっている。学校制度が崩壊している現状では、英語の

授業なんてやっていない。外国人は日本にたくさんいるし、そういう連中と意思疎通をはかるには英語が必要不可欠だ。

そしてこのジャック・ライリー、実はオタクである。ジャックが日本語を普通に話せるのも、度々来日して秋葉原に通っていたからという話である。

つまり、変態英国紳士だ。

「俺は変態じゃない、英国紳士だ！」

突然ジャックがツツコミを入れてきた。ジャックは今台所で、紅茶を入れているらしい。

「こらこらジャック、勝手に人のモノローグにつっこむなよ。今読者の皆さんに色々説明してるんだから」

「モノローグ？ 読者？ お前は何を言ってるんだ？ なんかことよ、俺は変態じゃない。変態英国紳士って言うと、なんか変態な英国紳士って感じで変態という名の紳士より変態度が高い感じがするじゃないか。訂正してもらおう」

「この変態（英国）紳士め」

「なんだよその（英国）ってのは？ 俺は変態じゃない、英国紳士だ！」

ジャックはカップに入った紅茶を運んできた。俺は椅子に座り、テーブルに置かれたカップを手に取る。

以前、「コーヒーは飲まないのか？」と尋ねたところ、「誰があんな泥水を飲むか！」未確認と言いやがった。お前は某FOX部隊のUM生物Aや007好きな某少佐かよ、と俺が心の中でつつこんだの言うまでもない。そして全国のコーヒー愛好家に謝れ。

ジャックは椅子に腰掛けると、早速話をきいてきた。

「で、仕事ってのは何だ？」

「水を廻る自治体同士の抗争。報酬1000万円」

「1000万円！？ 高いな」

「何でも今回依頼をしてきた町は、農業で裕福なんだと。んで先日からいきなり水源のある町が、『水と引き換えにしている食料もつと増やせやゴルア』って要求してきたから、民兵動員して水源の町を叩きのめして水源を自分達のものにしたいんだってさ」

「フムン。石油戦略ならぬ、水戦略か。依頼の内容はだいたいわかった。この依頼には何人参加するんだ？」

「8人までだ。俺とお前が参加すれば定員なんだが……やめとくか？ 相手はかなり装備がいらいらいぜ」

俺がそうからかうように尋ねると、ジャックはニヤリと笑みを浮かべて答えた。

「誰がこんないい仕事を逃すかよ。もちろん参加するさ」

「そういつと思ってたよ。じゃ、フジヤマに言って小野田に報告しないと」

俺は紅茶を飲み終わると席を立ち、早速ジャックの家を出た。ジャックはロシアンブルーの飼猫を抱き抱えつつ、俺を見送ってくれた。

翌朝。

高機動車をフジヤマの前に停めた俺は、店内に入ってしまった。フジヤマの前の道路には、俺の高機動車の他にもハンビー（ジャックの愛車だ）やバイクが止められている。今日一緒に仕事を受ける傭兵が、フジヤマに集まっているのだ。

早朝ということもあり、店内には小野田の他に7人しかいない。今回依頼を受けるのは8人なので、おそらく全員が傭兵だ。

「おはよう武、お前が一番最後だ」

カウンターの小野田が話し掛けてきた。俺は傭兵達が全員知っている奴であることを確認して安堵する。初めて組む奴がいたら、色々調整が必要だからだ。

俺がカウンター席に座ると、早速小野田が説明を始めた。

「もう皆も知っていると思うが、今回の相手は民兵だ。かなりの装備らしい。情報屋によるとそいつらは装甲車両も持っているそうだ。一応岩崎がRPGロケット推進式擲弾を持っているから対処は可能だろう」

皆は何も言わない。黙って小野田の説明を聞いている。

「で、だ。今回お前達を雇った山下町は、銃はいいが練度がアレだと聞いている。装甲車両も装備していないらしい。まあ、お前達はクライアント依頼主の言うことをちゃんと聞くんだぞ、何を言われても」

それはつまり、どんな命令でもやれってことだよな？ 皆殺しにするとか何とか。

うわあ、オラなんだかワクワクしてきたぞ！

小野田の言葉を最後に、打ち合わせは終わった。

傭兵達は外に出て、俺の高機動車やジャックのハンビーに乗り込んでいく。車両を持っていない奴もいるし、燃料節約のために相乗りするのだ。、ちなみに消費した燃料は、皆で割り勘して費用を払う。弾薬も戦闘で使用した分を、受けとった報酬の中から分割して公平に負担する。ただし敵の死体から補給する事の方が多いが。

今回参加するのは俺を含めて8人。俺はその全員と面識がある。

まず一人目は、中国人の李^{リー}だ。彼は元々人民解放軍の空挺部隊に所属していたが、ゾンビ発生による混乱で祖国が内戦状態に陥り、ボートを使って日本まで逃げてきた。

運の悪いことに途中でこれ以上のゾンビの侵入を阻むべく展開していた海上保安庁や海上自衛隊によってボートを撃沈されてしまったが、どうにか九州沿岸に漂着した。その後は第三次世界大戦のドサクサに紛れて本州に移り住み、そして傭兵稼業をしている。昔何かやらかして誰かに追われているのか、苗字しか教えてもらってない（その苗字すら偽名の可能性も高い）。

武器は昔空挺部隊に所属していた時に使用していたという95式自動歩槍（突撃銃）とガバメント自動拳銃だ。95式は先の大戦で外国軍が遺棄していつたり、規律が崩壊した外国の軍隊が横流ししたため日本によくある銃だ。

続いて赤城^{あかし} 命^{みこと}、26歳の女性。

「終わりの日」以前は両親と妹で仲良く暮らしていたが、ゾンビが発生したため彼らとは離別してしまっただけ。その後生き残っていた親戚を次々たらい回しにされたためか、少しひねくれた性格を

している。

武器はSG550突撃銃とPx4自動拳銃を使用している。

芦原 雄一は、元盗賊という変わった経歴を持っている。年齢は21歳。

コイツと俺は変わった出会い方をした。盗賊だった芦原達は別の依頼で彼らのテリトリーに侵入してしまった俺に襲撃をかけてきた。その戦闘中に強力なミュータントが現れ、俺と芦原達は仕方なく共闘した。芦原の盗賊仲間達はその際に全員死亡してしまい、それから芦原は傭兵をやっている。武器はG36K突撃銃と、ガバメント自動拳銃のクロームステンレスモデルを使用している。

七郎 和也はこの中で最年少の傭兵だ。年齢は18歳。

コイツは変わった奴で、貧しい村などからの依頼ばかり受けている。しかも報酬は弾薬などの必要経費しか受け取らない。まるでボランティアだ（ボランティアって言葉、死語だな）。

多分その内死ぬだろう。この御時世、他人の事を考えて生きている奴は真つ先に死ぬ。

彼を突き動かしているものは、死んでいった仲間達への思いらしい。その様子が、20年前の俺を見ているようでなんかムカつく。同族嫌悪ってやつか？

使用している武器はAK-47突撃銃とM19リボルバー拳銃。AKは昔所属していた傭兵団のリーダーから受け継いだものらしく、金属部分の塗装が剥げて銀色になっている。

坂野 浩次は俺と同じ、元自衛官の傭兵だ。俺と年齢も近い。ボサ

ボサの髪と伸びた顎髭が特徴だ。だらしねえな（兄貴風に）。面白そうな物事にはすぐ首を突っ込むので、坂野の周りは常に厄介事ばかりだ。正直言って、コイツと一緒にいたら俺にも厄介事が降りかかってくるんじゃないだろうか。使っている武器はUZI短機関銃と9mm拳銃だ。なんとこの9mm拳銃、坂野が自衛隊を辞める時に持ち出してきたらしい。自衛隊の厳格な武器管理は、「終わりの日」以降ゾンビが発生し、第三次世界大戦が勃発してもほとんど変わることはない（大八木三佐みたいな部隊ぐるみで不良な連中もいたが）。そんな自衛隊からどうやって武器を持ち出してきた？ と俺が尋ねた時、坂野はニヤツと笑ってこう言った。

「それに……一丁くらい無くなっても、気づかんだろ？」

悪い奴である。俺が自衛隊を辞めた時だって、ちゃんと武器は返却したのに。

「武、準備は終わったのか？」

いきなり背後から声をかけられた。振り返ると、そこには異様な風体をした男が立っていた。

彼の名前は赤峰^{あかみね} 徹矢^{てつや}、41歳だ。武器はミニミ軽機関銃の空挺モデルと、グロツク18C機関拳銃だ。

顔には包帯をぐるぐる巻き、さらに夏も近いというのに黒のロングコートを羽織ってフードをすっぽり被っている。ズボンは陸自の迷彩服だ。「終わりの日」以前だったら確実に警官から職質を受けているだろうが、彼がこんな格好をしているのにはきちんとしたわけ

がある。

実は彼、ミュータントなのだ。

しかも人間と狼の。

新谷市にいる時はよく、素顔の赤峰を見ることが出来る。包帯の下の赤峰の素顔は、どうみても狼のそれだ。全身も灰色の毛で覆われ、ついでに尻尾も生えている。どこからどう見ても狼男です、本当にありがとうございます。

彼は生まれつきこんな素顔をしていたわけではない。というか41歳なので、「終わりの日」には21歳だったはずだ。もし生まれつきこんなだったら、あつという間にテレビで取り上げられている。彼がこんな姿になったのは第三次世界大戦が原因だ。ゾンビに殺されることなく幼なじみと一緒に生き延びていた赤峰は、日本に撃ち込まれた弾道ミサイルに搭載されていた生物兵器で突然変移した狼に襲われた。

日本に野生の狼は住んでいない。日本狼は明治時代に絶滅しているので、動物園から脱走したか、違法に日本に持ち込まれて飼われていたものだろう。とにかく、ミュータント化した狼と赤峰は戦い、どうにか彼は狼を倒した。

だがその時に負った傷から、ミュータント狼の細胞が赤峰の体内に侵入した。そして赤峰もミュータント化してしまい、まるで狼男のような外見になってしまったというわけだ。

まるで、俺みたいな奴だ。俺が歳を取らなくなったのも生物兵器化したバイオテロの首謀者と戦い、頬の傷からそいつの細胞が侵入したせいだ。

赤峰の人間離れた姿は、俺に恐怖を与えた。別に赤峰が怖いわけ

ではない、いつか自分もあんな姿になるんじゃないかと、心の片隅に怯えを抱いたのだ。

バイオテロの首謀者は、まるで蜘蛛のような姿になった。なら俺はいつか蜘蛛男になるんじゃないか。

俺としては、なつてもスパイダーマツ！　みたいな方がいい。

「ああ、準備は終わった」

「ならさっさと行くでしょう。俺が先導する」

赤峰はそう言つて、停めてあつたバイクに飛び乗つた。濃緑色に塗装されたそのバイクは、カワサキのKLX250モデルだ。自衛隊の偵察用バイクとしても使用されている。このバイクは彼の愛車だ。

俺も準備を終えたので、高機動車の運転席に収まつた。助手席には芦原が座り、後部席には七原が座る。芦原は高機動車の屋根のハッチを開け、据え付けてあつたZID Kord重機関銃を構える。

この高機動車は、普通の仕様ではない。本来幌が張つてあるはずの荷台は装甲板で覆われ、無骨な印象を与える。屋根には機関銃を据え付けることも可能だ。

「終わりの日」以降に勃発した第三次世界大戦のために装甲車両を大量に必要とした自衛隊は、高機動車など非装甲の車両に次々と装甲を追加していった。俺は偶然払い下げられた、この装甲仕様の高機動車を購入することが出来た。ウン千万円かかったが、満足出来る車両だ。

屋根に据え付けてあるKordは、ロシア製の重機関銃だ。同クラスの機関銃と比べて重量は28キロと軽量で歩兵が携行でき、ロシア製らしく頑丈でしかも命中精度もいい。

武器屋の六実のじーさんが手に入れた奴だが、予備銃身や弾薬などを含めてウン百万円で俺が買い取つた。今では高機動車の機銃とし

て据え付けている。

高機動車に乗らなかつた連中は赤峰を除き、ジャックの所有するハンビーに乗り込んだ。ハンビーの屋根にはブローニングM2重機関銃が据え付けられ、物々しい雰囲気醸し出している。

長距離を移動するのでどこで盗賊やミュータントに襲撃されるかわからず、そのために俺の高機動車やハンビーは武装しているのだ。重機関銃はミュータントを一発で射殺可能で、しかも弾数も多いから大人気で襲撃をかけられても対応出来る。

高機動車とハンビーの余ったスペースには、予備の武器や弾薬、燃料の入ったポリタンクが積み重ねられている。どんな作戦を取るか現地で判断することもあるから、そのための予備の武器だ。

燃料はガソリンスタンドなどないため途中で尽きたら大変なので、燃料がなくならないようにするための措置だ。中東などの外国からの輸入がほとんど途絶えた今、燃料はとても貴重だ。

新旧政府はバイオ燃料を大量に生産しているが、それにも限度がある。旧政府はロシアから石油を輸入しているが、その量だって少ない。

ハンビーから準備完了を告げるクラクションが鳴り、運転席に座る俺もクラクションを鳴らした。バイクに乗った赤峰が先導し、その次にジャック達の乗るハンビー、そして俺達の乗る高機動車が続いた。

今回も死者が出なければいいが。俺は頭の片隅でそう思った。

第6話 俺達特攻野郎、Zチーム!! (嘘です) (後書き)

今回登場したキャラを送って頂いた方々。

坂野 浩次 霊剣荒鷹さん

芦原 雄一 charleyさん

赤城 命 モサオさん

七原 和也 ソウさん

赤峰 徹矢 飽和さん

ジャック ライリー SHUN44さん

李 NNさん

御意見、御感想お待ちしております。

第7話 俺がガソダムだ！！ わけがわからないよ……。

新谷市を出発してから半日程で、今回の依頼をしてきた山下町に到着した。放置車両が並ぶ東京外環自動車道を通り、放射能汚染されている地域を迂回したらこんな時間がかかってしまったのだ。「終りの日」以前ならその半分以下の時間で辿り着けるのだが、今の世界では歩いて30分の距離に一日を費やすこともある。どこからミュータントや盗賊に襲われるかわからず、しかも道路は戦争などの影響で使えないことも多い。

そんなこんなで山下町に辿り着いたのは、日がだいぶ傾いた頃だった。

一番前を走る赤峰のバイクがスピードを落とした。前を走るハンビ―も速度を落とし、俺も運転する高機動車の速度を落とす。どうやら山下町にたどり着いたらしい。

突然、前方から強烈な光が照らされた。あまりの眩しさに一瞬目を閉じ、そして目を凝らす。光はどうやらサーチライトから発せられているようだ。

サーチライトは鉄骨で組み上げられた監視棟に取り付けられ、俺達を上から照らしていた。サーチライトを操作する人影の肩に銃がかけられているのを確認した後、唐突に無線機からジャックの声 flowed。

『おっと、何人が男が出て来た……。多分民兵だな。全員、撃つなよ』

前を見ると、銃を携えた男達が10人程こちらに近づいてくる。町

の周囲は冊で囲まれていて、一部に鉄の門がありそこから出入りするようだ。

民兵の一人がハンビーのドアの窓を叩き、ジャックと何事か言葉を交わす。短い会話の後、民兵は「行け」とでもいうように手を振った。

同時に鉄門が開き、赤峰がバイクを発進させて俺達も後に続く。民兵達の脇を通り抜けるついでに、彼らの武装も確認しておく。FAL自動小銃にAK-74突撃銃、民兵の標準的な武装よりはまあいい程度の装備だ。

FALはベルギー製の自動小銃で、AK-74は旧ソ連製の突撃銃だ。どちらも「終わりの日」以前に世界各地の紛争地帯などで使用されていた銃である。

『おいおい、俺達歓迎されてないんじゃないか？』

ハンビーの天井のハッチを開け、M2重機関銃を構えていた坂野が呟く。その言葉で監視棟を見ると、サーチライトと一緒に何かが見え付けられているのが見えた。

それは旧ソ連製のRPD軽機関銃だった。一人の民兵がRPDを構え、銃口をこちらに向けている。

「裏切り？」

そう言つて芦原がKord重機関銃を監視棟の方に向けようとしたのを赤城が止める。芦原の言う通り、何か変だ。なぜ山下町の依頼で来たのに山下町の民兵に銃口を向けられなければならない？

仮に俺達をおびき出して武器や装備を奪おうとしているなら、俺達が山下町に着いた瞬間に襲っているだろう。それにこちらは大量の銃火器で武装しているのだ、全員死ぬ前に民兵達を道連れにするこ

とが出来る。

だつたらなんでだ？

「ジャック、なんかおかしいぞ」

『ああ、わかつている。皆警戒を怠るなよ』

警戒しつつ、車列は門を通り抜けた。

町に入ると、異様に活気がなかった。あまり電気は通っていないらしく、あちこちで松明が掲げられている。出歩いている人は少ない。家々のドアや窓は固く閉ざされ、わずかな光がその隙間から漏れていた。

ここは以前は住宅街だったようだ。どの家も20年前から現存する建物のように、新しく作られたような家はない。この辺りはバイオテロでも第三次世界大戦でもあまり被害を受けていないから、建物の損傷も目に見えない。

『皆、次の角を左だ』

先頭の赤峰がそう言って左に曲がる。今俺達は、依頼主がいるという町役場に向かっている。そこで今回の依頼の詳細や、俺達の仕事が説明されるらしい。

俺も角でハンドルを左に切ると、そこには大きな建物が建っていた。あれが民兵の言っていた町役場らしい。

元は公民館か何かだったらしいその建物は、すっかり要塞となっていた。窓には鉄板が張られ、屋上にはサーチライトがいくつか取り付けられている。鉄板が張られていない窓からは、機関銃の銃口が覗いていた。ただし、設置してある機関銃の数は少ないようだ。

『よし、ここだ。皆止まれ』

ジャックの言葉で、公民館（今じゃ町役場か）の駐車場に車両を停める。駐車場はあまり整備されていないのか、所々でアスファルトがめくれて土が剥き出しになっていた。

すぐに町役場から何人かの男が出て来た。銃を持っていないことから、彼らは戦闘員ではなく町の幹部達だろう。

幹部は俺達を見ると、「こっちに來い」と手を振った。彼らが依頼主のようだ。

赤峰、ジャック、坂野そして俺は車両を下りた。町役場の中で彼らと打ち合わせをするためだ。残りの4人は駐車場に残り、車両の護衛につく。

町役場の入り口に歩いていくと、男達が駆け寄ってきた。さっきの民兵達とは違い、俺達を歓迎してくれているらしい。一体どうなってるんだ、この町は？

「あなたがたが今回来てくれたという傭兵さん達ですかね？」

男達の中からリーダーであるらしい、60代は確実にいつているであろう老人が声をかけてきた。

「はい、そうです。私の名前はジャック・ライリー、よろしくお願ひします」

ジャックが傭兵達を代表し、老人と握手を交わした。

ちなみに今回はジャックをリーダーにしている。ジャックはこの中で最年長者だし、何より外国人ということでも傭兵という空気を醸し出している。

俺達に声をかけてきた老人は、自らを蜂須賀はちすかと名乗った。なんと蜂須賀氏はこの山下町の町長だということだ。蜂須賀氏は早速、俺達を町役場の中に案内する。

町役場の中は、外と比べて明るかった。どうやらここだけは電気が通っているらしい。

綺麗に掃除されている町役場の中を進み、二階にある会議室に入った。ちなみに会議室は普通に長机とパイプ椅子、そして地図が貼られたホワイトボードがあるだけの、それこそ「終わりの日」以前ならどこにでもあった会議室そのままの様子だった。昔とほとんど変わらないその様子に、なんだか懐かしさを感じるのは俺だけではないと信じていたい。

パイプ椅子に腰掛けた俺達は、早速話を切り出した。皆を代表して、ジャックがまず尋ねる。

「さて、ミスターハチスカ。今回の御用件は一体なんですか？」

「すでに小野田さんから伝わっているかとは思いますが、今私達の山下町と山中町は対立状態にあります。いつ抗争が勃発してもおかしくはありません。だからあなたたちには、万一抗争が起きた際にはその鎮圧に当たってほしいのです」

「鎮圧？ 山中町の民兵達の制圧ではなく？」

普通こういう時は、「敵を全滅させる」とか言われるもんだけど、抗争の鎮圧ってのはなんだ？ 鎮圧ってことは、戦っている山下町と山中町の民兵を武力を行使してでも止めろってことか？ なんだそりゃ？

俺と同じ事を思ったらしく、赤峰が今度は口を開いた。どうでもいいが、包帯を顔にぐるぐる巻いた男がしゃべっているのってなんか

不気味だよな。

「自分は赤峰といいます。鎮圧とはどういうことでしょうか？ もし抗争が勃発したら、自分達は山下町と山中町の両方を止めろということでしょうか？」

「はい。実は今回あなたがたをお呼びしたのは、わが山下町の警備^兵隊に圧力をかけるためなのです。彼らは今、町長である私の指揮を離れようとしている。だから彼らの勝手な行動を防いでほしいのです」

話を聞くと、山下町の複雑な事情がわかってきた。

元々山下町と山中町は仲がよく、「終わりの日」とそれによる第三次世界大戦の際も協力して乗り切った。

だが第三次世界大戦により、日本は物資不足に陥った。山下町は平地であることを活かして元から盛んだった農業で自給自足の生活を送ることが出来たが、山の中にある山中町では農業はあまり出来なかった。そのため山中町と山下町は互いに水と農作物を交換し、この20年間発展してきた。

この辺り一帯は民兵がいることもあり、盗賊やミュータントの被害も少なくなった。平和になった二つの町は、徐々に人口が増えていった。

だがここ最近、山中町の人口は今まで供給している食料では足りなほど増えてしまった。山中町は山下町に水と交換の食料を増やすよう頼み、蜂須賀氏を始めとする町の幹部達もそれに応じようとした。山中町は山下町に一番近い町であり、大切な隣人でもあるからだ。

だがそこに待ったをかけたのが、警備隊のリーダーである飯田とい

う男だった。飯田と警備隊の隊員達は、供給している食料を増やすなら、こちらもより多く水を要求すべきだと主張した。

「飯田は昔警官でした。『終わりの日』以降この山下町を守ろうと尽力してきた飯田にとって、見返り無しに食料を供給することは、町のためにならないと思ったんでしよう。そして警備隊の隊員達はほとんどが、子供時代に『終わりの日』を経験している若者ばかりです。彼らにとって物とは、奪うかなんらかの見返りと引き換えにするものです。彼らも飯田の主張に同調しました」

そして強硬路線を主張する飯田のせいで、交渉は決裂した。山中町は水の供給を絶つと脅し、そして警備隊は山中町を攻撃して支配し、後顧の憂いを絶つべきだと蜂須賀氏達に詰め寄った。警備隊の人数は約40人。訓練を積んで武装している彼らを、下手に止めることは出来ない。もはや警備隊は、町の幹部達の制御下を離れていた。聞けば蜂須賀氏は、まだ山中町との交渉を続けているのだという。どうにか抗争勃発を避けようと努力してはいるが、飯田達警備隊が開戦を望んでいる状態では焼石に水の状態だった。

その内山下町の住民達の間にも、山中町との開戦を主張する者が現れ始めた。山下町は二週間後に新たな町長を選ぶ選挙を控えており、開戦論者が増えるということは蜂須賀氏の再選が絶たれるということでもある。そしてその選挙には、警備隊のリーダーである飯田氏も出馬するらしい。

穏健派である蜂須賀氏が選挙に負け、強硬派である飯田氏が町長になれば、今まで築いてきた町の平和は一気に崩れる。飯田氏は武力に頼った政策を取りはじめだろう。そしてそれは、対話による他の町との共存ではなく、武力による他の町の支配になってしまう。

「もちろん私達は最後まで抗争を回避する努力はします。しかし警

備隊はもはや、町長の私ではなく飯田に従っています。もし彼らが勝手に戦闘を始めて、その結果山中町が攻撃してくるようになったら、その時はこの町を守ってください。それが今回の、私からの依頼です」

蜂須賀氏はそう言って、深々と頭を下げた。

つまり警備隊がいつ暴走するかわからないから、勝手な行動を取った時は可能な限り鎮圧し、それが原因で山中町と開戦してしまったら山下町を守ってほしいと。

「……了解しました。報酬はきっちり、払っていただけるとでしょうね？」

「もちろんです。山中町との交渉が成立した日には、きちんと報酬は支払います」

「オーケー、ミスターハチス力。これから私達は、あなたがたの指揮下に入ります」

ジャックはそう言って、蜂須賀氏と固い握手を交わした。

打ち合わせを終えて会議室を出た俺は、扉の脇に立っていた若い男の子二人に呼び止められた。

二人はどちらも20歳前半で、腰には拳銃の収まったホルスターが下がっている。警備隊はほとんどが飯田というやつ指揮下に入っているらしいので、彼らは臨時に蜂須賀氏が雇った警備員だろう。しかも素人に銃を持たせただけの。その証拠に、拳銃は38口径のリボルバーだ。こんな装弾数が少なく威力も弱い銃は初心者用と相場が決まっている。リボルバーは構造が簡単で『終わりの日』以前

も警察がよく使っていたため流通数が多く、しかも安い。
若者達はジャックを呼び止め、聞いた。

「あの、つかぬ事を伺いますが、なんで子供がここに？」

……子供、だと？

今コイツ、俺を見て子供と言ったな？俺の目を見て子供だと言ったな！？

思わず俺は叫んだ。

「子供言うな！！俺は37だ、お前らよりずっと年上だ！諸事情ですつとこんな外見だが、見た目で人を判断すんな！！」
「しっ、失礼しました！！」

若者達は慌てて頭を下げてきた。

いつもこれだ。俺は見た目がずつと17歳のままだから、いつつも初対面の人にガキと間違えられる。そのせいでなんとナメられ、不利益を被ってきたことか。

まあ、もう慣れたけど。

それでも反論したくなるのはなぜだろうね？俺が見た目も精神もガキのままだからだろうかね？

若者達は頭を恐る恐る上げ、再び聞いた。

「あの、詮索するようで悪いんですが、いいですか？」

今度は赤峰に尋ねているようだ。「なんだ？」とぶっきらぼうに答えた赤峰に、若者達は質問をぶつけた。

「なんで顔に包帯を巻いてるんですか？」

赤峰が固まったのがわかった。人間だったら多分、汗がだらだら流れているだろう。もっとも赤峰は文字通りの狼男なので、汗を流せるのかはわからないが。

赤峰が顔に包帯を巻き、コートのフードを被っているのは、ミュータントであることを隠すためだ。カンパニーの面々、いや新谷市にいる連中はたいてい赤峰がミュータントであることを知っている。だから赤峰は新谷市では狼の顔の姿をさらしている。

だが新谷市の外に出る時は違う。自分の外見が無用な混乱や不信感を与えないように、彼は包帯とフードで素顔を隠す。

人間は、自分と違うような人間を恐れる。そして恐れられる原因は、たいてい外見である。外見が普通と違う奴は恐れられ、排斥される対象でしかない。

ミュータントはその骨頂だ。例え中身が人間でも、見た目が普通と違うならそいつはもはや人間として見られることはない。それは今も昔も、「終わりの日」の以前も以降も変わらない。

かつてゾンビがこの世に溢れた時も、人間の見た目を保っていたことが仇になったしな。どう見ても人間の姿をしているゾンビを人々は倒すことが出来ず、感染は広がっていった。

……まあ、今さらそんな感慨に耽っても、壊れたこの世界がどうなるわけでもないんだが。

俺が感慨にふけっている最中、赤峰は必死に言い訳を考えていたようだ。そして重い口をようやく開く。

「……諸事情で」

はい、出ました諸事情。言い訳する時には便利なワード。皆も覚え
ておこう、いつか使うかもしれないから。

若者達は「？」と首を傾げた。彼らはまだ若い、色々物事について
知りたい時期だ。だがその好奇心が、時に命取りとなる。

「いいかお前ら、つまらん事は詮索するな。余計な事に首を突っ込
むと、後々後悔する事になるぞ」

俺が精一杯のドスを利かせてそう言つと、若者達はがくがくと首を
縦に振つた。

脅し？ いやいや、人生の先輩からのありがたいアドバイスと言っ
てくれ。

「
というわけで、俺達の仕事は抗争の勃発を阻止すること。
そして抗争が始まった場合、山中町の民兵達から山下町を守ること
だ」

駐車場で待つ皆の所に戻つた俺達は、皆にそう説明した。ジャック
の説明を、皆黙って聞いている。

俺達の居場所は当面の間、駐車場のままらしい。駐車場に停めたバ
イクとハンビー、そして高機動車を今後の活動の拠点にして、ひた
すら仕事を与えられるのを待つ。

こりゃ、しばらく帰れないかもしれないな。俺は頭の片隅でそう思った。

家ではサキと犬達が俺を待っている。この御時世、女の子を一人でいさせるのは「どうぞ襲って下さい」って言ってるようなものだが、俺がカンパニー加盟員である限り、新谷市においてサキの身の安全は保障される。新谷市の外ではその限りではないが。

「まるで第二次大戦の時の日本みたいだな」

李が呟いた。李は中国人だから、前の前の大戦の事も学校で習ったのだろう。そして戦争を引き起こした原因が軍部の暴走であることも。まあ、中国の教育は反日で共産党万歳な内容らしかったから、教えられた内容が正しいものかどうかは不明だが（「だったらしい」というのは、すでに中国は軍閥が群雄割拠している状態なので、共産党政治や教育体制が過去の遺物と化しているからだ）。

「力を持った奴は、必ず力を行使したくなる。いくらその飯田とやらの理念が正しかろうと正しくなろうと、武力を持った奴はどんな事でもできる。今も昔もそんなモンよ」

赤城がそう吐き捨てた。その考えは正しいと俺も思う。

「終わりの日」以降、力が全てになった。武器や力さえあれば、どんな事でもできるようになった。本来行き過ぎた力を取り締まるために存在する警察は、今や機能していないからだ。

だから武力を持つことが全てになる。皆が銃を手に入れようとして他の誰かよりも強くなるうとする。これは「終わりの日」のせいというより、人間が元々持っていた闘争本能のせいかもしれない。法律や警察の力が弱まっていたせいで、今まで押さえ付けられていたその本能が一気に解放されたからかもしれない。とにかく世の中は

弱肉強食、力を持った者が全てを制する。

飯田とやらも、力を持ってしまったから変わったのだらう。飯田は昔は警官で、「終わりの日」以降は町を守るために尽力してきたと町長は言っていた。

彼の「町を守る」という信念が、民兵のリーダーとなり力を手に入れたことで「町とその利益を守るためならなんでもする。そのためなら誰だって殺す」という狂気に変わったただけだ。

力は恐ろしい。善良な人間を、たちまち凶悪な殺人者に変えるのだから。

「なら、さつさとその飯田とやらを拘束した方がいいんじゃないか？ そうしたら彼が勝手に戦闘を始めることもない」

「アホか七原。飯田を捕まえようとしたその瞬間、奴はクーデターを起こすだらう。町長達が必要に交渉しているのに飯田がクーデターを起こしたら、今までの苦労が水の泡だ」

「だから俺達が行動を起こすのは、飯田達民兵が勝手に戦闘を始めようとした時なの。おーけー？」

坂野がやる気なさそうに言う。普段はこんなにいい加減な奴だが、戦闘の時には真剣になる。やる気の差が激しい野郎だ。

それにしても服装や身なりがいい加減だ。ああん？ 最近だらしねえな？

俺はとりあえず、依頼の内容を簡単にまとめた。

「つまり民兵達が暴走しそうだから、いざという時には武力介入してくれってことさ」

「……ガソダム000？」

芦原がボソツと呟いた。どうでもいいが、お前よくガソダムなんて知ってるな。20年以上前に放送されて、その時にコイツは生まれてすらいないというのに。

「そつだ芦原！ 戦闘がおつ始まつたら、狙い撃つぜ！ で、目標を駆逐する！ ってやればいいんだよ」

「こらタケシ。世の中には著作権というものがあるのを知らんのか？」

「俺がガソダムだ！！」

「話を聞けええええつ！！ それ以上は著作権とか色々な大人の事情にひっかかるから止める！！」

ジャックはそう言つて、俺の頭を殴つた。

痛い。さすが元イギリスSAS、殴るのにも容赦ない。

「殴つたな！？ 親父にも殴られたことないのに！！」

「止めるつてんだろぅがあああつ！ サソライズとかいるんな所から苦情が来る！」

今度は坂野が俺を殴つた。

「二度もぶつた！」

「あー、ジャック。少し武黙ムクモクらせる。これ以上続けさせたら色々な所から訴えられたり文句言われそうだからな」

瞬間、ゴツと何かが俺の頭に振り下ろされた。赤峰が獣人パワーを使って俺の頭にげんこつを叩き込んだのだ。

少しギャグに走り過ぎた。俺はその後悔したが、赤峰に殴られたことよつて急速に俺の意識は薄れていつた。

「嘘だと言ってよ、バーニー……」

俺は最後にそう呟いて、意識を失った。これからはギャグに走り過ぎないようによつ……。。

第7話 俺がガソダムだ！！

わけがわからないよ……。 (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第8話 俺はロリコンじゃないよ。幼女を愛でてるだけだよ。

次の日、俺は赤城を連れて山下町の周辺を偵察していた。俺達の仕事は山下町の民兵が武装蜂起したりしないかを監視することであるが、万一山中町との抗争が勃発した場合、山下町の防衛もしなければならぬ。

なので三台の車両を駆使して、山下町の周辺の地形を確認しているのだ。どこから攻撃が来るか、どこに陣取ればいいかなど必要な情報を集め、それに基づいて作戦を立てる。赤峰はバイク、ジャックと李はハンビーに乗り、それぞれ山下町の東西を調べている。残りの三人は、何かあつた時に備えて町で待機している。

俺は赤城と一緒に、町の北部を調査していた。町の北部にはかつて繁華街と呼ばれていた場所があるが、今では誰も住んでいない。立ち並ぶマンションやビルはミュータントや盗賊がどこに隠れているかわからず、住もうとする者はいない。いるとすればさつき言つたミュータントや盗賊、そして何らかの事情がある奴だけだ。

「こんな高い建物がある場所に来るのは久しぶりね。最近新谷市からあまり動いていなかったから」

「どんなに高い建物があろうと、そこに人が住んでなけりやただの廃墟だ。この町はただの、前世界の遺跡だよ。誰も住む人がいない、保守点検する人もいないから、その内劣化して崩れ去るだろうがな」

俺はそう返して、開きつ放しの運転席の窓から外を眺めた。

この繁華街は大戦の影響を受けていない。だが「終わりの日」のゾンビパニックで発生した火災や家電などの劣化で生じた火災で、繁華街南部一帯は焼け落ちていた。消防隊は道路に放置された車両が

邪魔になつて現場に向かえず、さらに襲い掛かるゾンビによつてもそもも出勤すら出来なかつた。消防士は一般人より鍛えてあつたが、消防署に銃火器がある訳ではない。高圧放水器やウォーターガン、そして消防用の斧などを用いて戦つたが、自分達のいる消防署を守るだけで精一杯だつた。そのため火災は燃えるものをすべて燃やし尽くすまで止まらず、結果直線を描くように町は燃えた。

その火災が発生した場所より南にあるのが山下町だ。山下町は元々農村だつた（「町」というのは、勝手に住人が後付けした）ので繁華街より離れており、そこに生き残つた人々は集まつた。そして居住地や耕作地の周囲を金網で囲み、今日まで過ごしてきたのだ。

繁華街の中を進む俺は、様々なものを目撃した。

商店のシャッターは破られ、ビルの一階の窓は破られていた。ゾンビ発生初期は大混乱に陥つていたので、道路には玉突き事故を起したり燃えて骨組みだけになった乗用車があちこちにあつた。20年も経つたせいで、それらは赤茶色に錆びている。

「毎度思つけど、酷いもんだね……」

「この町なんてマシな方さ。俺はこれよりずっと酷い状態の町をいくつも見たことがある」

「そう？ 私はあるたより色々な場所に行ったことのあるつもりだけど、どこもこんな状態でしょ？ 一度大戦であちこち建物が倒壊してた街を見たことがあるけど」

「甘い甘い。若者よ、もっといろんなものを見てみる。俺はお前より年上な分、いろんな光景を見てきたぜ」

核攻撃を受けた町とか、な。

町の道路はあちこちが放置車両で塞がっている。これを除去して進むのは難しいかもしれない。ブルドーザーがあればパワーにものを言わせて道を切り開けるかもしれないが、そんなものはない。20年も経っているから、新規製造されたものでもない限り動かない。そもそも動かす燃料だって乏しい。

山中町はこの繁華街の北側にあるから、仮に抗争が勃発すれば大きく迂回でもしない限り山中町の民兵達はこの繁華街を通って来る。多くの道は乗用車で塞がれているが、まだまだ通行可能な道はある。うまくいけば、敵をキルゾーンに侵入させて集中砲火を浴びせて撃破できるかもしれない。万一この繁華街を迂回することになっても、その場合は時間が稼げる。山中町にとっても燃料は貴重だから、迂回して余計に燃料を消費することを彼らも望んではないだろう。徒歩でやって来れば燃料の心配なんて無くなるが、その可能性はないと言っている。山中町から山下町まで歩いて一時間はかかるのだ。抗争が始まれば短期決戦で終わらせるために山中町は速度を求めらるうし、途中で盗賊やミュータントに出会う可能性を考えたら車両を使わざるを得ない。

繁華街の北部で俺と赤城は高機動車を降り、それぞれ徒歩で繁華街を調査することにした。敵待ち伏せするためには、出来るだけ敵の進行ルートを特定して先回りする必要がある。可能な限り、繁華街に入っすぐに攻撃するのが望ましい。ちなみに高機動車は偽装ネットを被せ、目立たない場所に隠しておいた。近寄って見ない限りはデカイ藪としか思われないう。搭載してあるKord重機関銃は誰かに勝手に使用されるのを防ぐた

め弾を車内に収納し、ドアにも鍵をかけた。そもそもKordは28キロもあるのだ、弾の入っていないクソ重い重機関銃を持って逃げようとすると奴がいるとは思えない。いたとしても、すぐに追いつける。

一時間したら高機動車に戻ることに、何かあった場合はすぐに無線機で連絡を取ることを確認して俺と赤城は別れた。俺達は無線機を持っているが、これは貴重な代物だ。携帯出来る分、大型無線機よりも高価で数が少ない。

町の北部を東側に進んでいく。背の低いビルの間から、青々とした木々に覆われた山が見える。あそこに山中町があるのだ。

相変わらず町の中は酷い。狭い脇道のような場所でさえ、事故を起こした放置車両で塞がっていた。車に乗ったままゾンビから逃げようとして、道につつかえて身動きが取れなくなり、そこをゾンビに襲われたようだ。その証拠に、脇道を塞いでいた乗用車のフロントガラスは大きく割れている。脇道にはまり込んでドアすら開けられず、乗っていた人々は車を棺桶にして死んだのだろう。ただし、その後犬猫やカラスに食われたのか、白骨すら残っていない。20年もの間風雨に曝されて流れてしまったのか、車内には血の跡すら残っていない。カビが座席に繁殖しているだけだ。

なんで乗っていた連中は、こうなる前に車を捨てて逃げなかったのだろうか？ ゾンビは動きがのろいから（100体に1体の割合で例外がいるが）走れば逃げ切れたのに。

あの日、日本中でこういう光景が繰り広げられた。車を持っている連中は我先にと街から脱出しようとする車を走らせ、同じ考えの人々が道路に集中してあつという間に渋滞が起きた。で、そこをゾンビに襲われた。

道路で渋滞を起こして放置されている車両に共通して言えることは、そのどれもに多くの荷物が積まれていることだ。最後まで車に残っ

ていたのは、荷物に執着があった奴らだ。

俺は大通りだったらしい道を歩いていた。車道は錆びた車両があちこちに放置され、渋滞を起こし、一部は歩道に突っ込んでいた。事故を起こしたのか、歩道すら通り過ぎて商店に突っ込んでいるものもある。

シャツターを破られた商店を覗いてみた。中にはプラスチックの棚がいくつも並んでいたが、当然の如く商品は一つも残っていない。代わりに風で運ばれてきて隅に積もった土から、草が生えている。あちこちがコケで覆われている。

「終わりの日」に、商店はあまり略奪の被害を受けなかった。人々は襲い掛かって来るゾンビから逃げるので精一杯で、商店を襲っている暇がなかったのだ。

しかし時が経つにつれ、襲撃される商店の数は増えていった。ゾンビから逃げ、あるいは家などに立て籠もっても、食料は徐々に減っていく。出前などは来ず、自力で調達して来るしかない。

だがスーパードなどは店主がシャツターを閉めている。当時金の価値はなくなつたに等しかったから、商品と引き換えになるものはない。

そこで、略奪が起きた。

一度略奪が始まれば、止める者はいなかった。警察はゾンビ対応に忙殺されていたので、商店の店主はそれぞれ武器　金属バットや鉄パイプ、包丁。よくて猟銃だ　を持って自衛しようとした。だが店主と略奪者が戦っている間に、人間の臭いに釣られたゾンビがやって来る。ゾンビに店主と略奪者のどちらも殺され、そしてその後によつて来た者が商品を手に入れた。店を守る者はゾンビに殺されていたので、いわゆる漁夫の利だった。

略奪は続いたが、ある日を境に急激に減っていった。店を襲っても、略奪すべき商品が無くなってしまったからだ。

今までは商品が棚に溢れているのが当然の日々が続いていた。だがゾンビの発生でその「当然」の日々は終わった。店に商品が無くなっても、配送のトラックは来ない。いや、そもそも工場や卸売市場が止まっているから、商品その物が無い。

高度に発達した現代（といっても20年前のことだけど）社会では、人間が本来生きていくのに必要な「食」ですら分業されていた。人々はパソコンや書類で仕事をして受けとった通貨で食材を買っていた。「普通」の社会人にとって、食事とは買って食べるものであり、自ら汗水垂らして作るものではなかった。そして身を守ることにすら警察に任せていた。そんな人々ばかりだったから、食料は奪って調達するしかなかったのである。自ら作り出すことが無く、奪うことしかなかったのだから、そりゃあ食料も無くなる。

効率優先で作られた現代社会のシステムは、一部が機能しなくなるのと瞬く間にすべてが止まってしまったのだ。まるでドミノ倒しみたいに。

こうして、最初の一年を乗り切るまでに数百万人が餓死したと思われる。実際は1000万人を越えていたのではないかという話を聞いたことがあるが、真偽はわからない。多くの役所は止まっていたから、死亡届が届けられることはなかったのだ。

こういう時に力を伸ばしたのが、山下町のような農業が盛んな町だ。人間が生きていくためには食料が必要であり、食料を利用して力を蓄えていったのだ。

食料と引き換えに様々な物を得る。あるいは人々を従わせる。そう

やって農村など今まで寂れていたような場所は発展していった。

大通りの途中、十字路があった。誰もかれもが信号を無視していたせいか、十字路の中心ではいくつも乗用車がぶつかって事故を起こしていた。

十字路をまっすぐ進み、東に進む。途中、事故車で塞がっていない道が一本だけあった。この道ならどうにか車両も通行可能であり、ここを敵が通れば待ち伏せ攻撃を仕掛けることができるかもしれない。

俺は着ていたタクティカルベストのポーチから地図を取り出すと、現在地点に丸をつけた。山下町の人々は盗賊やミュータントを恐れ、繁華街を通り抜けることは少なく、繁華街のどこが通行可能かはほとんどわかっていなかった。

その道を北に進んでいく。山中町のある山が正面に見える。

歩道を歩いていると、俺はあるものを見つけた。書店だ。

看板は錆びで赤く染まって店名はわからなかったが、シヨウウインドウの中には本が並べられていた。シャッターは閉じられておらず、しかも窓はどこも割れていない。この20年間誰も押し入った形跡がない。

俺は少し息抜きと称して、書店に入ってみることにした。ガラス戸は閉じていたが、ピッキングツールを使うとすぐに開いた。鍵が錆びて固まっていなかったのも幸いした。

SG556カービンを構えながら書店に入る。すると、外から流れ込んだ風で、店内に降り積もっていた埃が一気に舞い上がった。窓から差し込む光が、舞い上がった埃でレーザーのように浮かび上がる。

書店は、どこも荒らされていなかった。棚には本が並べられ、カウンターには水分を吸ってシワシワになった新聞が放置されている。さすがに金属は錆びていたが、店内のほとんどの部分は20年前の状態を保っているらしい。

俺はカウンターに置かれていた新聞を手を取った。日付は2011年5月1日のものだ。ゾンビのことなんてどこにも書いておらず、代わりに、

「全国で行方不明者続出。誘拐か？」

という記事が隅っこに載っている。

この行方不明者続出事件にもっと注目していれば、ゾンビ大発生も防げたかもしれない。だが起きたことは変えられない。「あの時あすればよかったのに」なんて言うのは、現実を受け止められない奴の逃避行動だ。

こんなに長い間書店が荒らされていなかったのは、単にここに食料が置いていなかったからだろう。「終わりの日」以降人々は食料を入手するのに精一杯で、書店なんか襲うのは無駄だと思っていたに違いない。

俺は店内をぐるっと回ってみた。誰も入っていないので、当然の如く本や雑誌は整然と並べられたままだった。

きっと今を生きている人間達には、本の重要性なんてわからないのだろう。本は知識の宝庫なのに、誰一人この店の本を持ち出していないからだ。

「終わりの日」以降、食料を得ることは難しくなった。だから本と食料があったら、食料を持っていく人の方が多いに違いない。本なんて持って行っただって重くて嵩張り、しかも食べられないから意味

がないと言つ人がいるかもしれない。

だがそれは違つと俺は思う。教育制度がほぼ崩壊しているこの日本では、新たな知識を得るには本を読むしかない。だが本を読むにも学校が無いので、今の子供達は読み書き計算すら出来ない。識字率の調査をやつたらきつとすごい結果が出るだろう。30代以上は100パーセントだが、10代20代はきつと10パーセントあるかないかくらいだ。

だから子供達には本の重要性がわからない。そこに何が書いてあるかがわからないからだ。今の子供達が知識を得るには、大人から聞いたり自分で学んだりしていくしかない。字を読めない彼らにとつて、本なんてただの燃料に成り下がる。

だがそれもいつまでも続かないだろう。今は「終わりの日」以前にきちんと学校教育を受けた大人達がいて、彼らが知識を伝えてくれる。だが彼らが寿命などで死んだ後はどうなるか？

大人達は全ての知識を教えられるわけではない。子供達が受け継いでいく知識はどんどん少なくなり、やがては知識の継承なんてなくなるかもしれない。そうなつた時、子供達は原始人になってしまう。人類の復興なんて夢のまた夢だ。

だからこそ、教育と本が大事なのだ。大人達がちゃんと読み書き計算を教え、足りない知識を本で補うことが必要なのだ。そうすれば人類が今まで積み重ねてきた知識を子供達にも継承させられるし、やがて子供達が文明社会を復活させられるかもしれない。

俺は店内を回り、そして何冊か本を拝借した。教科書の類や辞書、事典などだ。

俺はサキに勉強を教えている。とはいっても昔のような受験に合格するための勉強ではなく、きちんと実生活で役に立つ知識などだ。俺は高校一年生（死語だな、これ。そして懐かしい響きだ）の時に

学習塾に通っていたことがあるが、その時俺に英語を教えていた講師は、「俺は早稲田出てるんだぜ」とばかり自慢していた。その講師が駅で外国人に英語で話し掛けられて慌ててしどろもどろになっていたのを俺は見たことがある。つまり、受験を突破するための勉強なんか実生活で役に立たないのだ。必要なのは、実際に使えるかどうかである。いくら知識があつたつて、実践出来なければ意味がない。むしろ「自分は頭がいい」などと自惚れてしまつ分、タチが悪い。

俺が拾つてやった時、サキは中学校程度の読み書き計算が出来ていた。これは驚くべきことだ。

誰かに習ったのかと尋ねると、サキは無言で頷いた。誰に習ったのかまでは教えてくれなかつたが。

教科書などを背負っていたバックパックに放り込み、書店を出た。ピッキングツールを使って再び鍵をかけておく。いつか本当に本を必要とする人が来た時のために、この書店は以前の状態のままにしておかなければならない。

……後で歴史の教科書に、2011年からの歴史を書いとかなきやな。歴史の教科書なんて、もう新旧政府の支配地域以外では出版されてないし。

その後しばらく他の通れそうな道を探してから停めてあつた高機動車に戻ると、そこではすでに赤城が待つていた。どうやら赤城の方は通れそうな道を見つけられなかつたらしい。

「どうだった？ 敵が使えるそうな道はあったか？」

「私の行った方にはなかった。そっちは？」

「一本だけあった。そこを使えば待ち伏せを仕掛けられそうだ」

「ふ〜ん。……で、そのバックパックから突き出てる『高校公民』
って教科書は何よ？」

俺は鍵を取り出してドアを開け、中に背負っていたバックパックを
積んでから答えた。

「何って、そりゃサキに教えるものに決まってるだろ？」

「サキ……？ ああ、あんたが育てているって娘ね。あの噂は本当
だったんだ」

「噂って？」

「あんたがロリコンで変態っていう噂」

赤城の言葉に、俺は飲んでいた水筒の水を思いっきり吹き出した。
そしてむせる。

「……それ、誰から聞いた？」

「ジャックから」

畜生ジャックめ、いつか貸してやろうと思ってた「まどか マギカ」
のブルーレイボックスは貸してやらん。あいつが謝るまでな。

「赤城、お前ロリコンの意味を知って言ってるのか？」

「そりゃあ知ってるよ。いくら私が学校に行けなかったといっても、
ちゃんと勉強はしてたよ」

「じゃあ意味を言ってみろ」

「幼い女の子を好きになっちゃってしまっ、変わった趣味を持つ岩崎みた
いな変態のこと」

「俺は変態じゃないよ！ 仮に変態だとしても、変態という名の紳士だよ！！」

「何？ 変態……なんだって？」

赤城め、ここで学がないことを活かしゃがって。このままでは俺が変態になってしまっではないか。

「いいか赤城、お前は誤解をしている。まず第一に、サキは幼女じゃない。もう17歳だから、仮に俺が好きになっても問題ない。第二に、俺は幼女が好きって訳じゃない。幼女を見ると、『ああ可愛いな』と思ってニヤニヤしてしまうだけだ！！」

「それをロリコンというのでは？」

「……………」

「近寄らないでくれる、変態？」

罵られました。おいおい、興奮するじゃないか。

ありがとうございます。我々の業界では御褒美です。

変態呼ばわりされながらも、俺と赤城は高機動車に乗って山下町に戻った。すでに偵察に出ていた赤峰、ジャック、李も戻っており、山下町に残っていた七原、坂野、芦原と一緒に作戦会議を行う。山下町の民兵達への対策はまだ決まっていない。下手に威圧したら、逆に行動を開始してしまいそうだからだ。

「……………」というわけで、俺としてはこの道をキルゾーンに設定して待

ち伏せを仕掛けるのがいいと思うんだが」

俺はそう言って、先程行ってきた繁華街が描かれた地図の一点を指差した。そこは比較的放置車両が少なかった、書店の近くの道路だ。赤峰とジャック、李も繁華街の東西を調べていたが、通り抜けられそうな道はなかったという。つまり山中町の民兵達が攻めてくるとすれば、今俺が指差した繁華街の道路か、繁華街を迂回して遠回りであることになる。

「この道しか通れないってことを、敵は知っているのか？」

「20年あったんだ、知ってるに決まってるだろう。多分敵もここを通ろうとするだろうな」

「繁華街を迂回してきた時は？」

「その時は時間が稼げるから、別の対策も立てられるさ」

皆が口々に言い、赤峰が手を叩いて静める。

「で、どうすんだ元SAS？ 世界のトップの特殊部隊にいた男なら、待ち伏せ攻撃くらいお手の物だろう？」

ジャックは右腕で顎髭を撫でながら、地図をじっと見て何かを考えているようだった。そして10秒ほどして口を開く。

「フムン。ここはタケシの言った通り、繁華街の通行可能な道で待ち伏せしよう。ただし敵も待ち伏せされるのを警戒しているだろうから、車列で来た場合は先頭を装甲車両が固めているな。そして猛スピードで走り抜けようとする。敵が装甲車両を保有しているのかしていないのか、保有していても鉄板貼ったトラック程度なのか軍用装甲車両なのかわからないのが痛い……。タケシ、お前ちゃんとRPGは持ってきたか？」

「もちろんさあ」

「何故ド ルド風に言う。まあいい、作戦は出来た」

ジャックはそう言ってハンビーのボンネットの上に地図を広げ、作戦の説明をした。皆真剣に聞き、一通り質問なども出たところで、俺はジャックと一緒に町長に作戦の概要を伝えるに行くことになった。

「にしてもジャック、お前俺がロリコンだってあちこちで言っているらしいな？」

「ロリコンとは言っていないさ。ただ『タケシは幼女好き』と言っているだけさ」

「それをロリコンって言っただよ！ お前に貸そうと思ってた『まどか マギカ』のブルーレイ、貸してやらん」

「それだけは勘弁してくれ！ 俺はまたほむほむに会いたいんだ！
！」

ジャックはそう言って、まるで90年代の刑事ドラマで岸壁に追い詰められた犯人の如く、色々語りだした。

「だって、タケシがうらやましかつんだ！ 女の子と一つ屋根の下で生活？ なんだそりゃ！ それなんてエロゲだよ、うらやまけしからんな」

「だったらお前も女の子を拾って来い。あと、俺とサキがエロゲみたいな展開に発展することはないだろうね」

「リア充核爆発しろ」

「6000度の熱で骨まで溶かされると言いたいのかお前は。お前俺より年上だろ、大人気ないぞ」

「ジャック＝ライリー、17歳です！ おいおい」

「どこの17歳教の教祖様だよ!? てかオッサンがやってもむさ苦しいだけだぞ」

俺がそう言いつつ、町役場に入ろうと入口のドアを開けたその時だった。

ガチャガチャガチャツ！ という金属音がしたので前を振り向くと、そこにはいくつも銃口が並び俺達を出迎えていた。

「……………」

何故ワ行での発音になってしまったのかは知らない。それだけ唐突な出来事だったのだ。

後ろを振り返ると、ハンビーや高機動車の回りを、銃を構えた山下町の民兵達を取り囲んでいた。その銃口は、傭兵達に向けられている。

一人の男が民兵達の中から歩み出てきた。その男は昨日町長が言っていた、民兵（警備隊と名乗ってるらしいけど）のリーダーである飯田だった。

「動くな傭兵！ 武器を捨てて両手を上げろ！ おとなしくすれば危害は加えないし、君達から何も取り上げることはない!!」

……………これ、なんてテロゲ？

第8話 俺はロリコンじゃないよ。幼女を愛でてるだけだよ。(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第9話 通常の3倍のスピードで動けるわけではないよ。

「今までの町長の政策は間違っていたのだ！ 町長の政策はこの町の利益にはならない、我々の生活をますます不便にさせるものだ！ 引き換えとなる水の量も増やさずに食料を増やせ？ ふざけるのもいい加減にしろ！！ 山中町は我々をナメきっている、それは今までの町長の態度が甘かったからだ！ これは戦争だ。なら我々は勝って山中町の要求をはねつけ、逆に向こうの水源も我々の物にしなければならぬ！ そうすれば我々は我々のためだけに食料を育て、そして食料を用いた貿易をさらに活発にさせることが出来る！！ 諸君、出発だ！！ 傲慢な山中町の連中を叩き潰し、身の程を思い知らせてやれ！！」

拡声器を持った痩せた男、飯田がトラックの荷台に立ち、ハンドマイクを持って叫んでいた。そしてそのトラックを民兵達が取り囲み、飯田を見上げている。飯田が何かを言う度に、民兵達は片手で握った銃を高く掲げ、雄叫びを上げた。

「まあ、言ってる事は間違っていないんだろうけど……」

俺はそう呟きつつ、今の自分の状況を確認した。

十数分前、俺達はいきなり民兵に取り囲まれて銃を突き付けられた。そして武装解除させられた後、俺達が乗ってきたハンビーや高機動車を背にするように集められた。ちなみに今も俺達の目の前には、ライフルやショットガンを構えた民兵達がいる。

話の内容からして、どうやら民兵達がクーデターを起こしたらしい。町長は民兵達の反乱を封じようと俺達を雇ったが、民兵のリーダー

である飯田には町長が自分達を殺そうとしているように見えたらしい。そして俺達傭兵が山下町にやって来た次の日　つまり今日である　に反乱を起こしてしまったというわけだ。町長の考えがアダになったな。

俺達の持っていた銃は全て一時的に取り上げられ、俺達を包囲している民兵達の背後、町役場の入口の階段の上に積み重ねてあった。どうやら飯田は俺達を客人として扱ってくれるらしい。そうでなければ銃を取り上げた後、さっさと俺達を殺しているだろう。山中町を制圧したら、銃を返却して俺達を解放してくれるらしい。

飯田が俺達を殺さないのは、住民に自分達は町の敵ではないと示したいからのようだ。町の住民の半分は今の町長の政策に反発して飯田に賛同しているが、外からやって来た俺達を殺害したら一気に飯田にも反発するだろう。そうなれば数週間後に行われる町長選挙で飯田は当選出来なくなる。クーデターで一時的に奪取した町長の座に合法的に座り続けるためには、町長選に当選しなければならぬ。だから俺達を拘束するのは、山中町を制圧するまでの間だ。山中町を支配したら俺達の任務は失敗したことになるから、もはや俺達が行動する意味はない。

「おい、どうするんだ？」

李が聞いてくる。俺は肩をすくめながら、「さあな」と答える。

「まー俺達は金で雇われてるだけだから。民兵の連中が町長よりも高い報酬を支払うてなら、俺は民兵の側につくぜ」

銃口を向けられている状況だというのに、あくびをしながら坂野が言った。

俺も坂野と同意見だった。俺が忠誠を誓うのは金払いがいい奴、報

酬第一だ。この件で町長は失脚したら報酬は確実に支払われないだろうし、今のうちに民兵達に俺達を雇わないか言ってみるのもいいかもしれない。

「ところがどっこい、そうはいかないと思うぞ」

いきなりジャックが俺に言った。毎度思うのだが、勝手に人のモノローグに突っ込まないでいただきたい。俺が主人公じゃなくなるじゃないか。

「どっということよ、ジャック？」

「昨日町長から聞いたんだが、あの飯田って奴は結構プライドが高いらしい。自分が手塩にかけて育て上げた民兵達を信頼しているから、傭兵の手なんか借りなくても任務を遂行出来るって自信を持っている。俺達を解放しても、雇ってくれる可能性は低いな」

赤城の言葉にジャックが答えた。ジャックの言葉を聞いて、俺は思わず言った。

「おいおい、それじゃ燃料代が無駄になっちゃうじゃないか。燃料だってタダじゃないんだ、報酬もらえなきゃ大損だ」

「岩崎……、お前は金の事ばかり考えているな」

「何の問題ですか？（森の妖精風に）　そう言う七原はどうしろと？　銃突き付けられてなのに、町長を助けに行って民兵達を阻止するか？」

「そうは言っていない。俺は仕事をきっちりやるべきだと言っているんだ」

「じゃあアンタ、あの民兵達に『戦いは悪いことです、話し合いましょう』って言ってきたよ。連中の頭がおかしかったら、アンタの話聞いてくれるかもね」

その可能性はゼロに等しいだろうがな。俺は呟いた。それは飯田の話聞いていたる民兵達の顔を見ればわかる。

民兵の大半は20代の若者だ。彼らは飯田を尊敬の眼差しで見つめ、その言葉に心酔している。その様子だけで、民兵達が心から飯田のことを尊敬していることは明らかだ。和平なんて持ち掛けたら袋たたきにあうこと間違い無しである。

社会を維持する為には自分達の敵となる存在が必要だ。人間が二人集まれば集団が生まれ、集団が集まれば社会が生まれる。人間は自分勝手な生き物だから、すぐに勝手な行動を取ったり自分の意見を押し通そうとする。特に集団とはある目的のために人々が集まったものだから、その傾向が強い。そうなたらあつという間に社会は崩壊する。そうならないため、社会を構成する集団や個人を結束させて維持させるために、自分達の社会を脅かす敵の存在が必要となるのだ。

敵がいれば、その社会に属するほとんどの人が「あいつは社会を目茶苦茶にしようとしている。いがみ合っている場合ではない」と考えるだろう。そうなれば皆が同じような意見を持つし、自分の意見を通そうとする事も無くなる。敵の存在は、社会にとって必要不可欠なのだ。

歴史を見てもそれは明らかだ。アメリカ合衆国は独立戦争中は、自由の国の樹立を阻止しようとするイギリス。西部開拓時代はインディアンや、神の教えに従って領土を拡大しようとするのを阻止する南米の国々。第二次世界大戦中はファシズム国家の日本、ドイツ、イタリア。冷戦期は資本主義に真つ向から反する社会主義のソ連。冷戦集結後は中東各国や中国、北朝鮮など……。

日本の例を見ても、江戸時代の士農工商の身分制における穢多非人、村八分などが似たようなものである。社会とは常に敵や自分達と異なる存在を必要とするのだ。敵を倒したり和解すれば、新たな敵を

作り出すまでだ。

飯田がやったのは敵の存在を強調して、この町を守らなければならないとでも言ったのだろう。盗賊、ミュータント、そして武器を持っている山中町……、敵には事欠かない。民兵達は飯田の言っている事が正しいと感じ、進んで彼に従っているのだ。

さらに民兵達に若者が多いことも災いしたのかもかもしれない。彼らはゾンビや第三次世界大戦による混乱のなかで育ち、または生まれた。自分の周囲に常に脅威がある状況で育ってきたのだ、飯田の言う事を正しいと思いつつも仕方ない。

「自分達の生活を守らなければならない。生活を守るためには、敵を倒さなければならない」。彼らの頭の中には、このことが当然の事として刷り込まれているのだ。交渉も和平も存在しない、自分達の周りには敵か味方しかいないと思いつまんでいるのだ。自分が銃を握って人を殺すのは、町の皆のためだと自らに言い聞かせれば、罪悪感も何もない。

こんな民兵達を育てた飯田も、最初はこんなことをするつもりはなかったのだろう。

「終わりの日」以前、飯田はこの町出身の警察官だったと聞く。彼の町を守りたいという思いが、いつの間にか「ころしてでもまもりぬく」という過激な思想に変わってしまっただけだ。ギャルゲーで例えるなら、ヤンデレキャラといったところか。

彼が町を守るため、住民の結束を強めるために山中町を敵と認定して、敵意を強めていったわけだ。そしてここに来て山中町は水と引き換えの食料を増やせと要求してきた。食料は貿易の際に商品となり、山中町に分け与える分が増えれば商売での儲けが減る。それすなわち、今まで続けてきたこの豊かな（あくまで他のコミュニティと比べてだが）暮らしを捨てなければならぬということだ。

人間誰しも、一度豊かさを知ればそれを捨てるのは難しい。「終わ

りの日」以前にエコだなんだと言いながら、ゴミは大量に出して電気や水を使い放題にしていたのと同じである。山下町の住民は今の生活を維持したいだけなのだ、例えば他の町が飢えて滅びようとも。

演説を終えた飯田はトラックから下りると、町役場の中に入って行った。町長は拘束され、役場の中にある無線室という部屋にいらしい。飯田もそこから無線で民兵達に指示を出すのだろう。

民兵達が次々トラックの荷台に乗り、出発していく。数は合わせて50人といったところか。全員が自動小銃や突撃銃で武装している。トラックはディーゼルエンジンで動くやつらしい。ディーゼルエンジンは植物油でも動くし、山下町では菜種油を取るために菜の花を栽培している。どこで手に入るかわからないガソリンよりも使えるのだろう。

「あーあ、行っちゃまったな」

「ああ。これで依頼は失敗だ」

「残念だ」

坂野、李、芦原が口々に言う。そして俺達を取り囲んでいる民兵が「静かにしろ！！」と怒鳴ると、肩をすくめて黙った。

俺達を取り囲んでいる見張りは8人。全員が銃で武装しているが、今出発していった民兵達とは違いボルトアクション式のライフルや、水平二連の散弾銃などどう見ても狩猟用としか思えない銃しかない。これは武器が不足しているせいなのだろう。全ての民兵が軍用銃を装備しているわけではないようだ。

大戦後、治安がほとんど崩壊した日本では武器が以前よりも流通す

るようになった。大戦中に日本に上陸した外国軍が遺棄していったものや、穴があいた哨戒網をぐり抜けて大陸を通して船で密輸してきたもの、そして設計図などを手に入れた人間が密造したものなど様々なルートで銃が日本に入ってきている。

だがその数は少ない。遺棄兵器は大抵大戦終結後に自衛隊や国防軍に回収されているし、銃を密輸してくる船も海上保安庁や沿岸警備隊（西日本の海上保安庁みたいなものだ）に捕まることも多い。密造出来る銃の数なんかたかが知れているし、精度も悪い。しかも銃は高価であり、弾薬も高い。交易が乏しかったり、売れるようなものがないコミュニティでは銃の数は少ない。それに銃を入手出来る場所も限られる。

なので軍用の銃火器を持っていないコミュニティの方が多くくらいだ。大半のコミュニティが持っている武器は警察官用の拳銃や狩猟用のライフルや散弾銃、そしてクロスボウや弓矢だ。日本刀や金属バットを武器にしているコミュニティもある。だから、山下町は武装面ではかなり恵まれていると言っている。

ただし、見張りが狩猟用の銃しか持っていないということは、軍用銃は全て山中町の攻撃に向かう民兵達が装備しているようだ。彼らが猟銃しか持っていないのは、俺達から銃を全て取り上げて安心しているのだろう。何かあったらすぐに俺達を撃てるよう、引き金に指がかかっている。

トラック数台に乗った民兵達が出発してから10分もすると、さすがに見張り達の緊張も緩んできたようだ。例え俺達を解放しても、今から攻撃部隊に追いつくことは出来ないと思っているのかもしれない。

後数分で攻撃部隊は山中町に到達し、飯田が命令すれば戦闘が始ま

るだろう。そうなったら俺達の報酬はゼロになる。それだけは困る。

「（おい、赤峰。聞いてるか？）」

俺が小声で囁くと、高機動車のボンネットに寄り掛かっていた赤峰の被っていたフードがピクリと揺れた。狼のミュータントである赤峰は、聴覚が常人離れしているのだ。

「（……何だ？）」

「（見張り倒して、町長助けに行かないか？ 燃料代が無駄になるのはイヤなんでね）」

「（どうやってやるんだ？ 俺達は銃を持っていないんだぞ？）」

ちなみに俺も常人よりは耳がいい。歳をとらない能力こゝろづかいに加えて、五感も普通の人間よりはいい。ミュータントの赤峰には遠く及ばないが。

なのでこうやって小声で会話しても、お互いに話していることができる。

「（お前、中二病な奴のふりをしろ。んで顔の包帯を取れ）」

「（はあ！？ 何で俺が？ てか包帯を取ったら厄介なことになるぞ）」

「（それでいいんだよ。お前の素顔を見たら見張りも驚くだろうから、その瞬間に俺が取り押さえる）」

「（見張りは8人もいるんだぞ、武一人じゃ無理だ）」

「（大丈夫だつて。ジャックとかも空気読んで援護してくれるだろう）」

俺がそう言つと、赤峰が小さく溜息を吐くのが聞こえた。

「（……わかった。で、中二病っぽくつてのはどうすればいいんだ？）」

「（ん）。とりあえず、『俺の身体に封じられた邪神が暴れだしやがった！』みたいなイタい事を言っつて顔を掻きむしれ）」

「（ふざけてるのか？）」

「（大まじめですが何か？）」

「（俺がやらなきゃダメなのか？ お前がやれよ）」

「（ミュータントのお前だからこそインパクトを与えられるんだよ。俺がやつても『はいはい中二病乙』つて軽くスルーされるだけだ）」

再び赤峰の溜息が聞こえた。そして赤峰は覚悟を決めたのか、顔を押しさえて大きな声で言った。

「わー俺の身体に封じられた邪神が暴れ始めやがったーみんな逃げろー」

棒読みながらも、顔を押しさえて地面を転げ回る赤峰。そしていきなり奇行を始めた赤峰を何事かと引いて見る傭兵達。そしてそんな赤峰に銃を向け、突然のことに驚いたような見張り達。

「おい貴様、何をやっているんだ!？」

見張りの一人が散弾銃を赤峰に向けたが、赤峰は（棒読みで）呻きながら地面を転げ回り、そして唐突に顔に巻いてある包帯を取りはじめた。

そんな赤峰の様子を見て、ジャックがニヤリと口の端を吊り上げるのが見えた。どうやら俺と赤峰がやるうとしていることがわかったらしい。

見張り達はどうすればいいかわからず、とりあえず俺達に銃口を向

けているような状態だった。しかも視線は赤峰に釘付けなので、視線は時々俺達から外れている。

そしてついに、赤峰の顔に巻かれていた包帯が取り去られた。

「うわああああっ！！」

包帯の下の素顔を見たいという好奇心もあつたのだろう、赤峰の顔を覗き込んだ見張りの悲鳴が大きな悲鳴を上げた。赤峰が被っていたフードを外すと、見張り達の目が見開かれ、銃口が乱れる。

フードの下には、狼の頭があつた。青色の瞳をして、口からは鋭い牙が生えている。まるで狼の頭を切り取って、人間の頭と取り替えたようなアンバランスさだった。首から下の身体も毛に覆われ、文字通りの狼男となっている。俺も初めて見た時はビビった。

いきなり現れた狼の顔を見た見張り達は悲鳴を上げ、思わず赤峰に銃を向けていた。だが引き金には指がかかっていない、よほど驚いているのだろう。彼らはきつと、「ビビるわぁ！マジビビるわぁ！！」（ニコ動で人気の木吉カズヤ風に）「とでも思っているに違いない。

俺の目の前にいた見張りの若い男も、赤峰の顔を見て驚いていた。銃口は完全に俺から外れている。

全てはチャンス！！（木吉カズヤ風に）

俺の体外能力発動！！ 頭の中の脳内麻薬的な何かが大量に放出され、時間の流れが普通より遅く感じられる。俺はその状態で、目の前の見張りに向けて走り出した。

見張りは俺が近づいてくるのを見て、とっさにボルトアクション式ライフルであるレミントンM700を向けた。あくまでも俺が時間の流れを遅く感じているだけなので、別に俺が高速で動いているわけではない。身体は普通の人間並の速さでしか動かせないの、目の前に銃口があったらアウトである。高速で飛んでくる銃弾をかわせるわけでもないの、出来ることといえば銃弾が放たれる前に視線から身をそらすくらいしか出来ない。

俺は向けられたM700の銃口から身体をそらした。直後、銃口から火が噴き出し、7.62mm弾が発射される。放たれた7.62mm弾が俺の脇を飛んでいくのが見えた。

見える！ 私にも見えるぞ！！（某赤い彗星風に）

男は慌ててM700の機関部右から突き出ているボルトハンドルを引き、空薬莖の排出と次弾装填を行おうとした。ボルトアクション式のライフルは一発撃つ度にボルトハンドルを引いて次弾を装填しなければならず、連発が出来ない。その代わり構造が単純で自動小銃より安価であり、そして精密な射撃が可能なのだが、今回は連発出来ないことがアダになった。

男がボルトハンドルを引いて薬室に弾を装填した時、既に俺は男の

脇に立っていた。横からM700の銃身を掴み、思いっきり男の身体に突き出した。木製の銃床が勢いよく男の鳩尾に直撃し、男は「ゲツ」と踏み潰された蛙のような声を上げて胸を押さえて地面に倒れ込んだ。

別の見張りが、七原に銃を向けようとしていた。それを見た俺は大きく手を振って、手にしたM700ライフルを見張りの男に投擲した。

投げられたライフルは回転しながら男の頭に直撃した。約4kgの物体を頭に受けて、男は手にした散弾銃を撃つことなく昏倒した。

気がつけば、他の皆もそれぞれ見張りに飛び掛かっていた。ジャック、赤峰、李が見張りを殴り倒し、坂野が捕まえた見張りの一人を自分の前に立たせて盾代わりになっている。芦原と七原が見張りに蹴りを入れ、赤城がトドメとばかりに頭突きを入れた。

ほんの数秒の間に、見張りは全員が地面に倒れるか、奪われた銃を突き付けられて両手を上げていた。

猛烈に空腹を感じていた俺はポケットからカロリーメイトを取り出すと、袋を破って中身のバー（フルーツ味）をかじった。この能力を使う度に猛烈な空腹感が襲ってくるので、カロリーメイトは俺の必須装備だ。

もしカロリーメイトがなかったら、某菓子^{アンパンマン}パン男の如く、「腹が減って、力が出ない」てな感じになってしまう。

「よし、全員武器を取れ！ アカミネ、お前はバイクで山中町に向

かえ！ アシハラ、アカシ、ナナハラはハンビーで民兵達を追い掛ける！ 残りは人質になった町長を救出する、行け！！」

すぐさまジャックが言うと、傭兵達はそれぞれ行動を開始した。奪われて町役場の入口付近に積み重ねられていた自分の銃を手に取り、リーダーのジャックの指示に従ってそれぞれ行動する。

「赤峰、中二病乙！！」

「やかましい！！ 武のせいだろうが！！」

赤峰はそう言っただけでバイクに飛び乗り、すぐさまエンジン音を響かせて発進させた。一々巻くのが面倒だったのか、狼の顔を晒したままだったが、そんな顔で大丈夫か？

自分の得物であるACR突撃銃とガバメント拳銃を回収したジャックが、苦笑しながら俺に言ってきた。

「にしても、よくあんな作戦立てたな。まさかアカミネに中二病患者の真似をさせるとは……」

「あの時はああした方が手っ取り早かったんだよ。ちょうど見張りの緊張も緩んできた頃合いだったし」

「ま、俺としても報酬をもらえないのはゴメンだからな。お前がやったことは間違ってた……」

ジャックの言葉はそこで途切れた。呆然としているジャックの視線を辿っていくと、ハンビーの助手席付近に行き着いた。

ハンビーには赤城、芦原、七原がジャックから鍵を借りて乗り込もうとしていた。10分前に出発してしまった民兵達を追いかけるためだ。

よく見ると、ハンビーのすぐ傍に何かか転がっていた。目がいい俺には、それが何だかすぐにわかった。

「あ」

転がっていたのは、ハンビーの右側のサイドミラーだった。本来サイドミラーがあるべき場所には、途中から折れた支柱しかない。多分さつき流れ弾を食らって折れたのだろう。ハンビーの車体は装甲仕様だが、さすがにサイドミラーまで防弾になっているわけではない。

「クソツタレ！！ サイドミラーがぶつ壊れやがった！！」

ホーリーシット！！ とかファック！！ とか英語で罵るジャックを横目に、俺は高機動車に被害が及んでいないか確かめた。幸いどこも壊れていないようだ。

「うん、まあ、ご愁傷様ってやつだな」

「クソツ！ 何としても町長を助けて報酬を貰わないと、燃料代に加えて修理代まで出費しなければならん！ 行くぞ！」

色々と町長を助ける理由が加わったらしいジャックが先頭に立ち、町役場に駆け込んで行く。穩便に済めばいいなあと思いつつ、俺もその後が続いた。

第9話 通常の3倍のスピードで動けるわけではないよ。(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第10話 この戦い、24時間で解決できるのか？

さつき倒した見張り達をロープで縛って拘束すると、残ったロープを持って俺達は町役場に入っていく。

町役場の中には民兵はいなかった。どうやら民兵は山中町の攻撃に赴いたやつらと、俺達を見張っていた連中しかないようだ。よほど人手が足りていないのだろう。

町役場の役員に聞くと、飯田は2名の部下と共に町長を連れて無線室に向かったようだ。役場にいる人々を拘束したりしていないのは、武器も持っていないしさほど脅威にはならないと思っっているのかもしれない。

そもそも飯田にとっては、民兵達が山中町にたどり着くまで時間を稼げていればいいのだ。民兵が山中町の攻撃を開始した時点で俺達の依頼はほとんど失敗になり、山中町を制圧したら町長は「今まで弱腰だった」と住民から非難されて失脚する。

今頃民兵達は山中町のすぐ近くまで到達しているに違いない。赤峰が追いついて止まるように言うか、あるいは飯田を脅して無線を使って攻撃を中止することを伝えさせなければならぬ。

赤峰のバイクは車と違って細い場所でも入って行けるから、さつき見てきたあちこちの道路が塞がった繁華街を通り抜けて時間を短縮させることが出来るだろう。さすがにハンビーは凶体がでかいが、俺が見つけたあの塞がっていない道を通ればすぐに山中町に到着するはずだ。

「で、どうするジャック？ 飯田は町長を人質に取ってるんだ、どうやって町長を助ける？」

町役場の4階にある無線室の前まで来た時に李が言った。「無線室」このプレートが下がった部屋の前で、男達の中に立て籠もる飯田達

を説得している。その中の二人は、昨日俺と赤峰に失礼な質問をした臨時警備員の若者だ。

「おいお前達、銃をもってたんだろ？　なんであっさり飯田達を通したんだ？」

「だって向こうは三人で、しかもライフルとか持ってたんですよ！　通さなかったら撃つって言われて、通さない奴がいますか！？」

「それがお前らの仕事だろ……」

李がツツコミを入れたが、過ぎた事は仕方ない。ジャックは無線室のドアの前に立つと、説得を始めた。

「あんたらの負けだ！　もう俺達を見張っていた連中は倒した、諦めて投降して部下に攻撃中止を命じろ！！」

返事は無かった。ガチャガチャとドアノブを回したが、ドアが開くことはない。どうやら鍵を掛けた上にドアの前にバリケードを築いたようだ。

ジャックは溜息を吐くと、無線機を取り出して言った。

「クロ工俺だ！　無線室の図面を端末に送ってくれ、人質の命が掛かってるんだ！！」

「それジャック違いだね！？　それは愛国心だけで刺されようと撃たれようとウィルスに感染しようと不死身で24時間^{トウエンティフォー}で事件を解決する対テロ人型決戦兵器のジャックさんだよね！？」

多分、吹き替えは小山力也さんだろう。

「珍しいじゃん、岩崎がツツコミに回るなんて」

坂野が何か言ったが、そんなことはどうでもいい。俺は他人が著しくボケる時は、仕方なくツツコミに回ってしまう性なんだ。

ジャックは笑って「冗談だ」と言ったが、俺には冗談に思えない。その内テロ^{C.T.U}対策ユニットから本人が来るんじゃないか？

俺達は一端無線室の前から離れると、飯田達を制圧するための作戦を練った。バイクで先行する赤峰の話では、あと5分もしない内に民兵達は山中町に着いてしまつらしい。飯田が攻撃命令を出す前に無線室を確保しなければ。

ジャックは臨時警備員（役に立たなかつたけど）の若者達を呼ぶと無線室内部の構造を尋ねた。そしてその情報を元に、突入作戦を立てる。

「タケシ、コウジ。お前達は自衛隊時代に窓からの突入訓練をやったことはあるか？」

「ゾンビとの戦争中にそんなことやってる暇なんて無いに決まってるだろ？ 2、3回くらいしかやったことねえよ。岩崎は？」

俺も首を横に振る。自衛隊には成り行きで入ったとはいえ、訓練は一通りやったことがある。だがSASや空挺部隊にいたジャックや李に比べたら、まだまだ未熟というレベルだ。

「よし、じゃあ俺とリーが窓からラペリングで突入する。お前達は適当に、敵の注意を引いていてくれ。タイミングを見計らって突入する」

「大丈夫か？ 敵が窓も塞いでいるって可能性は？」

李が聞くと、ジャックは「大丈夫だ」と言った。

「奴らがこの20年間戦ってきたのは盗賊とかミュータントくらいだ。特殊部隊とかの存在なんて、ほとんど忘れてるだろう。いざ

となつたら爆薬で窓吹っ飛ばすから大丈夫だ」

ジャックがそう言つて作戦会議を終え、俺達はそれぞれ行動を始めた。ジャックと李はロープとフックを担いで屋上に向かい、俺と坂野はドアの前に立つて飯田達の注意を引くようなことをする。

「考え直しましょうよ。俺達だつて町長が殺されちゃつたら報酬が受け取れないんですよ」

「町長を殺すつもりはない。我々が山中町を制圧するまで黙つてもらうだけだ」

「チツ、俺じゃ駄目か……。じゃあ次は岩崎な」

坂野はそう言つて、さつさと説得役を俺と交換した。

「えーと、大人しく出て来た方がいいですよ？」

「出ていくさ、山中町を制圧したらな」

「いやいや、もっと穏便に済ませましょうよ」

俺がそう言つと、飯田は怒りを爆発させたように一気にまくし立てた。ドアの向こうにいるのに、廊下にまで声が大きく響いてくる。

「穏便だと！？ こんな世界に穏便も平和もない、奪うか奪われるしかないんだ！！ 俺はこの山下町を守る、そのためなら何でもやる！！ 山中町が山下町の利益を害するんなら、こつちから連中に思い知らせてやる。俺達に手を出せばどうなるかをな。ガキにはわからんだろうがな！！」

「ガキ言つな！！ 俺は37歳だつってんだろつがああああああ
っ！！」

あ、やべ。つい条件反射で怒ってしまった。いかんいかん、もっと

粘り強く説得しなければ。

「諦めんなよ、諦めんなよお前（和平を）！　どうしてやめるんだよそこで！　もうちょつと頑張ってみるよ！」

「何故修造？」

後ろで坂野がツッコミを入れたが、そんなの知らん。

「もつと熱くなれよ……！！　熱い血燃やしていけよ……！！　人間熱くなった時がホントの自分に出会えるんだ！！」

「お前は何を言っているんだ！？」

ドアの向こうから飯田の怒声が聞こえた。それと同時に、腰の携帯無線機と繋がるイヤホンからジャックの音が流れた。

『よし。連中、窓はノーマークだ。これより突入する』

その直後、ガシャン！　と窓が割れる音がして、ドンー！　という腹に響く大きな爆発音がドアの隙間からでも聞こえた。そして男達のうめき声と共に、バンバンバン！！　と銃声が三回響いた。

「あらら、やっちゃったか……」

坂野がそう呟いた直後、無線室のドアが内側から開いた。そして李が顔を覗かせる。

「終わったぞ」

そう言う李の手には、銃口から硝煙を立ち上らせているガバメント自動拳銃が握られている。

無線室の中に入ると、飯田達が腕や肩を押さえて床に転がり呻いていた。どうやら急所を外して撃たれたらしい。

窓は大きく割れ、外には屋上から垂らされたロープが風になびいていた。突入時に使ったのか、床にはまだ煙を上げているスタングレネードの残りがすが落ちてている。

「君達の負けだ。今すぐ部下達に引き上げるよう言うんだ。私は争いを避けるために今まで努力してきたんだ、それを邪魔しないでくれ」

「……町長、あなたは甘すぎなんだよ。やるかやられるか、勝つて得るか負けて失うしかこの世界にはないんだ」

「だからといって、何でもかんでも武力で解決することが正しいとは思えない」

ジャックと李に解放された町長がそう言うと、飯田は撃たれた肩を押さえて小さく呟いた。

「戦いを望んでいるのは、俺達だけじゃない……」

ジャックが部屋にあった大きなテーブルの上に置かれた無線機からマイクをとり、町長に手渡した。無線機のスピーカーからは、飯田の部下である民兵達の声が流れている。

『こちら田中、配置につきました。いつでも攻撃が可能です。飯田さん、指示を』

それとほぼ同時に、無線機のイヤホンから赤峰の声が流れた。

『こちら赤峰だ。たった今民兵達を目視した。奴らはトラックを下りて徒歩で山中町の周囲の森に展開している』

「こちらジャック、赤峰はそのまま待機しろ。今飯田が部下に撤収を命じるところだ」

『了解した。……妙だな、人間の臭いがやけに多い気がする』

最後の言葉に何か引掛かった。

狼のミュータントとなつてしまった赤峰の嗅覚は、正に狼並みだ。その赤峰が人間の臭いが多いと言っている。

……まさか。

俺と同じ考えに至つたのか、飯田がジャックの差し出したマイクを撃たれていない方の手で引つたくる。だが送話ボタンを押して部下達に撤収命令を出す前に、スピーカーから大きな銃声が響いた。銃声はいくつも聞こえ、そしてそれと共に男達の悲鳴も流れてくる。

『クソッ、待ち伏せだっ！！』

『敵だ、あちこちにいるぞ！！』

『撃て、撃て！ 応戦しろっ！！』

連続した銃声が、民兵達の怒鳴り声と一緒にいくつも聞こえてくる。それが山下町の民兵達が放っている銃声なのか、あるいは山中町の民兵達が攻撃している際の銃声かはわからない。だが山下町の民兵達は相当混乱している様が、無線を通じて伝わってくる。

『こちら赤峰！ 山中町の民兵達が待ち伏せをしていた。繰り返し、40人ほどの山中町の民兵達が山下町の民兵達を待ち伏せしていた！！ 連中はこっちが攻撃を仕掛けるのを待っていたんだ！！』

すぐにジャックが無線機の送話ボタンを押し、赤峰と話す。

「テツヤ、お前は今どこだ！？ 敵に発見されたのか!？」

『いや、とつさに木に上ったから無事だ。見つかったもいない。どうする、山下町の連中を援護するか?』

ジャックは携帯無線機の送話ボタンを押したまま、しばらく黙る。

何かを考えているようだった。

無線室に設置してあった無線機からは、相変わらず民兵達が激しい銃撃戦を繰り広げているのか、銃声と悲鳴と怒号、そして呻き声が響いていた。だが時間が経つにつれ、それらは一つ一つ少なくなっていく。

ジャックは何かを決断したのか、再び口を開いた。

「……いや、お前はその場で待機しろ。戦闘が終わったらこっそり山中町の民兵達を追跡して、連中がどのような行動を起こすか報告してくれ」

「おい、俺の部下が死んでるんだぞ！！ 何やってるんだよ、助けるよ……!」

ジャックの言葉を聞いて、飯田が喚いた。ジャックが赤峰に言った事は、山下町の民兵達を見殺しにしろというのも同然のことだった。

「今赤峰に戦うのを命じるのは簡単だ。だが赤峰が戦ったところでどうなる？ 赤峰は優秀な傭兵だが、一度に40人を相手にするとは出来ない。」

俺は一応リーダーなんだ。俺は仲間を無駄に死なせるような事はしない」

ジャックの言葉に、飯田の顔から血の気が引いた。身体から力が抜けたように床にへたりこみ、呆然としたように呟く。

「頼むよ……。皆俺の大切な部下なんだ、こんな風に死なせたくはないんだ……」

「この結果を招いたのは、あんただ」

李が冷静に言うと、飯田は声を上げて泣き始めた。

飯田がどんな気持ちで山中町を敵だと認定し、攻撃を仕掛けたのか俺にはわからない。だが飯田の命令に従う者が少なくとも50人はいたことから、彼は相当な人望があったに違いない。

そしてこの様子を見ると、飯田も部下達を大切に思っているのだろう。俺は飯田を頭のネジが外れたドンパチ大好き野郎だと思っていたが、それは違ったらしい。

流れ弾が当たって無線機が破壊されたのか、唐突にノイズを発生した後スピーカーは沈黙した。

「……こちら赤峰、たった今戦闘が終わった。10人ほどまだ生きているが、敵に包囲されている。どうやら投降したみたいだ。」

他にも山中町の連中が、遺体から武器を回収している。多分武器の回収と捕虜の移送を終えた後に山下町を攻撃するつもりなんだろう」「こちらジャック、了解した。山中町の民兵に動きがあったら随時報告してくれ」

『了解、オーバー』

その直後、山中町の町長から通信が来た。

いわく、こちらは山下町の攻撃を受けたがどうにか撃退した。我々には山下町に反撃する権利がある。先程の戦闘で山下町の戦力は壊滅しただろう。無駄に死にたくなければ、今すぐ武装解除して我々に従え。とのことだった。

おそらく山中町はこっちが攻撃を仕掛けてくるのを待っていたのだろう。そして正当防衛の名目で、山下町を攻撃する機会をうかがっていたのだ。

山下町の幹部達はこの話を聞いて、もう駄目だと思っただらいい。しきりに町長に降伏を進言した。だが町長はそれを頑としてはねつけた。

もし山中町に降伏したら、全てを奪われるとわかっているのだ。山下町の住民は殺されないにしても、強制労働につかされて山中町のために農作物を作り続けることになるだろう。それが勝者の権利であり、仮に山下町が戦闘で勝利していれば山中町の住民を追い出して水源を自分達の物にしていたはずだ。

だが町長はそんなどちらかが酷い目にあう事態を嫌い、今まで粘り強く交渉してきたのだ。だが飯田達の暴走で抗争は勃発してしまい、

そしてその戦力となる民兵達も壊滅した。

「……残された手は、こちらを攻撃しようとする山中町の民兵達に大損害を与えて、出来るだけ対等な状態で講和に持ち込むしかありません。お願い出来ますか？」

町長はそう言つて、俺達に頭を下げた。

「……いいでしょう、ミスターハチス力。だが報酬に加えて、倒した敵の装備品は我々の物とさせてもらいます。もちろん、山下町の民兵から奪った装備はそちらに返却しますが」
「いいでしょう。ではお願いします」

町長がそう言つと、二人は固い握手を交わした。

これで、俺達は完全に山下町に肩入れすることになった。仮に戦闘に負ければ、俺達は酷い目にあつに違いない。

そうならないためにも戦闘に勝利して出来るだけ敵に損害を与え、山下町と山中町が対等な状態で講和に持ち込むことが重要だった。

山中町に向けて移動していた芦原達には、行き先を変更して繁華街に向かうよう命じた。おそらく敵は山下町の戦力が壊滅している事を知っているだろうから、わざわざ繁華街を迂回して燃料を無駄遣いすることはしないはずだ。正面から攻撃しても勝てると思ふので、短期決戦を挑んでくるだろう。

とそこで、俺はあることに気づいた。

「そういえば、なんで山中町の連中は待ち伏せを仕掛けていたんだ？ こっちが奇襲することを事前に知っていたはずがない。だってあれは飯田達がいきなりやったことだし」

「……スパイか」

李が顎に手をやりながら呟いた。

おそらく山中町のスパイか、あるいは山下町から身の安全の保障と引き換えに寝返った者でもいるのだろう。山下町の住民は飯田のクーデター時にも遠巻きにその様子を見ていたから、それを無線か何かで「今から民兵達が出発する。警戒せよ」とでも山中町に伝えたに違いない。

「どうすんの？ それじゃ俺達傭兵がいるってこともとくに伝わってるんじゃない？」

「そうか……。こちらに戦力が残っていると知ったら、敵は待ち伏せを警戒して繁華街を通らないかもしれないな」

「こっそり出て行けば、こっちにいるスパイにも気づかれないんじゃないかね？」

「坂野、お前はアホか？ 敵は既に俺達の存在を承知の上で作戦を立てているかもしれないんだ。俺達がここに居ようと居まいと、繁華街を迂回して攻撃してくる可能性が高い」

坂野、ジャック、そして李が言い合う中、俺はどうすべきか考えていた。

李の言った通り、敵は既に俺達傭兵の存在を知っているだろう。そうすれば待ち伏せを警戒して繁華街を通らず、迂回して攻撃してくる。山中町のスパイにばれないようにこっそり山下町を抜け出して繁華街に展開しても、誰も来ない可能性が高い。

かといって繁華街以外の場所で待ち伏せを仕掛けるのも危険が高い。こっちは完全にアウエーだし、どこで待ち伏せを仕掛ければいいのか

今から調べる時間もない。待ち伏せとは地形を活かして行うものなので、そう簡単には出来るものではない。

山下町で迎撃するのは最悪の手段だ。そうなれば確実に非戦闘員が巻き込まれるし、火力で勝る山中町側が有利だ。民兵達が軍用銃をほとんど持って行ってしまい、こちらには機関銃一丁と自動小銃が数丁、そして猟銃が十数丁しか残っていない。これでは、おそらく全員が軍用銃で武装しているであろう山中町の民兵達に勝つことは出来ない。

少ない兵力で勝つためには、待ち伏せ攻撃が一番効果的なのだ。

議論している暇はない。今はまだ戦利品の回収や捕虜の移送で時間を食っているが、山中町の民兵達が移動を始めたら繁華街での待ち伏せは不可能となる。

どうする？ 俺の灰色の頭脳よ、働け！！

ん？

いいことを思いついた！！

それから数分もしない内に、俺、坂野、李、そしてジャックは町役場の駐車場に止められた高機動車に乗り込んでいた。

「ま、待ってください。本当に行ってしまうのですか？（棒読み）」
そう言つて町長が俺達の後を追い掛けて来る。山中町が攻めて来ると知つて逃げ出そうと荷物を抱えてあちこちを走り回っていた住民達が、何事かと集まつて来る。

「うるさい！ 報酬も払わないような町に、用はない！！（棒読み）」

俺が事前に指導した通り李がそう言つて高機動車の助手席のドアを開け、素早く乗り込む。

「だからさ。助けて欲しかったら、それ相応の代価を支払えつてんの。あんたら報酬払つてくれないんでしょ、なら俺らも助けないよ」

いつもの不真面目そうな態度で坂野が言い、後部ドアを開けて車内に転がり込んだ。

「ミスターハチスカ、あなたは我々にきちんと報酬を支払うと言つた。だが山中町が攻撃してくる今になつても金の用意すら出来ていない。なので我々もあなた達との契約を破棄させてもらつ」

ジャックはそう冷たく言つた後、運転席に座つた。俺が渡したキーを使ってエンジンを始動させ、いつでも出発出来る準備を整える。

「こんな敵が攻めてくるかもしれない場所にいられるか！ 俺達は帰るからな！！ 銃だつてあるし、ここを離れば安全なんだ！！」

サスペンス物なら確実に翌日自室で死体となつて見つかるようなセリフを吐いた後、俺は後部ドアから車内に入り、屋根のハッチを開いて据え付けられたKORD重機関銃にを構えた。そしてジャックがアクセルを踏み込み、勢いよく高機動車を出発させる。

高機動車の周りにいた人達が慌てて飛びのき、すぐに後ろから、

「逃げるのか!？」

「この臆病者!!」

「二度と来るな!!」

という声が追い掛けてきた。多くの人がある言葉を聞いたのか、途中ですれ違う人々の俺達を見る目が軽蔑を含んだものになる。

高機動車は猛スピードのまま、山下町を取り囲む柵の所まで来た。

事前に連絡してあった通り、昨日俺達がやって来た時に通った門は開きつ放した。

そこを高機動車は勢いよく通り過ぎた。そして山下町が後ろへ遠ざかっていく。

「……これで演技は終わりか？」

そう呟いたのは李だ。

俺が閃いた天才的策略とは、ズバリ、「逃げるフリしてこっそり繁華街に向かう」というものだった。

傭兵が勝手に依頼を放棄することはよくある。依頼人が報酬を支払えなかったり、予想よりも敵が多くどう考えても死ぬような事態に陥った時などだ。

俺達はそれを町長達と協力し、「大軍が攻めて来るのに町長が報酬を支払えないので逃げ出す傭兵達」を住民が見ている前で演じたのだ。こうすればスパイが俺達が出て行くのを見ても、ただの依頼を放棄した弱そうな傭兵のようにしか見えないだろう。そうすればスパイは傭兵達は実は雑魚で、しかも逃げ出したと山中町に伝える。そうすれば山中町は脅威は完全に去ったと判断して、燃料を節約して正面から攻撃を仕掛けるために繁華街を通り抜けて来るはずだ。

念のため山下町が完全に見えなくなる場所まで来た後、ジャックは高機動車を停めた。そして無線機を取り出すと、山中町の近くで敵を偵察している赤峰と連絡を取る。

「こちらジャックだ。テツヤ、そちらの様子はどうか？」

「こちら赤峰。ついさっきから動きが慌ただしくなってきた。連中が何か言っている……」

赤峰はそう言った後、しばらく無言になった。耳を澄ませて敵が何を言っているかを聞いているのだ。

狼のミュータントである赤峰は、五感が並外れて優れている。50メートル離れた場所で赤峰の陰口を言ってもその聴覚でたちまち察知され、逃げてても狼並みの嗅覚でどこまでも追いついて来るといってゾンビもびっくりな能力だ。

ややあつて、赤峰が言った。

「……わかった。傭兵は逃げ出したらしい。我々はこのまま繁華街を抜け、一気に山下町に向かう」だそうだ

「了解した。敵の装備はわかるか？」

何故か、すぐに返事は帰ってこなかった。しばらくして、「は？」とでも言いたいような口調で返事が来た。

『……運転席と荷台に鉄板を溶接した、軽機関銃を搭載したディーゼルエンジンの装甲トラックが4台』

「装甲トラックか、民兵の標準装備だな」

『あとBTR』

「なるほどBTR……ってなにっ!？」

赤峰の「BTR」という単語に、車内は騒然となる。

BTRとは旧ソ連製の装輪装甲車だ。様々なタイプがあり、旧共産圏やロシア軍などでも現役で使用されている。

「タイプはわかるか!？」

『あれは70? いや80か。山中町はBTR80を一両保有している! 14.5mm重機関銃と7.62mm軽機関銃が装備されているタイプだ!』

「よしわかった。テツヤ、すぐにそこを離れて、芦原達のいる繁華街に向かえ! 敵に気づかれるなよ!」

『了解、オーバー!』

赤峰はそう言うのと通信を終えた。

BTR80とは、それ以前に旧ソ連軍で採用されついでにBTR70装甲車を、アフガニスタン侵攻の教訓を活かして発展させた8輪の装甲車だ。燃料を燃えやすいガソリンから軽油に変更し、兵員が乗り降りするための側面ハッチを大型化している。優秀な装甲車と言っている。

何故そんな代物が日本にあるか、理由はいくつか思いつく。第三次

世界大戦で日本に侵攻してきた外国軍が遺棄していったか、あるいはパーツごとにバラして大陸経由で密輸されてきたか。どちらにしても山中町は水売って金を儲けていたので、その売上でBTR80を購入したのだろう。

旧ソ連製兵器の特徴である、「高性能でなくても単純な構造」をBTRも受け継いでいる。だから山中町の装備するBTRはきちんと整備され、しっかりと稼動するだろう。

「クソツ！ タケシ、RPGは何発持ってきている？」

「三発だ」

「チツ、しけてんな」

「やかましい坂野。まるで20年前のカツアゲしている不良みたいな事を言うな」

今回俺が新谷市の自宅から持ち出してきたRPG7対戦車ロケット弾の弾頭の数は一発。BTRの装甲は戦車ほどではないので一撃で撃破出来るが、BTRは戦車よりも速い走行が可能だ。いくら威力があっても当たらなければ意味がない。

いや、こう言うべきか。

当たらなければどうということはない！！（某赤い彗星風に）

「装甲車を保有しているとは聞いていたが、まさかBTRとはな…」。せいぜいBRDM（旧ソ連製の4輪装甲偵察車）かハンピークくらいかと思っていたんだが……」

ジャックはそう呟いた後、再び高機動車を発進させた。

芦原、赤城、七原はすでに行き先を変更して繁華街に到着している。

赤峰はついさつき山中町を出発したばかりだが、赤峰のオフロードバイクはトラックなどと違って狭く荒れた場所でも走行が可能だ。敵の車列が繁華街にたどり着くより先に、色々な場所をショートカットして繁華街に到着するだろう。

こっちが先に繁華街に辿り着き、山中町の民兵たちを待ち伏せしなければ。

第10話 この戦い、24時間で解決できるのか？（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第11話 ステンパーイ……

それから10分後。

『臭う、臭うぜ。ディーゼルエンジンの排気煙と人間の臭いだ』

無線機から赤峰の声が流れてきたので、俺は被っていた偽装ネットを少し持ち上げ、下を見た。

今俺がいるのは、繁華街の車両が通行可能な道路を一望出来るマンションの屋上だ。長年放置されていたせいで屋上の転落防止の柵は錆び付き、風で運ばれてきたらしい土から雑草が伸びている。

この偽装ネットは敵に気づかれないためのものだ。屋上には所々に草が生え、マンションの壁にはツタが伸びて壁が緑色になってしまっている。偽装ネットを被れば、遠目からは俺は藪にしか見えな
いだらう。

俺達は先に繁華街にいた赤城、七原、芦原と合流した後、それぞれ配置についた。それからしばらくして赤峰も到着し、すぐに山中町の民兵達が乗る車両のエンジン音が聞こえてきた。

俺は二脚を立てたM14EBR自動小銃に取り付けられたスコープを覗き、エンジン音がする方を見た。数百メートル彼方に、土埃を舞い上がらせながら車列が繁華街に向かってきているのが見える。

BTR80装輪装甲車を先頭に、4台の装甲トラックが続く。荷台には民兵達がそれぞれ乗り込んでいる。一両あたり15人程度が乗り込んでいるので、BTRに乗っているのも含めて全員で70人近くはいるだらう。

赤峰の話だと山中町の民兵は40人程度だったはずだが、おそらく倒した山下町の民兵達から奪った銃を配布してさらに戦力を増やしたのだろう。

「こちらジャック。タケシ、敵は今の辺りだ？」

「11時方向、距離500ってところだ。今繁華街に入る」

「わかった。攻撃のタイミングはお前に任せる。オーバー」

俺は再び偽装ネットを被り、敵が順調にこちらに来ているのを確かめる。俺達の予想通り敵は繁華街を迂回せず、俺達が待ち構えている道路を通って山下町に向かうようだ。

ただし先頭にBTRを配置していることから、襲撃に備えていることは確かだ。BTRはロケット弾は防げなくてもライフル弾くらいなら余裕で弾き返すし、武装も強力だからだ。

俺はM14EBRに弾倉をはめてボルトハンドルを引き、薬室に初弾を装填する。続いてRPG7対戦車ロケット弾の弾頭部分に推進部分を取り付け、発射器に装着する。

M14EBRは、元々アメリカ軍が使用していたM14自動小銃を近代化改修したものだ。第二次世界大戦後にアメリカ軍が採用したM14ライフルは単発での命中精度はよかったが、ベトナム戦争で様々な問題が指摘されてお払い箱となってしまった。

ベトナムの木々が生い茂るジャングルでは全長が長いM14は取り回しが悪く、さらに高温多湿の場所では木製の銃床が腐ってしまった。さらに構造的な問題から連発での命中はほとんど期待出来ず、アメリカ軍はM14を「駄銃」と認定すると早々に後継で小口径弾を使用するM16突撃銃を採用し、M14は倉庫に放り込まれることになった。

だが湾岸戦争やアフガニスタン、イラク戦争で再びM14は必要と

された。広い砂漠では小口径弾を使用するM16では射程が足りず、モスボール保管されていたM14にスコープを取り付けるなどしてM16の射程外への攻撃を担う銃として再び活躍するようになった。M14EBRは機関部と銃身だけはM14のままだが、それ以外はほとんど別物のようにしか見えない。ピストルタイプのグリップと伸縮式の銃床が取り付けられ、ハンドガードにはレーザー照準機やフラッシュライトを取り付けるためのマウントレールが設けられている。

俺はこのM14EBRを狙撃用によく使用している。発射ガスの一部を次弾装填に使うためボルトアクション式ライフル程の威力や命中精度はないが、スコープを覗きながら連続して射撃出来るというメリットがある。市街地のような入り組んだ場所での戦闘には持つてこいだ。

しかも20年前の「終わりの日」とある事情で手に入れることが出来た銃なので、思い入れも深い。

RPG7は旧ソ連製の対戦車ロケット弾だ。構造が簡単で安価であり、世界中の紛争地帯でテロリストや民兵、正規軍が使用していた（20年前の時点だけでどね）。

「終わりの日」以前、テレビで中東での紛争を取り扱った番組で誰もが一度は見たことがあるに違いない。槍を長さはそのままに何倍にも太くして、2本のグリップと照準機を取り付けたような外見だ。そして穂先の部分が弾頭になっている。

そのRPG7だが、俺は今回3発しか携行していなかった。しかもこれ、俺が自宅の武器庫に保管してある全ての弾頭の数である。

RPG7はさすがに最新型（20年前の時点）は撃破出来ないが、装甲車やトーチ力などは簡単に破壊出来る。対人用に用いたら悲惨な事になる。それほど威力が高いので、当然価格も高いのだ。

いくら中東で密造されるほど構造が簡単と言っても、あくまでそれは必要な道具や材料、そして作り方を知っている人がいたから密造

出来たのだ。今の日本ではその全てが乏しく、それゆえ流通している弾頭の数も少ない。

例を上げて言うなら、何も無い状態で「火縄銃を作れ」と言われたのと同じことだ。

火縄銃がどんなものかは知っている人は多いだろう。だがその構造を知っている人はその中にどれだけいるだろうか？ 構造を知っていても、作り方は？ 作るのに必要な材料は？ 道具は？

それと同じだ。不幸なことに（？）日本は「終わりの日」以前はロケット弾が飛び交うような紛争地帯ではなかったので、作り方を知っている人なんかいない。今流通している弾頭はほとんどが大戦時に外国軍が遺棄していったものか、武器商人のグループが設計図などを手に入れ細々と作っている物か、あるいは大陸経由で密輸されてきたものに過ぎない。

エンジン音が徐々に近づいてくる。敵の車列は繁華街に入り、俺が目視出来る距離まで来ているのが見えた。

今は道の左右に放置車が乗り捨てられ、ギリギリの幅がある道路を通っている。BTRを正面に押し立てて障害物を排除しながら進み襲撃を警戒しているのかトラックの荷台の民兵達が銃を通りのあちこちに向けていた。

BTRには赤外線暗視装置が搭載されているので、下手に姿を晒せばあっという間に発見されてしまう。俺は赤外線を遮断する偽装ネットを被り、皆は見えないような場所に隠れてタイミングを伺っている。

『タケシ、タイミングは任せる』
「わかった」

俺はジャックにそう答え、お約束のあの言葉を口にした。

「ステンバーイ……ステンバーイ……」
『『『『それ、どこのマクミラン大尉だよ!!』』』』

赤城と芦原、七原を除いた全員から一斉にツツコミが入った。七原達はあのゲームCOD4が発売された時はまだ生まれてないかガキだったため、元ネタを知らないのだろう。

「ステンバーイ……ステンバーイ……ステンバーイ……ステンバーイ……」
『「ステンバーイ……」が長くないか?』

赤峰からツツコミが入ったが、スルー。
俺はRPG7を掴み、車列が放置車の間から抜けて来るのを待った。ようやく最後尾の装甲トラックが抜け出し、先頭を走るBTRがスピードを上げて一気に通りを走り抜けようとする。

俺はその瞬間を狙った。

「ゴォー……」

『ほれポチツとな』

ジャックがそう言った直後、道路の脇に一台だけ放置されていた乗用車が爆発した。爆風は今まさに真横を通ろうとしていた、先頭から二番目を走る4輪の装甲トラックにぶち当たる。一点に集中するよう調整された爆風を真横から受け、装甲トラックが派手な音と共に横転した。

荷台から民兵が投げ出され、進路を塞がれた後方の三両の装甲トラックが急停止する。直後、通りのあちこちから銃声が響き渡り、道路に土煙が舞い上がると同時に民兵達が血を流して倒れる。

今の爆発は、ジャックが仕掛けていたIED即席爆破装置が起こしたものだ。俺のRPG7を高速で走るBTRに命中させるのは難しく、鉄板を溶接されて重量が増え、BTRに比べて低速な装甲トラックを狙うことにしたのだ。

トラックが横転すれば車列は救助のために停止せざるを得なくなるし、直後に戦闘が始まれば応戦のためその場に留まるしかない。そこをRPGで撃破しようという作戦だった。

銃声が響き渡り、車列が停止したのを確認した俺は偽装ネットの下からはい出た。そしてRPGを構えようとしたが、その直前にBTRから発煙弾が発射されていた。

車体に備え付けられていた発射器から射出された発煙弾は空中で破裂し、内部の化学薬品が空気と反応して濃い白煙を発生させる。狭い通りはたちまち白煙に包まれ、俺の視界からBTRが消えた。

敵はどうやら戦い慣れているようだ。攻撃されると同時に発煙弾を発射して敵の視界を塞ぎそれ以上攻撃されるのを防ぐなんて、かなり経験を積んでいるのだろう。

『クソツ！ タケシ、BTRはどうなった！？』
「見えない！ エンジン音はしてないから移動はしていないみたいだが……」

そう言った直後、俺の目の前にあった転落防止用の柵が消失した。BTRが赤外線暗視装置で俺を捕捉し、重機関銃で攻撃してきたのだ。

ドンドンドン！！ というライフルのそれとは比べものにならない轟音の銃声が通りに響き、続いて俺の立っている屋上の淵が14.5mm弾で削られて見るも無残な形になっていく。14.5mm機関銃弾は、ジャックのハンビーに搭載してあるM2重機関銃の弾丸の二倍の威力があると言われている。コンクリートの壁なんて普通に貫通するし、もし一発でも食らったら身体が真っ二つになるだろう。

「ヤバイヤバイ！！」

俺は一人叫び、RPGとM14EBRをひっ掴んで慌てて屋上の端から離れる。BTRから死角となっている錆び付いた非常階段を駆け降り、BTRを攻撃可能な別の場所に移動する。

RPG7、というか大抵の歩兵が携行可能な対戦車火器は、発射時の反動を軽減するため後方から発射ガスの一部を放出する。そのため開けた場所でのしか使用出来ない。後ろに壁があったら、放出された爆風が反射して逆に黒焦げになってしまう。

移動する俺を追うかのように、BTRから発射された機関銃弾が次々壁を貫通して襲い掛かって来る。多分俺の移動先を予測して撃っているのだろう、幸いにも機関銃弾が当たる事はない。

『大丈夫か岩崎！？ お前攻撃されてるぞ！！』

「はっはっは！ 大丈夫だ坂野！ 当たらなければどうということ

はない!!」

そう言った直後、機銃弾で粉碎された壁のコンクリート片が高速で頭にぶち当たった。痛い。

「こちら芦原、煙幕が晴れてきた！ 早くBTRを片付けなきゃ、こっちがミンチ肉にされちゃう!!」

「武、早くしろ！ 俺は臭いで敵の位置がわかるが、他の連中は普通^{ムル}なんだからな!!」

銃声と爆発音に混じって、芦原と赤峰の音が響く。

俺はあらかじめ目をつけていた3階の広い部屋に向かう。そこはベランダが大きく外に張り出しているので、RPGを発射することが可能だ。

破壊しておいたドアから室内に入り、ベランダに向かう。さっきまで20年間無事だった窓ガラスは、流れ弾が当たったのか粉々になっていた。

ベランダに出ると、芦原が言った通り煙幕が薄れ始めていた。仮に煙幕が完全に消え、BTRが無事だったら、俺達が逆に不利になる。今のうちに破壊しておかなければならない。

ベランダに出た俺を赤外線暗視装置で発見したのか、すぐさまBTRが重機関銃を発射する轟音が響く。俺の真横にあった鉄筋コンクリートの柱に大穴が開き、文字通り粉々になったコンクリートの粉末が俺の目に入った。

「うわっクソッ!! 目が、目がああああ!!」

慌てて室内に引っ込み、某ラピュタ王（自称）みたいに呻きながら水筒を取り出して水を顔をぶっかける。目をしばたかせて粉々のコ

ンクリート片を出す。

まだ視界がぼやけているが、俺はRPGを構えた。機関銃は連射し過ぎると銃身が加熱して変形したり、最悪弾が熱で暴発してしまう可能性もある。なので時々射撃を中断しなければならず、俺はその瞬間を待った。

コンクリートの壁が穴開きチーズよりも穴だらけになり、もはや虫籠とっていい状態にまで部屋の中がだいぶ風通しがよくなった時、唐突にBTRの射撃が中断した。銃身を冷却しているのだ。

俺はRPG7を構えてベランダに飛び出した。たがBTRの砲塔に14.5mm重機関銃と並んで据え付けてある7.62mm機関銃が火を噴く方が早かった。

重機関銃のそれよりも幾分軽い感じの連続した銃声が響き、俺の頭上を弾丸が掠めて飛んでいくのがわかった。再び部屋に戻りたくなつたが、その隙はない。

右手で前方の引き金がついたグリップを握り、左手で後方の補助用のグリップを握る。発射筒を肩に担ぎ、上部に取り付けられた照準器でBTRに狙いを定める。

RPG7はロケット弾を発射するので、風の影響などを受けやすいだが外れる、なんて考えは頭のどこにもなかった。悪い考えは悪い結果を招く。

RPG7の引き金を引く。ボン！ という音と共に弾頭が発射され、同時に後方から反動軽減のために爆風が放出される。

一段目の発射用ロケットでしばらく飛翔し、続いて二段目の推進用ロケットに点火して一気に弾頭はBTRに向けて加速していく。BTRを盾にジャック達に銃撃を加えていた民兵の一人が慌てて離れた後、弾頭がBTRに命中し爆発した。

弾頭内部に詰まっていた火薬により、BTRが大爆発を起こす。車

内に搭載してあった機銃弾や燃料が誘爆したのだらう、まるで車内から破裂するような爆発だった。

タイヤは吹き飛び、さっきまで俺を追い詰めていた重機関銃が据え付けられた砲塔がまるごと空中高く舞い上がる。BTRを盾してジャック達に応戦していた民兵達が爆発に巻き込まれ、爆風で薙ぎ倒される。

吹き飛ばされた砲塔が地面に落下し派手な金属音を上げた時には、BTR80はすでに燃え盛るスクラップと化していた。

『よくやったタケシ！ 屋上に戻って敵を狙撃してくれ！』

ジャックにそう言われた俺は空の発射筒を担ぎ、M14EBRを手に再び非常階段で屋上に駆け上がる。すでに煙幕は晴れ、通りで行われている戦闘の詳細がわかってきた。

坂野と七原、芦原、赤峰が廃車のエンジン部分を盾に民兵達に銃撃を加え、建物の二階の窓や屋上からジャック、赤城、李が援護射撃を行っている。対して民兵達は横転したトラックの陰や停車したトラックの荷台に溶接された鉄板を盾に応戦している。

軍用の装甲板ではなく普通の鉄板を溶接しているためか、至近距離からの銃撃では銃弾は鉄板を貫通していた。最大の戦力であるBTRを失ったためか、先程よりも攻撃に勢いが無い。

『こちら芦原、トラックの荷台の機関銃を黙らせてくれ！』

だいぶ先程の攻撃で消失していたものの、無事に残っていた転落防止の柵にM14EBRの銃身をのせ、スコープを覗く。停車した装甲トラックの運転席の上に背が低いタイプの三脚が取り付けられ、民兵の一人が搭載されたM60軽機関銃を芦原達に連射していた。弾幕を張られ、芦原は遮蔽物の廃車から動けないようだ。

スコープの十字線の中心に民兵の頭を重ね、引き金を引く。頭を吹

き飛ばされ、力を失った身体は荷台に転がった。機関銃の脅威から逃れた芦原は再び廃車から顔を出し、G36K突撃銃を発砲する。雑居ビルの窓から銃撃する赤城を撃とうとする民兵がいた。すかさずそいつの胸を狙って撃つ。防弾チョッキなど着用していない民兵はあっさり胸を撃ち抜かれ、心臓と肺を破壊されて手にしたM16 A2突撃銃を撃つことなく倒れる。

『グレネードいくぞ!!』

その声とともにコンビニだったらしき建物の屋上にいた李が、安全ピンを抜いて手榴弾を投擲する。装甲トラックの荷台に投げ込まれた手榴弾を見て慌てて民兵達が下り、逃げ遅れた不幸な一名を巻き込んで爆発が起きる。

赤峰がミニミ軽機関銃の空挺モデルを構え、トラックの陰に隠れた民兵達に向けて連射した。ミュータントである赤峰は力も強く、重く反動が強い機関銃を連射しているのに弾着地点がほとんどぶれていない。装弾数の多いミニミが弾幕を張り、民兵達は下手に顔を出すことが出来ない。

民兵達が赤峰の攻撃にくぎづけにされているところに、ジャックがグレネードランチャーを撃ち込む。何人かまとめて爆発に巻き込まれ、全身を破片に貫かれて絶命する。

やがて、唐突に銃声が止んだ。スコープを覗いて確認すると、生き残っていた民兵達が銃を捨てて両手を挙げている。数は20人も残っていない。

どうやら投降するつもりらしい。

『こちらジャックだ。今から奴らを調べるから、妙な動きを見せたら撃てタケシ』

「わかった。気をつけるよ」

そう言い、民兵達にライフルの照準を合わせる。見たところに銃は持ってないが、小型の拳銃などを隠し持っている可能性がある。油断は出来ない。

ジャック達が銃を構えつつ両手を挙げる民兵達に近づいていく。彼らの足元に置かれた銃を蹴ってどかし、ボディチェックをしていく。抵抗したり逆襲しようとした場合に備えて、赤峰や七原が銃の照準を民兵達に合わせている。少しでも不審な動きを見せたら、即座に彼らの銃が火を噴くだろう。

多分その前に俺が頭を撃ち抜くだろうが。

次々身体を叩き、ジャック達が民兵達が武器を持っていないか調べていく。

投降した民兵達は、ほとんどが20代の若者だった。彼らはこれから自分がどうされるのかわからず、震えているのが数百メートル離れたここからでもわかる。

『大丈夫だ、武器は持っていない。言われた通り全部捨てたようだな』

俺は大きく息を吐き、若干緊張を緩める。だがまだ山中町から増援が来るといふ可能性も捨てきれず、マンションの屋上に留まって周囲を警戒する。

それからすぐに、山下町から町長がやって来た。町民を猟銃で武装させた臨時の民兵達を連れてきた町長は、投降した山中町の民兵達を町に連れていった。どうやら捕虜にして山中町に捕まった山下町の民兵達と交換し、さらに停戦の材料にするらしい。

俺は監視のために屋上に留まったままだが、他の連中は早速戦利品を漁り始めていた。

FALやAK74といった武器は元々山下町の装備だったので約束通り町長達に返却したが、それ以外は全て俺達の物となる。さすがに装甲トラックはいらないので、町長達に引き渡したが。

死体漁りというと悪のイメージが付き纏うが、今の世界では普通の事だ。道端で人が死んでいたらとりあえず漁って何か使える物がなにか調べる。物資不足のこの御時世、もらえる物は死体からでももらうのがセオリーだ。

そもそも「終わりの日」でゾンビが発生して世界が崩壊して以降、人の死体を漁らずに過ごしてきた奴がいるだろうか？ある者は死体から食料などを盗み、ある者は警官や自衛隊員の死体から銃を拝借しただろう。

そもそも俺だって、「終わりの日」に死体から銃を手に入れたのだ。

「おい皆、戦利品は後で仲良く分けるんだからな。勝手にかすめとったりすんなよ」

『へいへい、わかってるよ』

『心配すんなって』

皆口々にそう言うが、本当に俺の分を残してくれるんだろうな？

「赤峰、連中が使っていた武器はどんなだ？」

『M16A2にM60機関銃……どれも合衆国政府の刻印が入って

る。多分在日米軍の装備だった奴だな』
「ほうほう、なるほど」

よくゾンビ物の映画で軍隊はさっさと壊滅するが、自衛隊や在日米軍は「終わりの日」のゾンビパニックでは大した被害を受けることはなかった。のろろ動くゾンビは簡単に銃で倒せるし、早期のうち駐屯地への避難民受け入れを中止してゾンビの侵入を防止したからでもある。

だがいくら銃を持っていても、地を埋め尽くす程のゾンビが押し寄せてくればどうすることも出来ず、駐屯地や基地を放棄して他部隊と合流する部隊も多かった。その際に基地や駐屯地に持ち出し切れなかった武器がいくつか残され、民間人の手に渡ったという話を聞いたことがある（てか、俺も持っている）。

おそらく山中町の民兵達が持っていた武器は在日米軍が置いていった装備を入手したのか、あるいはそれを手に入れた奴から買ったのだろう。M16A2とM60機関銃は一世代前の装備であり（「終わりの日」の時点で）、最新型でなかったから重要性が少なく米軍が置いていったのかもしれない。

どちらにしろ、今の日本で銃は珍しいものでは無くなっている。どのコミュニティも装備の差こそあれ銃を装備している。

警官用の拳銃や猟銃から、山中町のように軍用銃や装甲車まで。数や規模の違いはあるが、どこも銃を最低一丁は装備している。

多分今の日本で銃刀法を厳格に施行し取り締まったら、かなりの検挙者と押収銃が出るんじゃないだろうか。それほど銃は多い。

盗賊やミュータント、そしてたまに出没するゾンビから身を守るためだ。銃やナイフを持っていても文句を言われる事はないし、言われる筋合いもない。

数時間後、山中町から正式に停戦の提案があつた。装甲車を装備した民兵達が壊滅したのがよほどショックだったのか、停戦に関して高圧的に要求を出してくる事はなかった。

当然町長はその提案を受け入れた。山下町の民兵達も全員が死亡するか捕虜となつたし、そもそも町長はこの抗争を最初から望んでいなかったのだ。

どちらもまだ銃は残つてはいるが、それを扱うのはほとんどが素人だ。戦つたつて、無駄に死者が出て決着がつく事はない。

この抗争を引き起こした（山中町が待ち望んでいた節もあるが）飯田は、今後町で裁判にかけられるという。今やコミュニティがそれぞれ勝手に法律を作っているので、飯田にどんな判決が下されるのはわからない。

町長は「町を思つたあまりの行動」として飯田を弁護するつもりらしい。だが数十人の死傷者を出したのだ、責任は取らなければならぬ。しかも山下町には彼のせいで夫や息子を失つた人が大勢いるのだ、例え無罪放免になつても町にいたら命が危ない。

おそらく飯田は山下町を出ていく事になるだろう。裁判で追放が決まるか、あるいは自発的に出ていくか。どちらにしてもコミュニティを出て一人で生きていくのは難しい。

俺達は報酬を受けとつた後、早々に町を出ていくことになった。これ以上ここにおいても意味がないし、それに俺達は山下町の住民の恨みを買っているようだったからだ。

「さつさと傭兵が事態を解決しておけば、死者も出なかったし戦いも起きなかった」という考えを持つ住民が多かったのだ。俺達が町長の命令がなければ行動出来ないということなど彼らには関係なく、しかも俺達がやって来たことで飯田が行動を起こしたと声高に主張する者も多かった。

「申し訳ありません。この町を守っていただいたあなたたちを追い出すような真似をして……」

ハンビーの運転席に座るジャックに、町長が頭を下げながら言う。報酬や戦利品を積み込んだ俺達は車両に乗り込み、いつでも出発出来る状態だった。

そこに町長を始めとする町の幹部達が頭を下げに来た。ぶつちやけお礼よりも報酬の方が俺にとって価値があるので、余計な時間を取らせるなど町長に言いたい。

「いえいえ、それが仕事ですから。今後モドンパチが起きそうな時は、我々カンパニーにご依頼を。報酬さえ頂ければ、きっちり仕事をしますので」

ちやつかり宣伝もしつつ、ジャックが答える。再び町長達が頭を下げて、赤峰のバイクを先頭にして俺達は山下町を出発した。

何日もかかるかと思ったが、あっさり片付いた。それは俺達が来たせいで飯田が焦り、クーデターに出たせいかもしれない。

まあそんなことはどうだっていい。金さえ貰えりゃ、俺はいつでも報酬の支払いが続く限り働くさ。

運転は李に任せ、俺は山分けされた自分の戦利品を点検していた。M16A2突撃銃が三丁にポンプアクション式散弾銃が二丁、今度どこかに売りに行こう。

「チツ、砂が詰まってんじゃねえか……」

同乗する坂野がM16A2を点検しつつ、そう愚痴をこぼした。分解して機関部を露出させ、内部を清掃する。

と俺は、目の前に座る七原がじつと俺を見ているのに気づいた。七原はいつものように報酬だけ受け取って戦利品には一切手をつけず、しかもその報酬だって使用した弾薬や生活する最低限の額しか受け取らなかった。

「なんだ、この銃が欲しいのか七原？ いらないうって言ったのはお前だぞ」

「……いや、あんたを見てたんだ」

「お前はガチホモかよ。俺はノンケだぜ、しかも二次元には興味が無い」

俺はそう茶化したのが、七原は手を組んで拳の上に顎をのせ、何かを考えているようだった。

「……なんだ、何か文句でもあるのか？ 戦いに勝って戦利品を受け取るのは当然の権利だぞ」

「違う。あんた、戦いが楽しいのか？」

唐突にそう聞かれ、突撃銃を弄る手が止まった。

「……なんでそう思う？」

「いや、見ていてそう思う。戦いの中でもジョークを放つたり、あんたは普通じゃない」

「そりゃ普通じゃないな、見た目はずっと変わらないんだし」

「俺が言ったはそういう意味じゃない。あんたは自分の命に執着していないから、その場限りの戦いを楽しんでいるんだ」

命に執着していない？俺が？

いやいやそれは無いと思うよ七原くん。俺だって命は惜しいし、ネタに走るのだって緊張を紛らわせるためだ。

俺はそう言ったが、七原はこう言った。

「あんたは戦いに意味を感じていない。自分の命がどうでもいいんだろ？」

「傭兵が戦う意味？んなもん金のためだよ。大体戦いに意味なんてないし、自分の命を惜しんでたらこの稼業はやってられないだろ」

「あんたは、何か許しを得たかつたんじゃないか？でもその許しを得られないから、死を以って許しを得ようとしている。その相手が誰かはわからないが」

知った口を利くな、若造。

俺は思わずそう言いそうになった。だが七原と俺は一回り歳が離れているのを思い出して止める。コイツはまだ若いから、自分の思った事を口に出せるのだ。それが相手にとって不都合な事でも。

そういえば、遠い昔に聞いたことがある。人間が他人に何かを指摘されて怒ったり不機嫌になったりするの、その指摘されている何かが凶星だからだと。

なら七原の言っていることは正しいのか？俺は何か、もしくは誰かの許しを得るために戦っているのだろうか？

「俺が許しを乞う相手は、とつくの昔に死んでるさ……」

俺は七原から目をそらし、窓の外を見ながらそう呟いた。

新谷市に着いたのは、翌日の夕方だった。夜間の移動は危険だったので夜営し、さらに山下町に行く時も一日ほどかかったので当然だった。

燃料代を割り勘して皆から請求した後、市内を回って皆を自宅に送り届ける。といっても俺みたいに自宅を構えている者は少なく、同じ宿に泊まっている者ばかりなのでそれほど時間はかからなかった。

自宅に到着し、高機動車を車庫に戻すと、早速家の中からシェパード達が吠える鳴き声が聞こえた。続いて玄関の照明が点灯し、ドアが開いてサキが顔を出す。

「お帰りなさい、武さん」

「ああ、ただいま。ちゃんと留守番してたか？ 怖くなかったか？」

「大丈夫でした。小野田さんが人を寄越してくれましたし、タロー達もいましたから」

サキはそう言って、玄関におすわりする四匹のシェパードの頭を撫でる。シェパード達は俺が家に入ってドアを閉めると、たちまち足元に群がってきた。

「ご飯は食べますか？ お風呂は？ わたしは先に済ませてしまいましたけど」

「いや、疲れたからいい。今日はリビングで寝るわ」

腕時計を見ると、既に九時を回っている。

サキはそれを聞いて「じゃあ、おやすみなさい」と言うと、二階の自室に駆け上がって行った。

俺は身を投げ出すようにソファに腰掛けた。隣にミーが上ってきたので、その頭を撫でつつ山下町から帰る途中に七原に言われたことを思い出す。

「許し、ねえ……」

そんなもの、思い当たる節はいくらでもある。初めて俺を好きだと言ってくれた少女、助けられなかった仲間達、その他多くの人々……。

あ、やべ。こんな事を考えながら寝たら、また悪夢を見てしまう。だが眠気は俺の身体を支配していた。眠いと気づいた時には、既に指一本動かすのもだるいと感じるようになっていた。

俺はまぶたを閉じた。

そして予想通り、悪夢という形で、過去を思い出すこととなった。

いや、現実が悪夢そのものだったのかもしれない。

第11話 ステンパーイ……（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第12話 2013年1月23日

2013年 1月23日

「……敵一個分隊を確認。明、俊夫、準備はいいか？」

「こちら横田、配置についた。敵を視認している」

「同じく松谷、俊夫と一緒にいる。敵が見えた」

「オーケー、狩りの始まりだ」

俺は64式小銃に取り付けられたスコープを覗きながら、そう呟いた。スコープには、迷彩の戦闘服にヘルメットや防弾チョッキを身につけ、突撃銃を構えながら荒廃した街を進んで来る「敵」が8人映っている。

「ライン、他に敵はいないか？」

俺は隣で伏せの態勢でいる、シエパード犬のラインに問い掛けた。

ラインは敵兵が接近してくる方向を見たままなので、敵兵は今接近してきている連中しかない。

今俺とラインがいるのは、20階建てのマンションの10階にある部屋だった。部屋の壁はミサイルか砲弾でも直撃したのが大きく崩れ、俺は床に伏せ、その穴から外に向けて小銃を構えていた。

穴から見える街は、まるで地震と火事がいつぺんに起きたかのように目茶苦茶だった。多くの住宅が倒壊し、燃えて黒焦げになった残

骸が散乱している。道路は放置された自動車で塞がっている。一つ地震が起きたような街と違うのは、街のあちこちにクレーターが出来ていることだった。

俺は大きく息を吐き、二脚を立てた64式小銃の上部に取り付けられたスコープを覗く。以前は機関部左側面にボルト留めされていたらしいが、俺が受領した64式小銃は機関部上部にマウントレールが取り付けられていた。

私物のスコープの十字線を敵兵の一人の頭に重ねる。距離は300メートルほど。高低差もあるが、確実に当てる自信があった。

敵の分隊は走る車がなくなった道路を、道路脇に放置された乗用車の影に隠れるようにして移動している。その顔には疲労の色が浮かび、迷彩服のあちこちが泥で汚れていた。

俺が狙いを定めたのは、指揮官らしき30代前半の兵士だった。手にはK1カービンを持ち、周囲を警戒するかのように顔を振っている。

引き金を引く。銃声と共に、スコープの中で敵兵の頭が7.62mm減装弾に貫かれ、周囲に血と頭蓋骨と脳の破片を撒き散らすのが見えた。

敵の一人が何事か叫び、残った兵士達が素早く乗用車や建物の陰に隠れる。だがその動きには未熟さが見え、彼らが兵士になって間もないことが伺えた。

敵兵の一人が、乗用車の陰に隠れていた。だが胴体の一部が陰からはみ出していたので、俺はそこを狙って撃つ。

再び銃声。防弾チョッキを着用しているとはいえ7.62mm弾を阻止出来るわけもなく、脇腹を撃ち抜かれた敵兵は悲鳴を上げながら道路に転がった。たうちまわった。

仲間が激痛に呻いているのを見て、一人の敵兵が彼を助けようと隠れていたコンビニから飛び出した。仲間の制止も聞かずに負傷兵に駆け寄ろうとしたその敵兵の頭を、俺は冷静に撃ち抜く。頭を撃ち抜かれた敵兵は、情性でふらふらとしばらく進んだ後道路に倒れた。街は異様な静けさに包まれていて、300メートル彼方の脇腹を撃たれた敵兵のうめき声が聞こえるかのようだった。

「こちら岩崎、敵を二人射殺。一人を負傷させた。残りは五人、後は頼んだ」

『了解、狙撃で援護してくれよ』

俊夫の声が流れた直後、街に銃声が響く。俊夫と明が生き残った敵兵に攻撃を始めたのだ。

俺が狙撃で敵兵の注意を引いている間にこっそり近づいていた二人は、俺の狙撃を警戒して身動きが取れない敵分隊の背後から襲い掛かった。俊夫のミニミと明の89式小銃が火を噴き、不意を突かれた敵兵が二人倒れる。

残った三人は即座に反応し、俊夫と明に銃口を向けた。だが彼らは二人に応戦する事に頭を支配されていて、物陰に身を隠すことを忘れてしまっていた。

その無防備な頭を俺は撃ち抜く。残った二人も俊夫と明に射殺された。

『全ての敵を排除した。じゃ、さっさと貰える物貰って帰ろう』

明がそう言っつて、冬季用の白い戦闘服に身を包んだ二人が今まで敵兵が隠れていた道路に前進していく。先程俺が脇腹を撃った若い敵兵も、大量出血のせいかもう動いていなかった。

二人は死んだ敵兵から、武器やその弾薬、携行していた食料や無線機など使える物を全て回収していった。俺は二人が戦利品を獲得し

ている間、彼らの周囲に敵が近づいていないかを警戒する。

やがて何丁も銃を肩に掛け、持ってきた背嚢に弾薬や食料を放り込んだ俊夫と明がその場を離れる。十数キロの装備を背負っているというのにその動きは素早く、俺のいるマンションに向かって走り出す。

ここ二週間の恒例行事となっている「狩り」を終えた二人がマンションに戻って来る間、俺は床に伏せたまま小銃を構え続ける。その時強風が吹き、壁の大穴から部屋の中に雪が吹き込んできた。

灰色の、灰が混じった雪が。

十数分後、誰かがマンションの廊下を歩いて来る足音が聞こえた。ラインが吠えないので敵兵ではない、きっと狩りから帰ってきた俊夫か明だろう。

ドアがノックされる。二回、そして間をおいて三回。あらかじめ三人で決めておいた符丁だ。確実に仲間だ。

ドアを開くと、自衛隊の冬季用装備に身を固め、ドットサイトが取り付けられた89式小銃を手にした明がいた。

「武、交代の時間だ」

「ああ、わかった。後は頼んだ」

俺はそう言つと、今まで持っていた狙撃仕様の64式小銃を明に手

渡した。予備の弾倉は壁の大穴付近の床に積み重ねてある。監視役は狙撃銃を携行する事になっているからだ。

「じゃライン、明と仲良くしろよ」

俺がそう言つてラインの頭を撫でると、ラインはワン！ と吠えた。部屋のリビングの28インチプラズマテレビの正面に置かれていた高級そうな皮張りのソファアの上に置いてあつた89式小銃を手にした俺は、監視役を明と交代して部屋から出た。灰混じりの雪は強く降り、街を灰色に染めていく。

電気が停まっているのでエレベーターなんて便利な物はとづくに停止しており、階段を下りて地下駐車場に向かう。

エントランスのガラスドアは粉々に割れ、俺はそこから外に出た。仕掛けてある地雷やトラップにうっかり足を突っ込まないよう気をつけながらしばらく歩き、マンションの地下駐車場のスロープを下つて駐車場に向かう。

スロープを下りきつた角に、濃緑色の大型トラックが一台停まっていた。73式大型トラックと呼ばれる、自衛隊が使用するトラックである。

「俊夫、俺だ」

小声でそう言つと、荷台に掛かっている幌が内側からめくられ、俊夫が中から顔を出した。片手には9mm拳銃を握っていたが、近づいてきたのが俺だとわかりレッグホルスターに戻した。

俺は荷台に上がり、幌をめくって中に入る。ただでさえ地下は寒く、さらに雪が降っているのでトラックの荷台は凍てつくような寒さだった。

「今日の収穫だ。K2が6丁、K1が一丁、M60が一丁だ。弾も

たっぷり頂いてきた」

俊夫はそう言つて、荷台の奥の方に並べられた軍用銃の数々を指差した。

そこには実に50丁以上の銃火器が並べられていた。拳銃から突撃銃、機関銃からロケット砲、自衛隊から外国軍の装備まで。大量のそれらの弾薬や手榴弾や爆薬なども並べられ、下手に火を点けたらデカイクレーターが出来ること間違い無しである。

武器弾薬だけでなく、無線機や段ボールに入ったペットボトル入りの水、携行糧食、ポリタンクに入れられたトラックの燃料なども置かれていた。それらは全て倒した敵兵から回収したり、敵部隊の物資集積場から盗んできたものだ。

広いトラックの荷台それらの物資で半分埋め尽くされ、荷台に毛布を敷いて俊夫は床に座っていた。

敵兵から回収したK2突撃銃を分解していた俊夫は、俺にカップ麺を差し出してきた。味は俺が大好きな醤油味。既にお湯も注がれて閉じられたフタの間から湯気が立ち上っている。

「今日の夕飯だ。俺と明はもう食った」

「早いな。明はさつき監視を交代に来たばかりだぞ」

「さっさとお前と交代して、楽にさせたかったんだろ。お前はなんだかねでいつも上に詰めっ放しだからな」

荷台の片隅に置かれたビニール袋から自分の箸を取り出し、フタを取ってカップ麺を食べはじめた。時間が経って麺が伸びていたが、まだスープは熱く凍える身体に暖かさが染み込んでくる。

カップ麺を食べ終わると、俊夫は「もう寝ろ」と言ってくれた。温かい飯を食って丁度眠気が襲ってきていた頃合いなので、有り難く

寝させてもらおう。

防弾チョッキを脱ぎ、レッグホルスターの9mm拳銃も抜く。荷台の奥の方、並べられた物資のすぐそばに毛布を敷き、その上に寝転がる。上から毛布を被り、すぐ手が届く場所に拳銃と小銃を置いて俺は目を閉じた。

トラックの荷台なのでヒーターなんて便利な物はなく、さらに武器弾薬を満載しているので火を起こして暖をとるなんて事も出来ない。俺に出来るのは厚着して毛布を何枚も被り、使い捨てカイロを張って身体を温めるくらいのことしか出来ない。

「寒いな……」

思わずそう呟き、毛布の中で身体を丸くする。「核の冬」のせいで、冬なのにさらにクソ寒い。

俺達が自衛隊員のような格好をして、というか自衛隊員になってしまっただけこんな荒れ果てた街で敵兵狩りをしているのには理由がある。クソみたいな理由だが。

一ヶ月前、街で起きた核爆発を見た俺達は、大八木三佐のいる避難所に戻る事にした。ボロボロになったライトバンはどうか動き（美少女キャラのシールが傷ついて俺涙目だったが）、避難所に向かう途中で傍受したノイズ混じりの無線交信を聞く限り、何かとんでもない事が起きたのは明らかだった。

途中で持っていた武器弾薬を人に見つかりそうにない場所に隠し、

数日後避難所に到着した俺達に大八木三佐は衝撃の事実を告げた。

第三次世界大戦が勃発したらしい、と。

世界中に弾道ミサイルをぶっ放して第三次世界大戦を引き起こしたのは、日本のお隣りの半島の、北側にある某社会主義国だという話だった。

将軍様が治めるその国は、ゾンビ発生以前から国民が苦しんでいた。度重なる経済政策の失敗に、核実験による経済制裁。全てが軍事優先であり、国連の支援の食料が軍隊に横流しされている状況で、国民は慢性的な栄養失調に陥っていた。

そんな状況でゾンビが発生したので、ゾンビは次々と増えていった。栄養不足の国民はゾンビから逃げ切れるほど元気ではなく、次々とゾンビに食われて歩く死体と化した。皮肉な事に、栄養失調でまともにも動く事も出来ず次々ゾンビに食われた国民は、ゾンビになって元気に歩き回るようになってしまった。

軍隊ですらゾンビの前に壊滅した。一般人に比べていくらか栄養事情がマシとはいえ、兵士が畑を耕して上官のための食料を作っているような状態なのだ。さらに銃の弾は少なく、ゾンビ掃討に用いる戦車や戦闘機は予備の部品や動かす燃料すらなかった。その状況で戦うのは不可能だった。

軍隊が散り散りになって潰走した後、労働党の偉い方々は国民に竹槍を持たせて義勇軍を編成し、ゾンビに立ち向かえと命じた。栄養事情がいくらかマシで弾薬不足とはいえ銃を装備していた軍隊すら負けたのだ、竹槍を持たせて栄養失調の素人の義勇軍が勝てるわけもなかった。逆に無駄にゾンビを増やすだけだった。

国がそんな状態でも、将軍様の労働党の幹部達は安全な場所で精鋭

部隊に守られて暮らしていた。今まで不正に自分の物にしていた支援物資やお隣りの世界一の人口を誇る某国から入手した武器弾薬で、将軍様達は一年半、国民が味わっている地獄なんて知らずにぬくぬくと過ごしていた。

状況が変わったのは12月の下旬だった。将軍様の愛人の一人が突然ゾンビと化し、将軍様に噛み付いたのだ。

その愛人は将軍様の一番のお気に入りだった。彼女はゾンビ発生以降行方不明になり、将軍様が必死に探していた。一年半経ってようやく発見され、即座に将軍様の命令によってシエルターに運ばれた。将軍様のお気に入りという事で誰もが慎重になりすぎているのだろう、彼女を身体検査する者はいなかった。彼女の機嫌を損ねて将軍様に告げ口され、粛正されるのを恐れたのだ。

で、シエルター到着以前に噛まれていた愛人は将軍様の目の前でゾンビと化し、将軍様に噛み付いた。

将軍様は医師達になんとかしると言ったが、どうすることも出来なかった。日本では俺が渡したワクチンと治療薬が生産されていたが、それらは自衛隊員や警官、医師やその他社会を維持するのに必要な職業の人々向けで、一般人には配られず入手が困難だった。

たとえ日本に潜入している作業者が治療薬を手に入れたとしても、日本から祖国まで運ぶのに時間がかかる。すでに航空便はあちこちが止まっており、飛行機で持ち帰ることも出来なかった。そもそも日本からの直通便がない。ゾンビ化ウイルスは数時間で発症するか、将軍様がゾンビと化す前に治療薬を届けるのは不可能だった。治療薬は咬まれてから意識を失ってゾンビ化する前に打たなければならぬ、ゾンビになってから打っても意味がないのだ。

そして絶望した将軍様は、最悪の命令を下した。

すなわち、世界中へ向けて弾道ミサイルを発射する命令である。

将軍様は自分が死ぬくらいなら、世界も道連れにしてしまおうと考えたのだ。何と言う自己中心的発想だろうか。

ミサイルを担当する部隊もゾンビのせいでかなり人員を減らしていたが、生き残っていた部隊は直ちにその命令に従った。中には良心からミサイルの発射を中止した部隊もあったが、将軍様の命令通りミサイルは発射された。

整備不良や燃料の劣化で発射に失敗したり、発射しても空中で爆散するミサイルが多かったが、それでも十数発が世界中に向けて発射された。それを確認したアメリカやロシアは、直ちに反撃を決定した。

アメリカ軍は日本海の戦略原潜から一水中発射型弾道ミサイル《SLBM》を、ロシアは短距離弾道ミサイルを発射した。発射された弾道ミサイルは全部が命中した。その中に核弾道を装備したものがあつたのはわからない。

アメリカとロシアは手を組み、ついでに世界一の人口を誇る某国を叩くことにした。すでにその国の政府は崩壊寸前であり、各地で軍閥が勢力争いをしていていつ弾道ミサイルが自国に向けて発射されるかわからなかったからだ。つまり、やられる前にやっつけてしまえという事である。

だがアメリカとロシアがミサイルを発射する前に、その国も世界中

へ弾道ミサイルを発射した。將軍様の国がミサイルの集中攻撃で消滅したのを見て、自国も攻撃されるのではと考えて先手を打ったのだ。

その結果、世界中に弾道ミサイルが降り注ぐことになった。俺達が見た核爆発も、共産党独裁のその国から発射された弾道ミサイルによるものだった。

さらに共産党独裁の某国は、將軍様の国や半島の南側の国と手を組んで周辺国　主に日本　に侵攻することにした。

半島の南の国では、ゾンビによる被害がとんでもないことになっていた。自国で発生したものに加え、非武装地帯を越えてやって来た難民の中に保菌者がいたり、その難民を追って南側に渡ってくるゾンビが多数いたからだ。

航空便や船舶は訪れなくなった南側の国は、たちまち国中にゾンビが溢れるようになった。日本は島国なので被害が大きい本州を物理的に封鎖すれば被害の拡大を抑えられ、さらにゾンビの少ない北海道や九州、四国、沖縄を拠点に活動を続けられた。だがその国は北からゾンビが襲来し続け、周囲には海しかなかった。逃げ出す場所はなかったのだ。

難民はボートで日本へ渡ろうとしたが、難民と共にゾンビが渡ってくるのを恐れた海上保安庁と海上自衛隊によって追い返され、撃沈されていた。どこにも逃げ場はなく、ゾンビだけが増えていく。

だからその三国は、日本への侵攻を決めたのだ。將軍様の国はゾンビだらけで米露の反撃で汚染され、共産党独裁の国は世界一の人口が災いして世界一ゾンビを抱えていた。南側の国は逃げ場はない。

だから祖国を捨て、まだゾンビの被害が少ない日本への移住を決意したのだ。日本はワクチンと治療薬で周辺国よりも被害が抑えられていたので、日本人を殺して代わりに自分達が住むという魂胆だった。元々その三国は反日感情をむき出しにしているような国家なので、「日本人を殺せ！ 我らに新天地を！」とスローガンを掲げて日本への侵攻を開始した。

三国は徴兵で戦力を増やし、なけなしの燃料を使った艦船で兵士達を日本へ送り出した。日本は反撃したが、第三次世界大戦の勃発による混乱で効果的な対応が出来ず、三国の軍隊の日本上陸を許してしまった。

で、なんで俺らが自衛隊にいるかというと、簡単に言えば大八木三佐のせいでもあった。

核攻撃後に避難所に戻った俺達は、「お前ら自衛隊員になれ。でなきゃ今まで提供した武器弾薬を返せ」と大八木三佐に半ば脅迫を受けた。各地の避難所では戦力増強のため自衛官の募集を行っており、あれよあれよという間に俺達は自衛官に仕立てあげられてしまった。俺達三人が軍用銃を持ち、戦い慣れていて即戦力と見なされていたからかもしれない。

あ、ありのまま、今まで起こった事を話すぜ！ 俺は高校生だったはずが、気がついたらいつの間にか自衛官になっていた。

断じて徴兵とかそんなもんじゃねえ、もっとおかしなもの片鱗を味わったぜ……。

まあ一言で話すならこんな感じだろう。

実は、ゾンビ発生当初は自衛隊はあまり被害を受けていなかった。これはゾンビ発生以前にアメリカの疾病対策センターCDCが発表した、「ゾンビが発生した時の対処法」という物を、陸上自衛隊のお偉い方の一人が偶然目にしたからだ。

半ばCDCのおふざけのような企画だったが、中身は充実していた。ゾンビが出たら人が多く集まる場所には近づかない、食料や水などをたくさん用意する、頑丈な家に隠れるなどなど。

元々その陸自幹部はゾンビ映画好きで、CDCの発表を見て「自衛隊にもゾンビへの対処法が必要なんじゃないか」と考えた。かなりの階級だった彼は、部下達にゾンビが発生した時の対処法を考えるよう命じた。

それは現実には起きる可能性が高いバイオテロの対策も兼ねての命令だったが、部下達は知恵を出し合っただろうすればゾンビによる被害拡大を防げるか議論した。ゾンビ映画のDVDが回し見され、議論は白熱した。

いつものように真面目な命令じゃなかったのも原因の一つだろう、部下達の纏めた対処法は、かなり現実的だった。

ゾンビが発生したら、早く駐屯地を封鎖する。内部での感染拡大を抑えるため、避難民を受け入れても身体検査の後一日程度隔離して様子を見る。

仮に駐屯地外に出る時は、戦車や装甲車など重く頑丈な車両を先頭に立てて移動する。もしゾンビが進路上に大量にいても、轢きながら前進出来るからだ。仮に周囲を取り囲まれても装甲車内部にゾンビは手を出せないから、乗員は味方が来るまで車内で待機する。行動する時は最低二人一組です。暗く狭い場所へ入る時は、どこからゾンビが襲ってくるかわからないので上下左右を警戒する。

仮に逃げる時は、狭い場所には逃げない。ゾンビに取り囲まれないよう、見晴らしのいい場所に移動する。

駐屯地内に侵入された時は、高い建物に避難してヘリコプターの救助を待つ。階段にはバリケードを築き、さらに銃を使えばゾンビは階上には入って来れない。

などという対処法が纏められた。

この幹部がやっている事の噂は他部隊にも知られ、やがてあちこちの部隊でゾンビ対処法が策定された。陸自だけでなく、海自や空自も対処法を考えるようになった。それを活かしてバイオテロへの対処法が作れるし、何より隊員達の息抜きになるからだ。

作った当人達も、まさか実際にゾンビ対処マニュアルを使用することになるとは思っていなかっただろう。とにかく自衛隊はそのマニュアルに従って駐屯地を封鎖し、初期の被害拡大を抑えていた。

在日米軍は元々「不審者が入ろうとしたら撃つ」というスタイルだったので、警告しても基地に無理矢理入ろうとする不審人物達を撃った。しかし頭を撃ち抜かない限り死なない彼らを見て、ただならぬないことが起きていると米軍も気づいた。

これが未知の空気感染する疫病だったら、職業を問わずに感染して自衛隊も早々に機能を停止していただろう。だが幸いなことにゾンビ化ウイルスは接触感染タイプであり、さらにウイルスは「ゾンビ」という目に見える形で存在していたので、逃げ切るか戦えば子供だろうと大人だろうと感染せずに済んだ。銃を持っている自衛隊員は、最も死にくい職種の間人だった。警察官は当初ゾンビが発生しているとは知らずに事件に対応していたので、死者がかなり出ていた。

だが後に態勢を立て直すことに成功した。

不意を突かれての犠牲などはあったものの、自衛隊は大半が行動が可能だった。それでもゾンビの掃討が進んでいなかったのは、自衛隊員の数が少なかったからだ。

日本全土を守るのに、陸上自衛隊だけでも20万人は必要と言われていた。だが定員はそれよりも少なく、充足率はもつと少ない。

しかも掃討すべきゾンビの数が多すぎた。世界で一番兵士が多い国でさえ200万人なのに、ゾンビの数はそれよりも多いのだ。これで全てを掃討出来る方がおかしい。

当然自衛隊は隊員の募集を行ったが、避難民から新たに自衛隊員になった者は少なかった。大半の避難民は「なんとかしてくれ」と座り込むばかりで、自分から事態を解決しようとは思ってすらいなかったのだ。

今まで戦ったことすらない人々にとってそれは仕方がないことだろう。だが世界は変わってしまった。安全とは警察や自衛隊が保障してくれる物ではなく、自ら勝ち取る物となったのだ。

大規模な自衛隊員の脱走はなかった。銃を持って脱走し強盗団と化した隊員達もいたが、そういった連中は早々の内に危険と判断され掃討された。銃を持ったまま脱走した隊員達は、ただでさえゾンビ対策で精一杯なのにこれ以上の治安が悪化したら困る警察や自衛隊によってさっさと掃討された。

多くの隊員にとって、脱走にメリットはなかった。銃を持っていても弾が補給出来なければ自分達が好き放題することは出来ない。食料や燃料の問題もある。

だが自衛隊に所属している限りは、生活が保障されている。自衛隊

上層部も隊員達の士気を維持するために食料や水の補給を強化し、隊員達が任務を放棄しないように心を配った。だが第三次世界大戦が始まると、隊員の不足は深刻な問題となった。募集年齢は16歳にまで引き下げられ、親しい者を失ったり守るべき家族がいる者が次々入隊した。自衛隊員になれば自分や家族に食料などが多めに配給されるのもメリットのひとつだった。

もしかしたら、大八木三佐は俺達に自衛隊に加わって欲しくなかったのかも知れない。

俺達に入隊するよう半ば脅迫した時だって、俺達に猶予を与えてくれた。すぐにも人手が欲しい状況なのに、俺達には行動する時間があった。武器やライトバンだって取り上げられなかった。逃げ出そうと思えば、いつでも逃げ出せる状況だったのだ。

大八木三佐は俺達がその間に逃げるように仕向けたのかも知れない。この先確実に自衛隊は外国軍と戦闘を行うことになる。今までみたいに自衛隊と一緒にいたら、戦闘に巻き込まれるかも知れない。彼はそれを避けるためにわざと俺達を脅迫して、俺達が自分から自衛隊から離れるのを望んだのだろう。

大八木三佐がどう思っていたのか俺にはわからない。だが俺達は、結局は自衛隊に入る道を選んだ。

俊夫と明が何を考えて入隊したのか、俺は聞かなかった。俺は二人に入隊しようと言ったことはないし、俺も二人から誘われたことはなかった。俺達はそれぞれ自らの意思で、自衛隊に入って戦う道を選んだ。

俺が入隊を決めたのは、絶望からだった。

俺は死んだ皆と、世界を救うと約束した。だが第三次世界大戦が勃発した今、その目標は潰えた。今後人類が衰退していくことはあっても、復興することはない。ゾンビという目の前の危機に手を取り合って戦う道よりも、人類はお互いに大量破壊兵器で殺しあう道を選んだ。どこまでも愚かな人類なんて、救われることはない。

その絶望感が俺を包んでいた。人類の未来のために、ゾンビから世界を救うために死んだ俺の友人達に、俺は顔向け出来ない。彼らも世界を救えなかった俺達を許さないだろう。

だったら、もうどうなってもいい。死なないから生きる。死ねばこんな地獄から抜け出して楽になれるのかもしれないが、俺は生憎と無宗教だったので、死後の救いなんてものを信じていなかった。それに俺は死後の世界というものを知らない。知らないという事はもっとも恐ろしい事である。

だからその恐ろしいものから逃げるために、死なないために戦う。理由なんてそんなものだ。自衛隊員となって戦えば少しは誰かの役に立てるかもしれないという考えも頭の片隅にあったが、俺は逃げるために戦う事を決めたのだ。

他の二人も、皆大切な人を亡くしていた。俺達三人は家族も友人も亡くし、そのような境遇のためか自然に集まったようなものだった。だから皆同じような考えを持っていた。世界を救うという考えを。それが死んだ友人達に報いる唯一の手段だと感じていた。だが大戦の勃発で、それは不可能になった。

俺達は、英雄ヒーローになれなかったのだ。

入隊を決めた俺達は、早速その事を大八木三佐に報告に行った。彼は複雑な表情を浮かべていたが、とりあえず足りない戦力を補う事を優先したのか、何も言わず俺達を自衛隊に迎えた。

そして俺達は迷彩服や防弾チョッキ、ヘルメットといった戦闘装具と共に、小型のガイガーカウンターと予備自衛官用の64式小銃を受領した。そして初めて与えられた任務は、敵軍の侵攻ルート上にある大きな避難所から民間人を脱出させる事だった。

結論から言えば、その作戦は成功した。ただしあまりにも避難民の数が多くてヘリコプターやトラックが足りず、徒歩で脱出せざるを得ない避難民が多数いた。

その避難所があるのは関西地方の中規模の都市だった。「終わりの日」(ゾンビが発生し、世界が崩壊した日を誰かがこう呼び始めた)に発生したゾンビの数は少なく治安も良好であり、自然に避難民が集まって大きな避難所が出来ていた。だがゾンビが少ないという点を敵軍に狙われ、街を確保するために敵の部隊が向かっていた。

幸い戦闘が始まる前に避難民は街から離れたが、徒歩なので移動速度は遅い。避難民の護衛のためにかなりの隊員を割かねばならず、避難民に敵軍が追いつくのを阻止に二個分隊16名の隊員がゲリラ戦のために街に残された。そして俺達三人も、その16人の中に含まれていた。

それが三週間前。16人の隊員はそれぞれ小グループに分かれ、ゲリラ戦を開始した。

突如現れ損害を与えて去っていく俺達に、敵軍の侵攻スピードは自然と遅くなった。街は敵に占領されたが、敵は俺達を掃討する事を優先して街を脱出した避難民達を追撃する事はなかった。

街を占領した敵の規模は約一個中隊200人。俺達はベトコンかブレデター並に嫌がらせのようなゲリラ戦を行ったが、やがて戦死する隊員が出始めた。

最初の一週間を過ぎた頃には、ゲリラ部隊は俺達三人しか残っていなかった。死んだ隊員から使えそうな装備を可能な限り回収し、半壊した高級マンションを拠点に定めた俺達は、「狩り」と称してゲリラ戦を継続した。

分隊など小規模で行動している敵部隊を狙って、俺の狙撃を中心に攻撃を仕掛ける。身動きが取れなくなったところを俊夫と明が接近して仕留め、武器弾薬などの装備を回収してマンションに戻る。武器弾薬や物資はいくらあっても困る事はない。この先補給できる機会は少ないからだ。

狙撃地点は常に移動していたので、敵に発見されることはなかった。俺達はこの二週間で実に40人以上を仕留め、そして今日に至る。

朝になり、再び監視役を交代する時間になった。俺は毛布の中から這い出し、9mm拳銃を持ってトラックから下りる。俊夫はまだトラックの荷台で寝息を立てていた。

三人でこのマンションを守るのは困難だったが、トラップを利用してそれを補っていた。マンションを取り囲むように仕掛けられたト

ラップに敵が引つ掛かったら、すぐにこのマンションを捨ててトラックに乗って移動する。一度拠点がばれてしまったら、三人で守り通すのは難しい。

トラップには手榴弾やクレイモア指向性散弾を使用している。ただしそれらのトラップは、人間の頭がある高さにセットされていた。これは仮にゾンビが街に侵入したとしても、確実に仕留めるためだった。普通の地雷やトラップは人間の足の位置に仕掛けられているが、それでは頭を破壊されない限り動き続けるゾンビを仕留める事は出来ない。

地雷は人間の足を吹き飛ばす威力があるが、頭を破壊して即死させる程の威力はあまりない。兵士は足をやられた場合戦線離脱するしかないが、痛覚がないゾンビは足を吹き飛ばされようが胴体がポロポロになろうが、人間を食おうと地を這ってくる。負傷しても仲間が後送して戦力を減らすこともしない。対人戦闘のセオリーが通用しないのだ。

しかも足を吹き飛ばされたゾンビは、地を這って姿が見えにくくなり余計に危険な存在となる。放置されて伸び放題となった草むらにも潜んでいたら、接近されるまで気づけない。ゾンビそのものが「地雷」となる。

足を吹っ飛ばせば移動速度は落ちるが、デメリットの方が多い。なのでゾンビに対して罠を仕掛けるには、一発で頭を潰せるような位置に仕掛けなければならぬ。

爆発音はしていないので、この付近にはゾンビも敵兵もないという事だ。ゾンビは元々この近くにはいないが、人間の臭いに引き寄せられていつ街に侵入してくるかわからない。

エントランスからマンションの中に入り非常階段を上る。まだ薄暗い空を見て、今日も曇りだなと何となく思った。

監視所のある10階に着くころには、灰混じりの灰色の雪が降り始めた。ただでさえずっと曇りが続いているのに、余計に寒くなる。

「核の冬」という現象がある。地球規模で核戦争が起きた際、核爆発で舞い上がった塵や煤が地球全体の上空を取り巻き、太陽光線を遮った結果地球規模で寒冷化が起きてしまうという現象である。この大戦でも核兵器が使用されたので、当然ながら核の冬が訪れていた。

この大戦はゾンビに支配された国からの移住を目的として勃発したので、日本に撃ち込まれた大量破壊兵器のうち化学兵器が大量に使用されていた。核兵器は移住先をまるごと消し去った挙げ句放射能汚染で住む事が出来なくなるし、生物兵器はコントロールが難しい。なので人間だけを殺せる化学兵器が主に使用されていた。

しかし、当然ながら核兵器も使用されていた。將軍様の国がぶつ放した弾道ミサイルや、アメリカやロシアが報復のために撃ち込んだミサイルにも核弾頭が搭載されていた。核兵器が使用された事によって大地や大気は汚染され、放射線を発する大量の灰や塵が舞い上げられた。

さらにフォールアウトという現象により、直接核攻撃を受けなかった地域も放射能汚染されるようになった。フォールアウトとは核爆発で舞い上がった放射性生成物　いわゆる死の灰である　が地上に降下してくることである。死の灰は気流に乗って広範囲に拡散するから、度合いは異なるとはいえかなりの地域が汚染されているのは間違いない。

今や自衛隊員の装備には小型のガイガーカウンターが加わっていた。一応この街は即座に人体に影響があるほど放射能汚染はされていないが、それでも気は抜けない。死の灰は雨や雪に混じってずっと地上に降下し続けているからだ。

この一ヶ月、太陽を見たのは数えるくらいしかない。季節は冬であり、その上太陽光が雲や放射線を帯びた塵や灰に遮られて日照時間が短く、例年よりも気温はずっと低い。

専門家が言うには核の冬は短くて1年、長くても10年以内に収まるだろうとの事だった。ただし、今後核兵器が使用されなければとの注釈付きであるが。

そんな状況でも、俺達はまだ人間同士の殺し合いを続けている。俺達は絶望から、敵兵達は国民を移住させるために。

敵兵達はもう命令を下すべき上層部も政府も消滅している事を知らずに戦い続けているのだろう。本国の敵軍の上層部はアメリカや侵攻を受けたロシアによるミサイル攻撃ですでに壊滅状態に陥っており、もう統制のとれた作戦は取れていない。日本への軍需物資の輸送は続いているが、必要な部隊に必要な物資が行き渡っていることはない。

彼らが日本に侵攻した理由の一つである移住させる国民だって、ゾンビやミサイル攻撃でほとんどで死亡するか、ゾンビとなって甦っている。もはや彼らの本国は、歩く死者しかないのかもしれない。だがそれでも、彼らは戦っている。そして俺らも彼らと戦う。殺し、殺される。

10階の、壁に大穴が開いた部屋のドアをノックする。もちろん敵に誤認されないよう、決められた回数と決められたペースでノックすることを忘れない。

すぐに中から明が顔を出した。「交代だ」と言うと明は頷き、スコ

ーブ搭載の64式小銃を俺に返した。そして階段を下りて地下駐車場に向かう。

部屋の中ではラインが俺を待っていた。下から持ってきたドッグフードの袋を開け、部屋の食器棚にあった高級ブランドメーカーの皿に盛る。この部屋の住人は、まさかブランドの皿が犬の餌皿にされるとは思っていなかっただろう。ただし、本人が生きていればだが俺も戦闘糧食の鳥飯のパックを開け、端からかぶりついた。あらかじめ下で温めておいたので、がちがちに固まっていることはなかった。

パック飯を食い終わったころ、突然ラインが耳をピンと立て、虚空に視線を巡らせた。ラインがこういうことをしている時は、敵かゾンビを察知した時だ。

ラインが俺達と一緒にいるのは、犬がゾンビの臭いを嗅ぎ付けて吠えて警告してくれるからだ。犬の嗅覚は並外れており、目視出来ない距離からでもゾンビを察知することができる。

それを知った自衛隊上層部が犬を部隊に同行させたところ、ゾンビによる犠牲者が格段に減ったのだという。これ以降、一個小隊につき最低二頭の割合で警備犬　　いわゆる軍用犬である　　が配置されるようになった。

だが隊員同様警備犬も不足しており、ラインが臨時の警備犬に任命されて俺達と同行することになったのだ。ラインはシェパードであり、シェパードは昔から軍用犬や警察犬と使役されてきたのでうつつつけの犬だった。さらにラインは人間の命令を聞き（俺を除く）、ゾンビや無法者との戦闘も経験していたのでかなり役に立つからだ。こうしてラインは俺達と共に、三週間この街で敵兵にゲリラ戦を仕掛けていく。ラインは敵兵の臭いも察知して俺に知らせしてくれるから、拠点であるこのマンションを守るのに一役買っている。

俺は戦闘糧食の空のパックを投げ捨て、壁に開いた大穴の側まで寄った。ラインも穴から外に顔を出し、西の方向を向いて唸っている。俺はラインが見ている方向を、64式小銃に取り付けられたスコップで覗き込んだ。

俊夫と明は最初に受領した64式小銃から死んだ隊員から回収した89式小銃やミニミニ軽機関銃に持ち替えているが、俺は相変わらず64式を使用している。64式は89式に比べて重いし色々問題があるが、大口径弾を使用していて破壊力が大きく連射時のコントロールも可能だからだ。

それに俺は狙撃手なので、長射程の銃を使う必要がある。64式はボルトアクション式の小銃に比べて威力も精度も劣るが、連射出来る分市街地での戦闘は有利である。障害物の多い市街地では敵を見つけ次第撃たなければならず、一タスコップから目を離してボルトハンドルを操作しなければならぬボルトアクション式では間に合わないのだ。

機関部上部に取り付けられたマウントレールに乗っているドイツ製スコップを覗く。ラインが睨んでいる方向を見るが、激しく降る灰色の雪に遮られて何も見えない。

次の瞬間、銃声が響いた。条件反射でとっさに姿勢を低くし、状況を伺う。

銃声は遠くから響いてくる。連続した銃声がいくつも、あちこちの地点で鳴っている。

どうやら俺達を見つけて撃ってきた訳ではないようだ。もし見つけたらこっさり近寄ってから襲撃してくるだろうし（一応マンシヨンの周囲には地雷が仕掛けてあるが）、そもそも銃声が鳴っている地点はどう考えても銃の射程外の距離だ。こちらの弾丸が届かないと

いうことは、向こうの弾丸もこちらに届かない。

『こちら横田。岩崎、今の銃声はなんだ？』

地下駐車場にいる俊夫にも銃声は聞こえたようだ。俺は「少し待ってくれ」と言い、部屋の片隅に置いてあった背囊の中から赤外線暗視機能付の双眼鏡を取り出した。これは一年前ほど、俺が弾薬補給のために立ち寄った銃砲店で手に入れたものだった。

銃や弾薬は根こそぎ持ち出されていたが、これだけは残されていた。狩猟の際に使用するもので、赤外線暗視装置で遠くの獲物もばつちり目視出来る優れ物である。それゆえ価格も高いが、俺は100パーセントオフの値段で購入出来た。

双眼鏡の赤外線暗視機能を作動させ、銃声のする方向を見る。風が西から東に吹いており、それで遠くの銃声が風に乗って聞こえるのだ。

双眼鏡の丸い視界が黒くなり、ぼつりぼつりと白い粒のようなものが映っている。赤外線を発する物体、つまり人間か動物だ。

倍率を上げ、その物体がはっきり見えるようになった。その白い影は人型をしており、どうみても人間だ。

二、三人の小グループで移動しているその人影は、何かから逃げようように走っていた。時々後ろを振り向き、その手元から白い影が瞬く。しばらくして銃声が風に乗って聞こえてきた。どうやら逃げながら銃を発砲しているらしい。

その人影はどう見ても兵士だ。それも多分敵。味方が街の奪回作戦に出たなら俺達に知らせてくるはずだし、そもそもこの街には奪回する程の価値もないはずだ。それに自衛隊は大規模な作戦行動出来るほど、戦力に余裕があるわけでもない。

奇妙な事に、敵兵が撃っているはずの相手の姿が見えない。赤外線

暗視装置は降雪中でも使えるから、熱を発する動物なら確実に補足出来る。

兵士達が撃っている相手は、熱を発していない？

その時、一瞬だけ吹雪が止まった。とつさに赤外線暗視機能をオフにし、通常モードに切り替える。

双眼鏡の丸い視界の中に、突撃銃を発砲する敵兵の姿が見えた。そして彼らの銃口の先には、両手を前に突き出してふらふらと兵士達に向かって来る人影がいくつもある。

どうみてもゾンビです。本当にありがとうございます。

俺は無線機を手に取り、すぐに俊夫に連絡を取る。

「ゾンビだ。敵兵がゾンビと戦っている」

『ついにここまで来たか……。距離は？』

「約1000。数は数十体」

『よし、ならこっちまで来る事はないな。すぐに敵が片付けてくれ

るだろっ』

俊夫はそう言って通信を終えた。その時急に風の向きが変わった。

次の瞬間、急にラインが勢いよく吠え始めた。まるで何かに怯えているかのよう。

態度が変わる。なんでいきなりラインは吠え始めたんだ？

すると風の吹く音に混ざって、何か聞こえ始めた。ざくっ、ざくっ。と積もった雪を踏み締める音と、唸り声が俺の耳に届く。

嫌な予感しかしなかった。俺は部屋から飛び出し、階段の踊り場から東の方向を見る。足元のラインがより吠える。雪で灰色に染まった地面を、マンションに向けて何かが近づいて来る。64式小銃のスコープを覗かなくても、それが何かすぐにわかった。

「俊夫、明、すぐにここを離れるぞ！！ゾンビが接近中だ！！」

そう叫び、64式小銃を構える。スコープを覗き、近づきつつある人影の頭に照準の十字線を合わせる。

真冬なのに半袖や薄着をしているその人影の身体には、吹き付けた雪があちこちに張り付いている。肌は茶色だ。どう見てもゾンビだった。

『ゾンビだと？　なんで今まで気づかなかったんだ！？』

「吹雪で臭いが拡散してたんだよ！　ゾンビが接近してくる方向は風下だったから、ラインが臭いに気づかなかつたんだ！！」
『クソッ！　明、すぐにここを出るぞ！　武も早く戻って来い！！』

その言葉を聞くより前に俺は部屋に戻って背囊を担ぎ、すぐさま廊下に戻って階段を駆け降り始めた。俺より先をラインが走り、雪で滑らないよう気をつけて階段を降りていく。毎度毎度思うのだが、ラインは御主人様^俺に対して冷たい。俺より先に逃げてるし。

その内ゾンビがマンション周囲に張り巡らせてあるトラップに引っ掛かり始めたのか、爆発音があちこちから聞こえるようになった。その爆発音は徐々に近づいて来る。

俺が一階に到達した頃には、ゾンビは既にマンションから数十メートルの距離にまで接近していた。道路を埋め尽くすように近づいて来るゾンビを見て、俺はデジャブを感じた。

64式の切替レバーを引っ張って回し、連発のレに合わせる。スコープの十字線を手近なゾンビに合わせ、引き金を引く。
ゾンビ達の頭が弾け、倒れたゾンビに後続が躓いてゾンビ達の動きが遅くなる。それを見た俺は銃撃を止め、地下駐車場に向かった。その時ちょうど、スロープを上がって73式大型トラックが姿を現した。このトラックはゲリラ部隊の撤退用に残されていた物だが、もはや乗るのは俺達三人しか残っていない。

「乗れ！！」

荷台の明が後部のあおりを下ろし、同時に89式を連射して近づきつつあるゾンビ達を撃ち倒す。まずラインを抱えて荷台に放り込み、続いて俺も荷台に手を掛けて飛び乗った。

「撤収命令は出たのか!？」

「ああ! 十分時間を稼いだってさ!!」

「なら、もうここに留まっている理由は無いな!!」

俊夫の運転する73式は徐々に加速していく。だが降り積もった雪や散乱する瓦礫のせいで、あまりスピードが出せないようだ。

当然、ゾンビ達も近づいて来る。次第に走るゾンビも現れ、俺達を折って来る。

走るゾンビの発生率は1000体に一体と言われていたが、最近ではより発生の確率が上がってきた。今や数十体に一体の確率で出現しているので、当然俺達を追って来る走るゾンビの数も多い。

「来るな死人どもがああああっ!!」

明がそう叫び、近づいて来るゾンビ達に89式を連射する。俺は荷台に並べられていた敵から回収した武器の中からM60機関銃を手取る。いつでも使えるように、あらかじめ弾は装填されていた。

あおりの上に銃身を載せ、ゾンビ達へ向けて発砲する。銃口を左右に振って、津波のように押し寄せてくるゾンビ達に万遍なく銃弾を浴びせる。

ゾンビ達の身体の一部が次々弾け、頭を撃ち抜かれたやつは活動を停止して地面に倒れ込む。

走るゾンビの一体が、荷台の淵に手を掛けた。すかさず明がその腕に銃弾を浴びせるが、三発撃ったところで弾倉内の弾が尽きた。

明は89式の銃床で荷台を掴むゾンビの腕を殴りつけた。すでに数発銃弾を食らった腕は脆くなっており、銃床の一撃でゾンビの腕が撃たれた部分からもげた。ばきりという音と共に腕を失ったゾンビがバランスを崩して倒れ、荷台にはもげた腕から先が残された。

『スピード上げるぞ、しっかり掴まれ!!』

運転席の俊夫が叫び、トラックが加速する。見る見る内に、ゾンビ達との距離が離れていく。

第12話 2013年1月23日(後書き)

次回も過去回想編の予定です。ちなみにCDCのゾンビ対策のマニュアル云々については実話です。詳しくはググって下さい。

第13話 2013年1月26日

2013年 1月 26日

ゾンビの襲来によって街を離れた俺達はひたすら東に向かい、愛知県に到達した。「終わりの日」以前なら車で数時間の距離だったのだろうが、今や放置車で道は塞がれ保守点検されていない道が崖崩れを起こしたりしてひたすら迂回するしかなかったのだ。中には迂回した先も塞がれていて、仕方なく引き返した事もあった。

俺達が離れた後、おそらく敵はあの街を占領しただろう。だがゾンビが多数押し寄せた上に灰混じりの雪に覆われたあの街に、戦略的な価値があるとは思えない。敵もゾンビの襲撃で被害を出し、進攻速度が落ちていてくれればいいが。

今俺達は、山沿いの道を進んでいた。東名阪自動車道を使えば早く東に迎えるのだが、高速道路など道幅が広く遠くまで繋がっている道路はほとんどが放置車や事故車で塞がっている。ゾンビの発生でパニックに陥った人々が都市を脱出し、より遠くまで逃げようとした結果だった。

そのため俺達はひたすら普通の道路を走っていた。普通の道は高速道路と比べて塞がっている道は少ないが、俺達の乗る73式大型トラックで通れるかわからない。しかもゾンビパニックがある程度収まった時に（ほんの一時だった。ほんの）道路を復旧させる際、優先されたのは早く人や物資を送れる高速道路などだった。なのでこ

の一年半以上、保守点検すらされていない道が多い。日もだいたい傾いてきている。冬で日は短くなり、さらに核爆発で舞い上がった粉塵が太陽光を遮っているので、以前よりも昼間が短く感じる。

「この先に夜営出来そうな場所はあるか？」

運転席でハンドルを握る俊夫が尋ねてきたので、俺はこの辺り一帯が書き込まれた地図を広げた。ちなみに俺が座っているのは助手席であり、明はラインと共に荷台にいる。

揺れる運転席の中で地図を広げ、今自分達がいる場所と進行方向を確認する。GPSなんて便利な物はそれを維持管理する人間がいなくなるとつくに停止しており、頼りになるのは略奪されたコンビニに残っていたこの地図とコンパスだけだ。

今走っている道を目で追う。この先に東名高速道に繋がるバイパス道路があるが、多分そっちは放置車で塞がっているだろう。とすると、ひたすら直進するしかない。

道をまっすぐ見ていくと、この先しばらく走ったところにガソリンスタンドがあると表記されていた。ガソリンスタンドはとつくの昔にガソリンが使い果たされているだろうが、事務所などは無事だろう。そこを寝床に出来るかもしれない。核の冬で日照時間が短く地面が温まっていない今、トラックの荷台で寝るには寒すぎる。

「ここから1キロ先にガソリンスタンドがある。少し早い休みにしよう」

「そうだな。じゃあ明に伝えてくれ」

無線機を取り出し、荷台の明にこの先のガソリンスタンドで夜営する事を知らせる。運転席の後部には小さな窓があるが、今は幌で荷台と遮られているので直接のやり取りが出来ないのだ。

明もガソリンスタンドで夜営することに賛成し、早速行き先が決まった。といつてもこの先直進していただけなので、道を確認する必要なんてない。

そのまままっすぐ進み、ガソリンスタンドから200メートル程手前でトラックを停めた。安全が確認されていない場所にそのまま乗りつけるのはアホである。ゾンビや敵兵が隠れているかもしれないので、誰か一人が先行して偵察することにしたのだ。外に出て、ジャンケンで誰が偵察に行くのかを決める。結果は俊夫と明がパーを出し、グーを出した俺の負けとなった。

「外はクソ寒いのに……。じゃあお前ら、10分以内に俺が戻って来なかったり、銃声がしたらすぐ来てくれよ」

二人にそう言つて、俺はラインを伴つてガソリンスタンドへと歩き始めた。ラインは鼻が利くので、ゾンビや敵兵がいたらすぐ俺に知らせしてくれる。

東西に走る道路の北側には山、南側には田園だったらしき平坦な土地が広がっていた。「らしき」というのは、地面が灰混じりの雪で覆われて何も見えないからだ。

核の冬やフォールアウトによつて、農業は大打撃を受けるだろう。日照時間は激減したし、屋外で育てている農作物は雨や雪に混ざつて降ってくる死の灰で放射能汚染されている。

今や農作物は工場で作る物になっている。「終わりの日」以前に植物工場というのが注目されていたが、今は食べられる農作物の大半が工場で作られる物になっている。地下や建物内部なら外より放射能で汚染されないし、電力が続く限りいくらでも生産出来る。太陽

光に代わって照明などを使用しているから気候に左右される事もなし、24時間照明を点灯することによってより早く栽培することも可能だ。

そういえば、ここ一ヶ月間生鮮食品を食べたことがない。食べているのはご飯に保存食品だけだ。

積もった雪に足跡を残しつつ、64式小銃の銃口を地面に向けながらガソリンスタンドに進んでいく。ガソリンスタンドに近づくにつれ、何かが気化するような刺激臭が強くなっていくのに気づいた。どうやらシンナーかペンキのような塗料がぶちまけられているらしい。ゾンビは臭いで人間を察知して襲うので、その対策として塗料や塩素系の洗剤を撒いてゾンビの嗅覚を潰すという手段があちこちで取られている。ゾンビがペンキを撒くはずがないので、あのガソリンスタンドには確実に人間がいる。生きてるか死んでいるかは俺の知るところではないが。

道路の先には二つの建物があった。南側に農機具を納めているらしき頑丈そうな倉庫と、北側に目標のガソリンスタンドだ。どちらも周囲に人影はない。

それにしても酷い臭いだ。こんなに石油系の塗料を撒いていたら、臭いで脳みそが溶けるんじゃないかという程の臭いだった。中にラリってる生存者でもいるのだろうか？

100メートル程の距離まで近づいたところで俺は積もった雪の上に伏せ、64式小銃のスコップを覗いてガソリンスタンドの様子を確かめた。敵兵やゾンビがいたら問答無用で射殺する。民間人がいたら、そいつが安全そうな奴か調べる。

ガソリンスタンドに建物の一階にはコンビニがあった。二階は事務所になっているようだ。入口や窓はカーテンのようなもので塞がれ

ていて、内部の様子を伺う事は出来ない。一見すると無人のようだが、油断は出来ない。

「行くぞ、ライン」

そう言って立ち上がり、再びガソリンスタンドへ歩いていく。ラインはシンナー臭がきついのか、顔をしかめているように見えた。犬は人間よりも鼻が利く分、酷い臭いにも敏感なのだろう。

ガソリンスタンドの周囲に壁はない。仮に隣接する建物の中に敵兵が潜んでいたらとつくに俺は撃たれているだろうから、建物の中に敵兵はいないだろう。ゾンビがいる可能性は捨て切れないが、このシンナー臭で俺の臭いを嗅ぎ付けていないのかもしれない。走るゾンビは臭いではなく目で人間を見つけるので、いたらとつくに俺を襲っている。なので走るゾンビもパスだ。

ガソリンスタンドの真正面に来た俺は、一瞬何かが給油装置の陰で動いたのを見た。ラインが吠え、64式を構える。

「誰だ!?!」

そう怒鳴ると、予想外の人物が給油装置の陰から姿を現した。

怯えたような表情で俺を見ながら給油装置の陰から出て来たのは、10歳くらいの少女だった。フード付きの厚手のジャンパーを来た少女は俺を見ると、いきなり建物の方へ駆け出した。

「あつ、おい、待ってくれ!」

俺はそう叫び、少女を追って駆け出した。少女を追い掛けたのは、別に俺が幼女が好きって訳だからじゃないよ。俺はロリコンじゃないな

いからぬ。

少女は隣接する建物の一階のコンビニのドアを開けると、中へ飛び込んだ。少女が開きっ放しにしたドアから、光が届かず暗いコンビニ内の床が見えた。

あの少女が一人でこのコンビニで生き延びていたとは考えられない、きっと他にも生存者がいるのだろう。そう考えた俺は、大声で叫んだ。

「陸上自衛隊です！ 誰かいるのなら返事をしてください！！」

大抵の場合、この言葉で隠れている生存者は顔を出す。そして自衛官の姿を確認すると駆け寄ってくる。自衛隊が助けに来たと思うからだ。

だが俺が叫んでも、建物の窓が開いて誰かが顔を出すことはなかった。俺を警戒しているのだろうか？

どちらにしても俊夫と明には報告しておく。生存者を見つけた以上、放置しておく訳にはいかない。

「こちら岩崎、生存者がいた。ガソリンスタンドに隣接する建物の中に10歳くらいの少女が入って行った」

『生存者だと？ 何人くらいいる？』

「見かけたのは少女一人だ。多分他にもいるだろうが、呼びかけても誰も出てこない」

『わかった。気をつけて調べる。3分たって連絡がなかったらそっちに向かう』

俺は通信を終え、防弾チョッキの胸元に取り付けられたL字型ライトを点灯した。これで両手を塞がず前方を照らすことが出来る。

ラインは強烈なシンナー臭で鼻が利かないようだった。さつき少女を察知出来なかったことといい、連れていても人間を察知する事は

ないだろう。

「ライン、ここで待て」

俺がそう言つと、ラインはおすわりの体勢になって建物前で待機する。俺は64式小銃を持ち、一階のコンビニに入っていく。生存者を威圧しないために銃口は下に向けておく。

「誰かいませんか？ 今から中に入ります」

そう言つて暗いコンビニの中に足を踏み入れた……直後。

「動くな!!」

突如そう言われ、同時に視界の右端に棒のような物が映つた。真ん中に穴が開いたそれは、どう考えても銃口だった。

まさか、入っていきなり銃を突き付けられるとは。俺は無意識の内に、頭の中でカウントを始めた。3分経ったら俊夫と明が来る。それまでに自衛官に銃口を突き付けるようなイカレポンチを倒すか説得し、銃を下ろさせなければならぬ。

「陸上自衛隊です、助けに来ました。だから銃を下ろし……」

「黙れ！ 持つてる銃を床に置け！」

女の声だった。しかも若い。もしかしたら俺と同年齢かもしれないが、そんな情報は何の役にも立たなかつた。俺はとりあえず言われた通りに、64式小銃を床に置く。「拳銃も置け！」と言われたので、レッグホルスターから9mm拳銃も抜いて床に置いた。

「両手を上げたまま、ゆっくりこっちを向け。余計な動きを見せたら撃つ！」

言われた通りに、ゆっくり右を見る。胸元に取り付けられたL字型ライトが、俺に銃口を突き付けている馬鹿の顔を照らし出す。

LEDの強烈な光に照らされ、闇に浮かび上がったのは一人の少女だった。髪は短く、少し汚れている。スキーウェアのような厚手の服を着ているが、その表面も泥や埃で汚れていた。

そして手には……。

「89式か。そんなモン、どこで手に入れた？ ガキが持っていていい代物じゃない」

少女が構えていたのは、自衛隊制式採用の89式小銃だった。俺達も死んだ他の自衛官の89式を使っているが、それは俺達が自衛官だから出来ることだ。この少女はどう考えても自衛官ではない。そしてこの国では銃刀法があり、軍用銃を民間人が所持する事は出来ない。89式小銃はそもそも自衛隊向けにしか作られていないので、民間人が入手する事は不可能である。

つまりこの少女は、自衛官から89式を手に入れたということだ。奪ったか、死んでいた隊員から拾ったのか。

どちらにしても、目の前の89式は本物だろう。自衛隊が訓練用として以来して製作されたリアルな89式のエアガンもあるが、この状況でエアガンを突き付けるアホがいるはずもない。

少女は俺の問いに無言で答えた。扱い慣れていないのか、まるで子供がエアガンを構えるような格好だが、その銃口はまっすぐ俺を狙っている。引き金に指が掛かっているし、少しでも俺が妙な動きをしたら撃ってくるだろう。

「俺は自衛官だ。なんで銃を突き付けられなきゃならない？」

「自衛官？　じゃああんたもあのクソ野郎の仲間なのね？」

「クソ野郎？　なんの事だ？」

少女は唇を噛んだ。だが俺の質問に答える事はない。

やれやれ、このまま銃口を突き付けられ続ける訳にもいかない。少しセコい方法だが、仕方ないか。

俺は首を傾げ、少女の右半身を見るような格好をした。89式の機関部の右側面をちらりと見て、大きく溜息を吐いた。

「な、なんだつてのよ！？」

「安全装置が掛かったままだぞ。それじゃ撃てん」

「う、嘘よ！　ハツタリかまそうつたつて騙されないんだからね！」

とは言いつつも少女は俺の指摘が気になっただらしく、銃床に当たっていた頬を放し、89式を傾けて機関部右側面の切替レバーセレクターを見た。他国の小銃と違って89式の切替レバーは右側にあるので、右利きの場合親指での操作が難しい。自衛隊のイラク派遣後に左側からの操作も可能になる切替レバーも取り付けられ始めているが、少女の構えている89式には取り付けられていなかった。

そして右利きの人間の場合銃床を右肩に当てるから、機関部右側面を見るには小銃を傾けなければならない。それすなわち、隙を作るという事である。

少女はまんまと俺の罠に引っ掛かった。少女の視線が俺から機関部右側面に移った瞬間、俺は一気に少女に近づいた。

俺の接近に気づいた少女は慌てて89式を構えたが、俺は左手で裏拳を繰り出し、被筒を斜め下から叩いた。銃口が俺から逸れ、勢いで少女が引き金を引いたのか銃声と共に弾丸が発射され、天井に小さな穴を開けた。

俺は89式の被筒を掴むと、思いつきり少女に向けて突き出した。身体の前で小銃を構えるような格好になっていた少女は、構えていた小銃を思い切り押され、銃床が鳩尾を直撃した。ごほつと息を吐き、少女の身体から力が抜ける。

力の抜けた少女の手から89式をもぎ取る。少女は銃床で強打された胸を押さえながら俺が床に置いた9mm拳銃に手を伸ばしたが、その鼻先に89式の銃口が突き付けられる方が早かった。

「なんつーか、ベタな脅しに引っ掛かってくれたよなあ……」

俺はそう呟きつつ89式を右手で保持し、左手でさつき床に置いた9mm拳銃と64式小銃を拾い上げる。64式を負い紐で肩にかけ、89式の銃口を少女に突き付ける。少女がとつさに引き金を引いて弾が出た以上、安全装置は解除されていたのだ。まさかこんなベタベタなハツタリに引っ掛かる奴がいるとは思わなかった。

飛び掛かってきても余裕を持って応戦出来る距離まで離れた後、銃口を少女に向けたまま89式の弾倉を外す。弾倉を外しても薬室に一発弾が残っていることを知っているのか、少女は拳銃を拾おうとした四つん這いの姿勢のまま俺を見上げる。

弾倉左側面の残弾確認孔を見る。5発毎に開いている確認孔には、一番上までしか金色の銃弾は見えていなかった。つまり、弾倉には5発以上10発未満までしか装填されていない事になる。

弾倉を嵌め、少女に尋ねた。

「89式小銃をどこで手に入れた？」
(こんなモノ)

「……奪ったに決まってるじゃない」

「誰からだ？」

「わたしをレイプしようとした自衛官からよ！！」

少女は睨むように俺を見上げると、悔しそうに続けた。

「一週間前、このガソリンスタンドに自衛官が一人だけやって来たのよ。わたし達は助けてもらえるって喜んだのに、アイツは……。でもわたしを押し倒したところで、持っていたナイフで刺してやったわ。ざまあみろってのよ」

「……ふん。ま、どうでもいいや」

俺のその言葉を聞いた少女は、俺を睨みつけて叫んだ。

「どうでもいいですって！？ わたしがレイプされかけたのに、あんたも自衛官なのに、どうでもいい！？」

「だって俺、お前に撃ち殺されかけたんだよ？ お前の話を信じるとても思ってたんの？ この銃はお前がどこかで自衛官を殺して奪ったやつかもしれないじゃないか」

「コンビニの裏に死体が埋まってるわ！ 本当よ！！」

「あんたが自衛官の格好をしたやつにレイプされかけようとかされかけまいと、そんな事はどうでもいいって言ってるだろ」

俺は少女に銃口を向けながら、冷静に続ける。

「なあ、こういふ言葉を知ってるか？ 『人を殺していいのは、殺される覚悟があるやつだけだ』って。

あんたは今、俺に向けて引き金を引いた。俺を殺そうとしたな？

ならあんたも殺されたって文句は言えないよな』

俺がこんな事を言っているのは、もしかしたらいろいろと疲れていたのかも知れない。3週間な戦闘による疲れにより、まともな判断力がなくなっているのだろう。

普段の俺ならそういった事は絶対に言わなかったに違いない。それほど、俺は疲れていたのだ。

少女は俺を睨み、叫ぶ。

「いいわよ、好きにきなさいよ！ 犯すなり殺すなりなんなりすればいい！！」

「いや、俺三次元の子供に興味ないし。しかも女の子を痛め付けて喜ぶような愉快な趣味は持ってないんだよね。女の子に痛め付けられるのは好きだけどね、精神的に」

罵られたりするとなんかテンションが上がるけど、殴られたり鞭で叩かれたり椅子にされたり溶けた蠟燭を垂らされるのは嫌だね。精神的な攻撃には耐え切れるけど、肉体的な攻撃には耐え切れない。少女は四つん這いの姿勢から、俺から逃げるように後ずさった。

「へ、変態……！！」

「俺は変態じゃないよ。仮に変態だとしても、変態という名の紳士だよ！」

「変態」と言われ、思わずそう返してしまった。そういえばこの台詞、久しぶりに言うな。

少女は俺の言葉を聞いて一瞬「は？」とでも言いたそうな顔をした後、突然笑いだした。俺の言い回しが面白かったのだろうか。

笑う少女を見て、思わず俺も笑っていた。なんとなく彼女は敵ではないとわかったので、少女に突き付けていた89式小銃の銃口を下

るす。彼女はただ、自分を襲った自衛官が怖かったただけだ。そのせいで最初俺に警戒心を抱いていたのだ。

俺が銃口を下ろした直後、コンビニの前のガソリンスタンドに73式大型トラックが急停車し、運転席から俊夫と明が銃を手に飛び降りた。そして俺と少女がいるコンビニに駆け寄ってくる。

「どうした武、大丈夫か!？」

「銃声が聞こえたから何かあったのか、って……」

明の言葉が途中で途切れた。きつと笑っている俺と少女を見て、何が起こったのか事態を掴めないのだろう。二人な足元では、俺が外で待たせていたラインが舌を出して俺達を見ている。

少女は俊夫と明を見て、一瞬警戒するような表情を見せた。だが俺が、

「大丈夫だ。仲間だ」

と言うと、少女は落ち着いたような表情になった。

そういえばこの少女の名前を聞いていなかった。俊夫が尋ねると、少女は霧島^{きりしま} 真希^{まほ}と名乗った。さらにこのガソリンスタンドには、彼女の他にも10歳前後の子供が5人いるのだという。

「じゃあ皆を連れて来る。あなたたちはここで待っていて」

霧島はそう言って、コンビニの二階にある事務所に上がって行った。彼女が子供達を連れて来る間、俺達はコンビニの中を見回りながら彼女達が今までどのような生き延びてきたのか思いを馳せた。

「まさかこんな所に生存者がいるとはな……。南の方に、確か大き

な避難所がなかったか？」

俊夫がカウンターに置かれたレジを弄りながら言う。カウンターの近くの壁に置かれたカレンダーは2011年12月31日で終わっていた。2012年分のカレンダーがなかったのだろう。

「たしか名古屋の方に避難所があったけど、そこは戦争直後に放棄されたはずだよ。でも彼女達がここに来たのも同じ頃だよね」

明が空になった窓際の雑誌のラックを眺めながら答えた。ラックの中に入っていたであろう雑誌や新聞は、燃料にされてしまったのか何もなかった。

電気やガスなどのライフラインが停止している今、暖を取るには何かを燃やすしかない。最初の方は石油ストーブやカセットコンロを使っていたが、時が経つにつれてそれらの調達も難しくなった。今では薪や紙を燃やして暖を取る、昔ながらの方法を取っている避難所がほとんどである。

すぐに、霧島が二階から子供達を連れて戻ってきた。全員厚着しているものの服は泥や埃で汚れ、痩せていた。

男子が二人、女子が三人だった。あ、俺はロリコンじゃないから絶対に手を出したりはしないよ。手を出したりはしないよ。大事な事なので二回言いました。

「これで全員か？」

俺が尋ねると、霧島は力無く頷いた。

「避難所から逃げる時に、この五人しか連れて来れなかったの。コ

ンビニに少しだけ残っていた食料を食いつないで、どうにか今日まで生き延びてこれたけどね」

「待て、お前だけでこの子供達の世話を見ていたのか？ 大人は一緒にいなかっただけか？」

俺の言葉を聞いた子供達が、何かに怯えるような仕草を見せた。霧島が「大丈夫だから、少し待っててね」と子供達を落ち着かせると俺達を外に連れ出した。ラインは、子供達にあちこちを触られて迷惑そうな顔をしていたが、噛み付いたりせずにはなされるがままになっていた。

外では雪と風の勢いが少し弱くなり、少しだけ寒さが薄れていた。霧島は俺達の乗ってきた73式大型トラックを見て少し驚くと、運転席付近まで移動してから、自分達がガソリンスタンドにいる理由を話し始めた。

霧島によると、彼女達がいた名古屋にあった避難所は規模が大きく、かなりの人が避難していたのだという。自衛隊こそ駐屯していなかったものの、猟師などが集まってゾンビの侵入を防いでいた為避難所の治安は良かったようだ。避難していた人達は公園や学校に農作物を植え、食料の自給も出来ていた。

だが核戦争の勃発により、屋外の農作物は全て駄目になった。核の冬による日照時間が短くなり、フォールアウトによる死の灰の降下が原因だ。

名古屋の避難所が多くの人々を受け入れていたのは、食料の大規模な農作物の生産による自給自足が出来ていたからだ。だがその農作物が駄目になった時、需要と供給のバランスが崩れ、一気に避難所の食料事情は悪化した。

で、後はお決まりのパターンだ。銃を持った連中が残った食料を独占しようとして暴動が発生し、人間同士の殺し合いが起きた。霧島達は暴動が起きた名古屋の避難所から、命からがら逃げてきたのだ。このガソリンスタンドのコンビニに残っていた食料は少なく、どうにか避難所から持ち出した食料と合わせて今日まで生き延びていたらしい。だが一日一食のみ、しかも暴徒に気づかれるかもしれないから火を起こせないで、ガチガチに固まった食事を取っていたのだという。

俺が偵察に出た時に女の子がガソリンスタンドの外に出ていたのも、飢えからの行動だったようだ。食べ物がないガソリンスタンドから、食べ物がある別の場所に行こうとして、霧島の制止を振り切って外に出たのだという。

「なるほど、よくわかった。話を変えるが、君を襲ったという自衛官の死体を見せてくれないか？」

明は冷静な表情のまま、顎に手を当てて言った。

「そういえば、あんた達本当に自衛隊員なの？ わたしと同じくらいの歳なの？」

「今じゃ入隊が可能な年齢が16歳にまで引き下げられたんだよ、人手不足だからな。あと、俺達はちゃんとした自衛官だ。一ヶ月前になったばかりだがな」

俊夫がそう言っつて、胸元から銀色に鈍く光る認識票を取り出した。音を立てないように透明ゴムのカバーがかけられた二枚の認識票は、自衛隊員なら必ず持たされる代物である。アルミのプレートに名前や認識番号、生年月日や血液型がレーザーで刻印されている認識票は、たとえ爆弾で吹っ飛ばされたとしても、損傷の激しい遺体を識

別出来るように持たされる物だ。ちなみに二枚持たされるのは、身体が真つ二つになつても上半身と下半身に付けて識別出来るようにするためだ　と、ネットで見た事がある。

認識票の端には切れ込みがあるが、これは死体の口をこじ開けるためのものらしい。顔が焼けていても、歯型で遺体が誰か判別出来るように、とのことらしい。俺としては、認識票のお世話になる自体にはなりたくないが。

認識票を見せられた霧島は、俺と明の認識票も見せるように要求した。言われた通り、素直に霧島に認識票を見せる。

「無線で司令部に問い合わせようか？」と聞くと、霧島はようやく俺達が本物の自衛官であると信用してくれたらしい。明が頼んだ通り、霧島を襲おうとした自衛官の遺体を埋めた場所に連れていくてくれた。

遺体は、コンビニの裏の畑の傍に埋められていた。折り畳みの携帯スコップで、言われた通りの場所を掘り返す。

積もった雪をどかすと、すぐに茶色の地面が見えた、さらに掘るとスコップの先端が何かに当たるのを感じた。

土の中から出て来たのは、20代前半の痩せた男だった。埋められていたせいで全身が泥まみれではあったが、どうにか彼が迷彩服に防弾チョッキ、鉄帽ヘルメットを被っているのが確認出来た。首の右側面には霧島がナイフで刺した時に出来たらしい傷口が見えた。どうやらこれが致命傷だったらしい。

死後硬直に加えて低温だったので遺体はガチガチに固まり、地面の中から引つ張り出すのは一苦労だった。雪の上に男の遺体を置いた俺は、男の格好を見て違和感を感じた。

違和感を感じているのは俊夫と明も同じようで、二人とも怪訝な表情をしている。

「なあ……、コイツ偽者じゃね？」

俺がそう言つと、霧島は目を見開いて反論した。

「嘘よ！ だつて銃持つてたし、迷彩服とか防弾チョッキも着てるのよ。偽者のはずがないじゃない！」

「いや、コイツは偽の自衛官だよ」

俺はそう言つと、遺体の傍らにしゃがんで偽者だと思われる根拠を挙げていった。

まず、着ているのが通常の緑を基調とした迷彩服である点。俺達は防寒着を兼ねた白の冬季用迷彩を着用し、その下に緑色の迷彩服を着用しているからだ。これは核の冬で例年よりも気温が低く、各地で大雪が降っているから。雪上で緑色の迷彩服を着ていたらすぐに敵兵に発見されてしまうので、白い迷彩服を着用し、銃にも白いビニールテープを巻いたりして徹底的に偽装する。

この男がガソリンスタンドにやって来たのは一週間前。核の冬で大雪が降つてとつくに冬季用迷彩服が支給されている時期なのに、緑色の迷彩服を着たままなのが不自然だ。

しかも男が着ていた迷彩服は、本物そっくりのレプリカだ。生地が違ふ。

防弾チョッキもレプリカだった。通常は銃弾の貫通を阻止する抗弾プレートが挿入されているのだが、男が着ている防弾チョッキにはプラスチック製のプレートのレプリカが入っていた。当然、防弾能力はない。

「ほら、持ってみる」

俺はそう言っただけで着ていた防弾チョッキを脱ぎ、霧島に渡した。霧島は俺の渡した防弾チョッキを持った瞬間、一気に腰を落とした。

「なにこれ、重っ！！ あんたら毎日こんなもの着てるの？」

「まあ、中に抗弾プレートが入ってるからな。寒いからさっさと返してくれ」

再び防弾チョッキを着用し、今度は遺体が着ていた防弾チョッキのレプリカを渡す。霧島は軽々とそれを受け止めた。

「軽いわね、あんた達のと違って」

「それはレプリカだからな。見た目がリアルならそれでいいんだよ」

「でも、これって本当にレプリカなの？ どう見ても本物そっくりなのに」

アメリカなど外国では、軍隊が使っていた装備が払い下げ品として民間に出回る事がよくある。軍隊が使っている物と同じ工場で製造された、新品同様の物だ。外国では軍隊が身近なものなので、銃や装甲車などですら払い下げられることもある。

だが日本ではそれがない。色々な法律に引っ掛かるので実際に自衛隊で使われている物が民間で流通する事は少なく、代わりに見た目がそっくりなレプリカが作られ、サバイバルゲームなどで使われている。

こういったレプリカは見た目重視なので、実用的な機能はほとんどないと言っている。官給の迷彩服は身体から放出される赤外線を遮断したり耐火性を持つ。だがレプリカは戦場で使われる事を想定していないので、そういった機能がない。防弾チョッキだって見た目だけだ。

しかも認識票すら身につけていなかった。いつ死んでもおかしくないの、今は全ての自衛官に常時認識票を身につけることが義務付けられている。

これらの事から考えるに、多分霧島を強姦しようとしたこの男は、たまたま死んだ自衛官から銃を手に入れたミリオタだったのだろう。それで「ヒヤッハー実銃だ、俺TSUEE！」「みたいな感じで気が大きくなり、普段なら絶対やらないような事をやるようになってしまった。自衛官に成り済まして相手を油断させたのち、殺すなり犯すなり略奪するなりしてきたのだろう。

「偽自衛官か……。第三次大戦勃発で自衛官の死人が多い今、これからどんどん出て来るんだろうな」

「ああ。それに自衛隊や外国軍の遺棄兵器を危ない連中が拾う恐れがある。今までは金属バットやナイフ、よくて猟銃しか持っていないかった無法者が、これからは自動小銃で武装するかもしれねえ。気をつけなきゃな」

偽自衛官の遺体を埋め戻す最中、明と俊夫がそう言葉を交わすのを聞いた。

これから日本の治安は、もっと悪化していくだろう。自衛隊や警察がいる地域は抑止力があって無法者達は好き勝手出来ないだろうが、それ以外の地域の治安は最悪になる。

もしかしたら、日本は世紀末救世主伝説的な世界になっていくんじゃないか。俺はそう思った。

一時間後。俺と霧島、そしてラインはガソリンスタンドに隣接する建物の二階にある事務所にいた。隣の倉庫からは、子供達がはしゃぐ声が壁を通って聞こえてくる。

「カレーなんて食べたのは久しぶりよ。ありがとう」
「いやいや、気にすんな。国民のための自衛隊だからな」

俺は頭を下げた霧島にそう答えた。
子供達は長いことマトモな食事を取っていなかった。それを聞いた俺達は、彼らにトラックに積んである食料で料理を与える事にしたのだ。

戦闘糧食の白飯と、俺達がゲリラ戦を繰り返していた街の商店から回収したレトルトカレーでカレーライスを作り、彼らに振る舞った。「終わりの日」以前なら簡単な極みみたいな食事だが、霧島や子供達は喜んで食べた。それほど長い間、暖かい料理を食べていなかったのだ。

今までは無法者に見つかるとも知れないという恐れから明かりを点さず暖を取るための火も起こさなかったようだが、今は金属製のバケツに燃料となりそうな薪を放り込み、火をつけて暖を取っていた。仮に無法者に見つかったとしても、俺達には数十丁の銃とそれらの弾薬がある。簡単に撃退出来るので、子供達に火を起こして暖を取らせたのだ。

俺と霧島は倉庫の隣にある事務所で見張りについていた。事務所からは道路が一望出来るので、監視場所としてはうってつけだった。俊夫と明はコンビニの入口に荷台を突っ込むような形で停まっているトラックの荷台に陣取り、武器弾薬食料燃料その他諸々の見張り

についている。

「にしても、あんなに大量の銃と食料、どこから手に入れたのよ？
軍隊でも作るつもりなの？」

「まさか。あれは元々俺達に支給された物と、敵から奪った奴だよ。
食料は元々ゲリラ戦のために残された16人分あつたけど、一週間で俺と俊夫と明の三人にまで減った。だから支給された戦闘糧食にはまだ余裕があるんだ。

他にも商店の隅に残っていた奴とか、敵の物資集積所を襲って手に入れた奴とか、そういったもんだ。武器弾薬も敵を倒して、物資集積所から手に入れた」

「物凄く物騒なルパンね……」

霧島の言葉に、俺は思わず笑ってしまった。そしてふと思い出し、傍らに立てかけてあつたK1カービンを霧島に手渡す。霧島は戸惑つたような表情で、俺の渡したK1カービンを受け取った。俺はK1の30発入り弾倉もいくつか手渡しつつ言う。

「持つておけ、その銃の弾だ。使い方は89式と大体同じだからわかるな？」

「え、ええ……。でもいいの？ わたしはあなたに銃を向けたのよ？」

「あれはお前が怯えていたから仕方がなかったことさ。それに俺達三人でここを守るのには難しいからな、人手が欲しいんだよ」

さつき霧島が持つていた89式には、弾丸がほとんど残っていないかつた。偽自衛官が撃ちまくつたのか、それとも彼が手に入れた時点で弾が少なかったのかはわからないが。

一応89式小銃は自衛隊の装備なので、民間人の霧島が持つたまま見て見ぬふりをするのは難しい。なので俺達は、倒した敵兵から手

に入れたK1カービンを霧島に渡した。弾薬は89式やミニミニと共有出来るし、全長が短いので女の霧島に持たせるにはこっちの方が最適だと思ったのだ。

霧島は受けとったK1を少し弄ると肩にかけた。そして思い出したように言う。

「そういえば、あんた達はこれからどうするの？」

「どうするもなにも、明日にはここを出て北に向かうよ」

「北？　なんで？」

「東北地方にはゾンビに襲われて駐屯地を放棄した部隊が元々集結していた。東北は人口が少ないから、ゾンビの数も少なかったからな。」

で、第三次大戦が勃発した今、自衛隊上層部は戦力を温存したまま部隊を集集させ、それから反撃に出るらしい。敵を日本から追い出さない事には、ゾンビの掃討も進まないからな」

そこまで言ったところで、俺ははたと気づいた。

「あ、今のことは他の人には話すなよ。秘密だからな」

「なんで秘密なの？」

「あまり避難民が押し寄せて来ると、作戦行動の邪魔になるんだ。言い方は悪いが、今は避難民の面倒まで見る暇はないんだ」

俺がそう言うと、霧島は何かを考え込むような表情になった。そして少しして、真剣な顔で俺に言う。

「わたし達も、一緒に連れていってくれる？」

「え？」

「もつここに食料はない。ここにいたらいずれは餓死してしまう。」

だからお願い。トラックの荷台はまだ空いてるんでしょ？ わたしは子供達を死なせたくはないの。代わりとこっちゃなんだけど、わたしに出来る事は何でもするから」

……何でも？

いやいや、俺は自分の身分を盾に色々要求するような人間じゃないからね。そういった変態的な要求はしないよ。それに三次元の女子には興味はないしね。

俺はそう言葉を並べて、一瞬頭の片隅をよぎった「毎朝メイドさん姿で起こしてもらおう」とか、「これからはお兄ちゃんと呼ばせる」とか、「犬耳をつけてもらおう」とかいう願望を打ち消した。いかにいかに、危ない危ない危ない……。

俺は紳士だからね、そういう変態的な行為には及ばないよ。俺は紳士だからね。

「……しゃーない。途中で保護したって言い訳で、お前達を部隊の集結地点まで連れていくか」

「本当！？ ありがとう！！」

「でも、保護するのはお前らだけだぞ。何十人も何百人も、俺達では面倒が見れないし連れて行けない。残酷だが、どこかで線引きするしかないんだ」

霧島は少し悲しそうな顔になったが、頷いた。彼女も三人の成り立ての自衛官に出来る事には限界があるとわかっているのだろう。

霧島が手を差し出し、俺も握った。握手を交わし、そして俺達は今後の進行ルートについて話し合い始めた。

何か湿った物が顔に押し付けられる感触で俺は目を覚ました。

既に陽が上り、窓から朝の眩しい光が差し込んでいる。

何か湿った物の感触は、俺の顔を舐めていたシロの舌だった。どうやら朝になったので、俺を起こしてくれたらしい。ただまだサキが起きる時間の10分前なので、腹が減って俺を起こしたようだ。その証拠に、シロの腹がグーグー鳴っている。

「あー、くそ。顔がベタベタじゃないか。今度から起こす時は、顔を舐めないでくれ」

そう言ってシロをソファから下ろした俺は、顔を洗うために洗面所に行こうと立ち上がった。座ったまま眠ってしまったせいか、立ち上がった瞬間に背中や腰の関節がポキポキと音を立てた。

俺は起こしてくれたシロに感謝していた。あのまま夢を見続けていたら、鬱な気分が目覚める事間違いなしだっただろう。

だって、あの後、霧島は。

第13話 2013年1月26日(後書き)

次回からは、時系列が再び現在に戻ります。18年前の続きに関しては、また回想編を入れるのでその時までお楽しみに！！

第14話 Amazon? そんなものはない。

7月に入っただけで、庭の発電用小型風車が壊れた。

いきなり屋根のソーラーパネルと合わせた発電量が減っているのを不審に思っただけで風車の配線を見てみると、配線は何かにかじられていた。配線の下に何匹もの焼け焦げたネズミの死体があったことから考えるに、どうやら隙間から侵入したネズミの群れが配線をかじって感電死したらしい。ネズミなんてものは珍しくない。今じゃ道端に人間の死体が転がっているのが普通の時代だし、毎日あちこちで人が死ぬ。ネズミはそれらの死体などを餌にして大繁殖しているのだ。

中にはまるで猫みたいなのまで成長したネズミのミュータントまでいる。外見は普通のネズミとは異なり、性格も狂暴になっている。人間に襲いかかって来る事も珍しくなく、町の郊外やゴーストタウン、ノーマンズランドに多数棲息している。一度襲われたらその小ささと敏捷性のせいで、銃弾を当てるのは至難の技である。散弾銃が有効だが、ネズミ故の繁殖力で大量に襲い掛かってくるから倒しても倒してもキリがない。

ドラ○もんが見たら、発狂するに違いない。

一応俺の家もネズミ捕りやホウ酸ダンゴなどのネズミ対策をしているのだが、G黒いアレと同じで出る時は出てくる。いたちごっこなのだ、相手はネズミだが。

風車は日中しか使えない太陽光発電機と違い、風さえ吹いていればいつでも使えるので重宝している。特に夜間は警報装置などの電源として使っているので、風車の復旧は即座に行った。

家の一階にある使っていない部屋を改修した倉庫から予備のコードを取り出し、かじられたせいで焼け焦げたコードと交換する。今は電気関係の業者なんて便利な職業の人間はいないので、何事も自分で行っしかない。俺も「終わりの日」から20年生きている内に、そういったスキルを生存のために身につけた。

一時間もしない内に、配線の交換は終わった。いつも通りの平常な発電量に戻ったのを確認し、ようやく一息つく。浄水器や食料を保存してある冷蔵庫は電気で動くので、停電は命の危機に直結する。

「武さん、お疲れ様です」

サキがそう言って、冷たい麦茶の入ったコップを持ってくる。

サキは今まで俺の隣で配線修理の作業を見ていた。サキにもこういつた技術を教えるためだ。俺が生きている内はいいが、サキが一人で生きていくような事態になった時、出来るだけ技術を身につけていた方がいいだろう。知識と技術があればある程いい、あつて困る事はない。

俺はサキからコップを受け取り、麦茶を一気に飲み干した。やっぱり夏はビールよりも、冷たい麦茶に限る。異論は認める。

「さて、困ったな……」

俺は風車と、庭に置かれた焼け焦げたコードを見て呟いた。

物資不足のこの時代、必要な物がいつ手に入るかわからない。そのため俺は、銃や弾薬から車両などの部品まであらゆる物の予備を貯めておくことにしていた。^{ストック}

だが発電機用のコードの予備は、今の修理で使い切ってしまった。

電気を通すためのコードは不純物が出来るだけ入っていない、精度の高い物がいい。銅線などに不純物が混ざっているコードは不純物が抵抗となって発電量を落としてしまうし、不純物がある部分が発熱して破損の原因になりかねない。

だがそのような精度の高いコードが手に入る事は少ない。まだ工業が生きている新旧政府の支配地域から流れてくる事は少ないし、どこかで手作りされたような物を使うのは論外だ。

焼け焦げたコードを修理してまた使うのはさすがに無理だ。今回コードを交換した事でアクシデントさえ無ければ当分先までコードは保つだろうが、やっぱり予備はあった方がいい。

新谷市でもたまにコードは取引されているが、それだって滅多にならない事だ。しかも高価である。

俺はしばらく考えた後、サキに提案した。

「よし、闇市行くか」

俺がそう言っていると、サキの目が輝いた。「犬達連れて、準備して来い」と言っていると、サキは笑顔で頷き家に駆け込んで行った。

サキは面白い物が好きだ。こんな時代では面白い物といっても必要な物や武器弾薬といった物騒な物しか買えない。「終わりの日」以前の日本なら、週末毎に女の子達が渋谷などでショッピングを楽しんでいたが（女の子と無縁だった俺はそんな光景はテレビでしか見た事はないが）、今や衣服なんて自由に買える物ではない。ショッピングなんてサキには想像もつかないだろう。

サキを面白い物に連れて行って笑顔を見る度に、俺の心は締め付けられたように痛む。女の子が普通に面白い物に出掛けられるような、そんな世界を元に戻せず救えなかったその事実。

闇市とは、流通制度がほとんど崩壊した日本のあちこちで開かれている、商人や難民などが合法非合法を問わずに手に入れた物を取引している市場の事だ。「闇市」というのは、雑然とした市場の様が第二次世界大戦後の日本のあちこちで見られた不法に開かれた市場に似ていることから自然に名付けられたものだ。もともと俺は第二次大戦後の闇市は歴史の教科書（死語だな、これ）でしか見た事がなく、また取り締まる警察も存在しないので「闇」ですらないが。

闇市では食料や衣服などの生きていく上で必要な物から、武器弾薬といった物騒な物まで手に入る。どこかの闇市では戦車まで扱っているらしいが、俺は見た事がない。

闇市には主に行商人が集まって来る。どこかで商品を手に入れては闇市で売り、また商品を求めてどこかへ行く、という連中だ。そのため闇市では日本全国の様々な情報が、真贋問わず集まって来る。闇市で取引される商品はパチモンがほとんどだが、稀に新旧政府の地域から流れてきた最高の状態や品質の商品が入荷している事がある。もしかしたらコードも売っているかもしれない。高価だろうが、新谷市で取り扱っている物よりも安い場合が多々ある。

さて、闇市に行くからにはこちらも何かしら商品を持って行かなければならない。相手が新旧政府の支配地域から商品を手に入れている商人なら現金が通用するが、それ以外は物々交換で取引する者がほとんどだ。現金だけ持って行っても意味がない場合がある。

そこで俺は、先日山下町と山中町の抗争で手に入れた自動小銃の他、元々自分が持っていたり依頼の過程で手に入れた（奪った）銃とその弾薬を持って行く事にした。武器庫の銃は十分あるし、何丁か売っても問題ない。

それに高精度の銃器は、市場に置ける取引レートがかなり高い。しかも銃は誰もが欲しがっている。銃で農作物を作り出す事は出来ないが、銃口を突き付けて奪う事は出来るからだ。

市場で氾濫しているのは数十発、下手すりゃ数発撃っただけで壊れるような粗製手作り品ばかりなので、きちんと作動する銃の需要は高い。

地下の武器庫から銃と弾薬を運んで高機動車に積み込んでいく。頭の中で今回闇市まで往復する時の燃料代と、銃の売上がどちらの方が高いか計算した。銃が六丁売れば、燃料代を売上が上回る事がわかった後に計算を終える。ケーブルを手に入れるために必要とはいえ、燃料代だって馬鹿にならないから大損するのは御免だ。

一応一万円の札束もアタッシュケースに詰め、荷台に放り込んだ。インフレで現金の価値は下がっているし、現金取引の場合ケーブルがいくらかかるかわからない。現金は多いに越したことはない。

高機動車の燃料タンクの蓋を開け、植物油と軽油を1：1で混ぜた燃料をタンクに注ぎ込む。高機動車を始めとした軍用車両は大抵ディーゼルエンジンを搭載しており、そしてディーゼルエンジンはガソリンエンジンと違って使える燃料の幅が広い。ガソリンは燃えやすいので、被弾することを前提に作られている軍用車両には不向きなのだ。

ディーゼルエンジンは植物油から作った燃料でも動くので、ガソリンが中々手に入らないこの御時世でディーゼルエンジンの役割は大きい。今や、動いている車両の大半がディーゼルエンジンを搭載している。

品物の武器弾薬や現金、そして燃料の入ったポリタンクを後部の荷台に積み終わった頃に、サキが着替えて犬達を連れて家から出て来た。Ｔシャツを着てパーカーを羽織り、カーゴパンツを穿いたサキは身体の線を目立たなくしていた。

今の時代は女が外を出歩くには危険が高いので、大抵の女性は外出する時に身体の線を隠すような服を着ている。サキは元々凹凸が少なげフンゲフン、スレンダーな体型だったので、パーカーのフードを被れば一見すると男か女かわからなくなる。サキがショートカットである事も幸いした。

サキを助手席に乗せ、犬達は荷台に乗せる。今回はシェパードを四匹全部連れていく事にした。サキの護衛兼警備の為である。訓練された犬は普通の兵士よりも危険だ。そして俺のシェパード達は全員、対人対ミュータントの訓練をしてある。

家には誰もいなくなるが、発電機が復旧したから警報装置が使えるので問題ない。もし俺達の不在中に誰かが敷地に侵入しようとしたら、警報装置が作動してカンパニーに連絡が行く。俺はカンパニー加盟員なので、すぐさまカンパニーの警備員が家に駆け付けてくれるから安心だ。

高機動車を車庫から出すと、偶然俺の家の前を通り掛かったジャツ

クと出会った。肩にはACR突撃銃を掛け、弾倉がいくつも詰まったタクティカルベストを着用して完全武装している事から考えるに、これから依頼でどこかに行くらしい。

「おはようタケシ。君はいつもかわいいね、サキちゃん。これからどこかに行くのか?」

「ああ。少し闇市にな」

ジャックはそれを聞くと、「ブラックマーケット闇市か……」と呟いた。

「何か買ってきてやるうか?」

俺がそう言っていると、ジャックは顎に手を当てて何やら考え始めた。どうやら真に受けたいらしい、冗談で言ったのに。

しばらく何か唸っていたジャックは、あつと何かを閃いたように、

「小学生の女の子!!」

「死ね」

国道296号線を進んでいくと、船橋市に入った。船橋市は「終わりの日」以前は、南部に港があることで大規模な工業地帯が存在し、また日本最大規模のショッピングモールや競馬場など様々な特色があった人口80万人の政令指定都市だった。

「終わりの日」以降はその活気も失われた。南部の工業地帯は通常弾頭の弾道ミサイルの攻撃を受けて壊滅し、また港湾施設も大打撃

を受けた。生存者はゾンビの少ない東北地方に逃れ、今では数万人が暮らしているかどうかだ。

新京成線前原駅を過ぎると、296号線は北に伸びはじめた。俺は道なりに高機動車を走らせる。

296号線は東京に向かう主要な道路だったため、ゾンビの発生が一時減った時に、放置車両は自衛隊によって撤去されていたため道路上に障害物は少ない。元々放置車両が撤去された頃には、ガソリン不足によって政府機関以外の走る車はほとんど無くなっていった。そのため296号線上に今でも放置してある自動車は少ない。時折道路のど真ん中に、ガソリンが尽きて乗り捨てられたとおぼしき錆で赤茶けた色になった、スクラップと化した自動車がぼつりぼつりと放置してあるだけだ。道を完全に塞いでいるわけではないので、簡単に通り抜けられる。

しばらく進むと、296号線は西に折れた。ハンドルを切って右に曲がると、前方からこちらに向かって走って来る白い軽トラックが見えた。闇市で何かを調達したのか、荷台にはビニールシートで覆われた大きな荷物が載っていた。窓を開けると、エンジン音に混ざって人の声が聞こえはじめた。闇市は近い。

「そろそろ着くぞ。準備しておけ」

サキは俺の言葉に頷くと、着ていたパーカーのフードを被った。一応薄手だとはいえ、夏でも長袖を着なければならぬサキを少し可哀相だと俺は思ってしまう。

大きな公園に隣接し、錆び付いた蒸気機関車が展示してある郷土資料館の前を通過すると、人の声はいよいよ大きくなってきた。車のエンジン音も前方からいくつも聞こえて来る。

すぐに、闇市のある場所が見えてきた。

そこはかつて、陸上自衛隊習志野駐屯地と呼ばれる場所であった。

習志野駐屯地の前身は、旧陸軍の騎兵連隊の駐屯地だった。騎兵連隊は精鋭部隊であり、日露戦争などでも活躍した。「坂の上の雲」という作品でも、騎兵連隊の事が出ている。

習志野駐屯地の脇には広大な演習場が広がっていたが、大戦（第三次ではなく第二次の方）に敗れて日本軍は解体され、演習場も住宅地や工場用地として使われるようになった。

だが朝鮮戦争勃発により作られた警察予備隊が自衛隊に変わると、習志野駐屯地も再び自衛隊によって使われるようになった。ただし騎兵なんてものは時代遅れになっていたので、駐屯するようになったのは空挺部隊だった。

空挺部隊とは、パラシュートによって主に敵部隊の後方に降下し作戦を行う部隊である。その性質故に空挺隊員は戦闘能力だけでなくサバイバル術なども並の隊員よりも高い事が求められており、空挺部隊イコール精鋭部隊として世界中の軍隊には認識されている。もちろん、日本も例外ではない。

自衛隊の唯一の空挺部隊である第一空挺団は、この習志野駐屯地を拠点に活動していた。「終わりの日」以前なら、ジェットエンジンの轟音やヘリコプターのローター音と共に、空挺隊員達が航空機から降下していく風景がよく見られていた。

余談だが、第一空挺団は別名「第一狂ってる団」とも呼ばれている。隊員達は移動時間の短縮のために二階の窓から飛び降りているとか、四階から飛び降りても平気だとか、そういった噂が広まっていたために「狂ってる」と名付けられたらしい。

実際、パラシュート降下で地上に着地する際には二階から飛び降りたのと同じくらいの衝撃を受けると言われているので、そういった話が本当でも驚かないが。

そして習志野駐屯地は、陸上自衛隊の特殊部隊である「特殊作戦群」の拠点でもあった。これは隊員の多くが空挺徽章を持っているதாக、精鋭の空挺団から特殊作戦群に入る隊員が多かったかららしい。

そんな第一空挺団も、「終わりの日」のゾンビパニックの際には出動した。空挺部隊という事で装甲車などは多数配備されていたので、ゾンビが大量発生したらその地域に空から投入されてゾンビを掃討する、といった感じに運用されていた。

それに続いて発生した第三次大戦でも、空挺団と特殊作戦群は活躍した。これはあくまで噂だが、特殊作戦群の隊員が潜水艦で海から侵入し、日本に侵攻してきた国の軍の司令部に攻撃をしかけて指導者を暗殺したという話を聞いた事がある。あくまで噂だが。

そして第三次大戦の終結及び日本民主共和国の樹立による内線が勃発すると、第一空挺団は習志野駐屯地を放棄して北海道に向かった。今では他の部隊と共に北海道に駐屯して、対新政府及びミュータント掃討任務に投入されているらしい。

そして打ち捨てられた駐屯地には、元々この周辺にいた生存者や西から流れてきた難民が住み着き、いつの間にか闇市が形成されていた。警備が厳しい自衛隊の駐屯地は他の施設よりも外敵の侵入を阻止出来やすかつたし、駐屯地のすぐ近くに広がる広大な演習場を農場に転用すれば大量の農作物を生産する事も出来た。今では農場で作られた農作物が、駐屯地の闇市で商品として売られている。

駐屯地の塀に沿って進んでいくと、すぐに正門前に到達した。俺達以外にも闇市に訪れる者は多く、徒歩や自転車、馬車、自動車など様々な移動方法でやって来た人間が正門から入っていく。

闇市に入る為には許可が必要なので、馬車や自動車等やって来た者達が許可を得るための列が正門から並んでいた。幸い俺の前には四台しか並んでおらず、すぐに中に入れそうだった。

「ちよつと、あんた」

風通しをよくするために開きっ放しにしていた窓から男の声が入って来た。見ると、肩に散弾銃を掛けた20歳くらいの男が、バインダー片手に運転席の脇に立っている。

「ここに書いてある事に答えて、入口で渡せ。顔写真を撮ったら入場と営業の許可が出る」

そう言つてバインダーを窓から突き出すと、男は新しく俺の後ろに並んだ馬車に向かつて歩いていく。

バインダーにはコピー紙が挟まれ、質問事項が印刷されていた。氏名年齢や住んでいる場所から、今回やって来た目的と営業する場合は売る商品を書けとある。一応、物騒な連中への対策なのだろう。

俺は嘘偽りなく、質問事項に記入していった。年齢が37歳と書く時だけはさすがに疑われるかと思つたが、実際37歳なんだから仕方がない。

コピー紙の質問事項に答え終わったちよつとその時、俺の前のトラックが入場許可をもらつて駐屯地内に入つて行つた。俺は高機動車を前進させ、正門のと真ん中にある立哨所の前で停止させた。立哨所とその反対側にある詰め所では、自動小銃を構えた男達がこちらを注意深く見ている。何か不審な動きをすれば即座に撃つてくるだろうが、この高機動車は小銃弾くらいなら貫通しない装甲仕様なので問題ない。もっとも、不審な動きをする理由もつもりもないが。

「書類を見せて」

立哨所にいた40歳くらいの丸刈りの男に言われ、素直にバインダーを渡す。男は書類を一瞥すると、俺の顔と書類を交互に見た。

「おいボウズ、字が間違つてるぞ。37歳じゃなくて17歳だろうが」

案の定、間違われた。ここまでは予想してあつたので、俺はポケットから小さくあちこちが擦り切れた手帳を取り出すと、男に渡した。男は俺が渡した手帳を見ると、怪訝な表情を浮かべた。再び俺の顔

と手帳を交互に見比べ、

「なあ、お前本当に37歳なのか？」

と聞いてきた。

「そこに書いてあるのは本当だ。俺は37歳だ、諸事情で17歳から見た目は変わってないがな」

「ほーほー、いわゆるミュータントって奴か。俺も人間の姿をしていて精神が崩壊していない奴を見るのは初めてだ。放射能にやられたのか？」

「ミュータントじゃない、諸事情だったの」

俺の言葉に男は豪快に笑うと、デジカメを取り出して俺とサキの顔写真を撮った。サキが女である事に男は気づいたが、こういった御時世では女が男装する事が多いので、男は何も言って来なかった。

「商品を見せる」

と言われたので、俺はSG556カービンを片手に高機動車から下りた。そして車体後部に回って後部ドアを開くと、男や詰め所の警備員からどよめきが上がった。

「コイツは珍しいな。粗悪なコピーのAKじゃなくて、M16とは
「買うか？」

そう尋ねると、男は「考えておく」と笑った。どうやら悪い奴ではなさそうだ、と後部ドアを閉めながら思った。

「おっと、これを返さなきゃな」

男はそう言っつて、俺が見せた手帳を返してきた。

片面が透明な青色のビニールカバーに入り、あちこちが擦り切れたその小さな手帳には俺の顔写真が張り付けられていた。そしてその脇には、俺の名前と共に、

「平成23年度 県立豊島高等学校身分証明書」

と印刷してあった。

20年前の、俺の高校の生徒手帳だった。

その後諸注意の説明を受けた後入場を許可された俺は、駐屯地内へと高機動車を走らせた。首からは営業許可証と入場許可証が入ったビニールのケースが下げであり、きちんと許可を取って入場している事が一目でわかる。

市が開かれているのは降下塔のある広場だという。正門から続く道を進んで行き、壁のあちこちが剥がれた鉄筋コンクリート製の建物の間を通り抜けると、そこには広場があった。広場の真ん中には降下塔と呼ばれる、塔のてっぺんに十字の構造物を載せたパラシュート降下訓練用の鉄骨で組まれた塔が建っており、その周囲に市が広がっていた。

テントを広げてその下に商品を並べている者。客がやって来なくて

暇なのか、ぼーっと虚空を見ている者。荷車を引く馬に水を与えている者。一円でも値切ろうと商人と交渉する者。様々な人達がいた。ざっと200人以上はいるに違いない。

俺は空いているスペースに高機動車を止めると、近くにいた警備員を呼んだ。こういった市場では商品を巡っての争いや強盗をやらかさうとする者が出て来るので、こういった銃を持った警備員が配置されている。

俺のすぐ近くにいた警備員は、俺より年下の20歳前後の青年だった。手にはステン短機関銃を持っている。

彼は「なんでガキがここに？」と言い足そうな表情だったが、俺が首から掛けてある営業許可証を見たのか何も言わなかった。商品を売りに来た者は闇市を仕切る連中にとつての客でもあるので、粗相をしてはいけないと教えられているだろう。どこかのフジヤマと違って、店員(?)教育がきっちり行き届いている。

「アンタ、この車見張っていてくれ」

そう言ってポケットから1万円札を何枚か取り出すと、青年に握らせる。たちまち青年は笑顔になった。

闇市での注意事項その一。市場で起きた窃盗事件などについて、運営機関は一切補償しない。

つまり事件の発生は未然に防ぐようにするが、起きたら起きたで仕方がないって事である。だから何かを盗まれても自己責任、騙されても自己責任という事である。

だからこうやって警備員にチップを渡して、自分の荷物については特に注意してもらわなければならない。チップを弾む程、警備員はやる気を出してくれる。

「悪いなサキ、少し待っててくれるか？」

「どこに行くんですか？」

「早いうちに発電機用のコードを買ってこなきゃならない。コードを買ったらすぐ戻って来る。そしたら銃を売って、その後であちこち回ろう」

そう言うと、サキは笑って、「わかりました。行ってらっしゃい」と答えてくれた。

俺は金の詰まったりリュックとSG556カービンを肩にかけ、M93Rマシンピストルをホルスターに突っ込む。市場では物を持っている者は襲われやすいので、自衛のための武装が許可されている場合が多い。入ってからすぐに武器を取り上げられ、帰る時に返却するよつな市場もあるが、そういつた場所は重武装の警備員がいて事件が起きないように目を光らせている。

この市場は警備員が盗賊が使ってそうな短機関銃を使っているため、そういつた安全度が高いとは言えない。だから誰も彼も、市場にやってくる者は武装している。

俺は警備員に、「帰って来た時に何も盗まれてなかったり、連れに危害が与えられてなかったら、もう何枚かやる」と言ってやった。これで警備員は追加のチップをもらうために、しつかりサキと犬達、そして大事な商品である銃が乗った高機動車を見張っていてくれるだろう。

もつとも、高機動車は防弾だから狙撃銃や機関銃でも持って来なければ車内は安全だ。そして車内にはシエパード四匹がいる。仮にサキが車外に連れ出されそうになっても、そいつの首に噛み付いて殺してくれるだろう。

さて、さつさとコードを調達しなければ。俺は近くにいた商人に電気関係の車内を売る商人がいる場所を聞き、その場所へ走り出した。

第14話 Amazon? そんなものはない。(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第15話 焼き鳥はやっぱり皮だよ

サキを置いて電気コードを買いに出た俺は、行き交う人の間を縫って降下塔の土台まで来た。降下塔の北側正面には大きな掲示板が掲げられており、そこに駐屯地内の地図が貼られている。掲示板の下では休憩中なのか、疲れた様子で座り込み、煙草を加えた男達がたむろしていた。皆服は薄汚れており、腰や肩に銃を掛けている。

さつき電気関係の商品を売っている商人の居場所は聞いたが、もう一度確認しておかなければならない。地図で確認すると、その商人は降下塔のすぐ近くにある格納庫で商売をしているようだ。斜め左後ろを振り向くと、ここからでも格納庫らしき建物が見える。

「さて、他に何か情報は……」

掲示板に目を戻した俺は、降下塔を構成する鉄骨の一本に何か細長い袋のような物がロープでぶら下がっているのに気づいた。位置が高く、気づかなかつたのだ。

目を懲らすとすぐ、それが袋ではない事に気づいた。風に吹かれてゆらゆらと揺れているそれからは、だらんと弛緩した手足がぶら下がっていた。

ロープに吊されたそれは、人間の死体だった。

顔は麻袋を被せられてわからないが、多分男だろう。ポロポロに擦り切れあちこちが裂けている服の間から見える手足は、異常な程に細かった。

そしてその首からは紐を通したボードが吊されていた。ボードには、

『窃盗は死刑！』と書いてある。

おそらくあの首を吊られている男は、盗みを犯して捕まり死刑になったのだろう。こういった市場では、暴力や窃盗等は即死刑となる。実際、この習志野駐屯地の市場のあちこちにも、『殺人、暴行、詐欺、窃盗は死刑』と書かれた注意書きがある。物不足のこの時代、何かを得るには盗むのが手っ取り早い。だが市場とは正当な手順で商品が取引される場所であり（商品の入手方法が正当かどうかは除く）、窃盗はその行為に真っ向から反するものだ。

しかも大抵の商人は苦勞して商品を手に入れて来る。それを盗まれたら商人はやっていられない。

市場を牛耳っている連中からしても、窃盗などが蔓延していると商人が寄り付かなくなってしまう。だからああやって、犯罪を犯した者がどうなるのかみせしめに行っているのだ。

俺は首を吊られた死体から目を離し、足早に格納庫の方に向かった。少なくとも、あの死体をサキには見せない方がいい。こんな時代で人が死ぬのが珍しくないとはいえ、やはりサキには暴力と無縁でいてほしいと俺は思っていた。

地上での訓練用だったのだろう。ローターを取り外された状態で長年風雨に曝され、迷彩塗装がだいぶ薄くなったCH-47JA「チヌーク」が格納庫脇に放置されていた。その前を通る際に下げっ放しの後部昇降ランプから機内を覗いてみると、中では男が数人眠っていた。身なりから判断するに、どうやら行商人のようだ。一人一人が横になれる幅のチヌークの兵員室は、休憩所代わりに使われているらしかった。

チヌークの奥に建っている格納庫に入ると、途端に耳が痛くなった。人々の喧騒が狭い格納庫の中で反響し、何倍もの大きさの騒音と化して俺の耳に突き刺さる。

格納庫の壁際には商人達が自分のスペースを作り、床に商品を広げていた。どれもが新品同様で、最近作られた物ばかりだった。

さっきの掲示板の通りに、格納庫の東側の壁際に向かう。するとそこでは、一人の顎髭を生やした40代後半と見られる禿頭のオッサンが、大声を張り上げていた。オッサンの脇には、『物々交換可』と書かれたプレートがある。

「さあどうだどうだ！ 小型発電機にソーラーパネル、組み立て式の風車やアンテナもあるぞ！！ ラジオテレビパソコンその他なんでも揃ってる！」

オッサンの周囲には数人の男が集まり、熱心に商品を見つめていた。俺は彼らを掻き分け、前に出る。

オッサンのスペースである事を示すらしきビニールシートの上には、ありとあらゆる電気関係の商品が並んでいた。床だけでなく、ビニールシートを囲むように並べられた机の上にも商品が並べられている。

「発電機用の電気コードはあるか？」

そう問いかけると、オッサンはぎょっとしたように俺を見た。そして俺の胸元に下がっている入場許可証と販売許可証を眺め、そして視線は俺の肩に掛かったSG556カービンに移る。

「……えっと、君。誰かの使いか？」

またか。どうやらこのオッサンも、俺をガキと思っているらしい。

見た目が17歳のままだから仕方のない事とはいえ、いい加減何百回繰り返したかわからないやり取りにウンザリしてしまう。

俺は無言でズボンのポケットから生徒手帳を取り出すと、オッサンに突き出した。オッサンは生徒手帳の顔写真と俺の顔を交互に見比べ、ようやく俺が大人だと判断したらしい。

「……これは驚いた。まさか見た目は子供、素顔は大人な人間が実在するとはな」

「どこの江戸川君だよ!？」

思わずツツコミを入れてしまった。

オッサンはニヤニヤと笑いながら俺に生徒手帳を返し、続けた。

「俺もここに腰を据えるまではあちこちを行商で廻ってた。散々珍しいモンを見てきたとは思っていたが、君みたいな人間に出会うのは初めてだよ。やっぱあれか？ 放射能か生物兵器か？」

「まあ、そんなところだ。で、電気コードはあるのか？」

「はいはい、電気コードね」

オッサンはそう言って、足元に置いてあった半透明のビニール袋を一つ手に取った。中には電気コードが入っているらしく、あちこちがいびつに出っ張っている。

「旧政府の地域から流れてきた、不純物がほとんど入っていない貴重品だ。この市場で、俺以外に取り扱っている奴はいないぜ」

オッサンはそう言って、実際に抵抗計と繋いでテストして見せた。確かに、抵抗はほとんどない。つまり不純物の量は少ない。発電機用としては持ってこいの電気コードだ。

値段を聞くと、500万円だと言う。持参した金は400万しかない

い。インフレで通貨の価値が10分の1以下に下がっているとはいえ、高すぎやしないか？
そう言つとオッサンは、

「何を言ってるんだ。旧政府のある本州北端からここまで、どれだけの苦勞でこれを運んで来たと思う？ 盜賊に襲われミュータントに襲撃され、千葉まで来たのが奇跡みたいなもんだ。それを考えりゃ、500万でも安いくらいさ」

「まあ俺はここで売るだけだがね」と、オッサンは最後に付け加えた。お前が調達してきた物じゃないんかい。

どうやらこのオッサンは、商品を店頭販売をする人間。実際に商品を買って付いたり輸送するのは別の人間がやり、そいつから商品を買って市場で売っているのだ。つまり、小売業者といったところだ。

「生憎、持つてる金は400万しかないんだよね」

「じゃ売るのは無理だな。帰った帰った」

「でも銃がある。それとセットで引き替えてのはどうだ？」

オッサンの眉が少し動いた。何かを考えているらしい。

「……銃つてのは、今お前が肩と腰に下げている奴の事か？」

「いや、売るつもりで持ってきたヤツだ。M16A2、在日米軍の装備品だったヤツ。手入れも行き届いた精度の高いヤツだ」

「なるほど……」

先に銃を売って売上金を加え、その後で再びオッサンの所を訪れるという選択肢もあった。だがそれでは時間がかかるし、俺がまた来る前に誰かに電気コードが売られてしまつては元も子もない。そもそも銃が売れなかつたらどうする？

早速、交渉が始まった。

「400万と高性能の突撃銃2丁。これでどうだ？」

「高すぎる。あのM16A2は、俺が何度も死にかけた目にあつて手に入れたんだ。旧ソ連製の装甲車にミンチ肉にされかかったのに、一丁50万円での計算は割に合わねえな」

「じゃあ350万円と銃2丁。これで問題ないだろ」

「いや駄目だ。200万と2丁か、400万と1丁のどっちかだ」
「ぐぬぬぬ……」

オッサンの顔が歪む。多分銃の値段がいくらになるか頭の中で計算し、いくら高く売るかで悩んでいるのだろう。

そうして200万円と銃2丁か、400万円と銃1丁の天秤に掛けられているのだ。

インフレが発生する前である「終わりの日」以前、M16突撃銃のアメリカ軍向けの価格は10万円程だったという。俺はそれを2丁で300万円分、つまり昔の30万円程の値段で売ろうとしているから、1丁あたりの値段は15万円程だ。5万円分は、俺の利益という事にしなければならない。

しばらく経ち、オッサンが口を開いた。

「……230万円と銃2丁、これでどうだ？」

「いや、210万だ」

「チツ、仕方ない。じゃあ間を取って220万円だ。これ以上は下げられん」

俺は手を差し出した。つまり、売買成立の合図だ。

オッサンも苦笑しながら、「未恐ろしいガキだよ……」と俺の手を握り返した。だから俺はガキじゃないって。オッサンが銃2丁で取引するのを選んだのは、現金と違ってまだ換金出来るからだろう。現金はそのままの値段でしか取引できないが、商品ならいくらでも値段を上げられる。

その後一度高機動車に戻ってM16A2を2丁と現金を取ってきて、不良品でない事を確かめるためオッサンの部下と共に数発試し撃ちをした後、ようやく俺は電気コードを手に入れる事が出来た。オッサンは俺が売った銃を転売し、さらに利益を得ようとしているようだ。

強欲、と彼らに言うのは簡単だ。だがこの御時世、強欲でなければ生きていけない。一歩引いたら負けだ。引いたら弱いと思われ、そこから様々な物を奪われてしまう。だから俺達は自分の利益を貪欲に追求していかなければならぬ。

欲に目がくらみ、慎重さを失うのは論外だが。

電気コードの束を持って高機動車に戻る。あのステン短機関銃を携えた若い警備員はしっかり見張りをしてくれていたようで、サキが車内で犬達と一緒に俺の帰りを待っていた。

「ほらよ。約束の金だ」

「へへへ……、どうも」

そう言っただけでお札を渡すと、警備員はニヤニヤ気持ち悪い笑みを浮かべながらそれを受けとった。

高機動車の後部ドアを開けると、シエパード達が「待ってました」とばかりに飛び掛かってきた。それらを全て避けつつ電気コードを放り込むと、助手席からサキが荷台に移動してくる。

「これからどうするんですか？」

「目当てのモンは手に入れたし、もう用はないんだが、銃売って市場を回った後帰ろう。お前もずっと車の中にいるのはつまらないだろ？」

「いえ、わたしは……」

「遠慮するなよ。じゃ、手伝ってくれ」

俺がそう言うと、サキは少し顔をほころばせながら頷いた。

そして新谷市の自宅から持ってきた自動小銃や拳銃などを取り出し、広い高機動車の荷台に並べていく。高機動車の前を行き交う商人達が一人二人と足を止め、早速声をかけてくる。

「君、留守番か？」

「いや、俺パシリとか誰かの下っ端じゃないから」

「そりゃ失敬。ところで、これは全部商品なのか？」

一人の行商人らしき若い男が、荷台に並んだ銃器を指差す。俺はニヤリと笑い、頷いた。

「俺は仕事柄いろいろ危ない所に行くんだが、ミュータントにも対人用にも使える銃はないか？」

その商人の肩からは上下二連式の散弾銃が掛かっていた。装弾数が少ない、射程も短い散弾銃で今までよく生き残ってきたなとツッコミを入れたい気分だったが、大事な客の機嫌を損ねてはならないので黙っておく。商人も上下二連散弾銃だけではこの先危ないと思っただから、俺に声をかけてきたのだらう。

「それならコイツがいいな」

俺はそう言っつて、並べられた銃の中から一丁を取り上げた。

「旧ソ連製、AK-47だ。質の悪い密造品じゃないぜ。威力はそこそこ、構造も簡単だから整備も簡単。弾も手に入りやすい。命中精度は悪いが、近距離での戦闘なら問題ない」

商人は弾倉を外したAKを構え、何度かカチカチと引き金を引いて調子を確かめていた。やがて銃が問題なく取り回しもいい事がわかったのか、「これくれ」と言っってきた。

「60万円だ。ちなみにこれは最低額だから、値下げには応じない」
「終わりの日」以前は、密造されたAK-47はブラックマーケットでは数千円で取引されていたという。これは純旧ソ連製なので質の悪い密造品よりも高価だし、どこかの調子が悪いということもない。

商人はしばらく顎に手をやって何事か考えていたが、すぐに俺の言い値で購入する事を決めた。代金を受け取り、引き替えに銃本体と弾薬90発。そして弾倉3本をオマケとして男に渡す。

「使い方はわかるな？ 単発と連発の切替が可能だ。弾倉内の銃弾を撃ち尽くしたら弾倉を交換して、ボルトハンドルの引く。弾薬と部品はどこでも手に入るだろう。点検はあまり頻繁にやらなくても大丈夫だ」

そう言つて男の前で銃を簡単に分解し、内部構造とメンテナンスの仕方を教える。元々泥水の中に浸しても使えると言われるAKなので、メンテナンスの必要も故障の心配もあまりない。

商人がAKを買うと、続々と銃を買う客が高機動車の前に並んだ。市場に持つて来た銃は俺が依頼の過程で手に入れたり、武器屋から購入した物だ。いつも使っている銃が使用不能になったような時の為の予備として保管しておいたが、新たに銃を手に入れて不要になったり余剰になった奴を今日は販売している。

予備用といつても、きちんと整備され精度も高い物ばかりだ。こういった市場では六実屋のようなきちんとした武器屋はなく、精々行商人が小遣い稼ぎのために売る盗賊が使っていたような精度も信頼性も低い物しか出回っていない。だから俺が持つて来たような精度や信頼性共に優れている銃は、結構需要が高い。

ミュータントが多い地域に行商に行く商人には威力の強い散弾銃を、逆にこういった市場を中心に活動する商人には護身用に拳銃を売る。映画やドラマ、アニメでは拳銃一丁で近接戦から遠距離の銃撃戦を繰り返すようなシーンがあるが、一丁の銃で何でも出来るわけではない。状況や立場に応じて銃を選択する必要がある。

危険な場所に行く場合は強力な武器を。市場のような比較的安全で他人に威圧感を与えたくない場合は小型で携帯性に優れる拳銃を売る方が、客のニーズに答えられるのだ。

「その犬は売り物なのか？」

散弾銃を買った行商人の一人が、ミーを指差して尋ねる。犬達はきちんとしてつけてあるので、俺と一緒にいる時に見知らぬ人と出会っても吠えない。番犬なので、俺がいない時や俺が見えない場所に人がいる場合には吠えるようにも教えてあるが。

「コイツは売り物じゃない。残念だったな」

俺が言うと、商人は肩を竦めて去って行った。

こんな危険だらけの世界では、犬の価値は計り知れない。臭いでミュータントや不審者を嗅ぎ付け吠えて注意を促してくれるし、しつければ戦闘の際に一緒に戦ってくれる。それに食料が無くなってしまった際には、殺して食べる事も出来る。行商人などにとっては最高の相棒なのだ。

だから犬は需要が高いのだが、今では20年前程犬を飼っている人はいない。犬を買える程の食料がない人がほとんどで、犬は飼うものというよりも、殺して食うものといったイメージしか抱いていない者も多い。

犬といえば、野犬もミュータント並に恐ろしい。「終わりの日」や第三次大戦の際に家などから逃げ出した犬達は野犬となって群を作り、人を襲うようになった。

犬の祖先は狼というが、野生に戻った犬達は本当に狼そのものだ。集団で静かに獲物に近づいて包囲し、俊足と鋭い牙を活かして一気に獲物を仕留める。俺も何度も襲われ、死にそうになった事がある。ミュータントと違い身体が突然変異で強化されているわけではないので拳銃でも十分対応出来るが、次から次へと襲い掛かってくる野犬は恐怖以外の何物でもない。

全ての銃を売り捌いた利益は300万円近くになった。先に銃を売っておけばオツサンと電気コードの売買の際に金額交渉など起きなかっただろうが、商品が既に売られた後、なんて事態も避けたかった。これでこれら問題ない。

売上金を鍵付きのトランクケースにしまい、サキに向き合う。

「じゃ、行くか」

「はい、武さん！」

心なしか、サキの声が弾んでいるように聞こえた。

犬達を高機動車の周囲の地面に刺さっている杭に繋いで見張らせ、再び若い警備員に金を渡して見張りをしてもらおう。高機動車の戸締まりをしっかりして、サキを連れて市場の中を歩き始める。

犬達が「一緒に連れてけ」みたいな視線を送ってきていたが、全てスルーした。

正午を少し過ぎた頃なので行き交う人の数は少なくなっていたが、相変わらず市場は人だらけだった。下手に離れれば迷子確定なので、俺はサキの手を握った。

女の子特有の細い指が手に触れ、身体に電流が流れたかのようにサキが一瞬身体を震わせる。

「あつ、すまん。手を繋ぐのいやだったか？」

「そんな事ないです！……武さんの手って、わたしとあまり変わらないんですね」

「身体は17歳のままだからな。完全に大人に成り切る前にこんな

身体になっちまったから仕方ない」

心は大人だがね。そう小さく呟く。

さつきは電気コードをかうために急いでいたので詳しく見ていなかったが、やはり市場には様々な商品が溢れていた。

駐屯地に隣接する畑となった演習場から収穫したらしき野菜を売る者。格納庫のオッサンと同じように電子機器を並べている者。その他エトセトラ……。

中には「これって売れるのか？」というような商品を並べている者もいた。

焼け残った住宅から拾ってきたらしいパソコンのキーボード「だけ」を売る者や、死体や盗賊から入手したらしい粗悪な密造銃を売る者もいた。中には明らかに死体から剥いだと思われる、茶色に変色した血の染みがついた、胸の部分に小さな穴が開いた服をハンガーに掛けている者がいた。

テントの一つの前を通り掛かった時、俺は10歳くらいの男の子が缶詰を売っているのを見た。よく見るとあちこち擦り切れた缶詰のラベルには「中型犬向け」と書かれており、どうやら犬用の肉の缶詰らしいと俺は判断した。缶詰はあちこち凹み、煤で黒くなっている。

衣服というよりもボロ布と言った方がいい服を着た男の子は、必死に犬用缶詰を売ろうと声を張り上げていた。しかし振り返る者は誰もいない。あんな小さな男の子が一人で市場に来たとは思えず、おそらく親か誰かと一緒に来て、今親は休憩中なのだろう。

彼はおそらく字が読めないのだろう。でなければ、犬用缶詰なんてアホらしい物を買ろうとするはずがない。

そういえば、20年前の犬用缶詰って食べるんだらうか？ 確か「終わりの日」以前に、米軍将校が退役する時、ベトナム戦争中に誕生日を迎えた際に貰ったケーキの缶詰を開けて食べたという話を聞いた事がある。最低でも30年以上が経過していた計算になるが、缶詰は空気が入っておらず密閉されているので問題ないのだから。だがいくら缶詰でも、犬用では買ってくれる者はいない。犬用缶詰を食うのはよっぽど飢えて食料がない者だけであり、市場には商品が溢れ大半の人間は金を持っている。つまり缶詰の事態がいくら良好でも、犬用缶詰を買ってくれる者はいないのだ。

「武さん……」

サキがそう言つて、手を強く握り俺の目を見つめた。その目は、「彼を助けられないんですか？」と訴えていた。

「俺達は犬用缶詰に用はない。だから買わない」

「……はい」

遠回しに「あんな奴は知らん」と俺に言われたサキは、悲しそうな目をして俯いた。

サキは俺に、あの男の子を助けて欲しかったのだらう。かつて俺がサキを拾った時のように。

だが、俺にそこまでの余裕はない。少女一人と犬四匹くらいを買う経済的な余裕はあるが、これから成長期を迎えて食べ盛りになる男の子を養う事は出来ない。

それに下手に助ければ、後々俺が死んだりして野に放り出された時、「また誰かが助けてくれる」という甘い考えを男の子は抱いてしまう。実際には助けてくれる者なんていないのに、自分から生き残るために行動を起こす事を放棄してしまう。

人を助ける余裕はない。人を甘やかしてもいけない。これがこの世界で生きていくための鉄則だ。

だが俺はその鉄則を破り、サキと暮らしている。何故だろうか？時々俺は、自分の行動が一貫していない事を自覚する。それはまるで俺がこんな壊れた世界で、まだ人間である事を止めようとしていないかのよう。

「……サキ、何か食っていくか？」

俺は溢れ出てきた疑問に蓋をするかのように、サキに問い掛けた。サキは曖昧な表情で頷いた。

着る服にも事欠く男の子をおいて、自分だけ腹を満たす事に罪悪感を感じているのかもしれない。だがそんな罪悪感、生きていく上で必要ない。こんな時代だから、自分を最優先に生きていく事は正しい。

そんな事を言おうとしたが、止めた。サキにはこんな世界の不条理や矛盾を、出来るだけ感じて欲しくなかった。

別にサキをあらゆる人間や世の中の辛さから守ったところで、20年前の仲間達との日々を再現出来るはずはないのに。サキが世の中の矛盾や問題点、不条理さに気づかず生きていく事は、俺が死んで野に放り出された時に、彼女を厳しい境遇に追い込むことではないのに。

「行くか」

俺はそう言って、サキの手を引いて屋台が並ぶ場所へと歩き出す。

サキは最後まで、犬用缶詰を売る男の子を見ていた。

降下塔から少し離れて立ち並ぶ鉄筋コンクリート製のかつての隊員用の官舎の間に、屋台は広がっていた。鉄パイプと屋根で作られた、運動会で使われるようなテントの下にはガスコンロや釜戸が設置され、あちこちからいい臭いが漂ってくる。

どうやらこの駐屯地などを中心に生活している人々が、行商人向けに屋台を開いているようだ。魚介類などの生鮮食品を新鮮なまま入手するのが難しいためか、食べ物は炒めたり焼いたり煮たりと全て火を通したものだっただけだ。

「さて、どれを食べるか……」

そう呟き、立ち並ぶ屋台を見回す。どこもエプロンや前掛けをした男達が、威勢のいい声を張り上げている。

まるで、「終わりの日」以前の夏祭りの屋台のようだった。これで客が銃を持たず、女子もたくさんいれば夏祭りそのものだったのに。

「焼鳥、焼鳥はいかが!? 隣の演習場で飼育した鶏だ! 汚染されてないぜ!!」

そう言いながら串に刺さった鶏肉を焼く、50歳ぐらいの前掛け姿の男がいた。ガスコンロが置かれている長机の前には、こんな謳い文句が書かれた紙が下がっていた。

『当店ではミュータント、野生動物、汚染された鶏、人間の肉は一切使用しておりません』

最後の『人間』にツツコミを入れてはいけない。ある所にはあるが、基本的に食料難のこの時代に、手っ取り早く肉を食うにはどうするか？ それは言わない方がいい。

核戦争が勃発した第三次大戦中には、各地で「共食い」が発生したという。核の冬やフォールアウトによって農作物が全滅し、食料調達が困難になった為だ。

中には生きていく為に、集団で人を襲う者もいた。死んだ人間も、その身体は「有効利用」された。あの光景は、本当に胸糞が悪くなる。

……なぜ実際に見てきたような口調で言うのかって？

そりゃあ、実際に見てきたからだよ、キミ。

実際に食った事もあるしね。

とは言え、他人から食料を買う時に気をつけなければならないのは間違いない。気を緩めたら放射能や化学兵器で汚染されたミュータントの肉を売り付けられかねないし、最悪ホモサピエンスの肉を食わされる羽目になる。

俺はサキの手を握ったまま、焼鳥を売る屋台に歩きだす。屋台の男は近づいてくる俺達の姿を認めたのか、ニヤニヤ気色悪い笑みを浮

かべた。

「おつ、君達は兄妹かい？ それとも彼氏彼女？」

「失敬な、俺はガキじゃない。それはそうと、その鶏肉、何かデカくないか？」

実際、男が焼いている肉はデカかった。肉の一つ一つのサイズが、女の子の拳みたいな大きさだ。絶対、普通の鶏肉ではない。

「それ、本当にミュータントじゃないのか？」

「やだなあ、ただの異常成長した大きな鶏だよ」

「それをミュータントと言うんじゃないかろうか」

「大丈夫だ、問題ない。放射能汚染も化学兵器の汚染もされていない」

念のため、俺は一本だけ買った。そして腰に下げた小型のガイガーカウンターを近づけ、反応を確かめる。人体に影響はないレベルだ。続いて、一口だけかじってみる。化学兵器で汚染された生物の肉なら、この時点で薬品のような味がする。

醤油ベースらしいタレの味が口中に広がる。どうやら汚染はされていないようだ。

生物兵器で汚染されていたとしても、加熱してあるので問題ないだろう。俺は串に刺さっている肉を全部食べ、問題ない事を確かめてから、6本追加購入した。

「毎度あり」

最初から最後までニヤニヤ気色悪い笑みを浮かべたまま、男は俺に言った。最後まで俺とサキの関係を邪推していたのが気に食わない。

「何本食う?」

「2本、お願いします」

拳サイズの鶏肉が3つ刺さった串を渡し、官舎の壁にもたれ掛かって焼鳥を食べる。甘くてしょっぱいタレに加え、噛む度に肉汁が溢れ出てくる。美味しい。

「美味しいか?」

「ふあい。ふありふあふおうふあふあいふあふ」

「……食い終わってから喋ろうな」

「はい。ありがとうございます」

しばらく何も言わず、黙々と焼鳥を食べる。

肉一つあたりのサイズが大きいので、4本の焼鳥で十分腹は満たされた。串は燃料にするのか回収するらしく、地面に置かれていた回収用のバケツに放り込んでから屋台を離れた。

その後しばらく市場を回ったが、特に興味を引く物は無かった。もうここに用はないので、さっさと帰る事にする。

再び高機動車を見張っていた警備員に金を渡し、杭に繋いでいたシエパード達を車に乗せる。「お前達だけ美味しいモン食っただろ」みたいな目で見られたが、スルー。いつも犬達は俺に冷たいし。

人を轢かないように注意しながら高機動車を発進させ、入って来たのとは逆の経路を辿って駐屯地の正門に向かう。途中、営業許可税という名目で50万円ほど、市場を運営する者達に支払ってから門から出ていく。

彼らもタダで営業させてくれるわけではない。でなければ自分達に利益が入って来ないからだ。だから税金を取る。

しかし税金が少なくて自分達の利益は少なくなる。税金を高くしたら市場にやって来る客が少なくなる。そのため、バランスを取る事が重要なのだ。

正門から出て国道296号線を西に向かう。午後のためか、これから市場に入ろうとする者は少なかった。

そのまましばらく車を走らせる。サキはお腹が一杯になったためか、助手席でうとうとし始めた。

「寝てていいぞ。着いたら起こしてやる」

「いえ……、大丈夫です」

明らかに瞼が下がって眠たそうなのに、サキはそう答えた。まあそう言うのなら、俺に眠るよう言う権利はないが。

前原駅を通り過ぎた直後、サキが突然目を見開いた。

「……後ろから、車が2台追ってきてます」

「何？」

速度を落としながらサイドミラーで後方を確認すると、突然500メートルほど後方の曲がり角の陰から、すっと2台のピックアップトラックが姿を現した。行き交う車がほとんどないため、かなり距

離があっても簡単に目視出来る。

連中の目的はなんだ？ まさか忘れ物を届けに来てくれたわけではあるまい。忘れ物をした覚えもないし。

なら、確率が高いのは盗賊だ。そういえば来る時に見たのだが、296号線から何本に通る道は全て、細い道であっても全てが放置車両や倒れた電柱で塞がれていた。もしあれが事故や経年劣化で塞がれたものでなければ、誰かに襲われた時に296号線を通る車両の逃げ道は無くなる。

つまり、盗賊にとっては好都合な状態なのだ。

「クソッ、盗賊か……！！」

そう小さく罵り、アクセルを思いっきり踏み込む。しかし節約のためにディーゼル燃料と植物油を混合した燃料を使用しているためか、速度はそこまで出ない。

対してサイドミラーに移る後ろから追跡してくるトラックは、見る見る内に大きくなっていった。ガソリンエンジンを使用しているためか、排気ガスに白煙が混ざっていない。ガソリンエンジンは出力が大きいので、ディーゼルエンジンで動く高機動車よりも速度が高い。ガソリンは劣化しやすいので長期間の保存には向かず、今の日本では貴重だ。あんな盗賊連中がちゃんと金を払ったりして手に入れたとは思えず、奪った物だと考えられた。

おそらく、前にここを通り掛かった、俺達のような奴から。

多分あの盗賊連中は、この辺りを根城にしているのだろう。296号線脇の道が全て塞がれていたのは、「狩り」をする時に獲物を逃さないようにするためか。

毎回毎回誰かが通り掛かる度に襲い掛かっては通る者がいなくなってしまうため、襲うのは俺達のような速度の遅いディーゼルエンジ

ンを搭載した車両に乗った者だけなのだろう。そして決まった地点に獲物が到達したら、速度の早いガソリンエンジン搭載車で追い掛ける。

まんまと盗賊の思惑に引つ掛かった自分を心の中で罵りつつ、俺は再びサイドミラーを見た。先程よりも距離が詰まってきている。このままでは後数分もしない内に追いつかれるだろう。

だが、まんまと殺^やられるのは本望じゃないんだよね。

俺は高機動車の速度を落とすと、道の真ん中に停めた。

「武さん、どうするんですか!？」

「耳塞いでろ、サキ」

俺はそう言つて後部席に移った。シェパード達は危険を察知したためか、後方を見て吠え始めた。

屋根のハッチを開いて上半身を出し、双眼鏡で追つて来るピックアップトラックを見る。トラックの荷台には数人の男が屋根に手をついて立ち上がっており、その手にはAKタイプの突撃銃が掲げられているのが見えた。

どう見ても盗賊です。本当にありがとうございました。

それを確認した俺は、荷台の端に置かれていた、毛布に包まれた物を手元に引き寄せた。そして毛布を取り払い、中身を取り出す。

毛布に包まれていたのは、ロシア製のKord重機関銃だった。元々高機動車の車載用機銃として積んであった物だが、市場で他人に威圧感を与えないためと盗まれるのを防ぐために車内に置きっぱなしだったのだ。

30キロ近い重量の機関銃を抱え、屋根のハッチから身を乗り出した。完全に外に身体を出し、機関銃の二脚を立てて広い屋根に俯せになる。

一緒に車内から持ち出した弾薬帯を給弾カバーを開いて装填し、付属している銃床ストックを伸ばして肩に当てる。

こっちが停車したためか、盗賊連中の乗る2台のピックアップトラックとの距離はさらに近づいていた。

Kord機関銃の銃弾の口径は12.7mm、射程は2000メートル以上。この距離なら確実に当たる。12.7?弾の威力は高く、当たったら人間は簡単に真っ二つになる。もしピックアップトラックに命中したら、車体前部に搭載してあるエンジンなんか簡単に貫通して運転手を引き裂き、十分殺傷力を保ったまま荷台の盗賊達に襲い掛かる。

つまり、当たった相手は死ぬ。

まるでエターナルフォースブリザードみたいな説明だが、それが一番的確だ。撃てば盗賊達から逃げられるどころか、返り討ちに出来る。

殺してやる……！

俺の中でどす黒い感情が沸き上がり、口の端が笑みを浮かべるかのように吊り上がる。照準機を覗き、前を走るトラックの運転席に狙

いを定めた。

とその瞬間、突然ズボンの裾が引つ張られるのを感じた。シェパードがぶざけているのかと思つて車内を見ると、ズボンを引つ張っていたのはサキだった。

「どうしたサキ、今忙しいんだが」

「……あの人達を、殺すんですか？」

声を震わせながらそう言つたサキの言葉に、俺ははつとした。ついさつき、俺はサキに暴力と無縁でいてほしいと願つたばかりじゃないか。なんであっさり、連中をぶち殺そうとしたんだ？ 俺の本能が、人間を殺す事を楽しみにしているのか？

やっぱり、サキには暴力と無縁でいてほしい。改めて俺はそう願つて、機関銃のグリップから手を離れた。

「……いや、追い払う」

俺がそう言つと、サキは安堵したような表情を見せた。

俺は車内に戻つて一緒に搭載されていたM14EBR自動小銃を掴むと、再び屋根の上に俯せになった。弾倉を叩き込んでボルトハンドルを引き、スコープレンズの保護カバーを開いて覗き込む。

今や盗賊達との距離は300メートルを切っていた。この距離なら細かい照準の調整をしなくても、確実に狙つた場所に当てられる。

俺は先頭車の前輪に照準を合わせた。まさか盗賊連中が、パンクしても走れるタイヤを手に入れられるとは思えない。穴が開いたら走行不能になるだろう。

まず俺は走るトラックの前輪左タイヤの未来位置を予想した。そし

てそこに照準を持って行き、トラックがそこを通り過ぎる瞬間を待つ。相手が移動している状態なので、未来位置を予想して撃たなければならぬ。普通に撃つたら、銃弾は相手が通り過ぎた後の空間を虚しく飛んでいくだけになる。

トラックの前輪左タイヤが照準した位置に差し掛かる直前、俺は引き金を引いた。

音速で飛ぶ銃弾が時速120キロ以上で走行するトラックのタイヤに突き刺さり、タイヤが大きな乾いた音を立ててパンクする。車体左前側が傾いて地面に擦りつけられ、大きくトラックが蛇行する。運転手が慌ててブレーキを引いたのか、トラックは土埃を舞い上げながら道を塞ぐように俺に右側面を見せて停車した。

停車した瞬間、続いて右側の前後のタイヤを撃ち抜く。これで3つのタイヤに穴が開いた。

大抵の乗用車は交換用のタイヤを一つしか積んでいない。トラックは2台追って来ているのもう一台の予備タイヤを流用しても、1つ足りない計算になる。

それにパンクしたタイヤが多ければ多いほど、敵は修理に時間を取られることになる。その間に俺達はオサラバし、盗賊連中は貴重な車両を失って悔しがる、というわけだ。

パンクしたトラックに乗っていた盗賊達は飛び降り、無事なもう一台のトラックを通すためかトラックをどかそうと押しはじめた。リーダーらしい男が荷台に立って何事か怒鳴っていたので、銃弾がその頭を掠めるように撃つ。

リーダーは銃弾が自分の頭を掠めた事に驚いたのか、荷台から転げ落ちた。盗賊達は俺の狙撃を警戒してか、慌ててパンクしたトラックの陰に隠れる。

それを確認した俺は満足して、機関銃と小銃を車内に戻した。ハツチを閉めて運転席に戻り、高機動車を発進させる。

「あの、武さん……」

「大丈夫だ、殺してない。少し驚かしてやっただけだ」

「そうですか、よかったです……」

そう大きく息を吐いたサキを見て、俺の頬も緩んだ。

やはり、サキの目の前で誰かを殺すのは好ましくない。甘いと言われるかもしれないが、やはりサキには暴力と無縁でいてほしいのだ。

それにしても……。と、俺は運転しながら思った。

なんでサキは、俺が盗賊達の乗ったトラックを目視する前から、その存在を知っていたんだ？

第15話 焼き鳥はやっぱり皮だよね（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

なお、作中に登場する銃火器やミュータント、兵器を募集しています。

ミュータントはトンデモ設定でなければ採用可能です。兵器に関しては、日本や周辺各国の軍隊が装備している兵器なら問題ありません。旧ソ連製の兵器なら、すぐに出せると思われます。

それでは。

第16話 番外編 武器募集中

今まで頂いた武器のアイデアです。これから応募して下さる方は、まずこれを見て被っていないか確かめてから応募してくださいと嬉しいです。

あと、既に登場してる奴は送らないで頂けるとありがたいです。本編読まれてないのか、と軽く凹むんで。

既に登場した物

M14 EBR 自動小銃

M93R マシンピストル
ソードオフショットガン
水平二連

SG556 カービン

NTW 対物狙撃銃

マカロフ 自動拳銃

ステン短機関銃

AN-94

M870 MCS 散弾銃

バレットM95 対物狙撃銃

ベネリM3

P230 自動拳銃

SCAR 突撃銃

M240 軽機関銃

グロツク17 自動拳銃

RPG7

ACR 突撃銃

ガバメント 自動拳銃

95式 自動歩槍突撃銃

SG550 突撃銃
Px4 自動拳銃
G36K 突撃銃
AK-47 突撃銃
M19リボルバー拳銃
UZI 短機関銃
9mm 拳銃
ミニミ 軽機関銃
グロツク18C 機関拳銃
ZID Kord 重機関銃
ブローニングM2 重機関銃
FAL 自動小銃
AK-74 突撃銃
RPD 軽機関銃
レミントンM700 小銃
M60 軽機関銃
M16A2 突撃銃
K1カービン
K2 突撃銃
89式小銃
64式小銃
上下二連式散弾銃
クレイモア対人地雷

これから登場する予定の武器

グロツク30 自動拳銃
ドラグノフ 狙撃銃

RPK 軽機関銃
PPSh - 4 1 短機関銃
PTRS 1941 対戦車ライフル
ワズプナイフ
XM8 突撃銃
AA - 12 散弾銃
MAC 10 短機関銃
FAMAS 突撃銃
56式自動歩槍
SPAS 散弾銃
M63 突撃銃
P90 短機関銃
USAS - 12 散弾銃
HK416 突撃銃
HK417 自動小銃
MP7 短機関銃
F2000 突撃銃
パンツァーシュレック
パンツァーファウスト?
トンプソン短機関銃
ビゾン短機関銃
ステアー AUG 突撃銃
CX - 4 自動小銃
MR73 リボルバー拳銃
PSG - 1 狙撃銃
デザートイーグル自動拳銃
M72 ロケット弾
REC7 突撃銃
バリステイクナイフ
AK102 突撃銃

TAR - 21 突撃銃

ガリル突撃銃

MP - 443 自動拳銃

PT92 自動拳銃

HK33 自動小銃

UMP 短機関銃

PKM 軽機関銃

M300 自動小銃

M1500 小銃

96式自動てき弾銃

紳士のウエポン
L85 突撃銃

カールグスタフM2 無反動砲

ハイパワー 自動拳銃

サイガ12 散弾銃

SKS 自動小銃

G3A3 自動小銃

既登場兵器

高機動車

ハンビー

BTR - 80 装甲車

73式大型トラック

登場予定兵器

Mi - 24 Mk? スーパーハインド

AH - 64D

BTR - 40

U H - 6 0
T 7 2
オ
フ
イ
エ
ー
ク
ト
!
T 5 5
B M P - 2

第16話 番外編 武器募集中（後書き）

御意見、御感想、アイデアお待ちしております。
頂いた兵器なども今後追加していく予定です。

第17話 2013年2月1日

俺はサキに、人が目の前で死ぬところを見せたくないと思っていた。だがそれは、自分勝手な言い訳と自分が一番わかっている。

俺はサキの目の前で人を殺し、彼女に嫌われる事を心の底で恐れていたのだ。

俺はサキが思っているような「いい人」ではない。サキは俺に拾われた事も含めて俺を信頼出来るいい人だと思っっているらしいが、実際の俺の性質は違う。

習志野から帰る途中で盗賊達を皆殺しにしようとしたように、俺は嬉々として人を殺すような人間だ。自分でも頭がおかしいとか、狂気じみているとか、壊れているということとはわかる。

だがそれはどうしようもない事だ。麻薬のように止めようと思っても止められない。俺が傭兵をやっているのも生きるためではなく、人をより多く殺し続けるためかもしれない。

でなければ、もっと別の職業に就いていたはずだ（もっとも、こんな世界では職業選択の自由なんてないが）。俺は今まで生き残るために様々な技術を身につけてきたし、それを活かせばもっと他人の役に立つ仕事につける。

だが俺は、そんな状態でも傭兵を続けている。それが俺が戦いに捕われてしまっている事を示しているのだ。

そしてそれは、最近始まった事ではない。俺が第三次世界大戦の最中自衛隊に入った時、いや、もっと前から俺は殺人を楽しむようになっていた。

多分、「終わりの日」から。

2013年 2月1日

霧島や子供達を拾った俺達は、自衛隊の残存部隊が集結している東北地方を目指して一路トラックを走らせていた。相変わらず空は灰に覆われ、太陽光が遮られたせいで気温は低下し、ずっと灰混じりの雪が降っているような状態だ。

そしてそんな中、新たな問題が発生した。

荷台に乗る俺と霧島は、急にトラックが減速するのを感じた。荷台では俺達の他にも、ガソリンスタンドで救助した子供達が、武器弾薬や燃料の間の狭い隙間に横になり、寝息を立てている。子供達は体力が俺達よりも少なく、長時間起きているのは困難なので寝かせていた。揺れる荷台の上でも全員熟睡しているせいか、トラックが減速したのに気づいた子供はいないようだ。

「こちら敏夫。武、これ以上トラック走らせるのはヤバいかも
ない。とりあえず速度は落とすが、早い内に今晚の拠点を探さ
ないと」

「わかった。明と相談して、よさそうな地点があったらまた通
信してくれ」

運転席でハンドルを握る敏夫からの無線通信に、俺はそう答えた。
先日霧島達を助けた後から、トラックの調子が急に悪くなったのだ。
走行中にエンジン音に異音が混じったり、急にエンジンの出力が下
がるなんてこともあった。

おそらく燃料節約のために軽油に植物油を大量に混ぜて使っている
のと、後は大気中に核爆発の影響で粉塵が大量に舞っているせいだ
ろう。ディーゼルエンジンは様々な燃料が使えるし、このトラック
は軍用なので普通のよりも頑丈に作られているはずだが、大した整
備も出来ずずっと最悪の環境の中を走っていれば、不調の一つが
出てもおかしくない。

「トラック、調子悪いの？」

俺の向かい側に体育座りをしていた霧島が、おずおずと尋ねてきた。

「そりゃ、ここ1週間はロクな整備も出来ずに走ってきたからな」

「でも、軍用でしょ？ 簡単には壊れないんじゃないの？」

「軍用装備が万全の状態であるためには、常にメンテナンスを必要
とするんだよ。てか、こんな最悪の環境で不調の一つも出ない方が
おかしい」

「へえ……。じゃ、整備のために、次の町では長く留まる？」

「状況によるな」

俺がそう答えると、エンジンから何か咳込むような音がして、唐突にスピードが落ちた。すぐに速度は戻り、エンジンの変な音も鳴りを潜める。

「こりゃ、整備に長くかかるな……」

一応、俺達は自動車のエンジンの構造と、簡単な整備の方法くらいは知っている。二ヶ月前まではライトバンで移動していたが、度々不調が起きた。そうなった時に再び動かせるようにするなり、道端に放置されていた車両を復活させて乗り換えるなりする事があるかもしれないなかったので、エンジンの整備方法を知る事は必須だった。だがこのような大型のトラックのエンジンは整備したことがない。軍用車両とはいっても製作したのは民間会社なので民生用のトラックと大した違いはないだろうが、それでも完全に不調の原因を取り除く事は難しいだろう。

そんな事を考えている内に、トラックは一番近くに位置する町にたどり着いた。静岡県の浜松市の少し手前にある中規模な町だが、耳を澄まして、聞こえてくるのは俺達が乗るトラックのエンジン音だけだ。

「明、何か見えるか？」

『辺り一面が雪に覆われてるだけだよ。運転席から確認する限り、人影は見えない』

「そうか。注意して進め」

注意する、というのは、何も生存者を見つけたら救助するためではない。

生存者そのものに注意しなければならないのだ。

俺は何度も、旅の途中で生存者に襲われた事がある。食料や物資を得るために仕方なくやる者が多いが、恐怖で完全に気が狂っていたり、逆に恐怖から逃れるために薬物クスリをやった者が大した意味もなく襲い掛かって来ることもある。中にはカルト宗教めいた連中が、生け贄を捧げるとかいった無茶苦茶な理由で襲い掛かってくることがあった。

食料等を求めてくる連中はとりあえず話し合いで穏やかに解決できる。上手くいけば避難所まで連れていく事も可能だが、それ以外は必ず流血沙汰になる。

頭がおかしくなった奴は自分以外の動く人影は全てゾンビだと思いつ込み、無差別に攻撃してくる。クスリをやっている奴は頭がおかしいから、大して理由もなく襲ってくる。宗教めいた連中は、人間を殺す事が天から与えられた使命だと勘違いしているからタチが悪い。

そんな中でも最悪なのが、暇潰しあるいは自分の楽しみで人を殺すような連中だ。

そういった連中は全員が銃を持っている。元々持っていた猟銃だったり、主人のいなくなった銃砲店から略奪してきた物だったり。まれに、死んだ警官の銃で武装している者もいた。

奴らは「ヒャッハー銃だ！俺TSUEEE！」みたいな気分になり、自分がこの世で最強の人間だと思いつ込んで好き放題やっている。銃は弾さえあれば、ゾンビや人間を殺せるからだ。そして生存者の一般的な武器である鈍器では、銃に立ち向かうのは自殺行為である。

そうして生存者の中でも強い力を持った連中は、殺しても強姦でも楽しんでやるようになる。霧島を襲ったという、偽自衛官が例

だ。

俺達はそういった輩を見つけると、問答無用で射殺した。生かしておいたらこちらの身が危険だし、そもそも生かしておく価値もない。

トラックはゆっくりと進んでいく。20センチ程降った雪に道路は埋もれていたので、トラックの脇に規則正しくならんでいる電柱から判断してここが道だとようやくわかる。

荷台後部の幌を明け、外を見る。灰色の雪なので光の照り返しで目をやられる事はないが、それでも辺り一面灰色に染まっただけは、自分がどこにいるのかわからなくなってくる。

しばらく町中を走り続け、ようやく俺達はよさそうな建物を見つけた。

一階は大型トラックでも駐車出来そうな車庫になっている3階建てのその建物は、どうやら建築会社の事務所らしかった。外から見た限りドアや窓ガラスが破壊されている形跡はなく、誰も立ち入っていないと思われた。

少し離れた場所にトラックを止めると、俺と明はラインを連れて事務所に偵察に向かった。もしゾンビや生存者がいたら厄介な事になるかもしれないので、まずは安全を確保する必要がある。敏夫は不測の事態に備えて運転席で、霧島は子供達の面倒を見るためにトラ

ツクに残った。

小銃を構えて、雪に埋もれつつある町を進んでいく。ラインが一番先頭に立って進んでいるので誰かいたら吠えて警戒を促してくれるだろうが、先日ゾンビの大部隊に接近された例もある。きちんと自分の目で確認しなければならない。

道路に積もったままの灰色の雪の上には、俺達を通った跡以外に足跡はない。つまりごく最近ここを通った者はいないという事だ。しかしこの町で雪がどのくらいのパースで積もったのかがわからないので、大してあてにならないが。

すぐに、目標の事務所が見えてきた。建設会社の名前の看板が入口に掲げられている。一階にある車庫のシャッターは閉められたままだ。

「よし、僕がまず行ってくる。武は援護よろしく」

「わかった。ライン、ゴー」

そう言うと、ラインは放たれた矢のように事務所へと走って行った。その後を冬季迷彩に身を包んだ明が、89式小銃を構えつつ事務所に近づいていく。

俺は路肩に放置されていた、積もった雪のせいで雪の塊にしか見えない乗用車の陰に隠れた。そして地面に伏せると、64式小銃の二脚を立てて僅かに身を乗り出す。

小銃のスコップを覗き、明が近づいていく事務所を観察する。まずは窓を見て、続いて屋上を見る。人影が見えたら、即座に明に警告を発する。人影が武器を持っていたら、問答無用で発砲する予定だった。

幸いな事に誰も出て来ることなく、明はラインと共に事務所までた

どりに着いた。明がこちらに向けてハンドシグナルで『こつちに来て』と伝えてきたので俺は立ち上がり、油断なく小銃を事務所に構えて小走りで進む。

「鍵が掛かっている」

事務所の入口にたどり着くなり、明がそう言ってきた。ラインは吠えていないので、事務所の中には誰もいないようだ。「終わりの日」で誰かが出勤してくる前に、ゾンビが発生したのかもしれない。とにかく、中に人の気配はしなかった。

「蹴破る？」

「後で使う事になった時、ドアがぶっ壊れてたら困るだろ」

俺はそっぴいながらしゃがみ、腰のポーチから先の曲がった針金のような物を2本取り出した。そして入口のドアの鍵穴に、その先端を突っ込む。

俺が取り出したのは、いわゆるピッキングツールという物だ。名前の通り、ドアや窓の鍵穴に突っ込んで弄り、ロックを解除するための道具である。もちろん、犯罪の道具だ。

これは以前生存者を助けた時に貰った物だ。昔は窃盗犯だったというその生存者を避難所に連れていく時に、持っていたらマズイ代物という事で礼を兼ねて使い方を教えてもらうと共に貰ったのだ。

それより前は建物に入る時は、ドアを破るか窓を叩き割るしか手段がなかった。鍵が掛かっている建物なんてほとんどなかったし、そういった建物は大抵危ない先客がいる場合が多い。建物の一部を破壊して侵入すると大きな音が響き、ゾンビや危険な生存者に気づかれる恐れもあったので、音を出さず壊さずに侵入出来るピッキングツールは大変便利だった。

最初は難しかったが、練習する内に鍵の解除にかかる時間はどんどん短くなっていった。練習材料はあちこち鍵の掛かった家にあつて困らなかつたし、何より時間もたくさんあつた。

ピッキングツールを鍵穴に突っ込んでしばらく動かしていると、しばらくしてカチャリという音がした。明が頷き、俺は9mm拳銃を抜いて一気にドアを開いた。

「陸上自衛隊だ！ 誰かいないか!？」

明がそう怒鳴りながら、89式小銃を構えて事務所に踏み込む。足元に不審物やワイヤーの類はない。周囲にセンサーも見えないから、俺は仕掛けてないようだ。

室内では長くて重い64式小銃は使いづらいたので拳銃に持ち替えた俺も、明に続いて事務所に入る。事務所の1階には、誰もいなかった。長い間閉め切られて放置された家が発する、カビの臭いが漂ってくる。

明も89式から拳銃に持ち替え、1階を搜索する。やはり誰かが出勤してくる前にゾンビが現れたせいか、事務所は荒らされた形跡はない。1階には応接室や説明用らしい家屋のミニチュアモデル、そしてガレージに続くドアといくつかの事務机が並んでいるだけだつた。

机の脇にあつたホワイトボードには、「明日は臨時休業」と書かれていた。だから誰も来ていなかったのだ。

「僕はガレージを見てくる。武は上の階を見てきて」

明はそう言って壁に掛かつた鍵束を手に取り、ガレージに通じるドアの鍵を探す。言われた通り、俺は上に向かう。

上の階に通じる階段は広いが、それでも小銃を構えたままでは進みづらい。建物内は暗く、俺は右手に拳銃を握り、左手にLED電球のフラッシュライトを逆手に構える。階段を照らし、ラインを先に2階に行かせた。

しばらくしてラインが一回吠える。それは安全を確認した、というラインの合図なので、俺は安心して2階へ向かった。

2階は事務室だった。部屋にずらっといくつもの事務机と棚が並んでいる。机の上に置き忘れられていた書類は、2年間の内に湿気を吸ってヨレヨレになっていた。

一通り事務室を回ったが、死体もゾンビもなかった。時が止まったままの事務室を後にして、今度は3階に向かう。

3階には、今までの仕事の契約書やら設計図などの分厚いファイルが納められた棚などが並ぶ資料室のような広い部屋が一つだけあった。もちろん、誰もいなかった。

そのまま階段を上がって屋上に出ると、先程より雪の勢いは弱まっていた。屋上には転落防止用の柵と水のタンクがある以外は、何も無い。

屋上からはかなり広い範囲が見渡せた。事務所が面している通りはかなり広い所まで見えるし、誰かが近づいて来たらすぐにわかるだろう。

屋上から周囲を見回し誰もいない事を確認した後、無線でトラックで待機している敏夫達を呼んだ。すぐにエンジン音と共に、建物の陰から73式大型トラックが姿を見せた。

1階のガレージのシャッターが開き、トラックがバックで入っている。建設会社という事もあるのか、ガレージは大型のトラックでも余裕で入れる面積と高さだった。

1階に戻ってガレージに向かうと、早速トラックから霧島や子供達

が下りていた。

「ガレージは臭くなる。3階に広い資料室があるから、そこに子供達を」

「わかったわ」

霧島はそう答えると、懐中電灯を持って子供達を3階に連れて行く。俺が渡したはずのキーカービンは、ここが安全だと思っているのかトラックに置きっぱなしだった。

無用心にも程がある。いつどこでゾンビやイカレた生存者に襲撃されるかわからないのに、身を守るための銃を手放すなんて。

もし俺達の気が変わって霧島を襲ったらどうなるのか。子供達を除けば男三人に女子一人の状況なのに、あまりにも無用心すぎやしないか？

そんな事を思って、ようやく俺は、霧島が俺達を信用してくれているのだとわかった。自分が銃を持たなくても、皆を守る程俺達は強いと思ってくれているのだ。そして常に銃を持っていなくても、俺達が彼女に何もしないと信じているのだ。

強い？ 俺が？

皆と一緒に脱出しようとして約束したくせに、自分だけ生き残って誰一人守れなかったのに？ 好きな少女が自分を犠牲にしてまでウイルスの治療薬を渡してくれたのに、結局まだまだゾンビは絶賛増殖中なのにな？

俺は強くない。俺は

。

「おい、何考え込んでいるんだ？」

そう言つて敏夫に肩を叩かれて、ようやく俺は我に返つた。あのまま考え続けていたら、きつと自殺したくなる程鬱な気分になつていただろう。

見れば明がトラックの荷台から工具を下ろしていた。敏夫はここでトラックを修理するのが一番だと考えたようだ。

「指示を頼む、リーダー」

敏夫がそう、少し笑いながら言う。

「……よし。じゃあ敏夫はトラックの修理。明は俺と一緒に、周囲にトラックを仕掛けよう」

「オーケー」

「わかった」

二人はそう言つと、それぞれ自分のやるべき事をやるために、必要な道具を荷台から下ろす。敏夫は工具、明は地雷や手榴弾が詰まつた背囊と大きな熊手を二つずつ持って、一つを俺に渡してきた。

開いたままのシャッターから外に出る。俺は南側、明は北側にトラックを仕掛けていく事になっていた。

事務所から100メートル程離れた場所まで来ると、俺は背囊を下ろして中からクレイモア指向性散弾を取り出した。そしてクレイモアを道路の両脇に並ぶシャッターが閉まつたままの店の前にいくつか置き、リモコン式の起爆装置に電源を入れる。

クレイモアは作動すると、前面に数百個の鉄球をばら撒く、三脚に乗つた弁当箱のような形をした兵器だ。通常は有線で爆発させるの

だが、俺が勝手に無線で起爆出来るように改造しておいたのだ。もちろん、俺達がゲリラ戦の際に支給された装備である。

電気で起爆する信管とコードで繋がれているのは、5000円くらいで売っている市販のトランシーバーだ。電波が150メートルまでしか飛ばない出力の低い玩具だが、アウトドアショップで大量に入手出来た

このトランシーバーを改造して、特定の周波数の信号を受信したらコードに電流を流して信管を爆発させるようにしてある。一つ一つ爆破していく事も出来るし、一斉に爆破する事も可能だ。

さらに歩道に生えている街路樹の枝に、手榴弾をセットした。クレイモアは数が少ないので、手榴弾を利用したトラップの方を主に仕掛ける。

手榴弾の安全ピンにはテグス糸が結ばれ、枝などを支点に曲げて、通りを横断するように糸を張った。テグス糸は透明で、積もった雪の上50センチ程に張ってあるので注意して見なければ気づけない。誰かがこのテグス糸を足に引っ掛ければ、安全ピンが引き抜かれ枝に取り付けられた手榴弾が爆発する。仮に糸を引っ掛けたのがゾンビだったとしても、頭のある位置に破片が撒き散らされるので確実に倒せる。

トラップを仕掛け終わると、割り箸の端に赤いすざらんテープを結んだ目印を、事務所の方角からしか見えない位置に突き刺しておく。これによって撤収する際に回収が楽になるし、何より仲間が間違つてトラップに引っ掛かる事がなくなる。

それが終わると、積もった雪に残った足跡とタイヤの跡を消すために、熊手を引きながら元来た道に戻った。熊手が踏まれて硬くなつた雪を攪拌させ、足跡を消していく。まだ雪が降り続けているので、

数時間もしたら完璧に足跡は消えるはずだ。

トラップを仕掛け終わったら、今度は近場で物資の調達を行う事になった。敏夫と明は近くの自動車整備工場で使えそうなトラックの部品を探しに、俺はスーパーパーやコンビニなどを回って食料などを。まあ、2年も経っているのだ。とつくに無くなっていると思うが。霧島はラインと一緒に事務所まで待ってもらおう。一応霧島には常に銃を持っていると言ったが、誰かに襲われた時にはラインの方が戦力になるだろう。

トラックの荷台から下ろしたスキー板を掃き、腰には子供が乗るようなソリをロープで繋いだ。徒歩では雪に足を取られて動きが遅くなるので、スキー板を取り付けて早く動くのだ。さらにソリに荷物を載せて引く事によって、歩くより重い荷物を運ぶ事が出来る。ソリの両端にはロープで輪を作り、未使用時にはリュックのように背負う事も可能だ。

ちなみにこれは、自衛隊や北欧などの軍隊の雪中戦時の恰好だ。戦争勃発直後に入隊したばかりの俺達は本格的に雪中戦の方法を教わる事はなかったが、俺がミリオタだった事が幸いした。以前自衛隊の雪中戦時の装備を見て、スキーで移動する事を思い付いたので。ちなみに、スキー道具とソリは、移動中に立ち寄ったスポーツショップで入手した。

訓練は受けているとはいえ、素人の見様見真似なので、本格的な雪中戦部隊と比べて行軍速度や戦闘方法は大きく劣るだろう。だが一応俺達全員にスキーの経験があったし、今はこれより速く雪上を動く方法は思いつけない。

大人の手助けが得られなかった俺は、何事も手探りでやって来た。怪我の手当や電気製品の修理方法、車の運転の仕方など、自分だけで身につけた技術は多い。今回の雪中での行動方法も、試行錯誤しながら自分のものにしていくしかないのだ。

5分毎に無線で連絡を入れる事、何かあったらすぐに知らせる事を皆で確認した後、ソリを背負ってまた町の南側へと進んでいく。ストックを雪に突き刺し、身体を前進させる。スキーは数年ぶりにやったが、すぐに感覚を取り戻した。

慣れればスキーでの移動も速く、走るよりも速いスピードが出せそうだった。途中で事故ったり襲撃される事を警戒して、スピードは抑えているが。

地図に記入されていた商店やスーパー、コンビニを回ったが、どこも略奪されていた。ドアは破られ窓は粉々にされ、店内は台風が通ったかのように商品が床に落ちていた。残っていたのは、文房具や化粧品など、食べられない物ばかりだ。

最初からスーパーなどには期待していなかったので、俺は別の場所へと向かった。裏の通りに面したその店は、いわゆるミリタリーショップというものだった。

ミリタリーショップとは、その名の通り、軍隊関連の商品を取り扱う店だ。海外では軍隊の放出品の実銃なども取り扱っている店もあるが、日本には銃刀法があるのでサバイバルゲームで使用するエアガンや迷彩服などを販売している店がほとんどだ。

ミリタリーショップに立ち寄ったのは、放出品の軍用糧食などが無いか調べるためだったのだが、店の入口のドアは何かでこじ開けられたかのように大きくドアノブが破壊されていた。俺達が来るより先に、誰かが侵入していたらしい。

落胆しつつも俺は9mm拳銃を抜き、片手にフラッシュライトを持ちながら店内に侵入する。スキー板は、入口の横に立てかけておいた。

店内はやはり荒らされていた。ドアが開いたままの入口から吹き込んだ雪が周囲に薄く積もり、溶けた雪で床が湿っている。

一階建ての店内の壁にはガラスケースが設けられ、中には箱に入ったエアガンがいくつも並べられていた。以前の俺ならここでテンションが上がっているところだが、生憎今は実銃を持っているのでそれほど心は動かされない。ここに侵入した人物もエアガンではゾンビも人間も倒せないとわかっていたのか、ガラスケースは割られず手付かずのままだった。

だが俺はガラスケース内部のある物に目を止めた。肩に掛けた小銃の銃床でガラスケースを叩いて割り、それを取り出す。

手の平程の大きさのプラスチックケースに入ったそれは、ドットサイトだった。ドットサイトとは銃に取り付けてレンズに映った光点を目標を撃つと命中する、光学照準機的一种である。明や敏夫の小銃や機関銃にも装着されている物だ。

大抵エアガンに取り付けられるのはレプリカのドットサイトだが、俺が今手にしているのはエイムポイント社製の実物だった。エイムポイント社のドットサイトは米軍を始めとして各国軍隊や警察で使用されており、実績と信頼性も高い。

どうやらこのドットサイトはアメリカから輸入されてきた物らしい。

レプリカは精々サバイバルゲームで用いられるくらいなので耐久性や精密さも低く、値段も1万円から2万円とお手頃である。しかし純正品は10万円台から20万円台と、非常に高価だ。

今のエアガンは、エアガンメーカーが実銃から型を取って製造したり、逆に実銃のメーカーがバリエーションとしてエアガンを発売したりと、外見だけなら実銃とほとんど変わらない。それは実銃のパーツをエアガンに取り付けられるという事でもあり、アメリカなどからこういった光学照準機やらフォアグリップ等を輸入するミリタリーショップが多々あった。

今銃に取り付けている光学照準機もその内壊れるかもしれない。その時に備えて、予備の照準機を入手しておくのだ。

輸入された実物のエイムポイント社製ドットサイトやイオテック社製のホロサイト、トリジコン社製のACOG低倍率スコープにAN/PEQ15レーザー照準機を近くにあったカゴに放り込み、店内を回る。気分はさながら「コマンドー」に出て来るメイトリックス大佐だ。価格100パーセントオフでのお買い物である。

クロスボウや警棒、スタンガンなど武器になりそうな物は根こそぎ持ち去られていた。銃と違ってクロスボウ等は所持するのに許可はいらないのでこういったミリタリーショップでも売っている事が多かったのだが、先に侵入した連中が持って行ったようだ。警棒はともかく、スタンガンなんてゾンビ相手に効果があるとは思えなかったが。

衣服が売られているコーナーに来ると、床には数着の迷彩服が散乱していた。侵入者が何着か持って行ったのか、迷彩服がかかったラックにはかなり隙間がある。

放出品の実物の迷彩服は、普通の服に比べて防寒性能や耐熱性に

優れているだろう。子供達にはサイズが大きすぎて無理だが、霧島はギリギリ切れそうだった。寒さを凌ぐために、霧島に何着か持って行く事にする。

……迷彩服を着た女子って、なんかイイよね？

店内や裏の倉庫をあらかた回ったが、やはり軍用糧食の類は見つからなかった。持ち去られたのか、それとも元々なかったのか、あるいはどこかに隠されているのか。恐らく一番最後だろう。侵入者達は食料を見つけられなくて八つ当たりしたのか、壊れたレジやショーケースの割れたガラスがカウンターの床に転がっていた。

ふと、俺はカウンター内部の床のカーペットの端が、少しだけめくれているのに気づいた。床に接着剤で貼付けられた物ではなく、コンクリートの床に敷かれている。何の気無しにカーペットをめくった。すると床から、収納スペースの物らしきフタが現れた。フタを開いた俺は、思わずニヤリと笑っていた。

「ブンゴ」

そう呟いて床下の収納スペースから取り出した段ボール箱を開けると、中からは真空パックされた軍用糧食が出て来た。表面には「MRE」と印刷されている。

「よりによってMREかよ……」

そう言いながらも、段ボールごとMREを持っていくことにした。

MREは、アメリカ軍の携帯糧食だ。真空パックされて長持ちし、栄養は十分。さらに様々な宗教の人間のために、バリエーション豊かなメニューを用意してある、完璧な軍用糧食だ。

味を除いては。

MREの正しい名称は、「Meal, Ready-to-Eat」、つまり「すぐ食べられる食事」である。しかしあまりのマズさに、現場の兵士達からはこんな名称がつけられている程だ。

Mr.E (ミステリー)

Meals, Rarely Edible (とても食べられたものじゃない食物)

Meals Rejected by the Enemy (敵から拒否された食べ物)

Morsels, Regurgitated, Eviscerated (吐き戻され、骨抜きにされた一口)

Mentally Retarded Edibles (精神薄弱料理)

Meal, Ready to Excrete (すぐ排泄できる食べ物)

Meals Rejected by Everyone (誰も拒否した食べ物)

Materials Resembling Edibles (食べ物に似た何か)

”Meals Rejected by Ethiopians” (エチオピア人すら拒否した食べ物)

MREはとにかくマズい。こんな物を子供達に与えても、その味付けと臭いのせいで、ほとんど食べられないだろう。

だが今の時代、食べられる物は何でも貴重だ。マズイという理由で他の食事が選べるような状況ではない。生き延びるためには何でも食っていかねばならないのだ。

俺はミリタリーショップから回収した光学照準機や迷彩服、そしてMREを、一緒に持ってきたソリに載せてロープで固定した。続いてソリの先端に取り付けられたロープを腰に結ぶ。そしてスキー板を身につけ、勢いよく漕ぎ出す。

雪は、そろそろ止みそうだった。

第18話 2013年2月2日

蝋燭のオレンジ色の弱々しい炎が、室内を薄暗く照らす。俺はその小さな炎を見つめながら、壁に背中を預けて座り込んでいた。

「……眠れないの？」

その声で顔を上げると、寝袋に包まっていた霧島が目を擦りながら上半身を上げていた。

今は午前2時半。俺は2時に明と屋上の見張りを交代して、この3階の資料室で休む事になっていた。

しかしいくら瞼を閉じても眠ることは出来ず、先程から蝋燭の炎を見ていたのだ。

「悪い、起こしちゃったか？」

「うっん、わたしがたまたま目を覚ましちゃっただけだから。それより、寝ないと疲れがとれないよ？ いつも無理してるでしょ、武は」

「無理？ 無理なんか……」

そこで考えて、

「……してるな」

と答えると、霧島は笑った。

真冬の深夜2時という事もあって、建物の中にも吐く息は白い。子供達はセーターや防寒着を何枚も重ね着し、霧島は俺がミリタリーショップで見つけてきた米軍のACU迷彩の上着を着て、コンク

リートの床に毛布を敷いてその上で寝袋に包まって寝ていた。

霧島の隣で寝ている子供達は起きる気配がない。夕食後はさっさと眠ってしまったのだが、子供だから仕方がない。18歳の俺達が物凄く疲れる環境なのだ、10歳の子供なら感じる疲労も俺達以上だろう。

「眠らないの？」

「眠れないんだよ。最近よく悪夢を見るからな」

「悪夢？」

霧島が不思議そうな顔で尋ねてくる。俺は膝の間に抱いた64式小銃を、強く抱きしめた。

がさがさという音がしたので霧島を見ると、霧島は寝袋から抜け出そうとしていた。子供達を起こさないように静かに寝袋から出ると、彼女は俺に近づいてくる。

「少し、話さない？ わたしも目が冴えちゃったし」

確かに眠れる気分ではなかった。目を閉じても眠気は一向に襲ってこないし、寒さがより眠気を吹き飛ばしている。このままここでしやがみ込んでいても、ただ眠りたいのに眠れないという苦しみを味わい続けるだけだ。

そういうわけで、俺は霧島の提案に乗った。64式小銃と火の点いた蝋燭が乗った皿を持ち、そっと資料室のドアを開ける。そのまま廊下に出ようとしたが、俺は霧島が銃を持っていない事に気がついた。

「おい、銃はいつも持ってろって言っただろ」

「いいじゃん。何かあったら守ってくれるんでしょ？ わたしはか弱い女の子だよ？」

「本物の自衛官に銃を突き付けてくる奴のどこが弱いんだよ……」
そう言うと、霧島は口を尖らせて無言でローキックを繰り返してきた。それをかわし、「2階に行くか」と言って先に階段を下りていく。

2階の事務室には誰もいない。明はラインと一緒に屋上で見張りだし、敏夫は1階の車庫でトラックと一緒に寝ているだろう。トラックの整備は明日か明後日には終わると敏夫は言っていた。どうやら燃料の中に不純物が入っていて、そのせいでエンジンの燃料噴射ポンプが詰まっていたらしい。

手近な場所にあった椅子に座り、蝋燭を事務机の上に置く。しばらくして、K1カービン銃を持った霧島が事務室に入ってきた。

「さて、と。じゃあまず過去について語り合いましょうか。お互いを知るためには過去を知らないかね。わたしもあんた達の事、よく知らないし」

茶化すように言いつつ、霧島が事務机を俺の真正面に引きずって来て座る。そして彼女は、自分の過去について話し始めた。

霧島は普通の家庭に生まれた一人っ子だったらしい。父親はサラリーマン、母親は専業主婦という平均的な家族だった。

「終わりの日」の時、霧島は学校にいたという。幸い霧島達のいた町はゾンビの数が少なく、また農業も盛んだったために自給自足が出来ていたそうだ。無事な人間は避難所に集まり、そこで去年の1月23日まで助け合って生き延びていた。霧島も避難所で子守の

仕事をしていたらしく、彼女が連れていた子供達は彼女が避難所で面倒を見ていた連中らしい。

だが核戦争が勃発した時、彼女達の厳しいながらも平穏な日々は終わった。自給自足を可能にしていた農作物が死の灰で放射能汚染され、人々はいきなり残り少なくなった食料を奪い合って争いを始めた。

霧島も避難所にいた両親とはぐれ、友人を何人も暴徒に殺され、子供達を連れて命からがら町を逃げ出した。そしてどうにか町から離れたガソリンスタンドに逃げ込み、そこで隠れて過ごしていた。

で、後は前に俺が聞いた通りだ。ガソリンスタンドに偽自衛官が訪れて霧島を強姦しようとしたが返り討ちにあい、そしてその後俺達がやって来て今に至る。

「はい、わたしの話はおしまい。次は武の番ね」

明るい口調でそう言っていたが、俺は彼女が家族や友人の事を語る時、その声が震えていた事に気づいていた。

彼女も、辛い出来事乗り越えて今日まで生きてきたのだ。親しい友人を何人も失い、両親は行方不明の状態で、それでも子供達を守ろうと必死に生き延びたのだ。

俺だけではない、霧島も、明も、敏夫も、いや世界中のほとんどの人が、大切な人や親しい人を失っているんだ。皆辛く、苦しい出来事乗り越えようとしているんだ。

俺は正直言つて、昔の事は話したくはない。話せば辛い思い出が蘇ってくる。死んだ仲間達との約束を果たせなかった俺は、昔の事を思い出すだけで頭を打ち抜きたくなる程の後悔と罪悪感に襲われていた。

だがあの日、世界を救おうと決心した時、俺は皆の生き様を語り継ぐと決心したのだ。それが皆が生きた証であり、俺が出来る供養であるからだ。

しばらくして、俺は重い口を開いた。

「今から話す事は、全て本当の出来事だ。信じられない事もあるかもしれないが、ふざけないで聞いてくれるか？」

そう尋ねると、霧島は黙って頷いた。それを確認した俺は、一つ一つ、事実を語り始めた。

「全ての始まりは、俺だったんだ。全部俺のせいなんだ」

俺は小学生の時に交通事故にあった。脇見運転をしていた主婦の乗用車に背後から高速でぶつかられた俺は、背骨を折る重傷を負って昏睡状態に陥った。

世界的な製薬会社で研究員をやっていた俺の父親は、俺を助けるためにある薬品を開発した。自然界に存在するあるウイルスに手を加えたその治療薬は、酷く傷ついた組織でも再生させる効果があった。治療薬を投与された俺は、奇跡的に回復した。背骨を折って確実に半身不随の身体になると医師は言っていたが、目を覚ました時、俺には何も問題は無かった。

「だけど親父は、その治療薬を開発した事で会社の上層部に目をつけられた。親父はその治療薬を軍事目的に転用する事を強要されたが拒否し、部下の女研究員が後を引き継いだ」

先進国の軍隊は、とにかく兵士が戦死することを嫌う。親父の治療薬にはどんな傷でも再生させる効果があり、製薬会社上層部はそれを軍隊用に転用して大きな利益を生み出そうと考えた。

結論から言えば、研究は失敗した。さらに手を加えられた治療薬は、損傷した組織を再生させる効果が向上し、筋力を強化させ痛覚も鈍らせる効果を生み出した。

しかしその治療薬を投与された患者は一度意識を失って心臓が止まった後、再び起きた。理性を失い食欲のみに従って、頭を破壊されない限り動き続けるゾンビとなって。

「当然製薬会社上層部は研究中止を決定した。だがその女研究員はそれに抗った。閑職に回された親父と一緒に研究を続けようとしたが、親父はそれを拒否した。しかし女の部下は、秘密に研究を続けた」

閑職に回された親父は、それから俺と多く時間を過ごしてくれるようになった。猫やキャンプに連れていってサバイバル術を教えるくれたり、持っていた猟銃を触らせてくれたりした。

もしかしたら親父は、その後起きる災厄を予期していたのかもしれない。そして俺に、銃の撃ち方や生き延びる為の術を教えたのかもしれない。

本当の事はわからない。だがそんな日々も長くは続かなかった。研

究を続けていた部下が、完成させた薬品を親父に見せに来たのだ。

「その女研究員は親父を愛していた。それこそ、病的なまでに。そいつは親父に完成させた薬品を使って、会社の上層部に食い込んでいこうと提案した」

親父は女研究員と彼女が完成させた薬品を拒否した。薬品を「悪魔の研究」と言い、彼女を告白しようとした。

だから女研究員は、親父を交通事故に見せかけて殺した。自分を愛してくれなかった、そんな自分自身な理由で。

その後女研究員は、ライバル会社に移った。完成させた薬品を手土産にして。

だがその会社は、女研究員を冷遇した。その会社が欲しかったのはあくまで治療薬で、女研究員はそのオマケでしかなかった。

その会社はさらに治療薬の研究を続けようとしたが、親父の会社同様途中で放棄した。何をどうやっても出来るのはゾンビを生み出すウイルスだけで、研究は封印された。

親父を殺してライバル会社に移籍したその女研究員は、自分の待遇に不満を抱いた。そしてある計画を、独自に進めた。

世界中のテロリストにウイルスをばら撒き、全世界で同時にバイオテロを起こそうとしたのだ。

組織の大小、目的、人種は問わなかった。イスラム過激派からヨーロッパの移民排斥を掲げる右翼団体、世界を破滅させる事が人類救済の道と信じる宗教団体から、それこそ日本の左翼系過激派まで。

とにかく世界中のテロリストにウイルスを渡した。

そして、「終わりの日」が訪れた。

「ゾンビが発生した時、俺は学校にいたよ。ゾンビは校庭に侵入してきて、体育の授業中だった生徒を食い殺して数を増やして、そして校舎に入ってきて来た」

パニックに陥る生徒達。我先に逃げようと他人を殴り、蹴り踏み付けて教室から飛び出していく鬼のような形相の少年少女達。校舎中から悲鳴と絶叫、そしてゾンビの呻き声が聞こえていた。

俺は身近な物を武器にして戦った。クラスメイトや途中で助けられた他クラスの生徒を加え、まずは学校に比較的近い場所にあった俺の家に逃げ込んだ。

「ラインっているだろ、あのシェパード。あれ俺の飼ってる犬なんだよ。思えば『終わりの日』から生き残ってる最初からいた俺の仲間って、あいつしかいないんだよな」

「それって」

霧島は俺の話の意味がわかったのか、顔を強張らせた。俺は手で続きを言わないように制し、話を続けた。

幸い、初日の夜は何事もなく過ごせた。翌日俺達は、近くにある警察署に向かう事になった。

だが警察署は既に放棄されていた。度重なるゾンビの襲撃と署員の死亡により、避難民と共に脱出したのだ。

俺はそこで拳銃を手に入れた。署内に残っていたゾンビに噛まれた警察官が、俺に渡してくれたのだ。

「その警察署でな、俺は始めて人を殺したよ。俺に拳銃を渡してくれたその警察官をな」

霧島が息を飲むのがわかった。だが俺は気づかないフリをした。

「介錯のつもりだったし、本人から頼まれた事でもあった。だがあそこでその警察官　　中田巡査を殺した時から、俺は墮ち始めたんだと思う」

その後俺に、中学生の従姉妹から助けを求める電話がきた。一時は仲間割れしそうにもなったが、最後は皆ついて来てくれた。俺は中学校で従姉妹とその友人を助け、そして翌日市の北部にあるシヨッピングモールに向かった。市の北部は人口が少なく、必然的にゾンビも少ないと思われたからだだった。

シヨッピングモールはゾンビに包囲されていたが、動きが鈍かったので回避する事が出来た。俺達は誰一人死ぬ事なく、シヨッピングモールに逃げ込む事が出来た。

「それから1週間くらいは、世界が地獄だったのに本当に楽しかったよ。シヨッピングモールの中に侵入していたゾンビは少なかったから、あつという間に駆逐出来た。学校も規則もない状況を、俺達は羽目を外すような事はなかったけれども楽しんだ。」

「ただ、楽しい時間は長続きしない。楽しかったらそれ以上に、辛く苦しい時間がやって来る」

数日してから、シヨッピングモールに多くの暴力団員達が逃げ込んで来た。全員が銃で武装し、モール内の勢力図はあつという間に書き変わった。

俺も猟師のゾンビから手に入れたライフルと拳銃を持っていたが、相手は数十丁の銃で武装していた。銃は最強の武器だ。銃口を突き付ければ、どんな相手でも言う事を聞くようになる力だ。

その力である銃を持っているのが、警察官や自衛隊員なら問題はなかった。だが暴力団だ。全員反社会的な人間だった。

銃を使って避難民を威圧した暴力団員達は、その内好き勝手するようになった。人こそ殺していなかったが、そうなるのも時間の問題だった。

「そんな時だった。俺に戦う術を覚えてくれた、あの人がやって来たのは」

その女の人は、親父の会社の非合法部門に雇われていた傭兵だった。ゾンビ発生を受けて、俺の住んでいた市の研究所にあったウイルスのワクチンと治療薬を確保するために送り込まれたのだ。

だが途中で同じくワクチンと治療薬を確保しようとするライバル会社の特殊部隊と交戦し、その女の人は負傷した。そして俺達のいるシヨッピングモールへ、ゾンビを倒しながら逃げ込んで来たのだ。

「その女の人は親父と仲が良かった。そして俺が親父の息子でありシヨッピングモール内が不穏な空気に包まれている事を知ると、ライバル会社の特殊部隊員らが死んでいる場所を教えてください」

俺と仲間の一人は暴力団員達に見つからないようにしてシヨツピングモールを抜け出し、その場所まで行つた。そして俺達は、十数丁の軍用銃火器と大量の弾薬を入手した。

だがその直後、シヨツピングモール内の暴力団員達が暴れ始めた。一人が酔つた勢いで避難民の女性を襲い、そのままシヨツピングモール制圧になだれ込んだ。警察も治安もないシヨツピングモールは、彼らにとって天国に思えたのだらう。銃を持った自分達は最強で殺しも強姦も何でもやりたい事がやれる、そんな欲望が暴力団員達を支配していたのだ。

暴力団員達は女性を襲い、抵抗する者は殺し始めた。避難民達に抗う術は無かつた。銃を持っていない避難民達は、ただ逃げるしかなかった。

俺達は急いでシヨツピングモールに戻り、仲間を救助すべく行動を始めた。

「だが、遅かつた」

シヨツピングモールに逃げてきた暴力団員の中に、俺の知っている奴だった。とにかくそいつは不良や反社会的人物という名前がピツタリの、最低のクズ野郎だった。小学校、中学校共に俺はそいつと同じ学校で、何度もそいつにイジメを受けていた。

そいつは無駄に仲間が多かつたせいで、俺は学年中の児童からイジメの標的になつた。俺は何年もひたすら耐え、そいつとは違つた高校に行く事でイジメから逃れた。

そいつは 関口は、万引き窃盗カツアゲ暴行何でもやるようなクズだった。当然高校を中退し、暴力団員の下っ端になった。そしてその暴力団がショッピングモールに逃げてきた時、関口もまたショッピングモールに逃げた。ショッピングモールでも俺は散々関口に屈辱的な目に遭わされた。

「関口な、従姉妹を強姦してやがったんだよ。俺はキレたよ、今までにないくらいに」

足を切り付け指の骨を折って、最終的には2階から放り投げてゾンビの餌にしてやった。

「楽しかったよ、アイツの悲鳴と命乞いを聞くのは。今までイジメられていた俺が、ようやくその復讐が出来たんだ、楽しくないわけがない」

そう言いながら、俺は自分が笑っているのがわかった。口の端を吊り上げてそんな狂気じみた事を口走る俺を、霧島は黙って見ていた。

「とにかく、俺はそんな事態を招いた暴力団の組長を爆殺した。でも混乱のせいでショッピングモールの中にゾンビが侵入してきて、生存者はモール内のあちこちに散らばってしまった。

それから数日は、ひたすら生存者救助に駆け回ったよ。途中で発狂した連中と戦いながら、どうにかほぼ全ての生存者を助ける事が出来た。

それにその女の傭兵が無線機で連絡をとってくれて、ヘリコプターで救助が来る事がわかった。俺達はそれを希望にして、ヘリコプターが来るまでの1週間をどうにか耐え抜こうとした。でも

問題は山積みだった。

まず、途中で走るゾンビが出現するようになり、実質的に俺達の動きは封じられた。ショッピングモールの駐車場にヘリコプターを着陸させて救助してもらおうという計画はパーになり、俺達は危険な脱出プランを練る羽目になった。

そして二つめの問題は、俺がクラスメートの女子に告白された事だった。そいつは高校を脱出する時からずっと一緒に行動してきた仲間だった。二次元の世界に生きる、俺も何となくいいな、と思うほどの美人だった。

「オーケーしたの？」

「即断出来るわけないだろ。その時は考える時間くれて言って、結論を後回しにした」

「断るつもりだったの？」

「いや、オーケーしようと思っていた。俺もそいつに好意を持っていたからな。でも、それを快く思わない奴がいた。

……俺の従姉妹だ」

俺の従姉妹は関口に乱暴されてから、徐々に心を病み始めた。彼女は親と連絡が取れず、そこに乱暴された事が加わり、俺に頼る事でどうにか心の均衡を保っているような状態だった。

だが俺は、彼女を突き放してしまった。俺がやらなければならぬ事がたくさんあって彼女に構う暇はなく、さらに告白された事で従

姉妹の事を考える余裕を失っていた。

従姉妹は本当に、俺の事を慕っていた。そして心のよりどころにもしていた。そんな俺が他の女に奪われてしまふ、そう考えた時、彼女の心の均衡は崩れた。

「完全に心を病んだ従姉妹は拳銃を持ち出して来て、俺を撃ち殺そうとした。だが従姉妹のクラスメートの男子中学生がたまたまそこを通りがかり、従姉妹はそれを誤射した」

男子中学生を撃った従姉妹は、すぐ我に帰った。そして自分のやった事を知り、逃げ出した。

俺はゾンビの群れを掻き分けて彼女を追った。だが俺が追いついた時、彼女はゾンビに追い詰められたせいで屋上から落ちそうになっていた。

落ちる直前、俺は彼女の手を掴んだ。掴んだはずだった。

だがその時になって、俺の背後にゾンビがやって来た。従姉妹を掴んでいて動けなかった俺は、拳銃を抜いてゾンビを撃った。

俺が妹を掴んでいた手で拳銃を握っていたのに気づいたのに、そう時間はかからなかった。

「笑えるだろ？ 守る守ると言っておきながら、俺がその手であいつを殺したんだ」

「でも、事故だったんでしょ？ そんなに思い詰める事はないじゃない」

「俺はゾンビが背後に立った時、死にたくないって思った。俺は従姉妹の命を手放してまで、自分の身を守ったんだよ。俺って、本当に最低の奴だ。」

でも、仲間達が支えてくれた。だから俺は、従姉妹の分も生きようとした。もう誰も死なせないと誓った」

だが、脱出前日になり、シヨッピングモール中からゾンビが消えた。バイオテロを引き起こした張本人の女研究員が、その町に来ていたんだ。

その女研究員は特殊な周波数を使ってゾンビを外に誘い出した上で、俺を呼び出した。俺は言われた通りに女研究員の元に向かい、そこで一緒に来るよう誘われた。

はた迷惑な事に、女研究員は俺を死んだ親父の代わりに見ていたのだ。俺を連れていくために、わざわざゾンビが徘徊する中俺の住んでいる町にやって来て俺の居場所を特定した。

当然俺は拒否した。そして女研究員を警察に引き渡すために拘束しようとしたが、女研究員は足を撃たれたにも関わらず化け物じみた能力で逃げた。

「そしてヘリコプターが来る日になった。何人かを除いて生存者は全員が脱出する事を決めた。」

だがあちこちに走るゾンビはいる。だから俺と傭兵の人が囷になって走るゾンビを引き連れて遠くまで走り、その間にヘリコプターが着陸して皆を救助する。そんな作戦を立てた。

そして作戦開始直前、俺は告白してきた少女に、『ヘリコプターの中で返事をする』と言った。それはいわゆる死亡フラグだったが、俺は自分が死ぬとは思っていなかったし、そのつもりもなかった。俺が死なせた従姉妹と男子中学生の分も生きるため、絶対失敗出来なかった。

そうして作戦は始まった。俺はバイクの上から迫り来るゾンビ達を撃ち倒し、回収地点である、俺達がゾンビ発生初日に脱出した高校に戻ってきた。

「だが、あの女研究員が先回りしてやがった。対空ミサイルでヘリコプターは退避し、一緒に囷を務めた女傭兵は撃たれて重傷を負った。俺は一人で、そいつを倒さなきゃならなかった。でもそいつは、とんでもない化け物だったんだ……」

そいつは生物兵器の専門家だった。作った生物兵器を自ら注射し、そして甲虫と蜘蛛と人間が混ざったような化け物と化した。頭を撃つても死なない。銃弾は硬い表皮に弾かれる。蜘蛛の成分が入ってるから目が大量にあり、後ろから近づいても気づかれる。オマケとばかりにそいつから逃げる途中に銃を壊され、ほとんど丸腰の状態で戦う事を余儀なくされた。

だが俺は、その場にある物と知恵をフル活用して戦いを挑んだ。自ら囷になってそいつをおびき寄せ、猛スピードで走る車でそいつを校舎の壁に叩きつけた。そして車と壁に挟まれて動けない状態のそいつに、科学部の部室から持ち出した液体窒素をぶっかけた。

そいつは細胞さえ無事なら何度でも蘇る、某ラピュタ王が欲しがるようなチート能力を持っていた。だが液体窒素で細胞をまるごと損傷させる事で、そいつの復活を阻止する事が出来た。

俺はとうとう、親父の仇であり、全世界を恐怖と混乱に陥れた張本人を殺害する事に成功した。

「だが一難去ってまた一難。女研究員が地下で育てていた、巨大な化け物蜘蛛が外に出て来ていやがった。俺はそいつとも戦う羽目になった」

機関銃で巨大蜘蛛を撃ち、必死にタンクローリーまでおびき寄せた。途中で重傷を負っているのに女傭兵が援護してくれて、俺はどうかタンクローリーごと巨大蜘蛛を爆殺する事に成功した。その際背中を巨大蜘蛛に削られ、その傷は今でも残っている。

「俺はようやく終わると思った。ワクチンと治療薬を自衛隊や警察に引き渡し、人類は救われる。そう思った。

当然だろ？ 何度も死にそうな目にあっただから、それが当然の結果だろ？

映画とかじゃ、主人公とヒロインがキスしてエンドロールだ。俺もあいつに、『好きだ』って言うつもりだったんだ。

……でも、世の中って、自分の思い通りにはならない。俺はその時に、身をもって知ったよ」

近づいてくるヘリに、俺達は必死に手を振った。だがヘリは減速す

ることなく突っ込んできて、墜落した。

原因は、生存者を救助した際にゾンビに噛まれた人間が何人か出ていた事だった。俺達が持っていたウイルスの治療薬は、噛まれてから意識を失うまでに注射する事でゾンビ化する事を防ぐ事が出来る。しかし使用可能な治療薬の数よりも、噛まれた人間が一人だけ多かった。噛まれたのは男の子で、ヘリから放り出されるのを防ぐために両親が噛まれた事を隠していた。

だが男の子がゾンビ化し両親の首に噛み付き、すぐにゾンビは増えた。何人もゾンビに噛まれ、機内は大混乱に陥った。

「治療薬は量産するために、最低でも2本は残しておく必要がある。噛まれた連中は、残しておいた治療薬を寄せと迫った。噛まれている連中は、いずれゾンビになる噛まれた連中を放り出そうとした。」

そして、銃撃戦になった。パイロットは流れ弾に当たって負傷。俺の仲間達は必死に止めようとしたが、同時に噛まれた奴らもゾンビになった」

結局、俺が救出出来たのは、俺に告白してきたあの少女だった。他は、全員死んでいた。

双子の少女と冷静なツッコミ役だった少女は、銃撃戦で死んだ。親友だった男子生徒は、争いを止めようしている最中にゾンビに噛まれ、自ら頭を撃ち抜いた。傭兵の女の人は、出血多量で死んだ。パイロットは、最後までヘリを無事に着陸させようとしたが果たせず、出血死した。

「一人残ったあいつは、ゾンビに噛まれていたよ」

「……！」

「俺は世界なんてどうなってもいい。お前を助けたい。そう言っ
てあいつを助けようとした。だがあいつは自分よりも世界を救って
て言い、それで」

『ごめんね。最期に一緒にいてくれるのが武で、よかったよ』

そう言っつて、俺に治療薬を使わせないために、自ら頭を撃ち抜いた。
一人、俺を残して。

「俺は、俺はそれでもどうにか前に進もうとした。ラインを唯一の
相棒にして、過去は振り返らず、世界を救おうと決心した。

そしてきちんとワクチンと治療薬を届けた。各地を回って人々を助
けた。敏夫と明も途中で加わって、死んだ皆のために多くの人々を
助けようとした。

でも、無理だった。所詮俺は、ただのミリタリーオタクの高校生に
過ぎなかったんだよ。ただの高校生が世界を救えるわけがない、ま
さに厨二病ってやつだ」

俺はそう言っつて、カーテンを閉め切られた窓の外を指差した。

「そしてこのザマだ。高校生に核戦争を止める力なんてない。俺達
がやってきたことは、全部無駄だったんだよ」

「……そんなこと」

「じゃあ俺が今までやって来たことはなんだったんだよっ!? 美雪が、ゴリが、奈津美が、亜衣が、麻衣が、リサさんが、ニコライさんが、世界を救うために自分の命を犠牲にしたのに、これはなんだよっ!? 遥と緒方を殺してその分も他の人を助けようと決心した、俺はどうなるんだよっ!?

全部、何もかも無駄だったんだよ! 俺がやってきた事も、仲間が死んだ事も、命懸けでワクチンと治療薬を届けた事も、全部無駄だったんだ!!

死んだ! 皆死んだんだよ!!そしてこれからもどんどん死んでいく!!

俺は、何も出来なかったんだ!!」

俺は肩を上下させながら、はあはあと荒い息を吐いた。しかし霧島は怒鳴った俺に怯えるわけでもなく、俺の顔を指差した。

「武、泣いてるよ……」

「え……?」

思わず頬に手を触れる。生暖かい液体が目の端から頬を伝って流れ落ち、床に染みを作っていた。

皆が死に、一人世界を救う決意をしたあの日から、俺は泣かなかつた。あの日の事を思い出しても、旅の途中で親しくなった奴が死んでも、俺は涙を流さなかつた。

なのに、なんで俺は泣いているんだろう?

「頑張れば報われるんじゃないかよ……努力すれば必ず結果は出るって、皆言ってたじゃないかよ……。映画もテレビもアニメもゲームも、そんな言葉が溢れてたじゃないか。

なのになんで俺は報われないんだよ。こんなんじゃ、俺、皆に顔向けできねえよ……」

出来る事ならやり直したい。タイムマシンがあるなら今すぐ過去に行って、あの女研究員を殺して全てを無かった事にしたい。

そう言った途端、霧島が俺を抱きしめていた。腕を背中に回し、まるで子供を落ち着かせるかのように俺の顔を胸元に抱き寄せている。いい香りがした、女の子特有の甘いような香り。何日も風呂に入っていないのに、霧島からは普通の女の子の香りがしていた。

「……最近、夢でよく見るんだ。死んだ皆が俺を取り囲んで、俺に非難の言葉を投げ掛けてくる。約束したのに。お前じゃやっぱり無理だった。あんな大口叩いた癖に、所詮はただのオタクだった。そんな事を言ってくる。そして俺は何も反論出来ない。きつと皆、俺を恨んでるんだよ。皆俺に願いを託して死んでいったのに、俺は結局破滅を止められなかった……」

「そんな事はないと思う。一生懸命頑張ったなら、褒める人はいいても罵る人はいないよ。」

武はわたしより何度も辛い目に遭って、悩んで今まで生きてきたんでしょ？ 多分わたしなら、悲しみと辛さでとくに自殺してると思う。でも武は生き続けている。今は生きるってだけでもすごい時代なんだよ？ なら武はすごい人だよ。わたしなんか頑張っても、武の足元にも及ばない」

そう言いながら子供をあやすように軽く背中を叩いてくる霧島に、俺の目からますます涙が溢れ出てくる。俺はこの時、霧島にもっと自分の事を知ってほしいと思った。

だから、自分の心の奥底で封印していた気持ちを吐き出した。本当の俺を知ったら、霧島は俺を軽蔑するかもしれない。だがそれでも

よかった。

「……俺さ、世界がこんなになって、本当は良かったなんて感じてるんだ。ゾンビが現れて法律も身分も何もかも無くなった時、俺はこれなら自分が活躍出来るって思った。ただテストの点がいいだけで踏ん返り返っている連中より、知識を実際に応用出来る俺の方が役に立つ。そうなら今まで空気扱いだった俺を、皆が尊敬してくれるんじゃないかって。

銃を手に入れた時も、俺は自分が無敵になったって思った。中学生の時俺をいじめていた関口を、銃とナイフを持った俺は簡単に圧倒出来た。そして散々いたぶった挙げ句、ゾンビに食い殺させた。自分勝手な振る舞いをしていた暴力団員達も、俺が撃ち殺した。

へりで脱出出来るって思った時、俺は正直言っただけだと思っただよ。世界が元通りになれば、俺は武器を取り上げられて、また目立たない空気みたいな存在にされてしまう。それよりゾンビ溢れる混乱した世界で、銃の力で自分の好きなように生きていきたいって。

そして今、俺は人殺しを楽しんでいる。正当防衛って名目で、俺の銃の存在を知らずに襲いかかってくる連中を返り討ちで皆殺しにするのが好きになった。戦争が始まってからは、敵兵の頭を遠くから撃ち抜くのが好きになった。人を殺す事に興奮を覚えるような、イカレた野郎になったんだ、俺は。

……もしかしたら、これって天罰なのかな。人を殺す事に楽しみを抱いた俺に、神様が罰を与えたのかな？」

「武がどんな人でも、わたしにとって武はすごい人だよ。現に、武はわたし達を守ってくれてるでしょ？ 大抵の人なら見捨てるよ、だって他人の面倒を見る余裕なんて誰にもないもん。」

だから、武はいい人なんだよ。その事を武は誇っている」

その言葉を聞いた瞬間、俺は子供のように声を上げて泣き出した。今まで心の奥底に溜まっていた、心を腐らせていく気持ちが、泣く事で一気に消えていくようだった。

思えば、今まで誰にもここまで俺の事を打ち明けた事はなかった。明や敏夫にも、俺が殺しを楽しんでいる事は言った事はなかった。

核戦争が始まり、今までやった全ての行為が無駄になったと知った時から、俺の心は空中分解寸前の飛行機を無理矢理直しながら飛ばしているような状態になった。気持ちは徐々に沈んでいく。でも根本的には直らない。見た目は普通だが、中身は腐っていつている。そんな感じだった。

でも霧島のおかげで、俺は全ての思いを吐き出せた。仮に霧島が慰めで言っているとしても、俺を肯定してくれる霧島の気持ちは嬉しかった。

今までやってきた事は無駄じゃない。俺はいい人だ。俺は頑張った、だから思い詰めるな。霧島の言葉で、俺は再び自分に自信が持てるようになった。霧島の言葉を聞かなくなったら、俺はおそらくずっと精神を病み続け、最終的には自殺か、気が狂って仲間に銃を乱射していただろう。

霧島は俺の鬱屈した気持ちを、全て消し去ってくれたのだ。

あの時から俺は、霧島に好意を抱き始めていたんだと思う。俺はあの時、霧島の事を守ろうと思った。

だが二度ある事は三度ある。俺がやる事成す事は全て無駄になると
いう呪いでもかかっているのか、俺は再び絶望の淵に叩き込まれる
こととなる。

だがあの時の俺は、能天気にも霧島に恋心を抱いていた。未来に何
が起きるか知っていたら、俺は霧島を、きっと好きにならなかつた
に違いない。

第18話 2013年2月2日（後書き）

総集編？ いいえ過去編です。今回を機に、もう一度「サバイバル高校生」を見て頂ければ嬉しいです。

あれから武はどうなったのか、どんな気持ちで生きてきたのか、今回はそれを描いたつもりです。

御意見、御感想お待ちしてます。

第19話 闇に光る眼

7月も半ばになり、トラックの剥き出しの荷台で揺られる俺達は、暑い日差しに身を焼かれていた。荷台の上の全員が帽子やフードを被り、まるでリストラされたサラリーマンの如く下を向いたまま黙っている。

「あー、暑い」

そう呟く頭にぐるぐると包帯を巻いた男は赤峰だった。ミニミ軽機関銃の銃身を杖代わりに、赤峰は包帯の下で犬のように短い呼吸を繰り返す。

「なら外せばいいじゃん、その包帯」

「馬鹿言うな。狼の顔を見られたら多分、いやきつと大騒ぎになるぞ。大抵の人間にとっちゃ、ミュータントは恐怖の対象だからな」

「大丈夫だ、問題ない。コスプレですって言い張ればいい」

「……今の時代、誰が狼男のコスプレ見て喜ぶってんだ？」

「腐った女子とか？」

「……」

赤峰は呆れたような顔をして（包帯で素顔は見えないからそんな雰囲気を感じた）、「もう話し掛けるな」とでも言うように顔を背けた。

「おい皆、後5分で着くぞ！」

助手席の窓を開けて若い男が顔を出して叫ぶと、顔を俯けていた荷台の男達がもぞもぞと動き始めた。

今まで寝ていたのか、荷台の上から周囲を見回す者。タバコを吸う者。銃に異常が無いか最終チェックをする者と、様々である。共通しているのは、全員が銃を携えている事だ。しかし軍隊とは違い、服装に統一感はない。迷彩の戦闘服に身を固めている者もいれば、Ｔシャツの上から弾倉が何本も入るベストを身につけている者もいる。そして銃器すら、全員が同じ型の物を所持しているわけではない。

俺や赤峰を含む荷台の上で揺られている男達は、新谷市のカンパニーから派遣されてきた傭兵達だった。2台のトラックに分乗した傭兵達は全員で20名弱。

俺達が真夏の日差しの中、トラックの荷台で焼かれているのには日焼けの為ではない。依頼の為だ。

話は昨日に遡る……。

昨夜 午後6時過ぎ

習志野駐屯地の闇市に取引に行つてからは特に大した依頼が入る事もなく、警備やミュータント退治で小遣い稼ぎをしていた俺は、その日もカンパニーが経営するバー「フジヤマ」へと向かった。別に酒を飲む為ではなく、高額報酬の依頼が入っていないかを確かめる為だ。それに家ではサキが待っているので、俺だけが酒を飲んで楽しむというわけにはいかない。

「へい、らっしゃい！」

毎度毎度の寿司屋のような声を小野田に掛けられ、片手を挙げて答えながらカウンター席に座る。

俺の隣では、狼の素顔を晒した赤峰が酒を黙々と飲んでた。トラブルを避ける為に外では包帯を巻いているが、カンパニーが仕切る新谷市には色々な奴がいるので（見た目がずっと17歳の俺含む）、特に赤峰の狼男のような姿が騒がれるという事はない。むしろ赤峰は仕事をきちんと仕事をするので外見など瑣末な問題にすぎず、皆から信用されていた。

「よう武、稼ぎはどうだ？」

「ぼちぼちだ」

これは傭兵同士ではもはや定型句と言えるような返事だが、実際ここ数日は大した収入を得られていないので嘘ではない。

俺はカウンターの途中でグラスを磨いていた小野田に向き合い、赤峰を指さして言った。

「マスター、こちらの方に生肉を」

「おい、いくら狼だからといって生肉をそのまま出すんじゃない！」

赤峰が突っ込んだが、小野田はスツとカウンターの内の冷蔵庫を開けると豚ロース（生）を取り出し、皿に載せてスツと赤峰の前に置いた。

あるんかい、生肉。

「まったく、俺は見た目は狼だけど中身は人間なんだぞ」

「肉は焼いてくれ」と小野田に頼んでから、赤峰はグラスに残った酒を一気に飲み干した。ちなみにミュータントの赤峰の顔は狼そっくりなので、普通の人間のように口にグラスをつけて飲んだら、尖った口の端から零れてしまう。そのため大きく口を開けて、中に酒を流し込んでいた。

酒を飲み干した赤峰はお代わりを頼むと、何かを思い付いたかのようになやりと笑い、

「マスター、こちらの方に牛乳を」

「おい、見た目が17歳だからといって、ガキ扱いするんじゃない！！」

「牛乳を飲めばカルシウムで背が伸びるかもしれない？」

「あ、てめえ！　さらっと人が気にしている事を！！」

ぎゃあぎゃあ言い合っている間にも小野田は冷蔵庫から牛乳瓶を取り出すと中身をコップに注ぎ、俺の前にスツと置いた。

あるんかい、牛乳。

まあ、予想はしていたが。

牛乳に口をつけつつ、小野田に何か高額報酬の仕事はないか尋ねてみた。闇市に行った時の燃料代に電気コード代は銃を売る事でどうにかカバー出来たが、利益は少なかった。ここはやはり報酬の高い仕事をして儲けておきたいところだ。

「んー、無いな」

「やっぱりな」

「まあ、ヤバい依頼ならいくつかあるけど」

「この仕事をやっていて、ヤバくない依頼があるか？」
「新旧政府から、『敵政府の主要人物を暗殺してこい』って依頼なんだが、それでもやるか？」

俺と赤峰は揃って首を横に振った。盗賊や略奪グループと化した小規模なPMC民間軍事会社、さらにはコミュニティー同士の抗争なら喜んで参加する。一方から恨みを買ったって、常に付け狙われる程ではないからだ。

しかし政府が相手となると話は違う。新旧政府はそれぞれ傭兵がいくら集まっても簡単に一蹴される程の戦力を持っており、さらに日本全国に兵員や兵器を大量に送り込む能力がある。新旧政府が互いに睨み合っていたり、汚染やミュータントの影響でどこへでも戦力を送れるわけではないが、それでも政府から逃げ切るのは日本に限り難しい。どちらかの政府を敵に回した者は、やがて遠くから頭を撃ち抜かれたり食べ物に毒を入られたり、ミサイルを搭載した無人偵察機の爆撃を受けたり、もしくは盗賊に見せ掛けた特殊部隊の襲撃を受ける事になる。

だから、政府を敵にするような依頼は受けない方がいいのだ。さらに俺は、新旧政府の両方にちよつとした因縁がある。あまりおっぴらにしたくない、というより出来ないその出来事により、俺はできればどちらの政府にも関わりたくはないのだ。

「にしても、最近は新旧政府の間で激しいドンパチは起きてないよな？ 停戦したのか？」

火を通した豚ロースに狼の如く噛み付いて引きちぎり、一気に飲み込んだ赤峰が小野田に尋ねる。

「いいや、そういう話は入ってない。だが両方の政府の間で、水面下で和平の話が進んでると聞いた。多分その影響だろう」

その情報を手に入れたのは、小野田の子飼いの情報屋のおかげだろう。関東でもかなりの勢力を誇るようになってきたカンパニーは全国進出を睨んで、小野田があちこちの組織や情報屋と手を組んで日本全国の情報が入ってくるようになってきているのだ。

無論ガセネタや誤った情報も多いが、火の無い所に煙は立たないと言う。それらの間違った情報をいくつも集めて見ると、やがて別の真実が見えてくる事もある。何かを隠すためにわざと流した偽装情報の場合は、その「何か」が判明するのだ。

なので、小野田が言った和平が進んでいるという情報は本当だろう。もう10年以上の長きに渡る戦いを繰り返している新旧政府は、いい加減同じ日本人同士で殺し合うのに疲れたのかもしれない。

そんな事を考えているとカウンター内側にある店の事務所に通じるドアが開き、小野田の部下が緊張した面持ちで現れた。前に俺をガキ扱いしてフジヤマに入れず、小野田に殴られたあの警備員だった。警備員が何事か耳打ちすると、たちまち小野田の表情が強張った。それから小野田は警備員と一緒に事務所に行ってしまった。

「何言ってるかわかるか？」

「いや、聞こえない。この店はなんだかんだで防音構造になってるからな」

狼の耳をピンと立てた赤峰が言う。ミュータント化した狼の血を取り込んで自らもミュータントと化した赤峰は、見た目通り狼同様の能力を発揮出来る。暗闇でも目はよく見え、遠くの会話も聞き取り、臭いで獲物を見つける。さらに身体能力も常人よりも発達している。俺も20年前の影響で不老の能力に加えて普通の人間より五感が発達しているが、それにしただって動物並とまではいかない。多分赤峰

と戦ったら、勝つにしても苦戦を強いられるだろう。

「でもあの警備員、『失踪』とか『行方不明』とか言っていたな。何か起きたのは間違いな……」

赤峰の言葉が終わる前にドアが開いて、真剣な表情の小野田が現れた。ぐるりと店内を見回し、大きな声を張り上げる。

「皆少し聞いてくれ！ 先程我々が友好関係にある橋田村はしたから、我々に支援要請が来た。村では最近住民が失踪する事件が多発しているらしい。我々は彼らと友好関係にあり警備のために傭兵を派遣しているが、ついさっきその傭兵も数名が行方不明になったという連絡が入った！」

傭兵が行方不明という言葉に、一斉に店内が騒がしくなる。小野田は手を叩いて再び皆の注目を集めてから、話を続ける。

「そのため我々カンパニーは、行方不明者の搜索及び原因究明のため、追加で傭兵を送り込む事を決定した！ 出発は明日、人員は20名程を予定している。搜索隊に参加したい者は申し出てください。なお、報酬は700万円前後を予定している！」

最後の700万円という数字に、再び皆が騒ぎ始める。今フジヤマにいたのは15人程だから、多分全員が搜索隊に志願するだろう。それに何人が加われば、あつという間に定員の枠は埋まるに違いない。

俺と赤峰はもちろん参加を決めた。他の連中よりも経験を積んでいる俺と赤峰の参加を、小野田は歓迎した。傭兵といっても50歳近いベテランから20歳にも満たない新人ルキまで様々であり、アラフォ

ーの俺と赤峰は中堅以上にあたる。といっても赤峰は見た目が狼男

だし、俺はずっと見た目が17歳のままなので、自分達が40歳前後であるという自覚はほとんど無いが。

「そっぴゃジャックと李は？」

「二人とも別の依頼でここにはいない。あの二人がいればもつとやりやすくなるんだがな。それより、なんで傭兵まで行方不明になつたんだ？」

橋田村は食糧自給率が100パーセントを越えており、食糧の取引で成り立っているコミュニティだ。新谷市から車で数時間の距離にあるためカンパニーは橋田村との協力関係を結び、食糧購入価格を下げる代わりに傭兵を派遣して村の警備を行っている。一応新谷市の北部では農業が、南部では漁業が営まれているが、市の全員を食わせるには量が足りていない。そのため外部から食糧を調達する必要があり、そのためカンパニーは橋田村と協力関係を築いたというわけだ。

橋田村には民兵数十人に加え、カンパニーが派遣した傭兵が十数人がある。傭兵は村の警備に加えて民兵の訓練なども行っているため、ベテランや中堅所が多い。

今回行方不明になった傭兵は3名。俺も名前は知っていて、そこそこ実力がある連中だ。そう簡単にやられるような奴らではないはずなのに、何があつたのだろうか？

聞けばカンパニーが派遣している傭兵の他にも、民兵や住民の行方不明者が続出しているという。夜逃げの形跡はなく、夜の間忽然と消え失せたらしい。

「盗賊が食糧目当てに誘拐してんのか？」

「だったらチマチマ拉致つてないで、一気に略奪してるだろ。そもそもこっちの傭兵が3人も消えてるんだ、ただの盗賊じゃない」

「じゃあはぐれ傭兵グループが住民と引き換えに食糧とか金を要求するのかも」

「そうだとしても、まだ取引の呼びかけとかは入ってないんだろ？」

この御時世、誘拐自体は珍しくは無い。というか戸籍制度が事実上崩壊している今、誘拐があつたとしても発覚することも少ない。

そして誘拐の大半は身代金目的ではなく、拉致して奴隷にし労働力として売り払つたり、武装集団の少年兵に仕立てあげたり、移植用臓器の調達など「人間そのもの」が目的である場合が多い。誘拐しても身代金が確保出来ない場合が多いからだ。

なので橋田村での連続失踪事件も、そういった人間目当ての誘拐事件かと思われた。俺は家に帰って近所の知り合いにサキの事を頼み、そして今朝、カンパニーお抱えの運び屋のトラック2台に分乗して橋田村に向かったというわけだ。

そして今に戻る。

早朝に新谷市を出たものの、夏の太陽に数時間照らされた俺達はすっかり気力を失っていた。いい加減日射病になる者が出てきそうな時によりやく橋田村に到着し、荷台の傭兵達は元気を取り戻す。

橋田村は標高500メートルの山の麓に広がる村で、近くを川が通っているため農業用水の確保が容易であり、村に入るなり一面に広がる水田が俺達を出迎えた。20年前とほとんど変わらない成長した稲を、俺は眩しく感じてしまう。

トラックは村の中心に向かっていくが、途中ですれ違う人間が極端に少ない事に俺は気づいた。橋田村は3000人前後の住民がいる

はずだが、見えるのは銃を携えた民兵ばかりで、農作業に出ている者はほとんどいない。そして民兵達の目にも怯えたような光が宿っているのを、俺は見逃さなかった。

「他の連中は怖くて外に出られないんだろうな」
「さっさと俺達が問題を解決すりゃいいだけさ」

荷台の傭兵達が口々に言葉を交わす。

やがてトラックは、村の中心にある平屋の民家の前に停まった。

「よし、全員下車！」

アサルトライフル
突撃銃の銃身を長く伸ばしたといった体の旧ソ連製RPK軽機関銃を携えたスキンヘッドの男が怒鳴り、傭兵達が荷物と銃を手に荷台から下りていく。あのスキンヘッドの年齢は50歳で、集まった傭兵達の中で最年長である事から搜索部隊のリーダーを任されていた。何度か依頼を一緒にこなした事もあるので、スキンヘッドの実力は信頼できる。

すぐに民家の中から、ジーンズを履きTシャツの上からタクティカルベストを身につけた若い男が出てきた。新谷市から派遣されてきている警備の傭兵達のリーダーだろう。皆が庭に集められ、現在の状況の説明を受けた。

曰く、

今のところ判明している行方不明者は合計22名。内男性5名、女性5名、子供7名、民兵2名、傭兵3名。

日没から夜明けにかけて行方不明者が出ている。夜間に悲鳴を聞いたという住民あり。なお昨日傭兵が行方不明になった際、銃声が聞こえた。

行方不明になった22名に共通点は特になし。一家三人が失踪した場合もあるが、夜逃げの可能性は低い。

数日前から警戒を厳重にしたものの、その後も失踪者あり。昨日3名の傭兵が、夜間の警備中に行方不明になった。

「諸君には二人一組になって、村の周囲を搜索してもらいたい！なお、この民家は搜索活動中の拠点とする。リーダーを除く4名が民家で常時待機し、何かあったら増援として向かってもらう！」

スキンヘッドがそう言って話を締めくくる。傭兵と民兵に加えて、銃を持たせた住民をサポート役として搜索に従事させているというが、やはり人数不足の感は否めない。

俺は赤峰と組む事になり、ついでに最初の3時間を民家で待機する事になった。傭兵達が銃を担いでそれぞれ担当地区へ向かう中、俺達も民家の中で待機する。待機といっても休息を兼ねているので、時間が来るか緊急呼集がかかるまで休んでいい。

ゆっくりしていったね！というわけである。

皆の荷物を運び込んだ後、俺達二人ともう一組の二人は、畳を敷いた居間を休憩場所とする事にした。いつ休めるのかわからないので、

休める時に休むのはこの仕事では鉄則だ。俺は居間の端に横になり、目を閉じようとしたのだが……。

「アイツさつきから何やってんの？」

俺達と一緒に待機する事になった二人の内、フード付きマントを羽織りマスクをした赤峰と同じくらい怪しさ爆発の男が、家中の戸棚を漁っていた。

男は背中に刀とドイツ製HK21軽機関銃を背負っている。機関銃はわかるが、何故刀？ 刀なんて銃火器全盛のこの時代にはアドバンテージなどほとんどないのに。

「ディアボロは羽根ペンを手に入れた。ディアボロは20ゴールドを手に入れた。ディアボロは……」

何やらブツブツ呟きながら片っ端から戸棚や冷蔵庫を漁っている男は、どう見ても不審者です。本当にありがとございました。

この民家は例の失踪した一家が住んでいた物で、今は誰もいない事から捜索隊の拠点に選ばれたのだ。家主が行方不明とはいえ帰ってくる可能性も否定できず（その確率はかなり低いだろうが）、それを承知である男は他人の家の棚を勝手に漁っているのだろうか？

「なあ、アイツ何やってんだ？ディアボロが何とかかんとか」

フードの男と組んでいる木下 堅と名乗った35歳の男に尋ねると、木下は苦笑しながら答えた。

「ああ、アイツの本名は齋藤 次郎ってんですよ。ここはファンタ

ジー世界で、自分をRPGゲームに出て来る召喚された勇者と思
込んでるんだとか」

「いつから？」

「『終わりの日』からだそうです」

「アイツ色々と終わってるんじゃないか？」

赤峰が頭を指差しながら言う。頭がおかしいと言いたいのだろうが、
本人の前なので表現を控えているのだろう。

どうでもいいがRPGと聞くと、ロールプレイングゲームではなく
ロケット推進式擲弾
RPGの方を思い出してしまう俺は、20年前からかなりのミリオ
タである。

「なんかゾンビが現れて自分が異世界に召喚されたって勘違いして、
近くの博物館にあった隕鉄で出来た剣を手に入れて、今日まで逃げ
回って生き残ってきたみたいです」

「……よく傭兵になったな」

「周りの人が頑張ってくれたのを、『俺TSUEEEEE!!』つ
て自分の力だと勘違いしたっばいです。てか、カンパニーを『ギル
ド』とか呼んでるあたり、本気で頭のネジが外れているみたいす
ね」

ディアボロ 斎藤は食器棚まで漁ると、今度はゴミ箱を漁りは
じめた。RPGゲームでよく勇者は他人の家に平気で入り、片っ端
から坪を叩き割ったり棚やゴミ箱を漁ってアイテムを探しているが、
実際にやるとただの泥棒にしか見えない。というかゴミ箱まで漁る
ようになったら、もはや勇者ではなく浮浪者である。

「まあいいや。俺寝るけど、赤峰はどうする？」

「俺はしばらく起きてるよ。なんかあったら起こしてやる」

「了解。じゃ、頼むわ」

今度は別の部屋を漁りに行った斎藤を横目に俺は横になり、目を閉じた。

すぐに、俺は眠りに落ちた。

が、眠りは唐突に遮られた。赤峰が俺の肩を揺すって起こしたのだ。腕時計を見ると、まだ眠ってから30分も経っていなかった。

「武、緊急連絡だ。北の山麓にある駅に集まるように、だと」

「……クソッ、せつかく夢の中で女の子達とキャツキャウフフなハレム状態だったのに」

「念のため聞くが、その夢の中の女の子達は現実の女の子だよな？」

「何を言ってるんだねキミは？ 現実の女子が二次元の女子に勝てるだけでも？」

「……お前も斎藤の事は言えないんじゃないか？」

赤峰は呆れたように呟きながらミニミを背負い、俺を手招きする。

俺もSG556カービンを手に赤峰に続いた。同じく斎藤と木下もそれぞれ銃と刀を手にして外へ出る。

「で、何があったんだ？」

「村の北西部にあるトンネル付近で、行方不明者の痕跡を見つけたらしい。他の場所の捜索に当たっている連中も召集されているそうだ」

「痕跡？」

「そこまでではわからん。とにかく、行けばわかるだろう」

庭には一台のプリウスが停まっていた。民家で待機する組が呼集を受けた際の移動用として、村が準備したものだ。プリウスはあちこちの塗装が禿げてベコベコ凹みまくり20年間の月日を感じさせるが、しつかり整備されているらしく、運転席に座った赤峰がキーを捻ると一発でエンジンがかかった。

今時ガソリンエンジンの車両は珍しい。添加物のせいでガソリンは劣化しやすく、長期間の保存に向いていない。さらに「終わりの日」と第三次世界大戦のせいで原油の輸入は極端に減り、精製されるガソリンの量も少なく必然的に流通量も少ない。

九州の新政府は中国大陸経由で、北海道の旧政府はロシア経由で石油を輸入しているらしいが、やはり輸入量は少ない。バイオプラントで代替燃料を精製してもそれらの大半は軍用に回され、ガソリンが民間に回ってくる事は少ない。おそらくこの村は農作物を売って、どこかから流れてきたガソリンを購入しているに違いない。

プリウスで村の北へと走る事数分、田園の向こうに小さな駅舎が見えてきた。橋田村にも電車が走っていたらしいが、インフラが完全に止まった今では到着する電車も出発する電車もない。駅舎もただの廃墟として、普段は村人もほとんど立ち寄る事はないと聞く。その駅舎の周囲を、傭兵や民兵が慌ただしく駆け回っていた。道端にプリウスを停めると、走って駅舎に向かう。

「行方不明者の痕跡っていうが、何を見つけたんだ？」

「見ればわかる」

赤峰の質問に、スキンヘッドが山の方を指差して言う。傭兵達が集まると、スキンヘッドを先頭にして線路の上を歩いて山の方へと俺

達は歩き始めた。

線路のレールは20年間保守点検される事がなかったせいで錆び、バラストと呼ばれる小石や枕木を赤茶色に染めていた。線路の上を歩いていると、唐突にずっと昔に見た「スタンド バイ ミー」という映画を思い出す。

敷かれた小石のせいで歩きにくい線路の上を進むこと数分、俺達は山の麓に到着した。線路の先にはトンネルがあり、その周囲を民兵達が銃を手にして注意深い視線を辺りに向けている。

「これだ」

スキンヘッドが唐突に立ち止まり、地面を指差す。指の先を目で辿っていくと、線路のバラストの上が赤茶色く染まっていた。錆びたレールの鉄分か？ 一瞬そう思ったが、足元の線路と見比べると明らかに違う。

「血、だな」

狼並に鼻のいい赤峰が呟く。確かに、鉄の臭いが周囲に漂っていた。血は時間が経つと茶色く変色する。バラストを染めているのは血であり、しかも時間が経っているようだった。何よりも目についたのは大量の血が線路を染め、そして乱暴に引きずられたかのように所々がかすれた血痕がトンネルに向かって続いている事だった。

「ここで拳銃と空薬莢が見つかった。どうやら昨日行方不明になった傭兵の物らしい。拉致された時は気絶していたが、トンネルに連れ込まれる直前に目を覚まし、銃を抜いて反撃しようとしたものの殺された。　　ってところだろう」

スキンヘッドがトンネルを指差して言う。確かに事前に見た地図では、あのトンネルは山を数百メートルに渡ってぶち抜いて隣町に続いているはずだった。住民達を拉致した「何者か」は、あのトンネルを拠点にしているのだろうか？

スキンヘッドはトンネル内部を搜索する事を決定し、傭兵と案内の民兵合わせて20名が突入する事になった。当然、俺と赤峰、そして木下と斎藤もメンバーに入っている。

風がトンネル内部に入り込む音が、まるで怪物の唸り声のように聞こえた。何度かトンネルに入った事があるという民兵を先頭に、俺達は油断なく銃を構えて進んでいく。

10メートルも進むと、たちまち進路は闇に包まれた。皆銃や胸元に取り付けたフラッシュライトを点灯させ、俺もSG556のハンドガードにマウントを介して取り付けたフラッシュライトを点す。幾筋もの強烈な光が闇を切り裂いて、トンネル内部を照らし出す。

「暗視装置を持つてる奴、何か見えるか？」

スキンヘッドがそう尋ね、俺もカービンの機関部上にくの字に曲がるマウントベースに取り付けられた、単眼鏡タイプの赤外線暗視装置を覗く。暗視装置の前には照準補助用のホロサイトが取り付けられ、マウントベースの関節を曲げる事で簡単にホロサイトと暗視装置の視界を切り替える事が出来るスグレモノだ。

赤外線暗視装置はその名の通り、物体が発する赤外線を可視化させる光学機器だ。人間は身体から赤外線を発するので、それを捉える

事によって暗闇の中でも人間を見つけられる。

暗視装置の緑色の視界の中、俺より先を進む傭兵達の姿が白く映る。一応俺は並の人間よりも目がよく、夜目も利くのだが、完全な暗闇では何も見えない。赤峰はフラッシュライトの光だけでずっと先まで見えているのか、携行している暗視装置を使う素振りも見せないというか、狼男のような赤峰に暗視装置は必要なのだろうか。

マウントベースを伸ばして暗視装置を機関部左に倒し、再びホロサイトを覗く。付属するベルトで暗視装置を頭に固定する事も出来るのだが、暗視装置の視界は狭すぎる。暗闇のトンネルの中、どこから襲われるかわからない時に周りがあまり見えないというのは自殺行為だ。幸い他の連中もフラッシュライトを点灯しているのでトンネル内部の様子もそれなりにわかるし、暗視装置は適宜使用する事にした。

ハンドガードに取り付けられたレーザーサイトを起動させ、赤い光点が大まかな弾着地点を俺に教えてくれる。これで不意に襲撃を受けた際、一々ホロサイトを覗かなくても大体の照準をつけられるからその分応戦にかかる時間が早くなる。

狭いコンクリート製の内壁が足音や装具が擦れあう音を反響させ、その中を俺達はトンネルを奥へ奥へと進んでいく。トンネルは進むごとに下へ向けて傾斜していつている。おそらくトンネルの出口は、俺達が入って来た場所よりも低い位置にあるのだろう。

そしてトンネルを300メートルほど進んだ所で、二台の列車が脱線していた。二両編成のその二台の電車は正面衝突したらしく、運転席部分をひしゃげさせて脱線横転している。綺麗に一回転したのか、脱線しながらもきちんと車輪を下にして線路脇に放置されていた。

このトンネル、というか橋田村を通る線路は、田舎に特有の一車線しかないタイプだった。車線が一つの電車の場合、両方が同時に走っていたら正面衝突してしまう。そうなるのを防ぐため、駅だけ二車線にしてお互いにすれ違うようにしているのだ。

「『終わりの日』にどつちかの電車でゾンビが乗ってたのか、信号も駅も無視して暴走した挙げ句、もう片方からやってきた電車と激突したんですよ。あの時は生存者の救助やらゾンビの退治やら、苦労しました」

案内役の民兵が、脱線した電車を眺めつつしみじみと語る。この民兵も、20年前に救助活動に参加していたのだろう。

脱線した電車の脇や内部を通り抜け、しばらく進んだ時だった。民兵と共に集団の先頭を進んでいた赤峰が、突然立ち止まった。

「どつした赤峰？」

「……何か臭う。それに変な音も聞こえる」

「臭い？」

民兵が赤峰の包帯を巻いた顔を怪訝な表情で見回す。新谷市からやって来た俺達は赤峰の姿を知っているが、ここの住民にとっては赤峰は怪しい奴にしか見えないに違いない。

その赤峰が目を細めてトンネルの奥を見ている。見た目通り狼並の五感を持っている赤峰は、俺達が見逃してしまう些細な事でも普通に感じ取る事が出来る。もしかしたら、何かに気づいたのだろうか？

「臭いはいかの糞みたいな臭いがするが、臭いが籠っていてよくわからん。音は何か動き回るような音が……」

そこまで言つと、突如赤峰は目を見開いた。

「……来る。何かこっちに向かって来るぞ!!」

「何!?!」

スキンヘッドが反応するのと同時に、俺の耳も変な音を感じ取った。何か擦れ合うような音と、足音のような規則正しい音。それらがいくつも重なり合つて、徐々に大きくなっていく。

「何か走つて来ている! ミュータントかもしれないぞ!!」

俺も叫ぶ。赤峰程ではないものの、俺の五感も常人のそれを上回っている。スキンヘッドもその事を知っているのか、素早く全員に電車の後ろまで下がり、迎撃する態勢をとるように命じた。

何か走る音はどんどん大きくなっていく。脱線した電車を盾にして、傭兵達は銃をトンネルの奥に向けて構えた。

「暗視装置に何か映っていないか?」

スキンヘッドの声が飛んだが、帰ってきた返事は「何も見えない」というものばかりだった。俺も赤外線暗視装置を覗いたが、やはり映るのは傭兵達の白い人影だけだった。

とその時、暗視装置に影が走った。しかし見えたのは一瞬だけ、しかも白く表示されていない。動物は身体から熱を発するので、人間だろうとミュータントだろうと白く表示されるはずなのに。

「一瞬何か見えた!」

他にも暗視装置を覗いていた傭兵が叫ぶ。が、彼も映った「何か」の正体まではわからなかったと言う。

「来るぞ！ 皆警戒しろ！！」

車両を下にして脱線した電車に隠れる俺の隣、レールを挟んだ向こう側で横転した電車を盾にミニミを構える赤峰が叫ぶ。俺も五感だけではなく、本能と呼ばれる物で接近しつつある「何か」を感じ取っているのか、何かざわざわするような感じがしていた。

こんな感じがするのは、いつも近くに敵がいるような時だ。昔診察してもらった医者には「無意識に殺気を感じ取った時に、ざわざわする感じがするんじゃないか」と言われた。

この感じがした時は、いつも近くに敵がいる。今までの経験に従えば、接近しつつある「何か」が殺意を抱いている事は明らかだった。

395

やがて足音は他の傭兵達にも聞こえる程大きくなり、皆が視線と一体化させた銃口をトンネルのあちこちに向け、それに合わせてフラッシュライトの光の輪が乱舞する。

「何だこの音は！？ 何が近づいているんだ！？」

「どこだ、どこにいる！？」

「何も見えないぞ！ 一体何なんだ！？」

悲鳴に近い怒鳴り声が傭兵達の間から上がる。「何か」が近づいて来ているのに、その正体を掴めない。これ以上の恐怖はない。

「皆落ち着け！ 天井も壁も警戒しろ！ ミュータントなら天井を這って来る事もある！」

スキンヘッドが皆を落ち着かせようと怒鳴るが、そのスキンヘッド自身が動揺しているのでは意味が無かった。

とその時、俺はフラッシュライトで照らされた先で、何かが光っているのを見た。

大人の握り拳ほどの大きさのそれは、地面から40センチ程の高さに二つ浮かんでいた。それを見た瞬間、俺は全身の毛が逆立つのを感じた。

その瞬間、俺の前にいた傭兵が、短い悲鳴と共に消えた。

第19話 闇に光る眼（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5733t/>

俺と少女と救われなかったこの世界

2011年11月20日19時30分発行